
死神の奇想曲(カプリス)

十握剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の奇想曲^{カプリス}

【Nコード】

N3459I

【作者名】

十握剣

【あらすじ】

極々平均的な高校生だった主人公は、ある日異形な力がある事に気付く。
幼馴染みで義理の妹達も同じく異形な力に目覚め学園や街での闘いを繰り広げる

学園ラブコメディ&バトルもあります！！
少々パクリもありますがヨロシクお願いします！！

第1話「出会い」

朝5・00―起床

俺の朝は根本的に早い、昔から婆ちゃんに起こされていたから板についてしまったのだ

「ふわぁゝ、寒っ」

俺はボサボサの頭を掻きながら台所に向かう、俺が住んでいるのは普通のアパートであり、なんの特徴もない寂しい所だ、良かったと言えばアパートの近くにスーパーや学校が近いだけだ、少し遅れても間に合う。

「…朝飯食うか」

こんな朝早く朝食を取るのは可笑しいと思われるが俺は普通だ、普通の時間じゃないのは分かるがこうも腹が減っては一日のやる気が出ないと言うもの…。

その後は部屋で静かに食パン（賞味期限切れ間近）をちよびちよび食べながら呆けていたらドアの方から声が聞こえた

「…こんな朝早くに誰だ」

俺は食パンを口に加えたままドアに向かう、何やらドアの前で誰かと誰かが話しているらしい。話し声が聞こえる。俺は縦横無尽にドアを開けるとそこには

「こ、こんな朝早くに失礼だって水波ちゃん」

「大丈夫、大丈夫だって。叔父さんの話だと5時にはもう起きてるって言ってたし」

「だからってこんな朝早くからは失礼だよ」

二人の美少女が居た

一人は蒼色をした髪で後ろ髪を束ねている女の子

もう一人は紅色のロングヘアーが良く似合う女の子が居た、

そして俺はと言うと

「……………」

固まっていた

だってそうだろ、生まれてこの方こんな美少女に会うのは初めてだし、何故に俺ん家^{アパート}のドアの前にいるんだ？

俺の脳では理解出来なかった。

そんな俺と言う存在がドアを開けている事に気付く二人の美少女は

「「あっ…」」

ハモった

「……あのう、俺に何か用ですか？」

俺を見て何か言いたそうな二人より先に俺が口を開く

「あつ、あの！！ 朝早くすみません、その、あの、あああ貴方につて言うか貴方様につて言うかって、ああもう何言ってるの私はあ」

紅いロングヘアーの女の子は今にもパンクしそうな程に顔を赤くしていた。となりで俺をジーっと見ている蒼髪の女の子は俺を見て聞いてきた

「貴方つて黒神零さんですよね？」

蒼髪の女の子は真剣な顔で俺に聞いてきた、限りなく顔が近かった

「…そうだけど何か用？」

加えていた食パンを食べきりながら答えると二人はパアツと顔が明るくなり次にきた反応に俺は驚愕した

「久しぶりだよ零兄iiiiiiiiii♪」

「零お兄ちゃん！！」

と言って来た。

「……へっ？ お兄…へっ…お兄ちゃん！？」

“お兄ちゃん”と言う単語に驚いている零はただただ動揺するしか無かった…。まだこの時…零は異形の力が既に動いているのを…知らなかった。

第1話「出会い」（後書き）

どうです？

何がなんやらでしょう。

初心者& a m p; 文才が無くこんな感じになってしまいました

良ければ感想や指摘などコメントをどうぞよろしくお願いします（
＜D＞）

第2話「学園」(前書き)

第2話「学園」

只今私、黒神零は俺の家から出て学園へと足を運んでいるのですが俺の両腕には美少女が絡み付いていた

「ねえねえ零兄のクラスって何処なの〜？」

「零お兄ちゃんは部活に入っているんですか？」

蒼い髪をした女の子と紅い髪をした女の子が零に質問攻めされていた

「あんさ〜、俺的にとっても嬉し過ぎるシチュエーションを展開させてもらってんのは有難いんだけどさあ。何故に俺の両腕にくっついてんの？」

零はアパートから出てずっと気になっていたことを二人の女の子たち聞いた

「そりあさあ〜、私達が入学する学園にまさか零兄が居たなんて知らなかったからさ。朝早く挨拶しに行こうって火波と決めたんだ〜」

水波はウキウキしながら零に言ったが零はまだ納得がいてない様子な顔をしていたが後ろから声が聞こえてきた

「ウオーイ、そのボサ頭のしょうね〜ん。朝からすんごいじゃあ〜りませんか」

「むっ…この無償に苛立たせざる声は…明日か」

「字が違あああうう!!」

零たちの後ろから先程零たちに声を掛けた男子高生が駆け寄って来た

「^{あした}芦田だ! 芦田!!、お前親友の苗字を忘れるってどんな神経してんだゴラァ、しかも両手に花だなオイッ。」

芦田と呼ばれる男子高生は零の両腕にくっついてる女の子を見ながらニヤニヤしていた

「オイ、お前はロリ好みじゃなかったのか…いや…一つ年下くらいの^{おなこ}女子でもカウントされんのか、いや恐れ入る」

「オイィィ、やめろお前、女の子は最初の印象が一番大切なんだぞっ!! あかね違うからお兄さんロリ好みじゃないから、まあそりゃまあ少しは…少しはあるかもしれないけどホント少しだからちょこっただけだから数ミクロンくらいだけだから」

芦田は必死に水波達にロリではないことを弁解しようしているがその必死さが逆に怪しく思われ引かれていることを芦田はまだ知らない

「もう止せ芦田、もうロリで良いじゃねえか、てかもうロリで良いよ、うん、このロリコンが!!」

「テメエは黙ってろおおこの…この…特になんもねえよコノヤロオオオオ!!」

芦田が零に殴り掛かろうとしたが零は可憐に避けた

「おい、いつまで下らない事をしているんだ。遅刻するぞ」

芦田と零が戯れていると後ろから凜とした声が聞こえた

「ひょうか 電華か、おはよう」

「うむ、おはよう」

「あれ？ 零さん？ 何故に俺には朝の挨拶無しですか？」

芦田はアレ？ アレ？ と零に顔を近付けさせて聞いているが零はウザそうな目で芦田を見ると芦田は黙ってしまった

「あのゝ零兄？ この人たち誰？」

「ちょ…失礼だってば水波ちゃん！！」

「「零“兄”！？」」

電華は目を丸くしていた、零ははあゝと深い溜め息を吐いて面倒臭さそうにしていた、電華も普通に戻り自己紹介をした

「私は南郷なんこうひょうか電華と言う、零とは生徒会の仲間だ」

電華は満足げに言った、電華は友達よりも“仲間”と言う関係の方がガツチリしていて気持ち良いらしい

「そうかそうか、零のシスターズか、俺は芦田あしたみねはる峰春みねはるってゆうもんだ。なあ零、この娘達の名前はなんて言うんだ」

芦田は零が自分の事を紹介してくれなかった為に自分で名前を言った、そして芦田は零の妹たちの名前が気になり零に聞くが：

「あぁっと、名前なんて言うんだっけ？」

「お前の妹だろうがぁぁぁぁぁ！！」

芦田は勢い良く零の腰を蹴り出した、霍華はいつもの事と言った感じで芦田と零を見ている、肝心の妹たちはと言うと自分たちの兄がロリ好みの男子高生に蹴られているのを心配しながら見ていた

「お前アホか？ アホだよな？ 何で名前知らないで一緒に登校して来れんだよ、人の事散々ロリコン、ロリコン、ロリロリコンって言っついてそれ無くな！？」 お前の方が危ねえつつうの」

「ふんっ、馬鹿め、お前には分かるか？ こんな可愛い女の子が俺の妹とかぬかして玄関先に居られたらもう良いだろ？ もう何か良いだろ？」

「何が良いのか分からんが、お前は俺よりなんかアブナイ感じなので。このシスターズは俺がウェスコートしてやるよ！！ さあさ、お兄さんで行こうか♪」

芦田がニコニコしながら紅い髪をした女の子の手を触ろうとした瞬間

「火波に触んな、触れんな、近寄んな！！」

「ええええええええええ！！」

蒼い髪をした女の子が芦田の手を弾いた

「火波に病気にでも移ったらどうするつもりだ!!」

「えっ、何この扱い!？」

「確かに最初の印象は大切だな、明日」

「字が違あああう!!」

と言った感じで電華に止められるまでずっと芦田は零と姉妹達（特に水波）に弄られ続けられた。

現在、零達は教室に居た

「確か今日は入学式だったな、早く帰れるんじゃないかね？」

「あゝ良く居るよな、そーゆー奴。」

零と芦田は席は隣同士であり、窓側の席に座っている

「だがな、俺たちもそうだったがこの黒須学園くろすがくえんの入学式って色々と面倒臭いだよな。何か華やか過ぎだし」

「零は知らねえのか？ この黒須学園って元女学園だったらしいぜ、現に今も男子高生の人口密度少ねえしな、まあ俺としてはウハウハで嬉しいッスけどねゝアハアッハッハッハ」

「五月蠅い」

零はポケットからワサビを取り出して大きく口を開いている芦田の口の中にワサビを投入した

「ぎいいやああああああああいいうああい」

と叫びながら廊下に出て行った、本当に騒がしい奴だなと零は思いながら外を眺めていた、気にしていないような感じを見せていたがやはり朝の妹の件が気になった

零は妹達と別れ際にやっと名前を聞いたらしい。

蒼い髪をして気が強そうな女の子の名前がなぎせみなみ風瀬水波。

紅い髪のロングヘアーの内気な感じの女の子の名前はなぎせほなみ風瀬火波と言
うらしい。性を聞いてハッと零は思い出した。零の性は母親の方で
あり、父の性は風瀬。零は昔叔父に聞いた話では父は世間から言う
“バツイチ”らしい。そして前の母親は事故で亡くなり父と前の母
二人の間に産まれた双子の娘が居たらしい、その双子は昔よく一緒
に遊んでいた記憶があったが何らかの理由により離れ離れになって
その日から一度足りとも会っていなかった。つまりあの妹達は義妹
となる。

「だから“お兄ちゃん”か…まさかあんな可愛い女の子になっ
たなんて、知らなかった」

零が一人呟いていたら、物凄い勢いで教室に芦田が帰って来た、何
やら喉を押さえている

「ヒューハー、ヒューハー、てめえクソ零。ハアハアな…何で学校
にワサビ持って来てんだ、てめえのせいでモロワサビ飲んじまった
じゃねえか!! ぶっ殺してやる……ぶっ殺してやんよおおお!!」

「!!!!!!」

芦田が零に襲い掛かろうとした瞬間、芦田の顔にチョークが命中した、しかも顔面ありとあらゆる部分に命中した

「ぎゃああああ!?! 目に、目にチョークがあああ!」

芦田は両目を手を当てながらゴロゴロ教室を転がっている、芦田はチョークが飛んできた方向を見るとそこには零と芦田たちクラス担任の出雲由先生いずもゆかりが居た、黒くて長い髪が特徴で学園内でもその妖艶なびている先生にファンが沢山居る、いわゆる“大人の女性”だ。

「さっさと席に着け芦田、お前だけだぞ、席に座ってないのは」

「それを生徒の目玉にチョークを投げつけた先生の言葉かつ!?!」

「ああ? 何か文句あんのかゴラァ?」

先生の言葉でクラスは凍りついた、聞いた話では出雲先生は昔、ヤ○キーだったんじゃないかと言う説があった。そこが強い女として同姓から好かれる理由かもしれない。そして肝心の芦田はかと言うと…

「どもすんませんしたああああ!!!!!!」

土下座をして謝っていた、コイツにはプライドは無いのかとふと零は思っていた

「分かったらさっさと席に着け、朝のホームルームを始めるぞ」

「あざあーす!!!」

芦田は物凄い良い返事を返して席についた、零を怨めしように睨み付けながら

「ええ、今日は黒須学園の入学式だ、色々と準備やら片付けは主に3年と2年がやる、当たり前だがな。準備はもう前日にやり終わっているから時間になったら体育館に向かって学年ごとに並べよ。」

出雲先生はそう言うのと学級委員長に任せて入学式の準備をしに体育館に向かった

「うおいこのボサ頭万年寝不足ヤロウ！！ さっきはよくもやってくれたな…」

「おい、ゆずは柚葉、ちっと教えてもらいたい事があるんだけどさ」

「アレ？ 零さんシカトユすか？ シカトユですか」

零は芦田を軽くあしらえ、学級委員長である角つのさか阪柚葉ゆずはに疑問に思ったことを聞いた、柚葉は金髪のロングヘアーでありこの子もかなり可愛い方である

「ん？ なぁに零ちゃん」

「その…柚葉、いつまでちゃん付けなんだ？ いい加減恥ずかしいんだけど」

「ええ、良いじゃない零ちゃん。それで零ちゃんは何を知りたいの？」

零は溜め息を吐きながら柚葉に聞いた

「生徒会長に何か聞いてない？ 何かこの前なんか言ってたような気が…」

「ああ、そう言えば生徒会長は入学式で会長挨拶があるから生徒会の人たちは集まってくれて言ってたわよ」

「…そうか、ありがとう」

零は柚葉に礼を言々と柚葉は、いえいえ、と言って時間が近付いていた為、クラスを廊下に並ばせた

「何話してたんだよ零、ハッ…まさかデェトのお約束、グハッ！」

「うるさい奴だなホントにお前は、余りにうるさいと土に埋めて土葬するぞ」

「えっ？ ちょ…何故！？」
なにゆえ

芦田はまた零に顔を近付くと目にチェストした

芦田はまた教室をゴロゴロしていると零は外に出て行き、教室を鍵を閉めて体育館へと向かった

何やらドアを叩いている音が聞こえたが無視していった

※

「……目覚めは始まりましたか？、アレを早く目覚めさせないと暴

走を始めますよ」

とある暗い部屋の中には黒いフードを被った者が居た、性別が分からないくらい体を覆う黒いフードだ

「…それは、分かっておりますが、まだ時期では無いかと…」

その黒いフードを被った者の前には同じく黒いコートを着た男が居た

「……………」

「時期はもうすぐです、もうすぐ…“妖刀”が…集まります、どうかそれまでお待ち下さい……」

黒いコートの男は黒いフードを被った者の前にひざまずき頭を下げた、そして呟いた

「……黒須理事長……」

黒いフードを被った者は窓を開けると外には闇夜を照らす月光が染まっていた

「…始まりますよ、この学園で闘いが…」

黒いフードを被った者は不適な微笑みを浮かべた

第2話「学園」おわり

次回

第3話「生徒会」

第2話「学園」(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

今回もグダグダ感があふれてました。
やっぱり小説って難しいですね。

次回は零が所属している生徒会の話について書きたいと思っています。
す。

第3話「生徒会」(前書き)

すみません(汗)

更新が出来ずに申し訳ございませんでした。

修学旅行で沖縄に行っていたので更新が遅れてしまいました。

戦争の悲惨さを見に染みた旅行でした(涙)

正直テンションがく下がりででした

まあそんなこんなでやっと更新します、今回もあんまり進められませんでした

小説はムズいッス

グダグタですがどうぞお読みになって下さい!!

第3話「生徒会」

黒須学園の入学式も終わり、新生徒たちも自分達の教室に戻って行き、零たち二学年も教室に戻って行ったが零は生徒会の一人の為、体育館に残っていた

「今回の入学式も随分と華やかだったな、しかも女子の割合が極端に多い、男子生徒がたったの20人で女子生徒が500人って…女学園とはなんら変わらないような気が…」

「零、サボってないで集まれ。副会長が呼んでいるぞ」

と後ろから声を掛けられた

零は振り向くと朝に会った南郷^{なんごう}電華^{ひょうか}が立っていた、ただ立っているのにその姿は凛々しく見える。

「電華か、生徒会は体育館の横に並ぶのって定番だよな」

「…話を聞いているのか、零」

「聞いてるって、副会長が呼んでるんだろ？ 別に行かなくて良くな、どうせ生徒会の反省会とかじゃねーの？」

零はポリポリと頭を掻きながら欠伸^{あくび}をして電華に言うが、電華は納得がいかなそうな顔で零を見ている

「反省会だろうがなんだろうが行くのだ零、何だお前のそのユルユ

ル感は！！　たるみきってるぞ！！」

電華は零のやる気の無さに喝を入れようと零に近付くがビクッと零は後退りする

「分かった分かった、行くよ、行くから蹴ろうとするなこの暴力女」

「なっ…何だと！？」

どうやら電華は挑発したら簡単に引っ掛かるタイプらしい
電華は暴力女に反応し、零に蹴りを繰り出す

「ぐふっ！？　あっ結局こうなるの！？」

零は電華の蹴りが溝に入り、床にうずくま蹴る。

「す…済まん、つい蹴ってしまった」

電華は床に踞っている零の背中を擦りながら謝罪している

「イテテっ、手加減を覚えろ。このぼう……」

零が言葉を発しようとした瞬間、電華の脚が目の前で止まっている。

「…何か言おうとしたか？」

「イヤ、ナンデモナイヨ」

零は固くなに答えた、そんな二人の前から不適な笑みを浮かべながらこっちに向かってくる銀髪の教師が居た、白いスーツを着ている

「何おもしろいことやってんの君ら」

「アンタはこれが面白く見えるのなら眼科に行った方が良いな。てかそんな細目で分かんのかよ」

「こら零！ 先生に向かって何だその口の聞き方は」

「ああ、ええよ、ええよ霍華ちゃん。零くんは照れとるだけやから
♪」

「誰が照れてるだゴラァ！！」

零は銀髪 of 教師に殴り掛かろうとしたが先生の横から一人の女子生徒が零の前に出てきた

「何をしているのかしら零くん♪」

女子生徒は紫色の長い髪を靡かせながら零に言う「零はピシャツと背筋を伸ばし女子生徒の前でも良い姿勢で直立している」

「おおこれぞ正しく“鶴の一声”やな」

「銀雲先生も零くんをからかうのは大概して下さりますか？ たぶん私が思うに先生が生徒会顧問だから零くんは生徒会に積極的に参加しないんですよ」

「そないな事言われてもな、僕こうゆう性格なんよ、詠ちゃんも分かるやろ」

「なら治して下さいね」

詠ぎんらんと言う名前の女の子は満面な笑顔を見せながら生徒会顧問の五条ごじょう

銀雲に言ったが軽い感じで銀雲は頷いた

「ぜってえ反省してねーぞあの銀髪狐目ヤロウ！！　まだこっちは収まっちゃいね……」

「零くんにも反省すべき点がありますよ、と言うより教師に手を出すとはどういう了見ですか？　私たち生徒会はこの学園のお手本になるべき“目標”なんですよ？」

銀雲の説教が終わると次は零の説教タイムが始まった、零は過去、この人に3時間くらいの拷問説教を喰らった経験を持っていた。その事があって以来…零にとって苦手な人になった。

「良いですか？　だいたい零くんは…」

「ああーハイハイ、すみませんでした大月おおつき副生徒会長さん」

零も軽い感じで詠の説教タイムを終わらせようとしたが普通シカトされ、後で生徒会室に来てねと黒い微笑みを浮かべながら言ったので零は従うしかなかった

「あ…あの大月副会長」

詠の説教タイムがあった為、間に入れなかった電華がやっと入ってこれた

「あら、何ですか電華さん」

「さっき私たちを呼んでいたのですが何か生徒会の仕事でもあるんですか？」

電華はさっきから気になっていた事を詠に聞いた、詠は優しく微笑みながら言った

「すこし“裏”の仕事でね、電華さんには例の件、零くんは生徒会室に来てくれないかしら。会長が呼びよ」

詠がその事を言うと電華の顔は一気に引き締まり、体育館の横にある柔剣道場に向かった。

零は急に真剣な顔になった電華を気になりながら詠と一緒に生徒会室に向かった

銀雲とはと言うと入学式の片付けをしている先生と生徒たちの手伝いに向かった

※

現在、零と詠は生徒会室前に居た

詠は相変わらずまったりとした感じで部屋に入るとそこには見覚えのある双子と知らない女の子達が会長の前に並んでいた

「ヤーヤー、随分と遅かったようだね零くんは大月副会長。」

生徒会長は零と詠を見るとパタパタと手を振りながら陽気に話し掛けてきた

因みに生徒会長は少ない男子生徒の一人で文武両道が出来る凄い人。

白色長髪で眼鏡を掛けている。美男子

並んでいる女の子達も零達に注目する

「ああー零兄だぁ♪」

「零お兄ちゃん？」

見覚えのある双子は零の義妹である風瀬水波と風瀬火波が居た、零も軽く手を振り、生徒会長の横に詠と並ぶと生徒会長は立って零たちを紹介した

「この二人が私の補佐をしてくれている生徒会の副会長達だ」

零はうん？　といった感じで生徒会長を見た

「あの会長、今俺の耳には副会長“達”と聞こえたのですが？」

零はあれえゝみたいな感じの顔で生徒会長に覗き込みながら言うが生徒会長は全く動じないで話を続けた

「零くんはもう二学年、一学年の指導も出来るデシヨ、だから副会長に昇格したんだよ？　良かったじゃないか♪」

生徒会長はハッハッハと笑いながら零の肩をパンパンと叩いている。零は、いゝ痛いッスと言いながら脳裏の中で整理していた

つまり新しく入って来たこの子達の面倒を見ろと言われているらしい

当の本人とはと言うと：

（面倒くせえええ！！！）

と思っていた

「零くん、今心の中で面倒くせえとか思って無かったかい？」

「っ！！！！？」

零はビクツとしたが本当の事を言った

「：正直に言いますが、面倒くさいから嫌です」

「零くくん」

零が正直に言った後に詠が少しトーンの落ちた声で名前を呼んだ、その低さの迫力に零はまたビビりまくっていた

「ハハハ、零くんは本当に正直だね。でも君には拒否権なんて無いんだよ」

「……？：何ですか会長」

生徒会長はニヤリと不気味な笑みを出して言った

「今日の夜は月がよく見える、皆今日は月を眺めながらも寝るのも良いだろう。では生徒会はまた後日に」

と生徒会長が言うと、副会長の詠は集まっていた一年生を帰し、零

にはコッテリと説教をしたあとに帰らした、今生徒会室に居るのは詠と生徒会長だけだった

「もっと分かり安く教えて上げれば良かったのに、あれでは月を見るか分かりませんよ？」

「ふふふ、別に急がなくても良いんだよ、そう……急がなくて……良いんだよ」

「まったくもう、ウチの生徒会長さんはまったくとしていて困ります」

と言いながらも詠も笑っていた

※

零は生徒会室を出て直行に家に向かおうとしたが校門の近くに双子が待っていた

「アレ？ お前ら先に帰ったんじゃないかねえのかよ？」

「私たちまだ零兄に大事な話とかをしてなかったでしょ。だから……」

水波は少し暗い感じで零に話し掛けてきた、朝のあのテンションを嘘かと思わせる程の暗さで

「叔父さんから話は聞いてます、零お兄ちゃんのお父さんと私達のお父さんは一緒、でもお母さんは違う：私達のお母さんは事故で無くなって身内と言えはお父さんと叔父さんだけと聞いていたから、私達に兄が居たなんて知らなかったからつい嬉しくてあんな朝早くに会いに行ってしまったんです」

火波は零に申し訳無さそうに言った、零はハァ〜と小さい溜め息を吐きながらそっと二人の頭に手を置いた

「んな事を言いたかったのかお前らは」

零は二人を頭を優しく撫でていた

「はわぁ〜」

「ふみゅ〜」

と水波と火波は零に撫でられていると可愛いらしい声を出しながら頭をぐらんぐらんしている

「んな小さなこと気にしてるハズねえだろ、それとも何ですか？

この黒神零さんはそんな小さなことをネチネチと言ってくる小さな小人みたいな男に見えますか？」

零がそう言うのと二人はフルフルと首を横に振っている流石は双子だけあってバッチリ合っていた

「んーうん、零兄は何か父ちゃんに似てるから小さい男なんか見えないよ!!」

「わ…私も零お兄ちゃんが小さな小人さんなんかに見えないよ!!」

二人がそう言うのと零はニコニコしながらまた二人の頭を撫でた

「そうだろ、だから気にすんな、なっ？」

二人はうん、と頷き暗い顔からパアア、と明るい顔になりニコニコしていた

「そういや二人は学園から家って近いのか？」

零は二人の家が近いのか聞いた、何故なら今の時刻はもうすぐ7時になる、辺りは暗くなり夜が近付いてきていた、こんな時間にバスや電車はあるか心配になり二人に聞いた

零の家は学園からの距離が近い為、こんな時間まで居てもすぐに帰れる

「あつ、私たちは零兄と同じアパートに住む事になったから、しかもお隣同士」

「さいですか、近所同士になるのか、んじゃヨロシコ………つてマジで？」

零はマジで？ と二人を見ながら言った、二人はコクコクと頷く

「…まあ良いじゃねーの、どっちかつーと俺はマンションの方が良いと思うけどなアパマンショップで探すか？」

「イヤ大丈夫だよお兄ちゃん、マンションよりもお兄ちゃんが住んでるアパートの方が良いもの」

火波は顔を赤くして言った

「私も零兄が居るから零兄のアパートに決めただよ、別に火波が

ちゃっかり零兄を取ったりしないか監視する為に一緒のアパートにしたんじゃないんだからね」

「また嬉し過ぎるシチュエーションを繰り広げて貰ってんのは有難いんですが、そろそろ帰るぞ」門が閉まっちまう&空腹で死んでしまふから帰ろう」

零はぐうぐうと腹が鳴いている腹を擦りながら言った二人は慌てて校門に向かい門を出て行った

零はそんな二人を見ながら微笑む、だが思うのだった
二人は別にあんな事を言いたかったんじゃないかと、本当は零に一つや二つ、いや…沢山言いたかった事があるんじゃないか、水波や火波たちからすれば父親を零の母親に“盗られた”と思っても仕方が無い

母親を無くし、唯一親である父親が新しい母親を迎えた

確かにたまに会ってはいたと思うが、ずっとじゃない

零は思うのだった

あの二人は零を…憎んでいるじゃないかと

「……………」

零は複雑な思いで帰り道を辿って行った

その後は水波や火波たちと晩ご飯を食べ、各部屋に戻って行った、水波や火波は一緒に住むらしく部屋も二人一緒に楽しい。零は二人のことを考えながら眠りについた

その日の月の光が嫌に眩しく見えた夜だった

第3話「生徒会」(後書き)

グダグダでしたでしょ？

小説をスラスラと書いている人たちは本当に凄いなと実感します（涙）

零

「ただ単にお前に文才が無いだけじゃねえの？」

グサツ！！

水波

「駄目だよ、零兄！！」

おお…水波さん

貴女だけが味方……

水波

「文才が無いのは本当なんだから駄目だよ」

アンタら兄妹は一体なんなんじゃあああ！？

作者イジメて何してんじやあああ

芦田

「ふっ…あんたも仲間か」

あ…………明日くん

芦田

「字が違ええよ!？ えっ…何？ これってお決まりな訳!？」

作者・零・水波

「「「それでは皆さん次回もお楽しみに」」「」

芦田

「…もうヤダ…」

第4話「目覚め」(前書き)

かなあゝり時間が掛かってしまいましたゝ(汗)

本当にすみません(涙)

またあんまり進んでいませんが生暖かい目で観て行って下さい!!

電華

「今回は私が活躍するぞ」

第4話「目覚め」

…目覚めろ…

…われ吾を見よ…

…吾を…使え…

さすれば…絶大な力がお前に授かる…

…さあ…叫べ…

…吾の名は…

※

「…またあの夢かよ…」

零は布団から上半身を起こした、時計を見ると午前三時、まだ夜中

だ。

「…こちらら寝不足になっちまうよ……」

零は頭をポリポリと掻いてしばらくすると考え始める

「…考えても分かんねえや、寝よ…」

零はさっきから襲ってきている睡魔に負け、すぐに寝た

場所は変わり、零たちが住んでいる町、帝黒町ていこくちやうのとある廃棄した工場、そこには生徒会の仕事を受けた南郷電華ただすが佇んでいた

「…今日も月の光が染まっているな。不愉快だ」

電華は夜闇を照らす月を睨みながら独り呟くと、電華の後ろから二人の女性がやって来た

「おやおや、これは“生徒会の犬”で有名な南郷さんじゃないですか」

「本当だ、イケないなあ、いい子がこんな夜中に、しかもこんな危ない場所で」

二人の女性はまるで電華をからかうように喋ってきた、電華の白水色の髪をしたポニーテールを靡なびかせる

「そんな危ない場所に黒須学園ウチの生徒が出入りをしていると情報があったのでな。来てみればソコにお前達が居たんだよ。黒須学園第二学准風組やいなとみかの矢稻十美香、西堂菊里さいどうきくり」

「はっ…呼び捨てかよ」

「トミカの苗字初めて聞いたわ」

何とも二人の調子はバラバラでお互いを見て言っている、電華は背中に背負っている長い橙色の鞆たもとに納めている太刀の握りを手を付けて二人に告げる

「即刻、自宅に帰れ。事情等は明日じっくり学園で聞す。もしそれを拒否、否定をすれば…」

電華は静かにそう言うと、背中に背負っている太刀を鞆から出し、

銀色に輝く刀身を彼女二人に向けて言った

「強制的に帰らせる」

雹華が静かに言った

だが二人は全く動じておらず、逆に少し興奮してきていた

「強制的ねえ、全くそれは構わないんだけど、私らのリーダーが大人しくしてアンタの言うこと聞いてくれるか…分かんないよ？」

矢稲は笑う、だがその笑いにはけしてふざけてる笑いでは無かった、まるでリーダーの強さに対して“絶対”の自信のある、そんな笑いだった

「…なるほど…そのリーダーとかいう者がお前たち二人をたぶらかした者なのだな」

雹華のその一言で一瞬にしてその場の温度が急激に下がった、矢稲と西堂の様子も変わってきていた

「…たぶらかした…ね…、こっちの事情も知らないで何言ってるのかしらね、生徒会の犬さん」

矢稲はゆっくりと雹華の元に歩いて行く、西堂はさっきのふざける様子も無くなり、真剣な表情になっている

「…トミカ、コイツ殺ろうよ。リーダーの楽しみを邪魔するってコイツ」

西堂は黒須学園特有の制服である黒いブレザーの内側から何やら薄い紙を出してきた、そしてその紙を手につと…

「…蛇縛符!!」

西堂がそう言いながら雹華に向けて紙を飛ばす、その紙から黒い蛇らしき縄が雹華の手足を縛り付いた

「くっ!? 何だこれは!!」

雹華は手足に縛り付いている黒い蛇らしき縄をほどうとするが、逆にどんどんと手足を締めていく

「私は符術師だ、普通の学生と思って舐めて掛かると…死ぬよ?」

西堂はさっきのふざけてる雰囲気はすっかりと無くなっており、今は辺りが凍りつきそうな程の殺気を出している、矢稲は縛りついている雹華を眺めながら笑っている

「アハハハハ!! そっちから“強制的”にやって来ておいて早速捕まるとかバカじゃないの♪」

「……………」

雹華は縛り付けられながらも二人を睨んでいる、矢稲は睨みつけてくる雹華を見てまた笑っている、西堂はまた懐から符紙^{ふし}を取り出している

「…符術なんて一体何処から学んできたんだ、しかもこんな高度な術まで使いこなすなんて…」

霍華は二人を睨み続けながらも二人に問う、だが答えるハズも無かった、だが西堂は少し驚いた顔をしていた

「…何故この符術が高度な術だと分かった？」

「いやなに、符術とは元々、中国から伝わり風水符など、病気を無くす為に使う写紙うつしがみとしても使っていたハズだろ？　それなのに攻撃型の符紙があるとはいえあんな短縮で、しかも呪文を唱えただけで私を縛りつけるなど…高度な術しかあり得ないと思ってな」

「……ふん、大した自信だな。私が使った符術は日本古来から伝わる陰陽術の一つだ。話す必要はないがな」

西堂は縛られている霍華を見ながら軽く笑い言い放つ、お前ごときが分かるハズが無いだろ、といった感じで…だが最後の止めを刺そうとする為に霍華に近付いて行くと…

「……！？……」

霍華に近付いていた西堂が動きを止めた、そしていつの間にか西堂の背後に人影が立っていた

「…何故だ…、何故私の後ろに立って居る、南郷霍華！！」

西堂は怒鳴った、それもそのハズだ。縛り付けている相手がいつの

まにか自分の背後に立っていたからだ

しかも電華は自分の持っていた太刀を西堂の背中に突きつけている

「：甘いな西堂二年、私が何の準備も無しでお前達の前に姿を見せ
ると思ったか？」

電華は太刀を西堂の背中に突きつけたまま笑う、西堂は持っていた
符紙を力強く握りしめる

「クソ：こっちは偽物か!!！」^{ダミー}

西堂は縛りつけていた偽物電華の蛇縛符に念を送ると偽物^{ダミー}だった電
華の身体を骨が砕けていく音と肉が締め付けられていく音が静かな
廃工場に響いていった

電華は自分の身体が無惨になる様子を見ながらゆっくりと太刀を西
堂の首筋に移動した

「ふふふ、やはり良いものでは無いな。偽物^{ダミー}とはいえ自分の身体が
肉の塊になるのは」

と電華は言いながらも不適な笑みを浮かべている

「クソっ!!！ トミカ!!！ 何やってんだ、お前も手伝：え：」

西堂は首筋に太刀が向けられていることにも関わらず大声で矢稲が
居る方向を見ると：

「ハハ：加勢は無理かな、菊里い」

錆れた椅子に座っている矢稲の後ろには太刀を突きつけられた南郷
電華の姿があった

矢稲は涙目で西堂を呼んでいた

「もうやめておけ、無駄な抵抗だ」

矢稲の後ろに立っている電華が静かに言う、だが何処か威圧感のあ
る言い方だった

「“妖刀育生計画”に邪魔なる火種は早く消し去るのみ、お前達が
言うリーダーと言うのは斬崎鎖取きりかぎしるでは無いのか？」

“斬崎鎖取”と言う名前に二人いち早く反応した、恐らく二人は知
っている。あの気まぐれで戦闘狂のアイツを、電華はそう思った
「あっ、なっ：何でリーダーの名前を」

西堂は口を開けてポカンとしている、変わりに矢稲が電華に質問した

「……………」

電華は無言のままだった、矢稲がチラッと後ろに立っている電華を
見ると、とても寂しそうな顔をしていた

するとそんな静寂に無機物な機械音が鳴り響いた、ピピピーと鳴り響いている根源は矢稲のポケットから聴こえてきた

矢稲はビクツとしたがすぐにポケットに手を入れた

「貴様…私の太刀が突きつけているのだぞ、勝手な行動して…」

「リーダーからなんだよ、携帯に出ないと後でボコられんだよ、私と菊里が」

電華は「ムウ…」と呟き、携帯の会話を承認した

「ハイハイ、リーダー♪ 私だよ、矢稲十美香だよ」

矢稲はテンションちょい上で携帯に出た

『……………』

「アハハ…ごめん」

矢稲は無言の威圧感で謝ってしまった、出て早々に謝るって何やってんだ、と電華は思いながら軽く矢稲の背中に太刀を突っつけた

「ひっ!」

『…お前何やってんだ?』

携帯の音量を大にしている為、少し電華の耳にも入って来た

「あつ、いや、その、ああそう言えばリーダーは今日来ないのかよ、廃工場に」

矢稲は戸惑いながらも話をいきなり変えた

「何で来ないんだよ、西堂と私こんな時間から来てるのにさ」

『…ああ…わりい、所でよ、相変わらず物質分身が得意みたいだな…“電華”』

電華は驚いた様子だった、だが平然を保っていた

『くくく…相変わらずあのクソ会長の言いなりになってンのか、南郷電華』

電華は矢稲から携帯をぶんどる形で奪った、そして携帯に向かって叫んだ

「斑備会長の愚弄は赦さんぞ斬崎鎖取!!」

『ヒハハ、やっぱ居たか電華ちゃん。本当にまあ良く慕うねえ、あのS野郎なんかより俺とつるもうぜエ電…』

「黙れ…逃避者が…」

斬崎が言い終わる前に雹華は携帯の電源を切り、携帯を宙に投げると一瞬にして切り刻まれた

「ぎゃあああああ、私の携帯いゝ」

矢稲は切り刻まれた携帯の残骸を拾おうと飛び込むがバラバラになってしまった残骸を全て拾えるハズもなく顔面を地面に擦り付けながら派手に転んだ

「リーダーとアンタってどんな関係なんだ」

西堂はずっと首筋に太刀を付けられながらも全く動じないで雹華を睨んでいた

「……お前らには関係の無いことだ、それよりも」

雹華は転んでいる矢稲を掴みながら言う

「まだ闘^やるのか？」

二人は背筋を伸ばし言った

「「遠慮しときます」」

※

「えええええ…えれえモン見ちまったあゝ」

とある廃棄した工場の様子を茂みから覗いていた一人の少年が居た

「廃棄した工場跡に奇妙な音や女霊の笑い声を確かめて来いって言われて来てみれば……ええええれえモン見ちまったあゝ」

ツンツンとしている頭に黒ブチ眼鏡を掛けている少年はコソコソとその場を離れて行った

第4話「目覚め」(後書き)

どうでしたか？

語尾、脱字がちゃんとなっているかとても不安です。

それとあまり書いていないと言う遅い感…自分…しがないッス。

ですけども少しずつ成長していきたいと思ひやす!!

読んでいった方々!!

またまた読んで行って下さあゝい!!

次回

死神の奇想曲
カプリス

第5話

「妖刀・黒斬」

第5話「妖刀・黒斬」（前書き）

ども〜やっとの更新です。

テスト期間と言うのにも関わらず勉強をしないでこっち優先って…
…ヤバイ！！

ま…生暖かい目で見守ってください。

第5話「妖刀・黒斬」

はあゝい、僕の名前は黒神零って言いまあゝす。

いやあ、今日は寒いねゝ。この街ってマジ寒いんだよねゝ

平気で朝の温度とか1℃とかいっちゃいますからねゝあと1℃さが
ったら一の世界だつっうのゝ。

アッハッハッハ

さてと、何故この作品の主人公である俺がこんな事をやっているか
と言うと、今の俺は現実逃避をしたいからなのです

その理由はと言うと……

「くうゝくうゝ」

俺の布団の上に…

「ん…う…くうゝ」

女の子が寝ていた

※

「むほおおお、美味しいです、美味しいです、美味ですー!!」

魚肉ソーセージを必死に貪り食^{むさば}っている黒髪長髪の女の子が零の部屋に居た

零はそんな魚肉ソーセージを美味しそうに食べている女の子を見ながら眉間にシワを作っていた

「おおおお俺は、俺は記憶が無くなる程に欲求が溜まってついには見知らぬ女の子を部屋の中に入れてしまったのかああ?」

零は「ぬああああ」と嘆きながら部屋の壁に頭をぶつけていた

「どうされたのですか? ご主人様?」

零は黒髪の女の子のある“一言”で体がフリーズした

「ちょ…ちょ…ちょっと待って、待って下さい!!
何だった? 何て言った? きき君は今

「…?…何ですか“ご主人様”」

「きゃああああああ、何その犯罪一歩手前みたいな一言お!?
俺は望んでいない、望んでいないぞ。俺は健全な男の子♂だあ

「!!」

零は決して広くない部屋の畳の上を意味不明な言葉を発しながらゴロゴロと転がっていた

「さっきからどうしたのですか、ごしゅ……」

「ストップォプ!!」

やけに発音の良いストップを言うと零は黒髪の女の子の前に座った

「まずその犯罪的な言葉はやめよう、や…別に犯罪なんて決めつけてはいないけどさ…駄目だよその言葉は」

「ムムム、何故ですか!？ 主である貴方に『ご主人様』と言って何が悪いのですか?」

「やめてええ、頼むからやめてくれその言葉あ。俺が言わせてるみたいでなんか恥ずかしい／＼／＼／＼」

零は魚肉ソーセージをまた黒髪の女の子に渡すと黒髪の女の子は「おお!!」と言いながらまた貪り食べる。

そんな女の子を見ながらこの後どうしよう、と考えていると玄関から声が聞こえてきた

「零兄、どうしたんだよ、何かあったの? 隣まで丸聴こえだぞー」

零の妹である凧瀬水波の声だった

(ぎゃあああああ、身内がキター!!　やべえだろ、これはやべえだろ!?)　兄が見知らぬ女の子を部屋に連れ込んどるかあああ
(ああ)

零は妹が来たことにより更にパニック状態になってしまった、当の黒髪の女の子は魚肉ソーセージを口にくわえたまま首を傾げている

「零兄から返事が無い……ハッ!?　まさか零兄に何かあったんじゃない……!!」

水波は返事が返って来ない零に心配し、何やらガチャガチャと音が聞こえる

(ふふふ…無駄だ水波、鍵が掛かっているドアを開けられるハズが無い、さて…マジでこの娘どうしよ)

零は再び黒髪の女の子をどうしようかと悩んでいるとガチャ、とドアが開く音が聞こえた

「ああああ…まさか…」

「いや～さあ～、いざという時の為に零兄の部屋の合鍵を作っておいたんだよね～いやあ良か……」

水波はゆっくりと奥の間に入って来て襖を開けようとしたが

「うおおおお、待て水波、入って来るんじゃないあああ!!」

零は水波が襖に手を掛けようとした瞬間に叫んだ、それはもう必死に叫んだ

「どっ…どうしたの零兄？　　そんな大声で？」

零は慌ててた為、声が少し高くなっていたらしい、それもそのハズ、零はつい先日義妹達と会い、そして共通の学園に通う、つまり妹達は“兄”である零をまだどんな“兄”なのかは知らないのだ。

それがこんな光景を妹である水波に見られてしまえば今後の“兄の威厳”が無くなってしまう

そう零は瞬時に思ったのであった

「いやな水波、今はちつとばかり忙しくてなあ。そこ開けられると困るんだよね、アハハ…」

零は苦し紛れに言い訳を考えていた、それはもう必死に

「…壁に頭をぶつける程忙しいの零兄？」

「ふっ、水波。男はみんな忙しい時は壁に頭をぶつけるもんなんだ、分かってくれ…」

零がクールっぽく言った

「…そんな言い訳があるハズが…ってちょっと待って、“朝”で“忙しくて”入って来るなって…まさか／＼／＼／」

水波は急に慌てた様子になってきた、襖の前に居る零でも分かった

「ん？　　どうした水波？」

零が急に大人しくなった水波が気になり声を掛けるが返事が無かった

「…はわぁ…そそそ…そんな、こここんな朝早くから…ななな」

何やら一人でソワソワしていた

そんなソワソワしている水波の様子を伺いながら零はどうするが悩んだ

生憎、黒髪の女の子は魚肉ソーセージに夢中だ、さっきから食べてるな、魚肉ソーセージ、

因みに何故こんなに魚肉ソーセージが零の部屋にあるかと言うと魚肉ソーセージの安売りが先週、街のお店“みかど”で大量販売していたのを近所のおばさんと死闘の末に勝利品として大量に購入したのだ（一本50円）

だが当の本人は五本食べて飽きていたので処理法が見つかり助かってはいるのだが

「さて…俺も妹が俺に対してどんな想像をしているのをだいたい予想がついて来て“ある意味”での兄の威厳が無くなりつつあるから…開けるか…」

半分は面倒臭くなってきていたらしく今の状況でもう兄の威厳とかの問題は「もどろ〜でもいいやあゝ的」な感じなので零は襖を開けたするとそこに襖の間を必死に覗こうとしていた義理の妹が居た、水波は「きゃあ！！」と小さく驚いた、顔の両頬が赤く染まっている、が…魚肉ソーセージを必死に貪り食べている黒髪の女の子を見ると

水波は硬直した、

「あのゝ水波ちゃん？ 何故に固まったの」

「……にいの……」

「へっ？」

「零兄のバカアアアアア！！」

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！」

※

あの子の零は死の境界線を踏みそうになりつつ所を後からやって来た水波の双子の妹、なぎせほなみ風瀬火波によって救い出された

そして現在、黒須学園生徒会室に集まっていた

「こんな朝早くから何の用だいレイくん、ふわぁ」

会長は大きなアクビをしながら言った、会長の横には副会長の太月おおつき詠と、昨日いきなり消えていた南郷電華が並んで立っている、俺たちが生徒会室に来る前から居たらしい。

今、生徒会室にいるのは零、水波、火波、黒髪の女の子、そして何故か芦田も居た

「何でテメェも居んだよ」

「ふっ、俺みたいな男前な奴はこんな早朝からも忙しいのさ…」

「峰春くんにはこの生徒会室の掃除を任していた所だったんだよ、いやあ〜使えるよね峰春くん♪」

会長はまんべんな笑顔で芦田を見ると芦田はヒッ!?、と小さく震えていたが詠が芦田に優しく、そして何処か怪しげな声で「気が効く男の子って女の子にモテるのよね〜」と言うと芦田はデヘデヘとニヤつきながらその場に崩れていった

(…斑備会長まだらびの毒牙と大月副会長の妖艶に負けたのか…巧みに芦田イッを使ってやがる)

零が既に上手く利用されている友を見ながら思った

「さて…そろそろそっちの事情も聞こうかなレイくん、その娘が原因みたいだね」

斑備会長の目が黒髪の女の子に集中した

「ええ…今朝起きたら寝てたんすよ、この娘が」

「……零兄が連れ込んだんじゃないの?」

零が黒髪の女の子を見ながら言うのと水波はふて腐れたような顔をして話に入ってきた

「……零お兄ちゃん…」

「ちょ…やめて…そんな目で兄を見ないで、確かに一時は意識が無

くなる程欲求が溜まり、見知らぬ女の子を連れ込んだと思ったが今
思うと記憶あるから、昨日昨晚の記憶あるから」

火波のイタイ目線が氣になり必死に零の思いを妹に伝えた

「零くんって以外に大胆なのね♪」

「……零……お前……」

「ええ！？」
大月副会長と電華までもが俺にそんな目を！？」

詠はまた零のネタが出来た事に対して笑い、電華はお前は普通だと思つていたのに、と辛い目で見られた。

何気に斑備会長も笑みを浮かべている

そして最後にこの男も……

「ああれえええゝゝゝ?」　ちよつとちよつと零くゝん、人のこと散々ロリコンとかさあゝ言つてた癖にいそれは駄目だろゝ。ぷっ、俺がロリコンならテメーは変態だつづのゝ(笑)」

「んだとゴラあ！！　こちとらテメエと同じ人間で我慢してやつてんだぞゴラア？　なあにが（笑）だ屑が！！　土に帰れよゴミがあ！！　ああそうだ今日からテメエは塵男と名乗れ、そしてマイホーム　ゴミ箱に帰れえええええ！！」

「ええええええ！？」　オレの親友今まで我慢して人間と見てきたの！？　そして俺はズエツタイに塵男名乗らんぞってキャアアア、ゴミ箱に頭を入れないでえええ！！　痛い痛い痛い痛い、首の骨が折れるウウウウウ！！　はい分かったあああ、今日から塵男と名乗るから許して下さいいいいい」

ダストマン

零は芦田をゴミ箱にねじ込んでいる、そんな様子をマジマジと見て笑っている黒髪の女の子と風瀬姉妹

だが斑備会長と詠は互いに顔を見て頷く

「ふっ、やっと君にも生徒会の仕事を手伝えることが出来るね、レイくん♪」

斑備会長は眼鏡をクイツと上げて零に言う、零は芦田をゴミ箱に頭を突っ込ませてやっと落ち着きを取り戻していた所だった、黒髪の女の子はそんな芦田の姿を見て爆笑している

「まるで今まで俺は生徒会の仕事やってなかった的な発言ですね会長、それとこの娘は関係あるんですか？」

「実は大いに関係してるんだよ、この学園では少し珍しい計画が建てられているんだ……その名は『フレイド・パーティ妖刀育生計画』と言ってね、黒須学園の理事長を務めている人から聞いた話だとこの学園に入学した者の数名に妖刀が送られているんだよ」

零は斑備会長の言っている言葉の意味を一つ一つ理解していこうとしているが、未だ意味が分かっていない様子だったが段々と嫌な展開になってきている事を感じている零

義妹の風瀬姉妹は何が何やらといった感じで図上にクエスチョンマークが出ていた

斑備会長はそんな三人を眺めながらまた話し始める

「送られると言っても直接妖刀を渡し行く訳じゃない、この学園の敷地内には特殊で巨大な術式になっていてね。この学園の敷地内に居ると少しずつ構成されていくんだ、妖刀がね」

零はここでふと疑問に思い、斑備会長に聞く

「…じゃあその妖刀は何処に構成されているんですか？」

「ふふふ、良い質問だね。そしてそこが重要なんだよ、構成されている所…ズバリそこは!!」

零、水波、火波と三人は斑備会長の答えを待つ

そして…!!

「…実はその所だけ不明なんだよ、アハハハ」

「ええええええええ!?!? そこ重要じゃ無かったんですか!?!?」

零はまさかの斑備会長の言葉に驚く

「でもねー僕が思うに、その形状、能力は人によって変わり形造られ…そして与えられたその妖刀かたなの銘なを知る、まあ想像の中で創り上げられているんだよ、妖刀を」

零は思った…まさかと

「レイくん、君はもう理解しているんじゃないかい? その娘の正体。夜に聴いたんじゃないかい? その娘の銘なまえを…」

零は愕然とした、正に予想的中、そして呟く、黒髪の女の子の銘なを

「まさか……クロキリ黒斬か？」

第5話「妖刀・黒斬」（後書き）

ハハハ

急展開ですみません（T|T）
自分でも焦りました（汗）

芦田

「オイ、作者」

何ですか？

芦田

「零の奴なんとかしてくれよ！！」

いつか死ぬぞ俺！！」

まあ…そんな時はそんな時ですよ。

芦田

「えっ！？

死ぬの俺！？」

まあ良いから早くゴミ箱マイホームに帰ったらどうですかミスタ・ダストマンさん

芦田

「ダアレダストマンが塵男じやあああああああああああああ！！」

それでは次回にて

第6話「妖刀師」(前書き)

まず謝らせて下さい…

長い間放置してすみませんでしたああああ！！

12月からずっと放置してすみません、まさか携帯をいじっている程の暇がないとは自分も思わなかったです。

今回の話はかなり展開が激しくなってしまうました。

温かい目で見守って下さい…(T|T)

第6話「妖刀師」

零は驚いていた、最近になって夜中、頭の中に響き渡る声の正体がこんな小さな女の子だったのに。

しかも斑備会長からの話だと少女は“妖刀”：つまり『武器』なんだと言う。

何故、少女なんだと言うと妖刀とは内なるもう一人の分身なんだと言っている、そうになりたい、そうでありたい、という願念がんねんから容姿かたち創られて人の容姿かたちになるケースが多いらしい。

そもそも妖刀には不明な点が多いらしく、黒須学園の『妖刀研究部』が地形に組み込まれた陣形型の魔法陣を探りながら日夜研究している

「つまる所に君はその娘と一緒に行動してもらわないとこっちが困るんだよね♪、妖刀ブレイド・パーティー育生計画は妖刀を育生して観察する計画なんだから」

斑備会長はケラケラと笑いながら零に言っている、当の零はカチカチに固まり、風瀬姉妹は兄の部屋に同じ年位の女の子が同棲になるのを酷く驚いている。

詠は相変わらず面白そうに微笑んでおり、電華は瞳を閉じて黙っている。

「待って下さいよ会長！！
！？」
そんな話信じるとでも思うんですか

「ふうむ、それならその娘が“妖刀”になればレイくんも納得すだ

ろうから黒斬クロキリちゃん、妖刀になったらどうだい？」

零が納得がいていない様子で斑備会長に聞くがそれならと、斑備会長は妖刀である黒斬クロキリに提案を出す。

すると黒斬は

「…それが…」

「んん…？」

黒斬はモジモジしながら言葉を詰まらせる、そんな様子を見た斑備会長は零を見る。

「レイくん、この娘とちゃんと“刀契約”したかい？」

「……とうけいやく？」

零は斑備会長から出てきた言葉を聞いてまた少し戸惑う。

「何か段々ファンタジーっぽくなってきてますよ、“とう”って“かたな刀”ですよね、つまり刀の契約？」

「その通り、文字通りの意味だね、誰が付けたのは知らないけど…で、刀契約したのかい？」

「……多分してないスよ、刀契約なんて」

「ふう〜ん、だからか〜」

斑備会長は何かに納得していた、零は相変わらず分らないままだ、会長の横にずっと立っていた詠が前に出て来て斑備会長を見る。

「つまりね、零くんにはまだその娘と刀契約をしない限り彼女は力を発揮出来ないだよ、“妖刀”になるにも……エイちゃん、ちよっとレイくんは刀契約のしかた……」

斑備会長が詠に刀契約の仕方を教えあげて、と言おうとした瞬間……

ドガアアアアアーン！！

校舎から随分と離れているグラウンドから爆発音が聞こえた。

「な…何だ！？」

零は爆発音が聞こえた方向を向く、火波もいきなりで驚いたのか、水波とくつつく、芦田も爆発音に驚きゴミ箱から転がり落ちた。

「ぎゃあああ、原爆じゃああ、皆早く地下に潜るぞお！！」

「貴様は寝ている」

芦田が騒いでいると雷華が鬱陶しそうに芦田の首に手刀チョップを繰り出す、芦田はガクツと気絶した

「会長……これはまさか、『ブレイドマスター妖刀師』の仕業じゃ……」

詠がそう言うと、斑備会長は小さく頷く、電華は“裏”の仕事の報告も終え、すぐに爆発音が聞こえた現場に向かった。

「斑備会長！！　これは…」

「おそらく、他に目覚めた妖刀師ブレイドマスターだろう。人は誰もいきなり強大な妖刀ちからを手に入れば自制が効かなくなり暴走する。良くあるパターンその一だね」

零が慌てて斑備会長に聞くと落ち着いた様子で説明する。

「電華が出て行ったのは…」

「電華ちゃんはその妖刀師を止めに行かせたのよ。ただし“妖刀師”だったらの話だけど…」

零は素早く出て行った電華の事を聞くと会長の代わりに詠が答えた、だが話の中の内容に疑問を浮かべた。

「…ちょっと待って下さい、“妖刀師だったら”って…他にもなんか居るんですか!?!」

「…居るよ」

零の問いに短く答えた斑備会長、詠も生徒会室から出て行った。職員室に向かったらしい。

「妖刀を手にした者につけられる名は『妖刀師』ブレイドマスターであり、異質な能力ちからや異常な程の身体能力や身体変化をする者につけられた名は『異形者』イレギラと名付けられた。もしかしたらこの爆発音は異形者の仕業イレギラ

かもしれない」

「イレ：ギラですか？ 何で会長はその：イレ：ギラなんて分かるんですか」

まだ続く爆発音が聞こえる中、零と斑備会長は静かに語る。

「分かるよ、異形者と妖刀師の違いなんて離れていても分かる、多分レイくんも分かるんじゃないかな、……ほら、感じるかい？ この妖しい感じ。」

零は斑備会長の言っている事が本当なのかといった感じで瞼を閉じて神経に集中すると、

「……………！？」

身体のある部分に鎖のようなものが縛り付けてきた

「…何だ…コレッ！！、何で鎖が！？…」

「それは今グラウンドで暴れている奴の“妖圧”ってヤツだよ、“妖圧”は妖刀の妖力が重圧的に押し寄せてくる現象だよ。それと妖刀師にも多少なりと妖力を持っている、妖刀を使用していると持ち主も妖力を持つようになるんだ、勿論君も段々と付いてくるよ♪」

会長はまた少し笑う、会長は笑ってばかりだなと零が思っていると会長はいつの間にか真剣な顔になっていた。

「レイくん、さっきの妖圧で分かっただろう？ あれほどの妖圧を持つ者が電ちゃんが勝てると思うかい？、勝てない。殺されるよ」

会長はこれまでに無い満面な笑顔でそう告げた、零は一瞬で頭から血の気が引いていくのが分かった、零は会長は何を言っているのか分からなくなっていた。

「…確かに雹ちゃんは強い、だけどそれは所詮はたかが“普通”の人間に対してだよ、妖刀師は“化物”並の強さだ。そんな相手を雹ちゃんは無傷で帰ってこれると思うかい？」

斑備会長は話を続ける、満面な笑顔のまま。

「さて、君はどうするんだいレイくん？ 雹ちゃんを放っておくかい」

「……………」

斑備会長はまるで試してるような感じで零に聞く、すると零は迷いなくまっすぐな眼差しで斑備会長を見ながら言った

「行きますよ…雹華を助けに行きます！！」

「……良いのかい、君はわざわざ危険な場所に向かうんだよ、そして死ぬかもしれないよ？ それでも向かうのかい？」

斑備会長は真剣な表情で零を見据える、零も真っ直ぐ会長を見る。

「たとえ此処で断った所で何の解決にもならない事くらい分かります。さっきから爆発が止まないのも警察が動いて無いからでしょ？」

多分、黒須学園の理事長が何か絡んでいるでしょうけど…こんなふざけた計画で死人が出るなんて俺は…嫌です。バカげてるし、

それに、ここで俺が黒斬を放置すれば処分が決定すんのも分かります」

「……………なら君はどうする？」

「…俺も妖刀師ばけものになってやりますよ、そうすりゃ俺も何らかの力が入るんですよ？　そして妖刀を育てて行けば良い、ただそれだけでしょ？　ならなりますよ。そして…」

零は一度黒斬を見て優しい笑顔で微笑む、黒斬も笑みを返す。そして斑備会長に目を戻し、覚悟を伝える。

「…皆を護まもる為に妖刀師になります」

零がそう言うのと斑備会長はスッと立ち上がり、また満面な笑顔で零に言う。

「ならやることは決まったね。刀契約は……黒斬ちゃん知ってるね。分かってるねレイくん、“君しか止められないんだ”」

斑備会長がそう言うのと、零は小さく頷き、黒斬を連れてグラウンドに向かった。風瀬姉妹も付いて行こうとしたがちょうどソコに茶色の短髪少女が生徒会室に入ってきた。

「会長！！　電華がなんとか食い止めています但時間の問題です、すぐに校舎の中に入ってきます」

「灯璃ちゃんか、やっぱり電ちゃんじゃ荷が重すぎたね。大丈夫、今副会長を行かせたから安心だよ」

灯璃と言う茶髪の少女は驚いていた、同級生の黒神が妖刀師^{まけもの}を止めに行くなどどれ程無謀なことなのかと灯璃は思った。

「なんて無謀な！！　ただの人間が妖刀師を相手に出来るハズが無いじゃないですか！！」

「そうだね、レイくんが“普通”の人間だったら妖刀師なんて戦えないよ。“普通”の人間だったらね」

斑備会長はクスクスと小さく笑うと真剣な面持ちになり灯璃に指示を出していると丁度、電華から手刀^{チョップ}を喰い、今まで気持良さそうに気絶していた芦田がフラフラしながら立ち上がる。すると斑備会長は芦田の両肩に手を乗せる

「ひっ!?!」

何とも情けない声を出しながらビビる芦田。

「君にやつてもらいたい仕事があるんだよ、峰春くん」

※

黒須学園のグラウンドには焼き焦げた茂みの草やゴムグラウンドのゴムの溶けた匂いがグラウンド周辺に充満していた。と、そこに：

「オラァ、もう終いにしましょうや嬢ちゃん！！」

「く…ハァハァ…」

そこには金髪の頭に口にピアスをつけている男が居る、その男の前には膝を地につけ荒息をたてている電華の姿が居た。

どうやら電華の前に居る男が爆発音の犯人らしい。

「クックック、本当にこんなに騒いでんのに警察やらは動かねえのな、“アイツ”の言ったことは本当らしい」

電華は金髪の男が口ずさんだ言葉に反応した。

「…“アイツ”だって…貴様まさか“斬崎鎖取”の手の者か!!」

電華は金髪の男に叫ぶ、だが金髪の男は平然としながら電華を見下す。

「知らねえなあ、知ってたとしても嬢ちゃんなんか教えねーよ、俺は忙しいのよ。あの学校を破壊しねえといけねえからさ…」

金髪の男は片手に持っている刀らしき物を空に翳すと刀は形を変えていく。

「死んでくれよ嬢ちゃん、行くぜ…爆花」

金髪の男がそう呟くと刀は…いや、妖刀は夥しい妖圧を纏い形を変えていく、変え終えた妖刀の形状は、刀身の両側から刃枝が三本ずつ互い違いに出ていて柄や鐔は普通の刀と同じである。

妖刀の両側から出ている刃枝から火の球体が発火している。

「俺の妖刀の銘は「爆花」、銘の通り散りゆく花のように爆殺させる能力“爆散行刃”がある、嬢ちゃんじゃ俺に勝てねえよ…まあ諦めてくれやあ!!」

金髪の男は刃枝から発火した火球を電華目掛けて放つ、電華は荒息をたてながらもギリギリで避けた、だが

「ぐっ…ああああああああああ！！！」

避けた電華の近くで爆発した、それもかなり強力な爆発だった。

電華は受けた場所から数メートル先まで吹っ飛んだ、グラウンドにいるだけあって障害物にぶつからずに済んだが受けた衝撃はかなりものらしく電華は立ち上がれない。

「死んだか？」

爆花コイツの使い方もだんだんと分かってきたぜ」

金髪の男は電華が立ち上がれないのを確認すると学校に標的を変える。

「さてと、さっさと学校こいを潰すか…」

金髪の男が爆花の切っ先を学校に向けると刃枝から発火した火球がドンドンと切っ先に集まっていく、おそらく一撃で爆破させるらしい。

「随分と日が登ってきたな、早く終らせねえと…厄介にな……………ん？」

金髪の男は何か近づいているのに気付いたその瞬間、何か黒い物が勢い良く金髪の男目掛けて飛んできた。

「ぐおう！！ 何だ！？」

金髪の男目掛けて飛んできた物は漆黒一色の妖刀だった。

「おい、その金髪野郎、俺の大事な仲間に何しやあがる」

金髪の男が後ろを振り向くとソコにな黒髪の青年が立っていた。

「誰だテメエは!!」

金髪の男はそう言うのと黒髪の青年は大声で言う。

「∴テメエを倒す妖刀師だ」
ばけもの

零がそう言うのと金髪の男の近くに刺さっていた黒刀が勢いよく零の方に弾く、すると上手い具合に零は掴み金髪の男を前に立ち尽くす。

もうすぐ聴こえてくるかもしれない。

あのカプリス
の奇想曲を。

第6話「妖刀師」(後書き)

どうでしたか、かなりぶっ飛んでいたでしょ？

頑張って設定を考えながら書いてはいますが…ちと辛いですねー
(T|T)

やっと戦う場面が書けます、個人的に初めて書くので可笑しいかもしれないませんが次の話も読んでいって下さい。

第7話「初陣」(前書き)

くはあゝ書きました、打ちました。

またまたテスト期間と言うにこんな夜中にまで携帯いじって更新してます十握剣でゝす。

この作品にはモデルとなったアニメキャラがあり自分は小説や漫画から容姿や性格をパクっちゃってます。

実際にこの「死神の奇想曲」^{カプリス}の登場人物は容姿はオリジナリティをちと加えただけで後はそのまんまパクってます。

黒神零の容姿や性格は漫画・アニメ・小説の「とある魔術の禁書目録」の主人公…上条当麻から。

凧瀬水波の容姿はアニメ「けんぷファー」の主人公…瀬能ナツルから。

と言った感じです!!

それを想像しながら読んで頂くと少し面白くなるかなと思います。

それではどうぞ。

第7話「初陣」

初めて戦うことって“初陣”って言うんだよな、と零が目の前にいる金髪の男を見ながら思っていると何やら金髪の男が叫んでいる。

「オラァ！！
人に向かって妖刀投げる馬鹿が何処に居やがる！！」

「んだとゴラァ！！
そこら辺バンバン爆発させてる金髪爆発変態馬鹿野郎に言われたかねえわ！！」

「ゴラァァァァァァ、初対面でどんだけ悪口言ってるんだテメエエ！！！」

金髪の男は妖刀・爆花ばくばなから火球を零目掛けて放つ、零は勢い良く飛んでくる火球を見るや急いで横に避けるが電華のように零の近くで爆発した。

「ぐはあっ！！」

零は火球に直撃はしなかったものの車に跳ねられた衝撃並みに吹っ飛んだ。

金髪の男は爆花を振り回しながら零に近付く、零はまさかこんなに衝撃を受けるとは思っていなかったらしくまだ痛がっている、金髪の男はそんな零を見る鼻を鳴らしながら笑う。

「ハッ：何だよ、もしかしてお前、妖刀師ブレイドマスターと戦うの初めてなのか？
ハハハハハ！！」

金髪の男は物凄い勢いで零の脇腹を躊躇無く蹴る、零は爆発の衝撃だけでも痛かったのに脇腹を蹴られたことに口から大量の唾つばが出た。

「アッハハハ！！ 何だよ、弱えなオイッ！！」

「……………呼んだか…」

金髪の男が踞うずくまっている零の前で笑っていると金髪の男の後ろに青髪短髪の少年が立っていた、金髪の男はビクッ！！ もの凄く驚いたが何もなかったように平然を保とうとしたが何回か足を崩しては転んだ。

「…俺を呼んだのかお前」

「ななな何だお前、急に背後から声掛けるな、ちょっとちび……………」

「「ちびったのか!?!」」

零と青髪の少年は声をハモらせながら言った、零も激痛を抑えながらも聞いた。

「ち…ちびるハズねえだろバーカ！！ アーホバーカ！！」

（（ちびったな…））

二人はそう確信すると青髪の少年は零の背中をさす擦る。

「大丈夫か、黒神」

「済まないな尾井群^{おいむら}」

尾井群と言う青髪の少年は零に「肩を貸すか？」と聞くは零は尾井群の耳元に何か呟くと尾井群は頷き立つと、金髪の男の前に立ち塞がる。

「…何の真似だ、コラ」

金髪の男は目の前に立ち塞がる尾井群に睨み付けながら言ってくる、だが尾井群はなんの動揺もせず立ち塞がる、いきなり尾井群は勢い良く右手を金髪の男目掛けて振るうが金髪の男はかなりスレスレに避けた。

「…ぬほお!!、テメエいきなり何しやが…」

金髪の男が言い終わる前に尾井群は拳を振るう、金髪の男はスレスレに避ける。

零は蹴られた脇腹を抑えながら電華に近付いて行く。

「ハアハア、ちよく痛えよ畜生。あの金髪野郎マジで蹴りやがってクソッ」

脇腹を抑えながら走る零は本気で蹴った金髪の男が許せないのかぼやきながら走る、すると「黒斬」が話掛けて来た。

《…すみません、ご主人さま。まだ“アレ”を出すにはご主人さまに妖力を与えなければご主人さまの体がバラバラになっしまいます、故に……あんな…あんな仕打ちを…》

黒斬はどうやら金髪の男から受けた時に何も出来なかった事を相当

悔しかったらしいのか零が握っている柄がかすかに震えていた。すると零は力強く柄を握り返す。

「大丈夫だ、黒斬から妖力が流れて来てるのが分かる。多分これがあと半分くらい溜まれば“アレ”が出来る、でも尾井群だけじゃあの金髪野郎を足止めするには時間が…」

零が黒斬と話していると…
ドガアーン！！

と激しい爆発音が響いた、零が後ろを振り向くと尾井群の姿は無く、金髪の男しか居なかった。

「ああゝくそ、あの青髪野郎のせいでマジで時間を食っちゃったぜ、クソやろうが！！」

金髪の男は朝日が登っていくにつれて段々と焦っていた、どうやら時間が決まっているらしい。

「…やべえな、時間通りに終らせねえと妖刀^{ことう}を貰えなくなっちゃう。おいクソガキ！！ お前もさっきの青髪野郎と一緒に跡形も残らねーようにグチャグチャにしてやるからそこ動くんじゃねえぞ！！
ただでさえ学校も壊さねえといけねえんだからな…」

そう金髪の男が言うと勢い良く地を蹴るとあっという間に零の一步手前まで跳んだ。

（んな馬鹿な！？ どんな脚力だよ！！）

零がたった一步で近付いて来た金髪の男に驚きつつも半歩下がって妖

刀・黒斬を金髪の男に斬りつけようとした瞬間にまた爆発が起きた。

「があああああああああああ！！！」

どうやら金髪の男は斬られ掛けそうになった瞬間に地面に爆花を斬りつけ爆発を起こしたらしい、当然その間近で爆発を起こした本人もただではすまないと思っていた零が金髪の男を見ると無傷で立っていた。

「ワハハハ、ばあか俺は爆花を持ってるから大丈夫なんだよ。爆花の能力“爆散行刃”は爆発させる場所を自在に決められ爆花が放つ爆発は俺には一切効かない、つまりな……」

金髪の男は爆花を空に向けると空中に何か黒い点が徐々に集まりだんだんと真紅色の火球となっていく。

「ここ一帯を一気に焼け野原にしても俺だけは無事って訳だ……ヒハハハ……！！！」

金髪の男は爆花を空に向けながら高笑いする。

（……オイオイ冗談だろ？ アレまさか今まで攻撃してきたあの火球か！？ 今までの火球とは比べ物にならねえじゃねーか、運動会に使う巨大ボール並だ。もしあんな爆弾がここで爆発すりゃあ学校まで届くが………クソ……！！ 無差別かよ……！！ てかさんなことすりゃ確かにアイツは爆発を受けないが……）

「よお……分かってんじゃねーかお前も……」

零が考えていると金髪の男の声を掛けてきた、零は考えを遮断する。

「確かにこんな間近で巨大爆発を起こせば俺には爆発は効かない、だがその代わりに酸素が一気に無くなっちゃう、だが俺もそこまで馬鹿じゃねえ、ちゃんと酸素も確保する方法がある。だからって言ってもこれは使いたくなかったんだがよ、駄目だ…もう時間制限だ」
タイムリミット

金髪の男は軽い感じで話掛けてくるが零は思った、何でコイツはこんな“感じ”なんだと、今から何をするのか分かってんのか？と零は思っていたがそれ以外にも今一番にキてるのは単純な“怒り”だった。

何故コイツのせいで学校を壊されないといけないのか

何故コイツにせいで思い出の場所を壊されないといけないのか。

そして何より何故コイツのせいで、義妹の高校生活を壊されないといけないのか。

零は次々と金髪の男に対する“怒り”が溜まっていく。

《な…なに？ どんどんご主人さまに妖力が吸い取られていく…
…これなら…》

黒斬が零に妖力を吸い取られているのを感じると零の頭の中に念話する、だが、金髪の男がそれを待たなかった、待つハズがなかった。

「以外と疲れんのよ、火球爆弾造るの、だからだいたい出来たから…もうやっちゃおうよ」
これ

金髪の男はまるでこれからやることは全然大した事では無いような

感^{かん}じで零^ろに話^わし掛^かける、零^ろは一瞬^{いつしん}、一氣^{いっき}に金髪^{きんぱつ}の男^{おとこ}のがら空^{そら}きの懷^{いだ}に入り込み斬^きり飛^とばそうかと思^{おも}ったがそれでは空^{そら}中に浮^うかんでいる巨大^{きょだい}な火球^{くわく}爆彈^{ばくだん}が落ちてくるだけで意味^{いみ}が無^なかった。

「…悪いけどさ」

「あん？ 何^{なに}だ、最後^{さいご}に遺書^{いしょ}でも残^{のこ}したいってか？」

輕薄^{けいぱく}そうな笑^{わら}い方^{かた}をする金髪^{きんぱつ}の男^{おとこ}をソツと零^ろは見^みると、そこには絶^{ぜつ}望^{ぼう}の表情^{へいしやう}では無^なく、これから形勢^{けいせい}逆轉^{ぎゃくてん}をするかのような笑^{わら}みを出^だし黒斬^{くし}を構^{かま}える。

「勝^かたせてもら^{もら}うよ、この金髪^{きんぱつ}馬鹿^{ばか}クソヤロウ」

ブチッ

まるで縄^なが重^{おも}さにたいきれずに切^きれたような音^{おと}が聞^{きこ}ええると金髪^{きんぱつ}の男^{おとこ}は怒^{いか}りの顔^{かお}をさらけ出^だしながら言^いう。

「…押しちまったぜ、押しちまったよ、お前^{まへ}自身^{みづか}がこの巨大^{きょだい}な火球^{くわく}爆彈^{ばくだん}のスイツチをなああああああ！！」

金髪^{きんぱつ}の男^{おとこ}は爆花^{ばくか}の降^ふり下^{くだ}げる、空^{そら}中に浮^うかんでいた火球^{くわく}は零^ろ目掛^{めかけ}けて徐々^{じょじょ}に地^ちに近付^{きつ}いて行く。

だが零^ろは特に慌^{あわ}てている様子^{ようす}は無^なく、落^おち着^きいており黒斬^{くし}を目線^{めせん}の所^{ところ}まで持^もっていき横垂直^{やうていぢく}に構^{かま}えると、零^ろは小さく呟^{ささや}いた。

「…纏^{まと}え…『黒刃衣^{くろはがろも}』」

零がそう呟いた瞬間に丁度、火球がぶつかった。

ドカアアーン！！

今までの火球とは程遠い爆音がグラウンドを染めた、だが：学校までを破壊するハズだった核並の爆弾がかなりの小規模な爆発に抑えられていた、爆音だけなら学校まで届いたかもしれない。

だがこの事態を一番に驚いている金髪の男だった。

「な…何でだ！？　　何でこんな小せえ爆発なんだよ！？」

何故こうなった事を理解出来ないのか、かなり慌てている。すると金髪の男の後ろに“何か”が居るを感じ振り向くとそこには…。

黒い衣に身に纏い、黒い刀を持った一人の男が立っていた。

それを見た金髪の男はギョツと目を見開き、爆花の切っ先をすぐにその黒衣の者に向ける。

「ヒィィ、な…何だお前！！」

「…お……を……」

金髪の男からかなり離れている所に居るためか言葉を発しているが聞こえない、だが逆にそれが不気味で“恐怖”と言う感情が金髪の男を支配していく。黒衣の者は黒刀を横に翳すと一瞬にしてそこから消えた。

「何処だ!! 何処に居る!! 出て来やがれ、ぶっ殺してやるう!!」

黒衣の者が消えた為に余計に恐怖が倍增する、金髪の男はパニック常態だ、爆花を何回も空を切っている。何もしないよりマシだと身体が勝手に動く。

だがそんなこと無意味だということをすぐに気付かされる。

「…お前を逝かす事なんていつだって出来るが…正直迷うところだな…」

パニック常態の金髪の男はこの声を知っていた、さっきまで殺そうとしていた黒髪の少年の声だった、金髪の男は声が聞こえる方向を探す、聞こえる聞こえているのに姿が無い。

「このままお前を殺しても楽になるだけだ…だが、そんなの駄目だよな? 俺の仲間をあんな目に合わせたんだからこの程度で死ぬなんて軽い、軽すぎだよな?」

まるで地獄の門までの道のりをカウントするような囁きで金髪の男に語り掛ける黒衣の者、だが声はするのに姿が無い。

金髪の男は完全に“恐怖”が頭を支配した。

「うあ…ああ…ううわあああああああああああああああ
!!」

金髪の男は叫ぶ、声帯が潰れそうになるまで叫ぶ。
さっきまでの余裕など何処かに吹き飛んでいた。

「オイオイ：騒ぐなよ」

金髪の男はグラウンドから逃げようとしているが突如、足首を何かに掴まれ前方に倒れる。

黒衣の者がゆっくりと金髪の男の影から這い上がる。

その姿は漆黒の衣に頭まで覆い被さり顔が隠れている、『死神』と言う単語が似合いそうなその者は妖刀の妖圧が金髪の男を軋込ませる。

「な：何なんだテメエは、な、何で：俺の：爆撃が効かねえ：」

妖圧を受けながらも金髪の男は黒衣の者：に聞く。

「：まあ冥土の土産に聞かせてやるよ、俺の妖刀「黒斬」^{クロキリ}はある能力があるみたいでな：頭の中に直接に入ってきたんだがこの『黒刃衣』^{クロハコ}は材質は布上なんだが外部からの攻撃には鎧のようになる、お前が放った爆発の寸前に『黒刃衣』を円形に展開させて爆発の衝撃を小規模に抑えた。そしてこの姿になっていると色々な能力も付いてきたと言うわけだ」

淡々と説明していくにつれ、金髪の男は顔が青白くなっていく。

俺は一体何と戦っていたのかと。

「：まあ、確かに経験は絶対にアンタの方が上だったが、簡単にだな：“俺がアンタより強かった”だけだ」

金髪の男も分かっていた、自分の方が戦い馴れていると、こんな子供に負けるハズが無いと。

…だが負けた、

「チ…ク…シヨウ…」

金髪の男はそれだけを言うと瞳を閉じる。それは黒衣の者が黒刀を振り上げていたからだ。

「…逝けよ」

黒衣の者がそう告げた。

※

「早く…！ 早く来てよ芦田先輩、零兄が危ないんだよ」

「なら、尚更オレらも行かねえ方が良いじゃねーか！！ さっきも凄い爆発の音が聞こえたぞ」

「…芦田先輩、ビビり過ぎですよ」

風瀬姉妹と芦田峰春はというと会長からむちゃぶりな『お願い』を出され、妖刀師同士の戦いの結果の様子見に行くために学校の玄関の所に居る。

「アイツはこの位で死なねーよ（多分）、アイツは強いんだ（多分）」
芦田と水波はまだ黒衣の者（零）を確認していない為に零は首を傾げる。

（おかしい…流石にこんな地味な黒衣だからって動いてる俺を気づかないなんて…）

「おかしいと思ったでしょ♪」

「……!？」

零は突然後ろから声が聴こえ、急いで背後を向いて見るが誰も居なかった。

「こっちよ、こっち」

「…!!」

背後を向いていた為、正面はがら空きだった。零はすぐに黒斬を構える。

「あゝらこんな可愛い子に負けちゃった金野」こんの

正面には白い衣のような布を身に纏い、真っ白と言って良い程の白色、そして太股まで伸びている長い髪。しらしろも白衣で顔は隠れて少ししか見えないがかなりの美女で例えるならば『仙女』とでも思わせる雰囲気を持っているその女性は地につく程長い白衣を掴みながら話しかけてきた。

どうやらこの白衣しらしろもの女性は零が倒したこの金髪こんねの男、金野の味方らしい。

金野は気絶しているため白衣の女性に返答が出来なかった。

零は思った、この局面において金野の味方が出てきたということはお助けに來た可能性が高いと、だが、

「あの“お方”からの伝言だけど「もうテメエは終わりだ」だってえゝ、キャハハハ！」 アンタはもう用済みなのよ」

白衣の女性は腹を抑えながら笑っている、金野を助けるどころか見捨てた事を言うだけにワザワザ現地まで来たらしい。

「…あんだテメエは」

零は黒衣に顔が隠れているがかなりのガンツケをしながら白衣の女性に言い当てる。だが、当の白衣の女性は軽く咳払いして薄い笑みを浮かべながら零のガンツケに応じる。

「駄目よゝシニガミちゃん、いくら私が『死神をもウツトリさせる美貌の持ち主』だからってそんな力強く見つめないでエゝ♪♪」

検討違いにも程々しい、零は黒斬を白衣の女性に斬りつける。だが、

「あら、切れたかしら私」

白衣の女性はまるで煙の様に消えた、零が辺りを見ると何処にも居なかった、だが声はする。すると零は声が聞こえた方向を向くと宙に浮かんでいる白衣の女性が居た。

「私には貴方の妖刀は届かないわ、まゝだからと言ってコッチにも貴方に勝てる勝算も無いんだけどね」

白衣の女性はクスリっ、と笑うと白い衣を掴み円を描くように舞う、すると白い衣は透明になっていき、身に纏っている女性もだんだんと消えていく。

「うふふふ、貴方とはまたいずれ会えそうだわ、次は“あの方”も一緒にね」

白衣の女性はそれだけを言うと完全に白衣に身体が纏わり消えた。

「何なんですかあの白髪しらがババアは!!! 何気にご主人さまに色気出してましたよ!!! いイーだ!!!」

いつの間にか人型ひとがたに戻っていた黒斬は白衣の女性が消えていった所に舌を出しながら怒っていた、当然に黒斬が人型に戻っているのも『黒刃衣』も解除されており、黒須学園指定のブレザーの姿だ。

「のわっ!!! いきなり出てきたぞ!!!」

零が振り向くと近くの所まで来ていた芦田たちが驚いていた。

(…そうか、あの女の人の『白衣』の能力か)

零は芦田たちが気づかなかった訳があの白衣の女性の『白衣』の能力だと知ると水波と火波が零に抱き着いてきた。

「零兄!!! 大丈夫なの!?!」

「お兄ちゃん、怪我無い!?!」

「おおおお、おうお!?!」

水波は長身な方なので零と同じ身長だ、故に零の首に腕を巻き付き、抱き着いている、火波は零の目線辺りの身長なので水波の横から零の腹に抱き着く。

そんな抱き着き合っている三人を見た黒斬も「私ものです♪」といった感じに零の背中に抱き着く。

そんなハーレム状態の零は

(はあ〜幸せ〜)

といった感じに顔がふにゃふにゃ状態になっていると芦田がぶち切れてきた。

「ウオイウオイあんちゃん、こんな真っ昼間から見せびらかしてくるやないのう…ぶっ潰してやろか!!」

芦田のウザったい突っかかりを無視して零は片手にずっと引きずっていた金野を放す。

「お…おい大丈夫なのか？　一応コイツが爆弾魔なんだろう、ならけいさ…」

「警察に言っただって意味ねえよ、完全にコイツは妖刀を使った。てえーことはこの町の警察も完全無視^{スルー}って訳だ。押し消されてんだよ、黒須学園理事長の無駄な権力と言う圧力でな」

零は抱き着いている三人をはがして戦闘をした痕跡を眺める、これ程の騒ぎを起こしたと言うのに警察が動かないなんて黒須学園の理事長が何かしろしたに決まっている。

そんな事を思っていると金野の妖刀・爆花の攻撃を受けて気絶していた電華を背負いながら尾井群^{おいむら}がやって来た。

「…終わったか」

「尾井群！！　無事だったんだな」

尾井群は「ああ」と頷く、水波や火波は電華がボロボロなのに気付くと急いで尾井群の手伝いをした。

「やあ、終わったねレイくん」

校舎の玄関広場からグラウンドに繋ぐ階段の上にこの黒須学園生徒会の生徒会長である斑備まだらび、その横には副会長のおおつきえい大月詠、その横には灯あかり璃もいた。

「…まさか本当に妖刀師に勝つなんてな、黒神」

灯璃は当然のように驚いていたが、何処か無事で良かったと思わせる顔を見せ、詠もホッ、としている。

ただ一人はいつも笑顔を絶やさない斑備会長は笑っていないく、真剣な面持ちで零を見た。

「…何故殺さなかったんだいレイくん」

斑備会長は零の足元に気絶している金野を見ながら零に訊ねる。

「その男は電ちゃんを殺そうとしたんだよ、しかもオイくんも殺されかけたかもしれない、そんな奴を殺さなかったレイくんの理由を僕は聞きたいな」

自然に皆の視線が零に集まる、水波と火波、黒斬は心配そうな目で零を見る。零は皆からくる視線を気にしながらも肩をすくめて答える。

「気まぐれッスよ」

零の答えに皆は一瞬固まった、今何て言ったと。

「気まぐれですよ、気まぐれ。気まぐれにコイツを殺さなかっただけです、気まぐれに：殺したくなかっただけですよ、ただそれだけです。まあ：確かに雷華や尾井群が殺されかけた時は頭に血が登って冷静じゃ無くなってコイツを殺してたかもしれない」

零は後ろにいる黒斬を見ると頭を優しく撫でて言う。

「でも気まぐれに：黒斬こいつに救われたんですよ」

零はニカッ、と微笑みを出しながら斑備会長を見る。

斑備会長はそんな零を見てハァ、とため息を出すと。

「：君は大物になるかもしれないね、この妖刀ブレイド・パーティー育生計画で」

斑備会長はそう言った途端に零はぶっ倒れた。

どうやら初めての戦いだった為かかなり体力を消耗したらしい。零は寝てしまった。

死神は奇想曲^{カプリス}を鼻唄いながら眠った。

第7話「初陣」(後書き)

完全にBLEACHの黒崎一護の卅界をパクってます、個人的に一護の卅界が大好きなのでやっちゃいました。

すみません(涙)

近い内に人物紹介をやりたいと思っています、CVとかも考えておきます!!

第8話「戦いの後」(前書き)

やっとテストが終わり小説に集中できる時が来ました。

零

「今更だがこの作品見てくれる人が少ないよな」

芦田

「作者が何も分かんねえーからじゃねえのかよ(笑)」

零

「(笑) って、ていうか消えてるぞお前…」

芦田

「ギャアアアア!!、手が無くなってるウウウウ!!」

仕置きですよ明日くん。

明日

「字が違あああああう、そして今の俺の字も違う!!、えっ久々っ!?!、久々にこれキタぞ」

という訳で第8話「戦いの後」どうぞ

零

(こういう事してるから見る人が少ないんじゃない?)

第8話「戦いの後」

とある真夜中、

真っ暗な部屋の中、壁に手を当てながら移動するトゲトゲ頭の黒髪少年が居た。

「ふが、何故に鼻血が…」

つい先日、初めて『戦い』という高校生からかけ離れた経験をした少年、黒神零くろがみれいの姿があった。

話は遡る。

※

零が妖刀師ブレイドマスターのなる覚悟を決め、妖刀師であった金髪の男、金野こんのと戦い見事勝利におさめた零だったが妖力と体力を使い果たしてしまいその場で倒れ込み寝てしまった。

黒須学園生徒会会長である斑備まだらびは零と妖刀師との戦いで傷付いた霞ひよ華うかを保健室へと運ぶよう生徒会書記の尾井群おいむらと斑備会長に頼まれ（半脅し）生徒会雑務となった芦田峰春あしたみねはるは二人を保健室へと運んだ。

「クソッ、何で俺が零じろを運ばねーといけねえんだよ」

芦田が何かグチグチと文句を言いながら零の片手を掴み首かたに掛ける、そんな芦田を水波は鋭い眼光を放ちながら睨むと芦田はビクッ、と怯える。

そして火波はそんな怯えている芦田に優しい言葉をかけてあげる

「芦田先輩、どうかそんな事を言わずにお兄ちゃんを保健室まで運んで下さい。“優しく”て“頼り”になる芦田先輩なら大丈夫ですよね？」

火波はそんな事を芦田に言うと、

「ええ、仕方ないないなあもおう♪」

芦田は零を背負い一気に保健室へと向かった。全力疾走してる為、零は顎を芦田の肩に何回もガクンガクンとぶつかっていた。

尾井群も電華をあまり揺らさずに優しく運ぶ。

「…上手く芦田を利用してるな、火波は」

灯璃はと言うと上手く芦田を利用した風瀬火波にホォ、感心しながら風瀬姉妹と一緒に保健室へ向かった。

零と電華の事が心配なのだろう。そんな所にとこと生徒会顧問の教師がやってくる。

「終わったんかいな、妖刀師同士の戦いは」

生徒会顧問の教師、五条銀雲は知っていたかのような態度で斑備に聞いて来た、どうやらもう一人の生徒会副会長の大月詠が呼んでいたらしい。

「ええ、終わりましたよ五条先生」

斑備はメガネをクイツと上げながら銀雲に答えた、まるで業務報告をするような感じで答える。

「ブレイド・パーティー妖刀育生計画を監視する五条先生には迷惑をお掛けします。これで黒須理事長に報告が出来ますね…」

斑備はそう言いながら銀雲の横を通り過ぎる、銀雲はグランドを見てうわあゝこら酷いわ、と呟きながらしゃべる。

「…これも斬崎くんの差し金かもしれんね」

斑備はピクツと反応して動きを止める、詠も銀雲の言葉に両目を見開く。

「……なぜ鎖取さとりの差し金だと分かるのですか？」

斑備は銀雲に向きはしないが聞き返した。

「いやな、そうかもって思っただけなんやけど…矢稲達からの情報だと近い頃に黒須学園を崩壊させる計画を立てていたみたいなんや。まあまさかこんな速く仕掛けてくるなんて誰も予想出来なかったけどな」

銀雲はそれだけを二人に伝えると爆発跡となったグランドに向かって歩いて行った。

「……………」

詠は顔を俯いていた、そんな詠に斑備はソツと近付き優しく抱き寄せる。

「大丈夫だよ、鎖取はそんな事しないさ」

それは嘘の言葉だった、現に学園を壊す為に金野と言う男がやって来たのだから。

だが、その嘘の言葉によって本の少しだけ詠の気が軽くなったのは本当だった。

(…鎖取、まだお前は…)

斑備は悲しげに空を見上げながら思っていた。

かつての『友』の事を…

※

結局、零と電華は保健室で一日中寝る羽目になった。だが、保健の先生である愛手あいたは邪魔だから自宅に帰した方が良いと勝手に判断して教頭や学園長の許可も貰わず二人を送り帰した。これが保健の先生の在り方で良いのか真剣に思う。

勿論、愛手はこの学園が行っている妖刀育生計画の事も知っている。

「おう、今日は家から一步も出るんじゃないやねえぞ黒神、俺が怒られ

るんだからな」

「こんなズタボロの生徒を家に帰らせるアホな神経してる先公の言うことなんて聞けるかボケ、PTAに訴えんぞコラア。楽勝に勝てるわ」

今は愛手の自動車で零を家まで送ってもらった。電華アパートも乗っているが助手席で寝ている。

愛手は運転席の窓から首を出して零に言う。

「バカ野郎、PTAの略も知らねーで言ってるじゃねえよ。アホ」

「…生徒になんつう言葉だよ、じゃあどういう略だよ」

零が愛手に質問するが、

「適当に何か食って寝てろ、そして明日は学園に元気にやって来い、もう自分が生まれてきた事を感謝しながら登校しやがれ」

「いや答えろよ!!、てかこんなボロボロの俺を明日早速登校させる気かアンタ!?!、てか何で朝から、母ちゃん俺を生んでくれありがとオオオオ、って叫びながら学園入ってたか?、完全にイカれてんじゃないか」

ブルブルン!!、と甲高いエンジンを響かせられ零の声が掻き消された、愛手は電華を送りに行った。

「あんなにツツコんだのにスルーって…もう…良い…疲れた」

零はそう言って自分のアパートの部屋に入って行った。

※

そして現在に戻る。

「鼻血が…止まらね」

鼻を抑えながら零は洗面所で鼻にティッシュを詰め仕込んでいる。

「はあ、何が何やらだったな今日は。水波も火波も学校から帰ってくるなり俺の部屋に泊まって世話をするわけで騒ぐは…疲れた」

鼻にティッシュを詰め仕込んだ零は自分の寢床に戻ると真っ暗な部屋の中、零の布団の中でモゾモゾと何かが動いていた。

「……………」

零はそんな布団にチョンチョンと足で突つくとピクッ!! と過激に反応している。

零は布団を掴みガバツと引っくり返すとそこには真っ黒なヒラヒラパジャマを着ている黒斬クロキリが横になっていた。

「…何してんのこの娘は」

「わ…私はご主人さまの妖刀なのですから片時も離れる訳にはいきません!!」

「ちょ待って、だから『ご主人さま』って言うの止めてくれ、俺の事は名前で呼んで良いからさ」

「えっ…そ…そんな!! 私みたいな妖刀が主であるお方の名前を呼ぶなんてそんなご無礼は」

「良いから…名前が良いよ、俺も黒斬^{クロギリ}じゃ言いづらいから『ギリ』って呼ぶからさ、相子だよ」

零は単純に黒斬の「斬」と言う漢字から抜き取った名を黒斬につけた。

本人も、ご主人さまが言うのであれば…良いですが、…ああでもご主人さまから名を授かるなんてえ、と身悶えしている。そして次に零は何故に俺の部屋にギリが居るんだと質問するとギリはさっき言ってた通り、片時も離れないと言うことで水波達の部屋から抜け出して来たらしい。

「はぁゝ勘弁してくれよ、今日は疲れたんだ。大人しく水波達の部屋に帰って…」

「嫌です!!」

「しかも…速答かよ」

断固部屋に戻る気配を微塵に見せないギリに困る零はある物を見つけた。

「……………何これ？」

ギリの（零の）布団の横に何故か緑色のイモムシ寝袋があった、そして零は足でその緑色のイモムシ寝袋を転がしてみると丁度顔面だけを出している芦田峰春の姿があった。

「何やってんだテメエエエエエエエ!!」

零は生きの良い踵落^{かかとお}としをお腹を空かせた芦田のお腹に喰らわせた。
「ガボオオオオオ!!」

芦田は緑色のイモムシ寝袋を寝くるまったままゴロゴロと転がると
零に胸ぐらを掴まれ宙ぶらりん状態になる。

「…お味は如何^いかな、不法侵入野郎」

「…ごちそうさまでした、てかちゃんとオマエの妹達^{シスターズ}から許可貰
ったから不法侵入じゃねーよバカヤロウ」

「…ちよつと待て、お前ずつと俺の横で寝てたのか?」

「うふっ♪ 貴方の横顔を眺めながら寝れるなんて私はなんてシ
アワセ者なのかしらゝって、すみません、無言無表情で首締めるの
止めて貰って良いッスか? マジ怖いからッ!!」

零は宙ぶらりん状態の芦田を力強く首を締め上げる、芦田は、ぐげ
げげええぐるじい、と唸りながらも寝袋から手も足も出していな
く顔だけ出して苦しんでいた。

「クソッ、水波と火波も何故コイツを俺の部屋に、てか何でテメエ
は俺の家に居んだよ!!」

「はなぜないがだ、ぐびじめでるがらはなぜないがだ（略…話せな
いから、首締めてるから話せないから）」

ハアハアと相変わらず宙ぶらりん状態で首を締められてる芦田は訳を話しようにも話せない。

「ごしゅ…零さま、芦田さんが死んでしまいますう！！、離してやってくださいませんか？」

キリはあわあわと、白目を剥き出した芦田を心配して零に言うのと、生ゴミが出ると腐臭が酷いからな、と言って止めた。

芦田は緑色のイモムシ寝袋にくるまりながらゲホゲホと咳をしている。

「…生ゴミって…ハアハア酷過ぎるう…お前鬼か？ 鬼だろ？
鬼はそとーって叫びながらお前に豆ぶつけたるか！！」

緑色のイモムシ寝袋に入ったままの芦田が目をクワツ、見開きながら零に噛みつく。だが零はやつと鼻血が止まった事を確認してゴミ箱に鼻に詰め仕込んでいたティッシュを捨てようとしていた。

そんな零が芦田に背後を見せた事を後悔しやがれと言わんばかりに芦田は零の寂しい背中に、

「そんな寂しい零ちゃんの背中に『明日に煌めけビーンズドロップ
キック』を喰らわせてやるよ！！ ひゃはぁ♪」

芦田はびよんぴよんと飛び跳ねながら勢い良く零の背中にドロップキックを放つ、零はティッシュをゴミ箱に捨ててる途中だったらしく中腰で芦田のドロップキックを喰いゴミ箱の向こうにあった壁に頭から凄い音を出しながらぶつかる。

そして仕上げと芦田はイモムシ寝袋から取り出した空豆を口の中で転がしている、カラカラと音を鳴りながら、そしてその豆を、

「やって…くれんじゃねえのこのく……」

こつちを向いた零の顔面に勢い良くブツ、と吐き出し、零の頬にベト付いた。

唾液まみれの空豆が。

「……芦田よ、俺喉乾いたわ。だからさ…」

零が頬にベト付いた空豆を取って指の力だけで押し潰し。芦田の顔面に、

「三途の川の水持ってこいやアアアア!!」

距離を取りながら勢いの良い頭突きを芦田の顔面にブチまける。

「ぶがぁぁ!! は…鼻がアアアア!! ちと俺も途中から『やり過ぎた』と思ったわ」

芦田は流石にイモムシ寝袋から両手を出して鼻を抑える、かなりの鼻血だ。芦田が鼻にティッシュを押し込む。

とうにか零に豆を放った場面から芦田に物凄い目付きで睨んでいるキリが怖い。

「何でお前が此処に居んのか答えろ…」

零は芦田に不愉快極まりない事をされた為か物凄い嫌悪の目で芦田を睨むつける、まるでゴミを見るような目で。

そしてキリも、早く殺したい早く殺したい、と何度も
呟いている姿はあまりにも怖かった。

「アハッハー♪　なら俺にひきかか跪ひざまずいて足舐めやがれっつて俺の足首が
あり得ない方向に回わってるウウウウ!!」

芦田は勇気があるのか、それともこの時代に生まれた最大の馬鹿な
のか、零に足を突き出しながら半分ヤケになりながら言う。零は無
表情で芦田の足を舐める。変わりに足首をマッサージと言う名で足を
思いつき曲げようとする。

そしてキリはというと芦田の首を締めようとしていた。

「ちょっと待ってよキリちゃん、君何ご主人様と同じ事をしようと
してんの!?!」

「違いますよ芦田さん、私は主様ののような残酷な殺り方では無くて
優しい殺り方で殺りますから」

「えっ『優しい殺り方』何っ!!　聞いたこと無いよ。てか怖い
怖い怖いよ、怖いよキリちゃん、こわっ…グゲッガハッ…ぐるじっ
…」

キリはやっぱり苦しい方の殺り方が良いですね、と良いながら笑顔
で芦田の首を締める。

芦田はそ…そんなに多数存在するのか『殺り方』がアアアア!!

と叫びながらキリに首を締められている。

「はあゝ馬鹿だろお前は、キリももう良いよ。いい加減訳を聞かな
いとコイツを生ゴミにして山に埋めてきそうになる衝動に走らされ
るから…」

零は片手を頭に当てながらキリに言う「素直に聞き入れ止めた、芦田は噓せながらあの娘怖いわあ、」と涙目になりながら言っ「てやっとイモムシ寝袋から出る。」

「会長から言われてるんだよ、新しい妖刀師の様子を見に行つてあげろつてな」
ブレイドマスター

（…だから水波や火波達も何の疑いも無しに入れたのか）

芦田は首と足首を摩りながら言う「零は芦田を入れた意味が分かった、だが、」

「それで何で入つて来て寝てんだテメエは、俺に直接聞いてりやすぐに終わるだろーが」

「いや、そしたらつまらんだろ」

ドカツ！！

零は思いつき芦田の溝にパンチを喰らわせた、芦田はいきなりは無えだらう、と言いながら倒れる。

「そうか、なら痛感から快感に変わるまで殴り潰してやるから待つてろ…」

倒れている芦田を馬乗りすると片手に握り拳を作り殴り掛かる準備をする、芦田から見ると鬼か死神にしか見えなかった。
だが零もあんなに疲れた戦いをやった夜にこんな芦田ヤツを相手にするとかなりキツかった。

「まあ冗談はさて置き…だ…だから冗談はさて置きだぞ零！！
その拳を下ろして下さい、そして馬乗り止めたげて！！ 俺キリ
ちゃんに殺されるから、あと痛感の意味違っ…すみません！！」

零はもう本当に体力的にも精神的にもかなりキツイ常態の為に芦田の言うことを聞いて馬乗りを止めてフラフラと危ない動きをして布団の方に向う、もう本人はコイツら部屋に居ても何でも良いから寝ようとしているらしい。

キリも零の疲れているのを知っているので零の腕を掴み布団の方に誘導して零が布団に潜ると掛け布団を掛けてあげている。

零はなんてええ娘やあゝ、と感激していると芦田はもう朝なのに気付くと勝手に冷蔵庫を漁りまだ残っていた魚肉ソーセージを見つけ、ケツつけてんな、と呟きながらかじりつく。

そんな芦田を『殺そう』と衝動が起きそうになる寸前にキリは、それは私のギョニクソーサーjeeですう！！ とさっきまで母性能力をフル活動していたキリが芦田に飛び掛かった。

そしてさっきからこんなに騒いでいるのをいい加減我慢ならなくなつたのか、零の義妹達まで入ってきた。

もう零の部屋はワーワーギャーギャー状態になつたこの事態に零は掛け布団をゆっくりと返して言う。

「お前ら俺に何か恨みでもあるのかアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

※

結局零は寝れずじまいで朝を迎え学校に行こうとしたが火波が、

「お兄ちゃん全然寝れてないじゃないですか、こんな常態で学校に行ったら倒れちゃいます」

そりゃそうだろう、と零は頭の中で思った。

「でも愛手に学校に来いよって言われたしなあ、あと生ゴミも捨てて来ないといけねーし」

そう言うのと零の片手には顔面全体に青アザだらけ、いや恐らく身体中に出来ているのだろうと言った感じに服もボロボロの芦田が気絶していた、本当に生きているかは不明。

「愛手先生には私や水波ちゃんから説明しておきます、あと芦田先輩を虐めるのも大概にしてあげて下さいね、お兄ちゃん」

「分かったよ火波、優しいんだね」

零が火波の頭を撫でると火波はほわぁ、と顔を赤くしていると準備をして遅れていた水波が部屋から出て来た。

「あああー!!、火波ばかりズルいー、私にもやってよ零兄」

「ご…ごめんね水波ちゃん」

「お前は何年生だよ、まったく」

撫でている所を見た水波は私も私ー、言ってきた。火波は何故か謝

り、零は笑いながら水波の頭を撫でる。

とても良い絵面だと誰もが思うかもしれないがその場に合わない“者”があるために嫌な絵面になってしまう。

そんなやり取りをして二人を見送ると芦田の顔を軽く叩いて、早うはよ学校行けと言って外に放り出し零は部屋に戻る。

零はやつと寝れるうゝ、と言った感じに掛け布団を上げると芦田が零にベト付けた空豆の入った袋がぶちまけてあった、それはもう氣持良いくらいに布団の中に散りばれている。

そして何故かキリもポリポリと空豆を熱心に拾って食べている、主である零の布団を綺麗にする為か、それとも只単に腹を空かして食べているか分からない。

そして今ピッタリの言葉を思い出し零はため息を吐きながら言った。

「…不幸だ、これは」

えっ？

何処かで聞いたですって？電撃的に気のせいです。

第8話「戦いの後」(後書き)

どうでしたか？

何と度々名前が出てくる『斬崎鎖取』の知り合いが斑備会長。そして詠が俯く理由とは！！

零

「…頑張って盛り上げようとしている所が悲しいな、作者よ」

芦田

「てか何で俺はこんな扱いな訳？、作者はこれで面白いと思ってんのかよ！！、誰がこんな

零

「あっ！！、芦田が消滅したああ、喋っている途中で消すとは作者も酷いことをする」

尾井群

「……呼ばれたぞ」

零

「芦田の替わりと言う訳か、こんな作者が書いた小説を誰か読んでくれるのか心配だ」

尾井群

「次回は黒神の妹達が何かあるらしいぞ」

零

「な…なんだとっ!!」

では次回まで。

芦田

「……………だから何この扱い」

第9話「黒生組」(前書き)

暇だあゝ

勉強しろってか？

ヤル気が起きません。

そんな作者でゝす（ω₁）

第9話「黒生組」

雲一つ見当たらない青空を見上げながら零は学園の屋上で大の字で寝ていた。

今の時間はお昼、零達は一年生の頃から立ち入り禁止の屋上を勝手に上がっては昼飯と昼休みを満喫していた。零は屋上で大の字になって昼寝するのが日課らしい。

大の字で寝ている零の横には昼食らしく購買で買ってきた色々なパンを食べている黒須学園生徒会書記の尾井群おいむらが胡座あぐらをかいて座っていた。

「…静かって…良いよな」

「……そうだな」

尾井群は零がいきなり何故そんな事を言ったのか理解していないが一応答える。そういう男である尾井群はあんパンを袋から開けモグモグと食べる。

「あんパン美味いか？」

「……美味しい？」

零は何故に疑問系！？、と思っていると静かだった屋上に騒がしい奴らやって来た。

「芦田先輩はアソコで甘栗パンを買っていれば私の苺メロンパンと

交換出来たのに何ですぐに食べちゃうの〜!?!、マジあり得ないんですけど〜」

「いやだねえ、俺はそんな苺メロンパンの為に必死こいて奪い買った甘栗パンを水波ちゃんと交換する程堕ちていないのデス!?!、そっちの方がマジあり得ないんだけど〜」

「芦田先輩は授業もまともに聞いてるとは思えない、だから頭使って無いんだからお腹減ってないでしょ!?!」

「ちょ待てやああ、確かに授業では配られたプリントを折り紙みたいに遊んでたりしてるけど俺だって人間です、腹は減る!?!」

などと言い争いながら屋上に繋がる扉から入って来る芦田峰春あしたみねはると風瀬水波ぎせみなみが居た。

「嗚呼：俺の至福の時間を邪魔しに来やがった〜」

零は騒がしい二人の声を聴いた瞬間に俯せになって耳を塞いでいる。尾井群はあんパンを食べ終わり次にコロッケパンをモグモグと食べている。

「う〜い零、お前のパンも買って来てやったぞ〜」

「零兄は私が買って来たパンを食べるんだもんね〜♪」

芦田は買ってきたパンを零の前に差し出した後に水波も買ってきたパンを零に差し出す。

「う〜う〜ん、水波のその青緑色のパンは何だ?」

「うふっふっふ」新発売されたこのパンは手に入るのは本当に稀で今日は運良く余ってたコレを買えたんだよ、名付けられた名は：カビパン！！」

「芦田、お前のパン貰うわ」

零は芦田が差し出したパンを貰った、水波はガーン、と何処からか効果音を出しながら落ち込む。

芦田が零に買って来たのはカレーパンで零も辛い食物は好物なのですぐに食いつく。

するとまた屋上の扉から誰かがやって来た。

「ああここに居たんだね、お兄ちゃん達。捜したんだよ」

風瀬双子姉妹の風瀬^{なぎせほなみ}火波が入ってきた。

「ごめんね、水波ちゃん。委員会の集会があって遅れちゃった」

「大丈夫だよ火波、パンとか少し買って食べてるだけだからさ。早く食べよ、食べよ♪」

火波は遅れたことを水波に謝っていたが水波は気にしておらず火波が持って来た弁当を早く食べようと火波に言う。

零は芦田からカフェオレを勝手奪い取って義妹達のやり取りを見ていた。

そして尾井群はコロツケパンを食べ終わると今度は焼きそばパンを食べ始めている。

「つか、最初は屋上^{うわ}に居たの俺だけだったのにいつの間にかこんなに集まってんな…」

「零さんよ、集まってるって言ってもたったの5人だぜ？、しかも俺はまだしも生徒会の副会長と書記が此処に居るのはヤバいんじゃないですかな」

「……別に大丈夫だと思う、カフェオレくれ」

「ハイよ、尾井群が言ってんだからダイジョブでしょ。なあ火波、そのタコさんウインナー美味そうだな。頂戴」

「あつ、うん！！、良いよお兄ちゃん」

「ちよつつ零さん、何気に俺のカフェオレを尾井群にやるなよ！」

「零兄、私のタコさんウインナー上げるよ」

零が火波が広げていた弁当箱に入っていたタコさんウインナーをくれ、と火波に聞くと火波は嬉しそうに零にあげた。

水波も弁当箱に入っていたタコさんウインナーを零にあげる。

そして零から貰ったカフェオレを物凄い勢いで飲んでいる尾井群、その尾井群を見た芦田はおいコラァァ！！、と叫んで尾井群からカフェオレを奪い返そうとするが尾井群の腕力に勝てず全部飲み干された芦田が居た。

「二人はこの学園を満喫してるか？」

「零、お前はホントいきなりだな。」

「何だ芦田、俺のかわゆい妹達に聞いてんだ、お前のような塵男（ちみおとこ）に聞いちゃいない」

「何この毒舌!？」

「……大丈夫だ芦田、お前は良い方の塵男だから」

「えっ!？、良い方とか悪い方とかあるの塵男って!？」

零のいきなりの言葉に芦田がツツコミを入れると零と尾井群に塵男と呼ばれショックを受ける芦田。

「で、どうなのよ」

「楽しいよ、やっぱ苦勞してこの学園に來ただけあったね♪」

「うん、お兄ちゃんにも逢えたしね」

双子は満面な笑顔で零に答える、零もこの笑顔を見たら少し嬉しくなった。

そんなワイワイと騒いでいると昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

尾井群は食べ終えたパンの袋を一つに纏め最後の焼きそばパンを口に加えながら入口に向う。

水波と火波はもう食べ終え包んだ弁当箱を持って立ち上がる。

「じゃ私たちも行こっか火波、次の授業なんだっけ？」

「美術だよ水波ちゃん、美術室に向かわないと間に合わないよ」

「うえゝ次は美術かぁ、私美術得意じゃ無いのに」

そんな二人は零にまたね、と言って屋上の入口に向かった。

「ふああおあゝ、眠くなってきた時にチャイムとは随分と空気を読まねエ学園だよな、芦田」

「…ぐがあゝ」

零は入口に出て行った三人を見送った後、すぐに立ち上がり欠伸をしながら学園のチャイムの愚痴を芦田に振るが、芦田は何とも気持良さそうに昼寝をしている。零は足で芦田の頭をゴツくが逆に零の足に絡み付いてきた。

「くっ…ウゼエ」

女の子ならまだしも…って女の子でも問題はあるが男が男の足に絡み付く場面なんて誰が喜ぶだろうか、零は本当に加減無く芦田の手を払い腹溝一直線に蹴る。

「ひぐっ!?!」

芦田は奇妙な鳴き声を出すと顔を真っ青になってまた眠る。永眠でないことを祈る。

「これはちとマジイか…でも芦田だから別に良いか…、てか俺も急がねえと授業に間に合わねーな」

屋上で気絶してる芦田を放って零は自分のクラスに戻っていった。

※

キーンコーンカーンコーン

定番でありお約束であるおなじみのチャイムが鳴り全ての授業は終わった。

結局、芦田はあの後、六時限目の頭頃にやっとクラスに戻って来るなり零に殴り掛かろうとしたがその授業担当教師があらうことか零たちのクラス担任の出雲いずも由先生ゆかりの授業の時間だった。芦田が零に殴り掛かろうとした“瞬間”の間に何発入ったか分からないくらい速さのチョークが芦田の身体中に軋込んだ。

そして六時限目が終わった今、五時限目をサボっていた芦田を職員室に連行されて行く所を見送りながら授業で疲れた体を起こし、生徒会室に向かおうとした時、同じクラスのツインテールにウェーブが掛かったオレンジ色の髪をした女の子が零に声を掛けてきた。

「やつほ、黒神くん。これから生徒会の仕事なの？」

「ん…？、芽実めぐみか。そうだな、何か俺が副会長になっちゃったんだ。行くしかないな」

「大変だねえ黒神くんも、今回ののは生徒会の役員多いよね」

芽実が零と喋っているると学級委員長の角阪柚葉つのさかゆずはが学級日誌を持ちながら零に話し掛けてきた。

「零ちゃんは副会長になっちゃったから大変なのよね」

「まあ…まだ詳しい事は聞いちゃいけないけどさ、何か新しい仕事があるらしい…」

「えええ！？、大丈夫なのその仕事。電華ちゃんはまだ学校休んでるって聞いたけど、この前の“爆発事件”と何らかの係わりがあるんじゃないのう〜」

（うう：鋭いな芽実、てか爆発事件ってレベルじゃないだろあの爆発跡は…ってアレ？、何で爆発事件なんて知ってんだ？、確かにあんな朝早くから生徒が学園に居るなんておかしくないけど…）

零は何故、芽実があブレイドマスターの妖刀師同士の戦いを遠回しに聞いてみると、

「えっ？、だって私が部活で朝早く学園に来てただけど、グラウンドに飲酒運転していた車が突っ込んでガソリンが流れ出て爆発したんでしょ？、何でも生徒会に恨みを持つ人が運転した車がって五条先生が言ってたよ？」

見事に真実を偽りに変えていた。だが零はあんなに派手に爆発やらで荒らした芝生やグラウンドはどうしたのだろうかと思っていると柚葉が話を繋げてきた。

「確かにあの爆発跡は変よね〜、あっちこっちに爆発跡が残ってたもの」

「あつれはねえ〜私の推測が正しければきっと彼処では未知な魔物と戦う可憐な魔女っ娘ツンデレ美少女が居たんだよ♪」

「芽実ちゃんはまたアニメ見てたでしょ〜」

柚葉と芽実の話から逸れ、爆発事件の話はどこかに言ったのを丁度に零は二人にじゃなあ、と挨拶をして生徒会室に向かった。

※

場所は変わり学生寮、一応男子寮と女子寮に別れているが、基本的に元女学園だけあって女子寮の設備と男子寮の設備は天と地だ。そんな設備が余り良くない男子寮のとある一室には山吹色の長髪を後ろにまとめた少年と白髪で立てた髪に愛嬌のある顔に厳しい表情を張り付けた巨漢が何やら話込んでいた。

「：俺は生徒会室に呼ばれているんだがどうしたら良いだろうか」

「はあ？、何でお前が生徒会室に行くんだ？、何かしたのか白宇^{しろいう}」

「俺は何もしていない、だが生徒会には俺の兄が居るんだ」

「はあ……じゃ行けば良いだろうが俺は関係無いし」

「お前も呼ばれているんだぞ、銃耶^{つや}」

「はああ！？」

白宇^{しろいう}と呼ばれた白髪の巨漢は決して広いとは言えない一室の真ん中にある小さめのコタツに入っている銃耶^{つや}は横になり掛けた時に白宇が言った言葉で上半身を上げた。

「何で俺が呼ばれねーといけねえのよ!!」

「……俺に言われても困る、あとは妹と柱木を呼ばなくては…」

「何ッッ!!」

銃耶はコタツから身を出し白宇に飛び掛かる、白宇は少し引き気味で、あ…ああと返事をする。

(くあああ、白宇の妹と言えば入園した当時から学園美少女ベスト3に入る白亜^{はくあ}ちゃんじゃねえのか!?!、柱木って奴は知らねえけど……」

銃耶は少し悩むとイッヨオシ行ってやるよ、と銃耶が言う和白宇はそうか、と言って銃耶の襟を掴んでズカズカと足音をたてながら男子寮から出て行った。

※

また場所が変わり生徒会室。そこにはついこの間生徒会室に集まっていた生徒会役員立候補生達が居た。

「やっと私たちも呼ばれるようになったね、火波」

「水波ちゃんは少し嬉しそうだね?」

「だって私たち零兄と一緒に仕事出来るんだよ?、嬉しいじゃん♪」

「あっ：そうか！、そうだね♪、あっ：でも私は委員会の仕事があるんだった：」

水波が義兄である零と一緒に仕事が出来ると知ると喜んでいた、火波も喜ぼうとしたが自分には委員会の仕事もあった事に気付き落ち込む。そんな二人に興味深そうな顔で話し掛けて来た女子二人が居た。

「ねえ風瀬さん、その『零兄』って言う人は誰なの？、今日も昼食は何処かに行ってみたいだけど：」

「ああ分かったの、きつと世間的にも社会的にも決して言っていられない関係を持った兄……」

「ちょーっと待った柱木さん、いきなり何でそんな方向に！？」

「水波さん、良いのよ別に、私はそんな特殊な性癖を持った水波さんでも友達だから」

「ううう…ありがとう、ありがとうね柱木さん……って違うでしょ！、どうしてそうなっちゃったの！？」

柱木と呼ばれた少女は綺麗な翠色の長髪をポニーテールにまとめており、活発的な性格で水波に誘導尋問を行おうとしたが白髪長髪の少女によって止められた、火波もクスクス、と小さめの笑みをこぼす。

「零兄って言う人は私達の義理のお兄さんでとっても優しいお兄さんなんだよおー」

水波はとても嬉しそうに義理の兄の話を二人にしていると生徒会室にある特別大きな執務机の上にグテー、つとなんともだらしなく俯せになっている黒須学園生徒会の会長・斑備まだらびが居た。

「：遅いなあ、レイくん、レイくん来ないと始まんないよオ」

「しゃんとして下さい会長、貴方はこの学園の代表なんですよ？」

零が早く来ないのをだらしなく愚痴っている生徒会長を鮮明で綺麗な紫色の長髪を下ろしている副生徒会長である大月詠おおつきえいがそのだらしなさを叱る。斑備はええ、だってレイくん来ないとつまないじゃない、と呟くとさっきまで水波の話を聞いていた白髪の少女が斑備の前まで近付き、バンッ、と凄い音を出して執務机を叩く。

「もうすっかりして下さい『兄さん』！！、まさか何時もこんな感じなんですか！？」

「うわっ、急にどうしたんだい白亜はくあ！？」

白亜と呼ばれた白髪の少女は長い髪を揺らしながらだらしない兄に葛を入れる。だが兄である斑備はと言うとをまだ執務机に俯せになる。

「仕方ないだろ白亜、僕は今日凄い事を考えたんだ！！、きっと驚くだろうな、レイくんは…」

斑備がそう言うともただらしなく腕を下ろして顔だけ執務机の上に乗つけて3の口になってブーブー言っていた。そんな兄を見た白亜はちゃんとしなさいこのグータラ兄ー！！、と叫びながら兄・斑備の頭をポカポカと叩いている。端から見れば仲の良い兄妹だった。

だがそんな白亜と斑備のやり取りを見て居た四人は口を開けて硬直していた。

と…そこに、

「すんませ〜ん、来る途中に芦田に見つかって追い掛け回れ丁度仕留め終えて、今やっと生徒会室に着いた皆が大好き黒神零くんです」

ガラガラ〜とドアを開けてかなりヤル気が無い感じに入って来た黒髪ツンツン頭の少年、黒神零は硬直している四人を見て驚いていた。

「…どったのこの状態？」

「おおおー♪♪、やっと来たねレイくん♪」

零が生徒会室に入った途端に斑備は立ち上がる。零はそんな斑備を見るとかなり嫌そうな顔で挨拶すると斑備の前に居る白髪長髪の可愛いらしい女の子が零の顔を見て礼儀正しく頭を下げて挨拶をした。

「どうも、こんにちは、黒神先輩」

「へっ…あ…はあ、はい、こんにちはデス」

零はいきなり礼儀正しく挨拶してきた少女に戸惑いながら挨拶を返す、いきなりだったので変な挨拶になってしまっていた。

「あのう〜君はどちら様でおられるのでしょうか」

零は頭を掻きながら白髪の少女に尋ね、少女が答えようとした瞬間、

零は物凄い勢いで前方にぶっ飛んだ。

「ぶははははは！、無様よのう黒神れえゝいいゝいちちち、痛いよ」

零が立っていた場所にはどうやら零に本気のドロップキックをしたらしく、受身を出来ず肘をぶつけて涙目になりながら肘を摩ってゴロゴロと生徒会室を転がっていた。

「相当死にてえみてえだなテメエはアアアアアアアアアア！！」

零は芦田からドロップキックを受けて派手にぶっ飛び生徒会室に転がったが大したダメージは受けていなかった。

「なななっ：何だと！？、俺の『明日を貫けドロップキックSP』が大して効いてないだっ！！」

芦田は全然平気そうな零を見るとかなり焦って後退りする。

「あゝあ、お前のドロップキックヘボなあ」

すると芦田の後ろからスッ、と姿を表したのは茶色の短髪が似合う少女、灯璃が立っていた。

「灯璃テメエ、『お前が黒神にドロップキックを喰らわせてやればお前が一発KOにされるだろう』って言ったじゃねえか！、ってあれ……何か変じゃね」

「テメエが一発KOされてんじゃねえかアアアアアアアアアアアア
！！」

「あっホントだ…ぎゃあああああああああああああああ
！！」

零は一瞬にして芦田の近くまで来ると顔面に思いっきり、手加減、遠慮、配慮の全てを“無し”にして殴った、思いっきり殴った。

芦田は顔面を両手で覆い、ゴロゴロとまた生徒会室を転がる。最近芦田の顔面を思いっきり殴っても鼻血が出さなくなったのは芦田の進歩だ。

「芦田は相変わらず零の陥れる事になると話も聞かないで協力するから面白いな」

灯璃はゴロゴロと転がっている芦田を楽しそう見ながらそう呟いた。Sだ、この人は絶対にSの人だ、と零は頭の中で思っているとずっと静かに見ていた白髪の少女が零達に語りかけてきた。

「あ…あのう、自己紹介をしたいのですが…」

白髪の少女はいきなり乱闘になり、ゴロゴロと顔面を押さえながら転がっている芦田を心配しながら言った。零はああ、ごめんごめん、芦田がバカな事してきたから話が中断しちゃったね、と零はゴロゴロと転がっている芦田を一発蹴って腹に足を乗せて、一瞬にして動きを止めた後に言うと言っていると硬直し続けている四人を改めて確認して白髪の少女の自己紹介を聞く、灯璃も生徒会室にあるソファに座りながら白髪の少女の自己紹介を聞く、硬直している四人を見ながら…。

斑備はと言うとなかなか話を切り出せなくいじけて部屋の隅っこでブツブツ何か言っていた。

「あの、今年度から生徒会に立候補した斑備白亜まだらびはくあと申します、兄がいつもお世話になっています」

ガシャーーン！！

→灯璃が飲もうとしていたティーカップが割れた音。

ガラガラー

→閉まっていたドアを尾井群が開けた音。

グキグキグキグキー

→芦田の骨が軋んでいる音♪

「ぎゃああああああああああああああああああ！！」

※

「いやあーまさか斑備会長にこんな可愛い妹さんが居るとは思わなかったよ」

「うんうん、会長はそういう話はしないからなあ」

零と灯璃は生徒会室に何故か用意してある菓子と紅茶を生徒会立候補生に振る舞う、と言っても四人だけだが。

「あのちよっと、俺に対する謝罪とか無い訳？、てか慰謝料払えやクソ零！！」

芦田は零に罵倒を浴びさせるがあらゆる部分が何故か言う事を聞かないらしく生徒会室に何故か用意してあるベットの上で横になりながらジツとしていた。零も済まない、と素直に謝ったが今はそれどころじゃなかった。

「私達もまさか白亜ちゃんが生徒会長さんの妹なんて知らなかったよ」

水波は零から受け取った紅茶を美味しそう飲みながら言う「零はうん？、と首を傾げながら火波に聞く。」

「あれ？、二人は白亜ちゃんと同じクラスじゃ無いのか？」

「残念ながら私達のクラスはAクラスで史原先生しはらが担任なんです」

この黒須学園はクラスの担任の苗字をクラスの名にする決まりがあり、例えば零のクラス担任は出雲なので『出雲組』と呼ばれている。本当は2－Bクラス。

「史原先生か、確か一年生古文担当だよな？、あの爺さん大丈夫かよ？」

「史原先生はとても優しくて良い先生だよお兄ちゃん」

零がいい年になったんだから大丈夫かね、と何気なく呟くが火波が注意する。

「まっ、私たちの先生は史原先生だからシロッチとは違うんだよ」

(…………シロッチ!?)

水波が紅茶と一緒に出されたお菓子のクッキーをパクパクと食べながら聞きなれないあだ名を聞いた零は頭の中で理解する。

「水波ちゃんは私を『シロッチ』って呼ぶんですよ」

零が水波の言ったあだ名の事で考えていると思い白亜は零に満面な笑顔で答えた。

(…………その満面な笑顔が何処かの会長に似ているから少し警戒しちまうな)

零はいつも満面な笑顔を作っている生徒会長を笑顔を思い出し、白亜の笑顔と重ねてしまった。

その後少し話をするとう亜と柱木は前々から生徒会に入りたかったらしい。水波や火波は零と一緒に居たい理由で生徒会に入りたらしい。それを聞いた零は溜め息混じりにそんな理由で入るな、とぴしやりと言うとこの学園の生徒達の代表である生徒会長・斑備は別に良いんじゃないの一言で零は黙ってしまった。

そんな話をしていると生徒会室のドアがまたガラガラ、と音を鳴らすと、そこに入ってきたのは男子生徒二人だった。

「失礼します、黒須学園第一学年史原組の斑備白宇です」

「……同じく一学年史原組の――鋪崎銃耶しやうきじやです」

白髪の大漢は礼儀正しく挨拶して入って来たが後から入って来た山吹色のポニテ男は随分と、いやかなり嫌そうな感じで挨拶をして入って来た。

「……てかまた会長の兄弟ですか、しかも今度は弟」

灯璃はソファーに腰掛けたまま会長に目をやると何やらやっとな話をさせるチャンス到来の如き輝きを放ちながら執務机の前に立ってコホン、と咳払いする。

「やっと集まって貰ったネ」

斑備は肩まで伸びている白い髪を払いながら言う。相当言いたかったのか微妙にテンションが上がっている。何か最後辺りの発音と伸ばし方がカチン、とくる。

「ここに来て貰ったのは他でも無い、この学園、黒須学園に新しい組織を建てたいと思う!!」

斑備がそう言うのと生徒会をやっていた会員は全員溜め息を吐いた、一学年である男子二人と女子四人は頭に?マークを出している顔をしていた。

「その組織の名は……『黒生組』!!」

斑備は執務机の近くに置いてあったマジックボードにでっかく書きバンバンとマジックボードを叩く。

「：今回はまた大きく出たな斑備会長」

「私も流石に会長の“思いつき”には驚いたわ」

尾井群は零の隣に座って一年生と一緒に菓子を食べながら呟く、灯璃も同じく頷きながら言った。零も激しく同意した。

「会長の“思いつき”で何度死にかけたか……」

零は拳をブルブルと震わせながら会長に言うが、当の本人はマジックボードに何かサラサラ、と書いていた。零はおいコラ糞会長！、と叫びたかったが妹が居る前では言えるハズがなかった。

「まあまあ落ち着きなよ皆、ちゃんと理由があるんだから」

斑備はサラサラ、と書いたマジックボードに指差して言う。

「ここ最近になって妖刀フレイド・パーティ
フレイドマスター イレギラ育生計画の邪魔をしてくる奴らが出て来てね、後この学園内にも妖刀師や異形者が続々増えてるって情報を貰ってね、これじゃ駄目だと僕のが天才的な頭脳が閃いてね……」

「：どうして“黒生組”なんでしょうか？」

「何かヤクザっぽいね、白亜ちゃんもそう思わない」

斑備が説明しているのだがずっと気になっていたのか柱木が零に尋ねた、零も思ってた事を言って斑備の妹である白亜にも意見を聞こうとしたが、白亜は兄が皆に迷惑を掛けて居るんじゃないかと思いい兄を止めようとしたがもう一人の兄・斑備白宇に止められていた。

そんなやり取りを見ている山吹色のポニーテールの少年は美少女揃いの生徒会室でかなりだらしない顔をしていた。

「……聞いてよ、会長なんだけど僕」

「あゝはいはい聞いてますから早く続き喋って下さい」

斑備が皆真剣に聞いてないのに気付きまた落ち込みモードになりかけるが、クッキーを食べながら灯璃はいかにも聞いてましたから続きをう動的な言い方で会長をまたマジックボードの前に立たせた。だがさっきまでふざけていた顔がいきなり真剣な顔に変化してしまった。そんな会長の変わりように驚いた一年生、そして以前にもあったのか二年生達も真剣な顔になる。

「……まあぶっちゃけ、この組織提案はこの学園の理事長が出したもののなんだけどね」

「黒須理事長ねえ、妖刀育生計画の提案者だから妖刀がそんなに大事なのかね」

「それもあるかも知れないが、我ら生徒会はこの学園の生徒を守護ごまからなければならぬ。例えば何があっても……」

零は他の菓子を出して食べながら会長の話で理事長の愚痴を言うが会長は学園の妖刀も大切だが、生徒の安全を第一に考え、この組織案に賛成して建てようとしているらしい。

上手く飲み込めないらしい一年生、水波や火波は実際に会長から話を聞いていたのであまり驚きはしていなかったが残りの四人は少し戸惑っていた。それもそのハズ、この学園で起きている計画なんて知るハズも無い。

しかし、さつき会長は言った。学園内にも妖刀師や異形者が増えて
いると、するとつまり……、

「……ここに居るコイツらはそのどっちかって意味ですか？」

零の言った言葉は事情が知っている者しか知らなかった為に零が何
を言っているのか分からなかった者が多かった。

「まあ追い追ひ説明してくからダイジョブだつて」

会長は頼りない声で言う。と執務机の椅子に座って詠に僕にもお菓子
ちょうだい、と言って詠が持って来たマシユマロを食べながらまた
呟く。

「まあ兎に角、学園の守護兼風紀の乱れを取締組、 “黒生組” を
今日結成しまあーす」

マシユマロをあーん、と口に運びながら会長が言う。と今まで黙って
いた白宇と言う斑備会長の弟と山吹色の髪をポニーテールにしてい
る少年、銃耶も会長に意見した。

「白虚兄さん、いきなり呼び出されておいてこんな投げやりは納得
出来ない」

「そうだそうだ、第一誰が生徒会に入ると言った！、そんな面倒
くせえことやんねえぞ俺は！！」

二人が会長にそう言う。と、会長は詠に紅茶もちょうだい、と言って
会長の答えを待つ。だがそんな事を言っただけでこの人はやめるなん
てサラサラ無い。

零がそう思いながら会長の名前って白虚^{びやっこ}って言うのか、とまた別の事を考えているのは零ただ一人。

※

結局あのは上手く丸困れた二人は渋々黒須学園生徒会に入った。

会長の言葉で二人は一気に反論する意思が無くなった。

『別に嫌なら嫌で構わない、だけど君達が今ここで生徒会もとい黒生組に入らなければ“後悔”するだろう、まっ……何れにせよ君達は“自分の意思”で黒生組に入るしか無くなるからね』

会長は秀麗な顔なのだが、どこか柔和に崩した表情では裏腹に銀色の瞳は冷静に二人を見つめる。

白宇は家族のハズだからこういう場面では慣れているのでは、と零が白宇の顔を見ると白宇はとても直視出来なように下を向く、どうやら兄とは上下関係があるらしく哀しそうな顔をして従う。銃耶と言う少年はその会長の眼光に驚き文句を言えなかった。

会長の話では『黒生組』とは黒須学園生徒会を略して言っているらしい、なら普通は黒生“会”なのだが会長曰く《組の方がカッコ良い、新撰組っぽくて良い響きだから》の理由らしい…。

副会長の詠も相変わらずと溜め息を吐き、灯璃はまっ…いつもの事だからと割りきり、尾井群は普通に別に良いんじゃないの？と興味無しに言っていた。芦田は雑務だし芦田なので拒否権無し。電華にメールしたらすぐに止めさせろとあったが時既に遅し、

会長は完全に『黒生組』という組織を結成させてしまった。

生徒会長兼局長が斑備白虚で生徒会副会長兼副長が零と詠に決定し、そして一から十までの隊を作ったがまだ組長は決まっていなくて会長は言っていた。

『さあ、これから忙しくなっていくよ、まずレイくんは“黒生組”に、つまり生徒会に入らせる人員のスカウトを宜しくね、勿論能力者限定で』

『はあ？、そしたら生徒会に入りたいって言う生徒はどうすんだよ？』

『レイくんは優しいね、でもどのみちこの学園には妖刀育生計画をおおっぴらに発表するって五条先生から聞かされたから多分、妖刀師や異形者しか入って来ないよ、黒生組には』

零は別に優しさで言った訳では無かった、ただ学園側の都合で楽しい学園生活を邪魔をされては誰だって嫌に決まっている、そして生徒会に入りたい奴らも居る、何せ生徒会にはまるで漫画に必ずと言って良い程出てくる完璧な生徒会長が居るからである、しかも美男子に優しい、零は初めて会長と会った時は女では無いのは知ったが、何処から男からくる感じも受けなかった。

その生徒会長と一緒に仕事をしたい女子生徒はこの黒須学園には沢山居る。

だから零はその女子生徒達の事も考えたのだが後から“妖刀”の事

も脳内に浮かんできた。

この前の金野とか言う妖刀師が出て来たら普通の生徒達じゃ太刀打ち出来ない、それも何の力も無い女子生徒たちでは尚更無理だ。

『……発表って妖刀育生計画をツスカ？、そんなバカげた計画を生徒に言って大丈夫なんスか？』

零が疑問に思った事を会長に問うとそっけらかんと曖昧な答えが返ってきた。

『発表って言ってもそんな大それた風に言わないさ、名門黒須学園の名を落ちさせられない。結構捏造して貰って発表をね…』

そりゃそうか、と零はそれきり話を終え、黒生組に入ってくれそうな生徒を募集する事にした。

そして現在は黒須学園の校門から出て来た生徒会もとい黒生組メンバー。

先頭をズカズカと、納得いかねえー、いくハズがねえー、と叫びながら歩いている銃耶と何やらトラウマのようなもの思い出して身震いをしている白宇。そして震えている白宇を白亜が大丈夫だから、ね？、と背中を摩りながら励ましている。そんな先頭三人の後ろに柱木、水波、火波と三人が何か考えながら歩いている。そしてそんな一年生の後ろには二年生である零たちが歩っていた。芦田は少し回復したが元気が無く何も喋らないで歩いており、尾井群は呆けー、っとして歩いており灯璃はそんな尾井群をちゃんと意識して歩け！、と注意するが尾井群は頷くだけ。

零は思っている事を頭から離せられなかった、会長は何故いきなり『黒生組』の話を呼してきた理由、

妖刀師が黒須学園を潰しに来たからか？

それとも妖刀の集まりが悪いから？

そんな事を零が思っているとずっと考えていた柱木は頭を抱えてながら疑問に思っていた事を言った。

「……能力者限定って、私達も何かしらの能力を持っているってことかな？」

その言葉を発した瞬間に全員がピタッ、と歩みを止めた、おそらく皆もそれを考えていたのかもしれない。

「そしたら、今現在に分かるのは零が妖刀師であること位しか分からないな」

ずっと呆けていた尾井群が空を見上げて言った。

「そしたら俺らにもその、なんて言ったっけな白宇」

「…妖刀師か異形者イレギラだろ」

「そっ、それ！！、そのブレイドマスターやらイレギラやらになっちゃまうのか俺らは！？」

銃耶が頭をガシガシ、と掻きながら白宇に言うが勿論白宇も知った事では無い。むしろ被害者だ。白宇は知らん！！、と言うと銃耶は

しやがみ込む。

「ううう……俺はただ女の子沢山居るこの黒須学園でウハウハな学園生活を満喫しようしていた所なのにどうしてこんな目に!?!、てか何よブレイドマスターとか!?!、何かのバトル漫画か!?!」

銃耶はしやがみ込みながら頭をブルブルと振りまくっている、長いポニーテールが尻尾のように見えた。

「まったく、男がそんなんでどうすんのよ。やっぱ駄目ね男は」

「ちょ……柱木ちゃん!?!」

翠色の長いポニーテールを揺らしながら銃耶に言う柱木、白亜はいきなり言った柱木に驚きながら駄目だよそんな事言っちゃ、と言うと銃耶も立ち柱木に近付く。

「ああん?、何だとお嬢ちゃん、こちとら淡い恋愛シュミレーションゲーム的展開を待っていた結果がこんなバトル漫画みたいになりはじめてショック受けてんだぞこのポニテ女!?!」

「アンタもポニーテールだろうがバカっ、男の癖に長い髪して女々しい奴」

「はあ?、今時長髪が似合う男がモテる事を知らんのかこの小娘が」

何故か口論になってしまった銃耶と柱木、白宇と白亜は二人を止めようとして銃耶を抑え込む、巨漢だけあって簡単に銃耶を抑えた。白亜も両手でまあまあ、と落ち着かせようとしているが柱木は丁度抑え込まれた銃耶を蹴っていた。

銃耶もアレッ！？、俺だけ！？、俺だけ抑え込まれてんのコレッ！
？、と言いながら柱木の蹴りを受けていた。

零もそんな一年生を見ている灯璃が話し掛けてきた。

「なぜ会長はこんな一年生までに生徒会、いや……黒生組に入れた
んだろうな、零」

「…知らん、会長の考えている事なんて…分かんねえよ」

零は静かにそう返した。

妖刀育生計画フレイド・パーティーなんて大したものじゃないんだと零は思っていた。

だが、この計画でどれ程の事件が起きていくことなんてまだ、零や
他の者も気付いて居なかった。

第9話「黒生組」(後書き)

何か多めにやっちゃいました。

いきなりですみません(汗)

大抵、作者は家でだら〜、とパソコンでインターネットでアニメを観ることを生き甲斐にしているのですがウイルス入って来て出来なくなっちゃってます。

かなりバカテス(バカとテストと召喚獣)の続きが気になります。

てか趣味は金が掛かるってえのは本当ですね、文庫本やら漫画本を買ってたらあつという間に金が無に帰りました。

ひゃ〜(＜B＞)

あといきなりで良ければですが、PVと違ってどうやって確認をするんでしょうか？

この作者はあまりサイトとかに詳しくないのでちんぷんかんぷんです。

ユーザートップとかで確認するんでしょうか？

あれっ？
分かんない。

教えてくださあーい！！

《イメージ・CV 紹介》（前書き）

長々お待たせしました。

イメージCV発表です!!

何分文才が無い為に読みづらいと思いますが、どうぞ生暖かい目で読んで下さいまし。

読んでるくれる人へ

感謝をお送りします。

《イメージ・CV 紹介》

作者

「ども、作者です」

零

「やっと俺たちのイメージとCV発表だな」

水波

「今まで何やってたのよ？」

作者

「えーと、何か三年生になる為に必死に試験試験の毎日でやっと三年生になれて、やっと書ける時間が出来たんですよ」

芦田

「……バカだな」

作者

「君に言われたく無いよ!!」

零

「取りあえず早く全員のイメージCV頼むよ」

作者

「分かりました、それではこれが『死神の奇想曲』の登場人物全員の声優だよ、後モデルとなったキャラも付くときます」

名前／黒神 零

イメージCV／阿部 敦

《とある魔術の禁書目録》上条当麻役

《亡念のザムド》

竹原アキユキ役等

モデルキャラ／上条当麻

「姿や髪などは完全に上条当麻で服装などが違うだけ、性格は少し落ち着いた感じです」

名前／キリ（黒斬）

イメージCV／下屋則子

《Fate／stay night》

間桐桜役

《武装錬金》

河井沙織役

《黒神》

クロ役

モデルキャラ／クロ

「『黒神』に出てくるクロの容姿がそっくり、ていうかもろ真似^{パク}りで性格は主に従順な犬？ 的感じですよ」

名前／凧瀬 水波

イメージCV／井上 麻里奈

《セキレイ》

月海役

《けんぷファー》

瀬能ナツル役

《戦場のヴァルキュリア》アリシア役

《ハヤテのごとく》

橘ワタル役

モデルキャラ／瀬能ナツル「まるっきり真似^{パク}ってます、水波も完全にナツル♀です、服装などが違うだけです」

名前／凧瀬 火波

イメージCV／戸松 遥

《かななぎ》

ナギ役

《アスラクライン》

水無神操緒役

《明日のよいち》

斑鳩あやめ役

《T O L O V Eる》

ララ役

《絶対可憐チルドレン》

三宮紫穂役

《神曲奏界ポリフォニカ》コーティカルテ役

モデルキャラ／コーティカルテ

「容姿は髪を下ろした常態のコーティカルテです。性格はコーティカルテの反対で内気な性格で真面目な感じですよ」

名前／芦田峰春

イメージCV／阪口 大助

《銀魂》

志村新八役

《機動戦士Vガンダム》

ウッソ役

《あたしんち》

立花ユズヒコ役

《創聖のアクエリオン》

ジュン・リー役

《メルヘヴン》

ジャック役

《クラナド》

春原陽平役

《バンブーブレード》

中田勇次役

モデルキャラ／無し

「芦田はオリジナルで、容姿は春原が茶髪にした感じですが、性格は女の子を第一に考える男でそしてロリコン、良く女の子にパシられる」

名前／南郷 電華

イメージCV／甲斐田 裕子

《アスラクライン》

橘高冬琉役

《セキレイ》

光役

《とらドラ》

狩野すみれ役

《銀魂》

月詠役

《戦国BASARA》

まつ役

《とある魔術の禁書目録》黄泉川 愛穂役

モデルキャラ／橘高冬琉

「髪の色は白水色で少し長い髪でポニーテールをしている橘高さんをイメージして下さい、容姿はそんな感じで性格は真面目で融通が効かない感じ」

作者

「ふいゝ書いた書いた」

零

「俺の声って阿部さんだったんだな」

作者

「個人的に阿部さんの声は少年っぽくて良い、好きダスねえ」

水波

「私は麻里奈さんか」

芦田

「てかやっぱ俺の声って阪口さんか……扱いでわかります、ハイ」

作者

「阪口さんと言ったら『銀魂』の新八の声だろ!!、あの声は忘れられない…」

零

「『クラナド』の春原でも良い声出してたよな、シリアスなシーンでもあの静けさを出す声」

作者

「基本、声優さんは全員凄い!!」

芦田

「ふっふっふ、いやあゝそこまで言われちゃうと恥ずかしいなあ」

作者・零

「「いや、別に芦田^{おまえ}に言っただけから」」

芦田

「ええええええええ！？、いやちよつとそこで否定するう！？」

作者

「では次は斑備会長と詠、それと先生の五条先生と出雲先生のCV発表でゝす」

名前／斑備白虚

イメージCV／子安 武人

《ボロボロボ・ロボロボ》ロボロボ役

《∀ガンダム》

ギム役

《機動戦士ガンダムSEED》ムウ・ラ・フラガ役

《ワンピース》

青キジ役

《銀魂》

高杉晋助役

《BLEACH》

ペッシュ役

《TOLLOVEる》

ザステイン役

《鋼殻のレギオス》

カリアン・ロス役

《真・恋姫†無双》

于吉役

《戦国BASARA》

猿飛佐助役

《ニードレス》

アダム・ブレイド役

モデルキャラ／カリアン

「容姿はもろカリアンです、何か性格はカリアンの性格を少しオリジナリティを加えただけです（涙）」

名前／大月 詠

イメージCV／高垣 彩陽

《機動戦士ガンダムOO》

フェルト役

《鋼殻のレギオス》

ニーナ・アントーク役

《そらのおとしもの》

五月田根美香子

《続 夏目友人帳》

翠役

《聖痕のクェイサー》

水瀬文奈役

《デュララ》

狩沢絵理華役

《はなまる幼稚園》

柊役

モデルキャラ／五月田根美香子

「容姿は完全に美香子です、性格も少しオリジナリティを加えた感じです」

名前／五条 銀雲

イメージCV／遊佐 浩二

《BLEACH》

市丸 ギン役

《銀魂》

東城 歩役

《ご愁傷さま二ノ宮くん》奥城たすく役

《絶対可憐チルドレン》

兵部京介役

《にゃんこい》

ジョセフィース役

《はなまる幼稚園》

花丸役

モデルキャラ／野々原 楓

「『ハヤテのごとく』に登場する野々原楓をモデルにしました、姿は白いスーツを崩したように着ている。性格は相手を遊び感覚に突っ掛かってくる感じです」

名前／出雲 由

イメージCV／小菅 真美

《生徒会の一存》

真儀瑠 紗鳥

《らき☆すた》

高良ゆかり

《空を見上げる少女の瞳に映る世界》

王妃役

《おももりひまり》

文車妖妃役

モデルキャラ／真儀瑠 紗鳥「容姿はもう真儀瑠先生で、性格は少しヤンキーっぽいのに生徒を思いやる優しい先生って感じです」

作者

「ふ…ふいゝゝ（▽、）」

零

「やりきった顔してんじゃねーよ」

作者

「ちょっと見辛いかもしれないなあ（汗）」

芦田

「まあ、良いじゃねえの？、てかあの会長の声って子安武人さんだったのか！！」

零

「また大物声優を…」

作者

「やっぱあの人は入れときたいね、俺が子安さんの声初めて聴いたのはゲーム『テイルズ・オブ・ジ・アビス』のジェイドだった」

芦田

「へえ、てかいっぱいアニメ作品に出てるよな」

作者

「いっぱい出てると言えばこの人“遊佐浩二”さんだあああああ
あ！！」

零

「急にテンション高くなったな!？」

水波

「五条先生のイメージC Vの人だね」

作者

「そう!、そうだよ!、そうなんだよ!、そうなんですよ!」

零・水波・芦田

((う……うぜえ))

作者

「……何その冷たい眼差しは…」

水波

「…何でそんなに好きなんですか？」

作者

「えっ、聞いちゃう?、聞いちゃうの?、聞いちゃいたい訳?」

水波

「えっ…別に嫌なら聞かないけど…」

作者

「ちょバカっ!!、ソコは聞くでしょ普通うゝゝ、何やってるわけ」

「？」

零

「何か新しく出て来た一年生のイメージＣＶはどうすんだ？」

作者

「：分かったよ、君たちがそんな勝手にやっていくなら自分も勝手にやっ…」

水波

「その内またやるんですね、分かりました」

作者

「ハッ…こ…これは意味が無い!？」

零

「そんじゃ、また近い内にく（ω）／＼」

作者

「終わっとるッ!？」

《イメージ・CV 紹介》（後書き）

どうでしたか？

読みづらかったでしょう。すみません（汗）
駄文で（；――；）

感想・コメントを待っています。

何でも良いので感想やコメントを下さ〜い（涙）

作者の悲願！！

第10話「新たな妖刀師」 (前書き)

長らく放置してすみません、高3になってたから忙しくて小説をやる暇が (涙)

今回の話は変かましません、急いでやっちゃったので (T|T)

メガネくん」

「何が終わってねえだバカ野郎、己の人生を終わらせれるバカが何処にいやがる！！、化け物！！」

黒ブチ眼鏡を掛けた少年は必死になりながら走っていた、それもそのハズ後ろから迫って来る者は異形の者、普通の人間でさえこんな暗闇の中後ろから追ってくれば怖がる、だが、今追って来ているのは明らかに異形の者。手から炎を出すなんて普通の人間には無理だ。だが黒ブチ眼鏡を掛けた少年も少し普通の人間とはかけ離れた能力持っていた、それは、

「まあ逃げるこたア無えだろ？、くろがねびと《鉄人》さんよ！！」

腕部分だけオレンジ色のパーカーを着ている少年は手から炎を黒ブチ眼鏡の少年に放つ、だが黒ブチ眼鏡の少年は片手で炎を振り払う。

「ワハハハハハ、俺が普通じゃ無えんならテメエも普通じゃ無えんだよ、くろがねびと《鉄人》」

くろがねびと《鉄人》と呼ばれた黒ブチ眼鏡の少年は自分で炎を払った手を見ると手が黒い色をした手に変化していた。

「・・・違う・・・俺は鉄人なんかじゃねえ・・・」

黒ブチ眼鏡の少年は自分の手を見ながら俯く、炎を出した少年は掌に炎を出現させ辺りを明るくした。

すると炎の少年は俯いている少年に語りかける。

「・・・俺の名は炎条騎烈、えんじょうきれつお前と同じ妖刀育生計画の犠牲者とな

った異形者だ」

「・・・犠牲者?・・・」

炎条はああ、と答え相手の少年と向き合う。炎条の炎で照らされた少年は黒ブチ眼鏡にボサボサとした黒い髪、疲れきった瞳、そして何処かの高校の制服を着ていた。

「犠牲者って何だ?、俺のこの能力もそのブレイドなんやらのせいなのか?」

少年は自分の手を見て炎条に聞く、炎条も炎を照らしながら話す。

「そう妖刀育生計画の為に能力を与えられた実験体さ、俺と同じにブレイド・パーティーな。俺は異形者にされてこの通り《炎人》ほむらびとになっちまった・・・」

「・・・騎烈さんとか言ったなアンタ」

炎条は「ああ」と答える、眼鏡の少年は炎条に質問した。

「そのブレンドなんやらの実験で俺は変な能力を持ったんだよな?、何で俺なんだ?」

「ああくん?、そんな事知るかよ、俺はある“命令”でテメエを殺しに来たんだからよお」

黒ブチ眼鏡の少年は「えッ・・・」と眼鏡がずれて驚いた、今なんて言ったと?。

「ワッハッハッハ、なあに驚いてんだテメエ、俺がさっきからテメ

エを殺そうと何度も炎を放ってたじゃねえか」

炎条は手から発している炎を莫大に膨れ上がらせる、炎条の炎の熱気が黒ブチ眼鏡の少年の肌を熱く覆う。少年は炎条の炎に危険を感じながらジリジリと後ろに下がる。

「・・・まあ上手く逃げな、《鉄人》よ」

※

「おい、何かさあ昨日の夜中になんか火事があったみたいだな」

黒須学園に続く坂道にあしたみねはる芦田峰春とくろがみれい黒神零が歩いていた。

「ああ、何かあったみたいだな夜中12時頃に・・・」

零は素っ気なく答え歩みを止める、後ろを振り向くと元気になった
南郷雹華なんこうひょうかと零の義妹の風瀬姉妹の水波と火波が話していた。

「南郷先輩が元気になって良かったです、お見舞に行きたかったんですが南郷先輩のお家が分からなくて・・・」

「済まなかったな、心配を掛けてしまって、火波は優しいんだな」

「火波は心配性なんですよ、私が風邪引いた日なんて『一緒に休んで看病する』って言って聞かないんですから」

三人は和気藹々（わきあいあい）になって話していた。そんな三人を見ながら歩いていると芦田がニヤニヤしながら喋ってきた。

「良いイよな、こーゆー女の子同士の華やか会話は」

「・・・悪い、何か今の芦田見たら警察に通報したい位に変質者に見えた」

「えッ！！、普通に良いなあと思ったただぞ、今のは！！」

「そーか？、俺には変質者にしか見えなかった」

零と芦田がいつも通りに話していると後ろの会話に男性の声も聞こえた、零と芦田が振り向くとそこには青い髪が特徴な少年、尾井群おいむらが居た。

「ええー！？、尾井群先輩と南郷先輩は幼なじみだったんですか？」

「ああ、蒼道そうどうは私の幼ない頃から友達だ」

「・・・？・・・南郷先輩？、そうどうって誰かの名前ですか？」

「何だお前達、コイツの名を知らなかったのか？」

電華は尾井群に向かって指差す。そう・・・尾井群の名前は『蒼い道』と書いて『蒼道そうどう』と言う。零も久しぶりに聞いたなと顔を頷ける。

「相変わらずカッコイイ名前だな・・・尾井群」

「・・・そうか？」

零が尾井群の名前を褒めるが肝心の尾井群はシラゝ、っとした感じに答える。

「尾井群の名前聞くの久しぶりだよね」

「ああ、普段は尾井群って言ってるからな」

零と芦田がそう言うのと電華は疑問そうにして二人に聞いた。

「そう言えばそうだな、二人は何で蒼道を名で呼ばないんだ？」

電華が質問すると零が止めていた足を動き出し歩み進めながら言う。

「何か馴染んじまったんだよ、尾井群って呼ぶのが」

「俺も俺も」

電華は「そうか・・・」と言って区切った、電華本人は名前で言っている方が『友』としてしっくりくるから名前で呼びあいたいらしい。肝心の尾井群は風瀬姉妹に何か質問され、それを答えていた。その内容には「零兄に彼女とか居ますか?」、「お兄ちゃんの何か好きな食べ物は知りませんか?」やら零に関わる質問ばかりしていたが尾井群は嫌な顔もせずには答えていた。

「てかそんな事より昨日の火事騒ぎだよ火事騒ぎ、帝黒町の町中であつたって話だぜ」

芦田がさっき話題に出していた話を切り出した。

「・・・それってもしかすると異形者イレギュラの仕業なのか?」

「聞いた話だ何やら炎を出す奴が居て、誰かを襲ってたって話だぜ」

「また、会長のトコに行かないとだな・・・」

零が疲れた感じに言うと尾井群が話に入ってきた。

「・・・黒神、校門に芽実めぐみが立ってるぞ」

「ああ・・・本当だ」

校門に立っているのはオレンジ色にウェーブが掛かっているツインテールの女の子。零のクラスメートの芽実が居た。芽実がこっちに気付くと駆け足で寄って来た。

「おっはよー、朝から眠そうな顔しやがってお前らはあー、ちゃんと起きてますかあ？」

朝から元気良く挨拶をしてきた芽実、物凄い音量だったので芦田は耳を塞ぎながらも「おはよ」と答え、零も朝の挨拶をする。

「おお！！、電華ちゃんが無事復帰したかー、もう心配してたんだぞコノヤロ！！」

電華が居る事に気付くと勢い良く電華に抱き着く、芽実は本当に心配していたらしく零から見ても力強く電華に抱き着く、そんな芽実を見て微笑む。

「ムフフフ、これでやっとそろったね出雲組の『春華零道』しゅんかれいどうの四人組♪」

芽実は電華に抱き着きながらそう呟くと横で見ていた水波が口を開く。

「・・・？・・・しゅんか・・・れいとう？」

水波は頭にクエスチョンマークを浮かべながら考えていると芽実は赤い髪の女の子と青い髪の女の子が居る事に気づく。

「おやおや？、もしやこの可愛い女の子達は黒神くんの妹さんかな？」

芽実がそう言うのと今度は火波に抱き付いた。火波はもちろんビツクリして瞳を見開くがスリスリ、として来る芽実に自由を奪われた。

「いいやああ可愛い娘やなあー♪♪」

芽実は一セ関西弁を使いながら火波を頬擦りする。火波は「はわあゝ」と言ってジタバタするが火波の自由は完全に芽実が掴んでいた、だが、可愛い義妹を助けるべく零は「おい、こら」と言いながら火波から芽実を剥がす。芽実は「ああーん、柔らかかった黒神くんの妹ちゃんが」と言って離される。

「『しゅんかれないとう』って何ですか？」

水波はさっきから疑問に思っていた事を尾井群に聞いた。

「・・・どうやら芽実是我们たち四人をそう呼んでいるんだ」

「うーん？、それはどうしてですか？」

水波がそこまで言うと言芽実は零達の前に仁王立ちになって説明する。

「説明しよう、『春華零道』のしゅんは“春”つまり芦田峰春の“春”で、かは“華”で霞華ちゃんの“華”。そして黒神くんの“零”でしょう？、そしてそこに尾井群くんの蒼道、とうの“道”を入れて丁度『春華零道』の四人組を結成したんだよ♪」

「長い説明をありがとう芽実、だが・・・相変わらず俺だけ仲間外れみたいで嫌なんだよなそれ・・・」

長い説明が終わった芽実に零は自分だけの名前が違うだけにショックを受けていた。芽実はトントン、と零の肩を叩くが笑みを浮かべながら軽く揺すぶりパンパン叩いて終わった。

「もうすぐ朝のホームルームが始まるぜ、急ごう！！」

珍しく芦田がそう言う。零は辺りを良く見渡すと生徒達の姿は無く自分達だけが遅れていることに気付くと急いで教室に向かった。

※

零たちは何とか教室に間に合い自分の席に着く。

「ハアハア・・・よ・・・良かったあゝ出雲先生居ねえよー」

「・・・間に合って良かった」

「うお！？、尾井群！？、お前も出雲組だったわけ？」

「・・・失礼な奴だ、俺も2－Bクラス出雲組だ」

尾井群は胸を張りながら言う、芦田は「おう、そですか・・・」と自分から聞いたという素っ気なく言い終わると自分の席に着く。尾井群もすぐに席に着く、尾井群の席は左側の一番前だった、通りで気づかない訳だ。

「おはよー、零ちゃんに蒼ちゃん」

学級委員長こと角^{つの}阪^{さか}柚^{ゆず}葉^はが二人に挨拶する。零と尾井群も朝の挨拶を返して終わり・・・

「・・・ってアレッ!?!、委員長オレには朝の挨拶無しですか?、それなりにキツイよそれ、俺泣くよ?」

芦田に柚葉に聞くが芽実が教室に入ってきて来ると芽実には朝の挨拶をして終わった。芦田が泣きじゃくっているとすぐに担任教師の出雲由が入ってきた。

「オース、おはようお前ら」

出雲先生が皆にそう挨拶をすると「「おはようございまああす」」と元気良く挨拶が返ってきた。

「うんうん、元気があってよろしい」

元気良く返ってきたのに喜んでいる出雲先生にクラスの女子生徒一人が挙手する。

「・・・ん?、どうした沙藤、何処か調子が悪いのか?」

「いえ・・・私じゃ無いんですが芦田くんが何か踞っているのが・・・」

沙藤と呼ばれた女子生徒は踞っている芦田を心配そうに出雲先生に言った、流石は女の子・・・こんな芦田でも心配してくれるなんて。

「ああ芦田なら大丈夫だろう、腐った饅頭を食っても平気な男だ」

「いやいや、無理ですよ先生それは・・・マジで」

「何だ・・・生きてたのか？」

「オオオオオイ！？、何生徒を死なせてんだアンタ！！」

芦田が生きていた事に驚いた出雲先生だったが、また普通に朝のホームルームに戻り芦田は「シカトユですか・・・」と泣きながら座った。

その後はいつも通りに朝のホームルームが終わり一時限目から授業が流れた。

零は窓を眺めながらも授業に聞き入り、芦田は教科書を立てて爆睡し、尾井群は呆けながらも黒板を見ていた。根本的にこの出雲組の男子は零、芦田、尾井群の三人しか居らず女子生徒の割合で満たされていた。

流石は元女学園だけあって入学してくる女子生徒が年々に増加して行き、今では黒須学園の5分の1は男で残りは女子生徒で埋まっていた。

（・・・腹減った）

零は今の常態を頭の中で呟いた、今の授業は世界歴で担当教師は長い茶髪の女性教師、永倉千香先生ながくらせんかが受け持っていた。あの永倉先生はとても心優しく授業も分かりやすく、寝ていても優しく起こしてくれる女神様のような先生だ、永倉先生と出雲先生を比べれば断然に永倉先生の方が人気だろう。

零がそう思っていると永倉先生は零をチラッと見るとにこやかに笑いながら「この問題を答えて下さい」と綺麗な声で言った。

（ええゝ何々？、次の（ ）に正しい単語を入れなさい？）

【問題】

ロシアの作家ドストエフスキーは『（？）の兄弟』や『（？）』の中で、信仰心を失った近代人の虚無主義的な姿を描いたのはなんでしょうか？

「そんじゃ・・・？の答えですが『（マーズ）の兄弟』・・・ですか？」

零がそう答えるとクラスの大半は吹き出して居る者やらクスクスと笑っている者、何故笑っているのか知らない者が居た。永倉先生も微笑みながら答える。

「あらあら、なんてところをピンポイントで覚えていらっしゃるんですか」

永倉先生がそう言うのと隣で寝ている芦田に指差した。だが芦田は寝ていた。

「ちょっと起きろよ芦田、待ってる今優しく起こしてやつから・・・ふんッ！！」

ボグウツ！！

「ガハアアアッ!？」

気持良く眠っていた芦田は脇腹を押さえて身悶えしていたが永倉先生に指差され問題に答える。

「ええーと、ああ知ってますよこの問題はあ、確か？の答えは・・・
『（ムチ）と罰』！！」

「あ・・・あらあら、マーズの兄弟大喜びね」

永倉先生は少し汗を浮かせながら言った。流石に連続にこの答えに驚いていた。こりや後で出雲先生に呼ばれるな・・・。零はそう思った。

「ふう・・・それじゃ角阪さん、答えてくれますか？」

永倉先生はまたも優しい笑顔で言っていると柚葉もにこやかな顔で答えた。

「はい、？は『（カラマーズフ）の兄弟』と？は『（罪）と罰』です」

柚葉がそう答えると永倉先生は満面な笑顔で「はい、正解ですよ」と言って黒板チョークをカツカツ、と音を立てながらどんどんと説明していった。零は多少意識を残して授業を聞く。芦田はまだ脇腹を押さえて身悶えしていた。尾井群は完全に爆睡していた。

キンコーンカーンコーン

午前中の授業は終わり、昼飯時。いつものように屋上に向かおうとしたが、

「うお・・・何か雲いき怪しいなあ」

「・・・これは無理だな」

零と尾井群が窓の外を見ると雲いきが怪しくなってきたので止めることにして黒須学園の学食に向かった。寝ている芦田を叩き起こして。

黒須学園の食堂はハッキリ言ってかなりの豪華な作りになってある、食堂と言っても、和洋中イタリアンあらゆるジャンルを網羅したホテル顔負けの豪華施設、広さも見渡す程広く綺麗であり、クロスステールブルも幾つもありきちんとなっている、ガラス張りで外の景色も良く見えて天気が良い日なんて外で食べている気分になるほどの日光を浴びられる。黒須学園に入学する者はこのホテル顔負け豪華施設の食堂の為に頑張った者も沢山居るとのこと。

そして当然ながらも料理は和洋中イタリアン何でもござれの料理人も居る。

零はいつも人混みは嫌い静かな屋上で食べるのが好きなのだが、たまに顔見知りの友達と囲みながら昼飯を食べるのも悪くないと言った感じにトレイを持って陣列棚へと向かおうとすると、何やら一年生達が騒いでいる様子があった。

「ん〜？、何かあったのかアレ・・・」

騒いでいる一年生の周りを囲んでいた女子生徒に聞くと女子生徒は零が居るのに驚きながらも答えた。

「何か生徒同士で揉めているんですが内容は分からないんです」

「ふ〜ん」

「何々？、一年生同士のケンカあゝ、うわ何か面白そう!!」

芦田は野次馬魂の火が付いて人混みの中にへと消えて行った。尾井群も青い髪を揺らしながら見に行っている、ちゃっかり者の尾井群だな。零はそう思いながら空腹の腹を摩りながらも見に行く。

「今日という今日は許さんぞ、おきた冲多!!」

「もう、うるさいですよひじかた土方さん、皆が見ているじゃありませんか」

騒いでいたのは黒くて長いポニーテールをしている女の子と黄色い髪で短髪が似合う女の子が言い合っていた。

「うるさいじゃ無い冲多!!、お前は何かと私に突っ掛かりおって・・・」

「僕のせいなんですかあ？、どー考えても土方さんに言ったじゃない

いですか」

アレッ？、新撰組に出てきそうな苗字がちらほらと・・・

零はこんな話をあのバカ会長に知られたらまた面倒なことに!!、と焦りながら二人に近付こうとしたら見覚えのある顔が二人を止めに入った。

「ちよつと二人共、こんな所でケンカしていると他の人たちに迷惑だよ」

零の義妹である風瀬^{なぎせほなみ}火波が止めに入って行った。

「むう風瀬、済まんがそれは出来ん話だ。今日という今日はコイツの根性を叩き切る!!」

零はどうやって叩き切るんだろう、と思っていると土方と呼ばれている黒髪ポニーテールの少女は腰に差してあった刀の柄を掴んだ。

（・・・はあく何で帯刀してんだよ？、やっぱこの学園は何処かおかしい、うん絶対に・・・）

零がそう心の中で呟くと三人の女子に近付いて行く。俺が前に出ると周りに居た生徒が騒ぎ出す、ある男子生徒は、

「おおおお、我ら数少ない男子生徒の憧れの黒神副会長だ!!」

「うおお!!、本当だ!!」

恐らく一年の男子生徒だろう、同学年の男子生徒には一言もそんな

言葉を貰ったことのない零は少し感動していた。そして中には女子生徒の声も聞こえた、

「あの人が例の噂の黒神副会長？、噂に聞いた程怖くないね」

何で噂なんか流れてんだ、と零が思っていると三人は零に注目した。火波は零を見ると「零お兄ちゃん！？」と驚いていたが今の零のお腹の余裕が無くなってきた事に気付く。

「オイ、お前ら。こんな真っ昼間から何ケンカしてるんですかあ？、アレですか、最近の若者はキレやすいって言われてるのは君らのせいですかあ？」

零は腹痛が起きる程の空腹な腹を摩りながら二人に言う。

「あっ・・・貴方は誰ですか！？、どうやら上級生の方みたいです
が邪魔をしないでもら・・・」

「あっ・・・無理、本当に無理。こ・・・これひじょう・・・ま・・・
待たへられたら死う・・・」

さっきまで余裕だった零は両手をお腹を押さえながら言う、はたから見ればウンコを我慢してるような足取りをしているがさっきから零の腹の虫が騒ぎまくっていた、

ぐううううう

ぎゅるるるる

辺りを見ると零だけでは無く他の生徒達も腹を押さえながら腹の虫を鳴かせていた。そんな皆をみた土片は自分達のせいであろうなっただことに気付くと、

「も・・・申し訳ない」

「むうゝごめんなさい」

土方と沖多がそう言うのと二人は睨み合いながら場所を移動した、まだ昼飯は食べていないらしく二人は別々になって窓口から料理を頼んでいた。

「お・・・お兄ちゃん？、大丈夫なの、お腹？」

「らめ・・・ひぬ（だめ・・・死ぬ）」

「ワッハッハッハ、見てたぜ黒神副会長さんよオ！！、まったく上手くやるなお前は」

火波が零の空腹過ぎて死にそうになっている所に行くと言った生徒達の中から出てきた芦田に笑いながら肩を叩いて言った。

零はゆっくりと倒れた。芦田は笑いながら零を見下ろしていると尾井群がやってきて芦田にチョップを繰り出して零の腕を肩に回してスッ、と上げながら歩く。尾井群は適当に食堂のおばちゃんに料理を頼んでテーブルに向かった。

「・・・生きてるか、黒神、ホラ、ポテトサラダだ」

「アハハ・・・零お兄ちゃんってポテトサラダ好きだったんですか？」

「・・・知らん、適当に頼んだから」

火波は適当なんですか！？、と驚きながらも尾井群達と一緒にテーブルに座った。零はポテトサラダの匂いでガッツ、と起きてガッツガッツとポテトサラダを喰う。

「くはぁ〜次イ!!!」

ポテトサラダを喰い尽くすとすぐに次の料理に手を出した。

零は料理を次々と食べて行っていると芦田も自分の料理を持ってきて尾井群達と一緒にテーブルに座った。

「尾井群さあん、何気にさっきのチョップ痛かったんですが・・・」

芦田が尾井群に睨みをきらしていたが尾井群は自分の食べ物に集中していた、因みに尾井群は中華ラーメンを頼んだらしい。ズルズルーと音を立てながら食べている姿は満足そうにしていた。とにかく零と尾井群は昼飯に夢中だ。

「駄目だこりゃ、それにしてもさっきの娘って火波ちゃんの友達かい？」

芦田はカツ丼を食べながら火波に聞く、火波はサンドイッチを食べていた。

「あっハイ、黒髪ポニーテールの綺麗な女の子が土方歳絵ちゃんひじかたとしえで、もう一人の女の子は沖多総沙おきたそうしやちゃんです」

「ほお、何か新撰組の副長さんと一番隊組長さんの名前とか少し混じってるねえ」

零程のガツガツと食べていないがカツカツと食べている芦田、火波もその話をして少し落ち込んだ様子になった。

「さっきの喧嘩もそうですが二人にはとても大切な人が居まして、その人の事になると二人はいつも喧嘩を始めてしまうんです」

「その二人の大切な人ってもしかして・・・“近藤”さんなんじゃ・・・」

「・・・！？・・・凄いです芦田先輩、いつもバカみたいな顔をしているのに今は冴えてますね」

「うん・・・当たったのは嬉しいけど、何で罵倒浴びちゃってる訳？」

芦田はカツ丼を一気に平らげようとしたが喉を詰まらせて苦しそうになっていた。

「ななな、何やってるんですか芦田先輩！！、ハイ水！」

火波はテーブルの上に置いてあった水を芦田に渡すと勢い良く飲む。ぷはぁぁ、と言いながら生き返る。

「ハアハア・・・とにかくその理由はなんなのよ？」

芦田はカツ丼を食い上げ、火波の話に真剣に聞いていた、零は食べ終えた食器を返し行った、尾井群も食べ終え火波の話に耳を傾ける。

「芦田先輩の言った通り二人ね大切な人、紺藤勇美ちゃんこんどうゆうみって言うんですけど・・・」

「もう作者は完全に変える気ねえな・・・」

「えっ？、何ですか芦田先輩？」

「うーうん何でも無いよお♪」

火波は話を曲げないで下さいと言われてシュンとする芦田。火波は続けて話す。

「その勇美ちゃんが・・・ですね・・・」

「えっ・・・何？、何て言ったの、聞こえなかったんだけど・・・」

芦田は火波の言葉が聞こえなかったのもう一度聞こうとしたら火波から言ってきた、だが、それは驚きを隠せなかった一言だった。

「・・・紺藤勇美さんは・・・ブレイドマスター妖刀師なんです・・・」

黒須学園にもう一人の妖刀師ブレイドマスターが居る事を確認した。

第11話「妖刀師・勇美」(前書き)

ああ

やっぱり小説は難しいです。

今回は短いです、スミマセン(――)

第11話「妖刀師・勇美」

ホテル顔負けの豪華施設の食堂に、零は一人で食べている黒髪ポニーテールの少女に近付いて行った。

「・・・よお、土方、ここ座って良いか？」

零が土方と呼ぶ黒髪ポニーテールの少女に聞くと土方は零が居ることに気付いて零に頭を下げて謝ってきた。

「・・・黒神副会長！、さっきは、その、すみませんでした・・・って、何ですかソレは？」

「ん？、これは食後のデザートだ、トロピカルだろ？」

謝っていた土方は零が持ってきたドデカイフルーツパフェを見て驚いた、零は土方と同じテーブルに座るとフルーツパフェを食べながら土方に聞いた。

「さっき聞いたんだけどよ、お前・・・コンドウって言う奴のせいで喧嘩してたんだじゃねーのか？」

「紺藤さんを知っているんですか？」

「ま・・・まあ一応生徒会の副を務めてる身だからな、その紺藤っていう奴は・・・」

零がフルーツパフェのバナナを食べようとした瞬間に土方はテーブル

ルを叩いて零に怒鳴る。

「紺藤さんを『紺藤の奴』と言わないで貰いたい!!」

土方が怒鳴ると辺りの生徒達は一気に零や土方たちに注目する。

「悪かった、悪かったからあんまり大声を出すな、俺は良いが周りが見てるぞ」

零はフルーツパフェを夢中に食べながら土方に言うとう方は顔を赤らめながら椅子に座る。

「こ・・・紺藤さんは関係ありません、それに失礼ですが、もしあったとしてもこちらの問題なので。黒神副会長には関係ありませんので・・・」

土方がそう言うのと、さっきまで食べていた蕎麦そばを一気にたいらげ食器を片付ける為に椅子を立つ。すると零はフルーツパフェにスプーンをブスッ、と刺しながら静かに言った。

「確かにソッチの問題だったら口を出す必要なんて無えよ、でもよ」

そして零は刺したスプーンから綺麗にアイスをくりぬいて口に運ぶ。

「・・・何かあった後じゃ・・・どうにもなんねーぞ?」

零がそう言うとう方は無言で食器を片付けに行った。零は土方が居なくなると一気にフルーツパフェを食らい付いた、やはりチビチビ食べるよりガバツといった方が食べてる感じがしてるらしい。食べ終えた零は少し考え込む。

（火波が言った紺藤勇美^{こんどういさみ}っていう人物を調べた方が良さそうだな）

零は食べ終えた食器を返して、教室に戻ったのであった。

※

「そして私に聞きたいと言う訳？」

零はまだ終わっていない昼休みを同じ生徒会のメンバー、灯璃^{あかり}に会いに行った。

「灯璃なら何か知ってるかなと思ったんだけど・・・どうなのよ実

際」

「うゝゝん、余り知らないわねえ」

「・・・チツ、役に立たねえな・・・」

「ちょアンタ、何気に毒吐いた？、今毒吐いたわよね？」

零は言っ
てねーよ、と言った後に自分の教室に戻って行った、灯璃が零の背中を睨んでいる視線があつたが気にしないで戻る・・・。

零は教室に戻ると同時に授業の始まるチャイムが鳴り、五時限目が始まる。零は授業を聞きながら窓の外を眺める。黒須学園の新しい妖刀師が居る事が気になって仕方なかった。
ブレイドマスター

結局、一年生に居る妖刀師の事が気になり、授業に集中出来ず、授業を聞き流しながら五、六時限目があつという間に終わっていた。

（・・・取りあえず会長に聞くのが一番だな）

零はすぐに会長の居るであろう生徒会室に向かおうとすると教室の入口には黒髪ポニーテールの少女、土方歳絵が居た。二年生教室に一年生が居る事に驚いている出雲組の生徒一同、そして誰一人彼女が帯刀している事をツツコもうとはしなかった。怖いからツツコまないのもある。

（まあ・・・余程の“馬鹿”じゃないと帯刀してる奴になんかツツコんだりは・・・）

そう零が思いながら土方に近付こうとした瞬間、

「何で学園に刀を腰に差してんだこの娘!？」

芦田がツツコんだ。

「あああ!、そうだった、出雲組には芦田が居たんだった!!」

零が芦田^{バカ}を居ることを完全に忘れていた、だが土方は芦田のツツコミを可憐に完全無視^{スルー}して零の前まで近寄って来た。

「黒神副会長、話があります」

そう言って土方は零の腕を掴んで何処かに向かって行った。

丁度土方と零が教室から出て行った後に水波と火波が教室に入ってきた。

「零兄いゝ♪、一緒に生徒会室にいこ・・・ってアレ?、何で零兄が居ないの?」

「よお水波ちゃんに火波ちゃん、零ならさっき拉致られたぞお」

芦田が入れ違いに、と水波達に説明すると水波と火波は慌てて教室に出て行って零の後を追った。

「ムフフフ、これはまた黒神くんに新たな恋の嵐が吹き荒れますなあゝ♪」

「・・・芽実はこういうの好きだな」

水波達が出て行った後に芽実は満面な笑顔でそう言う、尾井群はサッサと零の後を追う、芦田は面倒臭そうなにダラダラと尾井群の後を付いていった。

※

場所は変わり曇り空の学園屋上、そこには土方と零、そして土方と言い争っていた冲多総沙おきたそうしやも居た。

「・・・それで、何か用か？」

来たは良いが、ずっと黙っている土方に痺れを切らして聞く零、だが尚も黙っている土方。冲多は何故か帯刀している柄を摩りながら微笑んでいる。

「おい、聞いているか？」

再度聞いてみる、すると土方が最初に言葉を発した。

「黒神副会長は紺藤さんを探して居たんですよ、二年生の灯璃さんから聞きました」

何話してんだよアイツは、と零が内心思っていると土方は零に言う。

「黒神副会長、確かに生徒会に所属している貴方だからこそ生徒の問題を解決するのは仕事かもしれません、ですが・・・」

「土方さあん、そんな回りくどい言い方しなくても良いじゃないですかあ」

土方がそう言い掛けるが冲多がずんずんと零に近付いて行く。

「・・・殺しちゃいましてー♪」

腰に差していた刀を抜刀して・・・

ヒュン！！

「・・・！？」

零は降り下ろされた冲多の刀をギリギリで避ける、冲多は薄い笑みを浮かべながら刀を構える。

「止めろ、冲多！！、何をやっている！？」

土方も刀を抜き冲多を抑え込もうとするが冲多はそれでも零に切り掛かる。零はマジビビりながらもスラスラと避ける。何故か避けれる。

「ぬああ!?!、マジでどうしちゃったのあの娘!?!」

「す……すみません、黒神副会長、冲多はその……紺藤さん絡みになるといつも見境無く……」

「見境無く……?」

「切り刻んで突き刺して抉り取ってまた刻んで刺して、そして細かく刻んで最後に燃やします」

「ななな……なんじゃそりゃあ!?!、怖過ぎだしそれただの殺人鬼だろ!?!」

ヒュン!!

冲多の刀が零の首スレスレに振るわれた、耳に刀が空を切る音がした。その音を聞いた瞬間に血が逆流する感覚に襲われる。

「ギヤアアアアアアアア!?!、殺されるう!?!」

零は急いで屋上の出入口に向かおうとするがすぐに冲多が前を立ち塞がる。

「ふふふ、貴方が紺藤さんをしつこく嗅ぎ回っているのは知っています」

冲多は相変わらず笑みを消さず斬りかかる。だが土方が冲多の刀を

止める。

（オイオイ冗談だろ？、まさか一年生にこんな奴が居るなんて聞いてねーぞ！！）

零が腰を低くして少しづつ屋上の出入口に近付こうとするが冲多が零に斬りかかる。

「アハツ☆、余り避けないで下さいよお、斬れないじゃないですかあ♪」

「いや満面な笑顔を作りながら何物騒な事を言っているんだこの娘は！！」

「そりゃ、死ね♪」

「ぬわっと！！」

ヒュン！！、と空を斬りながらも振り回す冲多の刀、たが見た目はただ振り回しているように見えるが確実に人間の急所を狙って斬りかかっている。頭、首、心臓等を的確に……。

必死に逃げている零は躓く、なんかもうピンポイントに躓いた。

「ぐあっ！！、ハアハア・・・ピンポイントに躓くなんて、最悪だ」

両手を地面に着けながら息を整える。そして冲多は笑顔を絶やさないうで刀を翳す。零を斬首するような形になりながら。

「ふふふ、紺藤さんと私達に関わった事を海より深く後悔してくだ

「さあい」

沖多が刀を降り下ろそうとした瞬間、

[illegible]

突如、何処からか声が聞こえ沖多はその声を聞いた瞬間、降り下ろした刀は零の首に当たる寸前に止まった。

「何してるの、総沙ちゃん!!」

声が聞こえた方向を見るとそこにはピンク色にロングヘアの少女が居た。

「こ……紺藤さん……」

沖多は刀を背中に回して隠す仕草をするがそんな事をしたって意味が無い。

（あ……あの娘が紺藤勇美ちゃんか？）

零は沖多から離れ、首を摩りながら立ち上がる。チビる思いをした零は土方に話し掛けようとしたが土方も紺藤がいる事に驚いており零は三人の様子を見ることにした。

「……どうしてこんな事になってるの、総沙ちゃん、そして歳絵」

紺藤は辛そうな、そして悲しみに満ちた瞳で冲多と土方に聞く。冲多は刀を下ろして紺藤と向き合う。

「・・・すみません紺藤さん」

さっきの気迫なんて何処へやら、今の冲多はまるで飼い主に怒られてシユンとしている子犬のように落ち込んでいる。

「私は何でその人に斬りかかっていたのかを聞いているんだけど・・・
・総沙ちゃんは聞けないみたいね、教えて、歳絵」

「あ・・・ああ、それは、この前のような奴のように紺藤さんが妖刀師であることを聞きつけ、仲間に入れさせるのでは無いかと思っ
てしまい此処で話をしようとしたのだが、な・・・」
「そっか・・・また“暴走”しちゃったんだ」

紺藤は土方の話を聞いて納得したのか、冲多に歩み寄り頭を軽く叩く。冲多は「あ痛っ」と言って冲多は頭を摩りながら紺藤の顔を見る。

「もう、総沙ちゃんは私や歳絵になると自制が効かなくなって暴走するんだから気を付けてって言ったでしょ？」

「うう・・・すみませえん」

紺藤はよしよしと頭を撫でて冲多をあやしていると土方は零の所まで行くと、

「すみませんでした黒神副会長！！、食堂の時もそうでしたが失礼の数々、どんな体罰も受ける所存です」

何度も深く頭を下げる土方を零は静止させようとしたら、

「おわッ!？」

「きゃあ!！」

零は今更冲多の剣幕に腰が抜けて土方を押し倒すような形になってしまった。

「す・・・済まん、今更腰が抜けてしまった」

と、そこに丁度屋上に芦田達がやって来た。芦田と尾井群、二人は女の子を押し倒している友を見ると、

「ぬひよオオオオオオオオ♪、なにお前T O L O V E 的なことになっているんだあ!!、ちょ待って、今写メすっから」

芦田が興奮しながら零に駆け寄ろうとしたがすぐに足が止まる、何故なら芦田達を鬼の形相で睨んでいる黄色い髪をした女の子が居たからだ。

この後に水波達が出来てきて零が土方を押し倒している場面を目撃し、後にフルボッコにされたのは別の話。

第11話「妖刀師・勇美」(後書き)

何かもう変でしたね。

終わり方雑っ!!

取りあえず妖刀師・紺藤勇美を出しちゃいました。漢字以外なら完全にな藤勇をパクってます!

もっとシリアアスにそして面白味にいゝ

いきたいです・・・

第12話「新敵再来」(前書き)

また新たな敵が！

そして後先考えずにポンポンと書いていく作者！

もう、ポンポンに駄目ですね。

ポンポンに・・・

第12話「新敵再来」

零と勇美達は屋上で話すより生徒会室で話し合った方が良いと判断し、今は生徒会室に到着して会長・斑備白虚まだらびびやっこと副会長・大月詠が勇美達を迎えていた。

「ヤーヤー、君が妖刀師ブレイドマスターの紺藤勇美ちゃんかい？、話は聞いたよお♪、友達に愛されているんだねエ」

「あっ、いえ、そんな事は・・・」

斑備はアハハー、いつもの満面な笑顔をさらけ出している。土方と冲多は生徒会室にある大きなソファーに静かに座っていると、

「どうぞ、紅茶ですよ」

「えっ、あっ、ありがとうございます。大月副会長」

詠が紅茶を淹れたティーカップを二人に渡す、土方はいきなり渡されたティーカップを慎重に持ちテーブルに置く、冲多もティーカップを詠から貰うが視線はジッと会長の斑備を睨んでいた。紺藤を困らせているのでは無いかと刀を抜いて襲いかかりそうな雰囲気を出している冲多だが、土方によってちゃんと止められている状態だった。

「レイくんから色々聞いたんだけどね、どうやら君の友達がレイくんに斬りかかったって話なんだ・・・・・・・・」

「す、すみませんでしたああああ!!」

斑備がまだ言い終わらない内に紺藤は長いピンク色の髪を揺らしながら頭を下げて謝る。

「本当にすみません、総沙ちゃんはその、少しスイッチが入ると手に負えないと言いますか・・・暴走しちゃうと言いますか」

紺藤はアハハー、と苦笑いをしながら沖多の事を話すが斑備は何故か首を傾げている。

「いやあゝ別にレイくんに斬りかかるのは良いんだけどねえ」

（えっ!?!、斬りかかって良いの!!）

「ちょっと待てクソ会長、誰が斬りかかって良いだ。危うく俺は死にかけたんだぞ・・・」

「チツチツチ、これから僕の事は斑備“局長”と呼びたまえ、“黒生組”の“局長”なのだからね、僕は!!」

零が斑備に殴り掛かろうとするが芦田と尾井群に抑え込まれ身動きが出来なくなっていた。

「斑備会長、話が拗^{こじ}れていつていますよ」

「ふう、皆が僕の話最後まで聞かないからだよ。あとエイちゃん。僕の事は“斑備局長”とよん・・・」

「はぁ・・・分かりましたから早くしてくださいね」

詠が溜め息を吐きながら言う。斑備も仕方ないように喋る。

「ふう〜まあ聞きたい事はと言うとね、レイくんの話だと君・・・勇美ちゃんは誰かに『仲間にならないか?』と誘われたんだね?」

斑備はさっきまでのふざけた態度は微塵も無くして真剣な顔つきで紺藤を見る、紺藤はそんな急に真剣になった斑備に驚きながらも緊張しながら答える。

「は・・・はい、白くて長い髪をした女性の人に、言われました」

紺藤はオドオドしながらもきちんと答える、斑備は紺藤の答えを聞くときとゆっくりと瞳を閉じて額に親指を当てて溜め息を吐く。詠も何故か驚いた顔をしたがすぐにいつも表情に戻す。明らかに何かある二人を見ていた零は斑備に聞こうとすると、

ガラガラー

まるでタイミングを測っていたかのように生徒会室のドアが開いた。

「斑備会長、少しお話があつて来ました」

入って来たのは生徒会役員の一人である南郷電華^{なんごうひょうか}だった。

「ダメだよ電ちゃん、僕の事は“局長”って呼ばなくちゃあ」

「・・・そう言えば『黒生組』とか言う新しい自発的な組織を結成したと聞きましたが、まさか本当にやっていたとは・・・・・・呆れるを通り越して尊敬しますね」

電華も溜め息を吐いて文句を垂れるが斑備にとってそんな事は意味なんて無い。

「それで、話って何なんだよ、電華」

「おお、零か。話と言っても五条先生から頼まれた事があってな。何でも町中で異形者^{イレギラ}同士の戦いがあったってその跡を見てきて報告して欲しい、との事だ」

「もしもし電ちゃん、その話の内容ってまず一番に僕に言うんじゃないのかな？」

「やっぱ昨日の火事は異形者^{イレギラ}の仕業だったんだって、こりゃ行くっきゃねえだろ♪」

「・・・場所は分かるのか芦田よ？」

「当たり前だ、俺を誰だと思ってやがる!!」

「ちょ・・・あれッ!?!、シカト!?!、無視い!?!」

何やら行く気満々の芦田は尾井群と一緒に生徒会室を出て行った。そして無視された斑備は執務机の上に俯せになって落ち込んでいる。

「おい、アイツら何行く気満々になって行ってるんだよ。良いのかの会長」

「……………うん、何かもうどうでも良いよ……………」

「どうしたら良いスカね、大月先輩」

役立たず化した斑備に聞いては意味が無いと判断した零は隣に居た詠にどう行動したら良いか指示を待つ。

「そうね、銀雲先生が言ったのなら多分学園絡みだと思うから言われて通りに戦ったと思われる現場に向かって下さい。ああ……………新しく入った生徒会員も連れて行ってあげてね、これからやって貰う仕事とかを教えて上げて」

詠は的確に指示を出すと零は軽く頷き電華と一緒に生徒会室を出ようとしたら、

「ああ、ちよつと待ってよレイくん」

いきなり斑備に呼び止められた。

「行くならちゃんと『妖刀』も連れて行きなよ？、家にずっと置いてると腐っちゃうから」

「……………キリも連れてですか？」

「勇美ちゃん達は学園から出さないから安心出来るけどね、学園外は襲われてもおかしく無いからね。あとツツコンでもらいたかった」

零は少し考えてから斑備の方を向いて頷くと生徒会室を出て行った、
電華も頭を下げ礼をして出て行った。

※

「ここが、昨日火事になった場所か・・・」

零達はすぐに火事になった場所を行き着いていたが、まだ数人しか居なかった。

「・・・集まりが悪いな」

「すみません尾井群先輩、白宇兄さんと鋪崎くんには連絡を入れて
おいたのですが・・・」

「まあ鋪崎の方は納得出来ていなかったみたいだからな、ほっとい
て良いだろ」

尾井群がそう言う和白亜はくあが申し訳なさそうに謝って来たが零が素っ
気なく返す。

今居る生徒会員は零、芦田、尾井群、電華の二年生と水波、火波、
白亜、柱木はしらぎの八人は火事現場に居た。

「火事と言っても終わった後だしなあ、残ってるのは焼けた跡しか

無えな」

零はそう言いながら黒く焼き焦げた道路や建物をマジマジと見て回る。他の生徒会のメンバーも焼けた辺りを見て歩いていたりしていた。

すると、

「のわぁー凄いなここ！」

芦田はある建物の前で驚きの声を出していた。

「何だ、どうした芦田？」

「おお見ろよ零、何かここすげえ事になってっぞ」

芦田が建物に指を指していたので零も芦田の指を指している方を見ると、そこにはまるで漫画とかによくある人間の形がそのまま壁にめり込んでいる凹み部分だった。

「・・・確かに凄いなこりゃ、誰かの手の込んだ悪戯か？」

「バーカ、こんな手の込む悪戯をする奴がこんな町に居るかよ。っ
ーかできねえ、こりゃ間違いない異形者の仕業だって」

零はふくむ、と考える。芦田は携帯を操りカメラモードにして人型の凹部分を撮るとすぐに斑備にへとメールをした。本当は零や電華がやらなくていけないのだが面倒なので芦田が全部やっていた。

「あのう〜?」

「……うん?」

零と芦田は背後から声を掛けられ、二人はすぐに振り向くとそこにはどこかの高校の制服を着ている黒い眼鏡を掛けた少年が立っていた。

「こ……ここで何してんスカ?」

「え?、何って……ここを少し調べて……」

「いやあ、ただの野次馬さ。まだ火事後があるなら見に行こうぜって話になってね〜、でもあんまり凄そうな感じじゃないから帰るとするよ」

芦田の言ってる途中で零が割って入ると芦田の寝首を掴んで黒い眼鏡を掛けた少年から離れて行った。

「痛てて、痛いっつうの!、なに、何なの?」

少年から離れた所で芦田は零から離れて寝首を摩りながら零に聞く、零は携帯を操り生徒会のメンバーを集めるように尾井群に伝える。

「バカヤロ、生徒が火事の後を調べるとか普通に変だろうが、あの場合の対応はアレでOKなんだよ」

零は携帯を降り立たんでポケットに入れながら芦田に答える、芦田は不服そうな顔をして零を睨む。

そんな二人の所に霍華と尾井群が走って近寄って来た、何故かとても焦っている様子だった。

「大変だ、一年生が何者かに拐われた!!」

「はあああ!?!」

零と芦田はハモリながら霍華の言葉に驚く、今なんて言ったと。

「な・・・冗談じゃねえのか!?!、本当に拐われたのかよ!?!」

「ああ、蒼道と二人でやけに酷く黒焦げになっている場所を調べていたら白亜や柱木達を連れて行っている所を見た、車で逃走したので追い掛けようとしたが邪魔が入ってな・・・」

霍華は申し訳ない、と頭を下げながら言う、尾井群も静かに頭を下げていたが零はスサァー、と顔色が青くなっていた。

「（ヤバい、これは非常にマズイ事になった、副会長である俺が付いていながら一年生を危険な目に合わせた事を会長や大月先輩にバレたとしたら・・・・・・・・・殺される!!）いいいや!!、まだ危険な目に合っていないハズだ!、だって拐って行った人はもしかすると一年生の関係者かもしれない、てかそうで合っ欲しい」

「願望かよ!!、良いから早く警察に通報を・・・!」

芦田が携帯で警察に通報しようとした瞬間、

バツ!!

→零が芦田の携帯を奪った音。

バキィツツ!!

→零が芦田の携帯を道路に叩き付けて壊した音。

パンツツツ!!

→零が芦田の頬を平手打ちした音。

「何で最後に俺をぶった!?!、つか何オレの携帯破壊しとんじやボ
ケエエエエエエエエエエ!!」

「ああバカッ!、警察に通報したら学園に伝わるだろ、それつまり
会長に伝わって俺が殺されるという恐ろしい答えを割り出されんだ
ろがああああ!!」

芦田と零が二人でギャーギャー騒いでいると、電華が二人を静止さ
せ、尾井群は零に大事な事を言う。

「・・・黒神よ、因みにお前の妹達も拐われたんだぞ?」

「・・・！？・・・」

「いや、何いまさら気付いてだよ？」

零は尾井群の一言で血相をさらに悪くする。本当にもう倒れてしまふんじゃないのかと言う程の顔で。

「バカ零が。こんな所で気絶すんなよ、面倒臭くなるから」

「と・・・とにかくすぐに何か手を打たなくては危険なんじゃないか？」

芦田は顔を青白くなっている零の顔に手をヒラヒラさせながら零に聞いているが反応が無い、そんな二人を置いという電華が誘拐された一年生を心配しながら何か手は無いかと考えていると、

『あらゝ？、まだ動いてねえのかよアンタら』

零たちの近くにあったポストの上に携帯が置いてあり、そこにはテレビ電話モードになっている携帯から強盗に入る時に使いそうな口と目に穴が空いてあるマスクをしている男性が映っていた。

『ヒヒヒ、アンタら黒須学園生徒会の奴らだろ？、まあ・・・色々混乱しているようだな』

零たちはポストの上に置いてある携帯に近付き、テレビ電話をしている相手に怒鳴りつける。

「ここらあぁ！！、今時誘拐とかアンタ何考えてんだ！！」

「・・・そうだ、そうだ。芦田コイツはロリコンだが小学生を拐うような行為はしなかったぞ・・・ジッと小学生の女の子を見つめながらニヤけていたが・・・」

「何イ!!、おい峰春!、お前は何を考えてニヤけていた!!」

「おおおい!!、電華が勘違いしそうな事をサラッと口走るな尾井群あ!」

「・・・済まん、ニヤけてはいなかったな」

「ああそうだ、俺がそんなロリコンみたいな真似をするなんて事はないな・・・」

「・・・見つめながらヨダレを垂れてニヤけていたな」

ヒュンッ

「危なっ!、ちょ電華さん!?!、普通に何処からその刀出したの!?!、つか尾井群死ね!」

『ちょ・・・お前ら何気に余裕なのか!?!』

そんなテレビ電話をしているマスクの男は目の前の三人がどう見てもふざけているようにしか見えなかった

だが一人だけは違っていた、黒い髪が特徴的な少年はズカズカと携帯の方へと近づいていくとズシリッと携帯をわしづかみし、

「おんどりゃあー！！、てめえなに俺の妹拐ってんじゃボケエエエエエエエー！」

『うわっ！、急に何だアンタ！？、ずっと青白い顔してたからちよつと心配してたのにっ』

「うるせえ、テメエの用件は何だ！」

零は携帯に怒鳴り散らしながらテレビ電話の相手に用件は何かと聞く、恐らく相手もその為になぜわざとポストの上に携帯を置いてあったのだろう。

『ふん、やっとまともな奴が出て来て一安心だぜ。名門黒須学園の生徒会はこんな馬鹿ばつかなのか？』

「・・・・うるせえんだよ、妹と一年生も返しやがれ」

『ハッ、アンタはちと態度がデケエな。そんな奴に俺がちゃんとした返答できるか心配だわ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『あんだよ、次は黙だんまりかよ。まあ良い、此方もちゃんとアンタら来てくれないと困るんだ、正直・・・』

マスクの男は今まで浮かばせていた笑みを無くして零に聞いてきた。

『・・・最近、この帝黒町^{まち}は何か起きてるのは分かるよな？、詳しくは聞いてないから分かんがどうやら何かの実験をやっているせいで騒^{さわ}がしくなってるみたいだな』

零はマスクの男が言った言葉に僅かに反応するだけで返事は返さない、今の零に相手に配慮しながら答えられる自信が無かった為に返事は返さないで居たのだが向こうもその方が話が進むと判断し話を続けていた。

『でよ、その実験に手を貸している奴ら居るって聞いてな？、何でも・・・』

零は微かに反応する、マスクの男はそんな僅かな動きを見過^みごさず、笑みが浮かべながら続きを話す。

『何でも・・・』《黒須学園》の名前が出てきてな、それで拉致^{ウチ}る結果になった訳よ』

「いや、訳よって意味が分かんねえよ？、どこに黒須学園^{ウチ}が関わってるって証拠があんだよ、拉致^{ウチ}る意味も分からねえ・・・」そして、その情報は誰から仕入れたモンだ？」

零はさつきより落ち着きを取り戻し、相手の話を聞くが相手の言い様がおかしく聞き返す、怒りを込めた言い方で。

「ふう、そんな怒った感じにならないで下さいよ」

携帯にばかり気が向いていた零は背後から聞こえた声に驚き急いで振り向く。

「どうも、わたくし『リン』と申します」

四人の前に突然と現れたのは茜色をした長髪の少女、少女は『リン』と名乗りそこに居た。

「気配を感じさせなかった!？」

霍華は隠し刀を出して戦闘体制に入る。だがリンは両手を上げて戦意が無い事を示し四人に伝える。

「私はアナタ方と戦う為に来た訳ではありませんよ?」

両手を上げながらリンは四人の反応を待つ、すると零が握っていた携帯から笑い声が聞こえた。

『ワハハハハハ!!、何だよお前ら、何驚いてんだよ素でツハツハツハ!!!』

マスクの男は腹を押さえながら笑う、零は握り潰すのでは無いかと思う程強く握っていた。

『ハアハア、ああ笑えた、黒髪の兄ちゃんの質問した答えを聞きたいか?、それに一年生っ娘達が心配だろう?。なら来い、道案内はそこに居るリンに任せる』

マスクの男はふざけた笑みを浮かべながら携帯から姿を消すと何やら向こう側の携帯を移動させているのか、向こうの画面が揺れながら移動した。

そして向こうに映った映像には、

一年生女子メンバーが手首に縄で縛られている姿があった。

『・・・・・・・・早く来ないとこの娘らに酷い事、し・ちゃ・う・ぜ
☆』

マスクの男はそう言って携帯の電源を切った。

第12話「新敵再来」（後書き）

まゝ中途半端に終わりましたね今回も（涙）

すみません〇（TOT）〇

てか生徒会には書記長とかあったんですね。

アハハ―

駄目だ、作者

第13話「異形者」(前書き)

またもやテスト期間中なのに携帯をいじっている十握剣でっす(涙)

何でかな？

テスト間近になるとすんげえ小説に打ち込めますよ。

あっ分かった(▽)

集中力が無えんだ(――)

第13話「異形者」

古い工場跡には暗い闇が支配していた、闇と言っても日が差ししていないだけで、目でハッキリとまでにはいかないがちゃんと見える。

そんな暗闇の工場跡に強盗に良く使われる目と口だけ穴が開いてあるマスクをしている男が居た。

「うーくん、アイツ来るかなあ。流石に見捨てるとまでにはいかないが・・・ガキだからな」

マスクの男はブラブラと工場跡の広場をウロウロしていた。

そしてそのマスクの男がウロウロしている場所には誘拐された黒須学園生徒会の女子一年生メンバーが居た。

「むぐうー！ー！！」

「うーくん？、また頑張っちゃってるね青髪ちゃん」

マスクの男は口に布をくわえさせている水波にしゃがみ込んで微笑みながら言う。

「はあ、俺もなるべく犯罪は犯したくないのよ？、でもさあ、君のお兄様がちゃんと来ないとこっちが困っちゃうのよ」

マスクの男はケラケラと笑っていると、

「いつまでも遊んでんじゃねえぞ、豊臣」とよおみ

豊臣と呼ばれたマスクの男は背後から聞こえた方向を見るとそこにはオレンジ色のパーカーを着ている少年が居た。

「はんッ、何言ってんだ。てめえが【任務】を失敗したから斬崎さんに殺されないようにしてるのを協力してやってんだぜ？、感謝こそすれその言い方はどうだかなあ、炎条騎烈？」

「チッ・・・」

豊臣の背後に居たのは昨夜、町中を火事にした犯人の炎条騎烈が居た。炎条はバツの悪そうな顔をして舌打ちをする。

「たしか斬崎さんの命令は新しく能力に目覚めた新米の仲間チカラ勧誘じや・・・」

「ああ！？、あんな奴仲間に入れる気はねえぞ！！」

「いや、それはお前が判断するなよ、斬崎さんに聞かないとどうしようも無い」

炎条は近くにあった錆びたパイプ椅子を蹴りあげる、水波達はビクッと怯えた。

「おいおい、イライラすんなよ。お前がその新米を甘く見てたから失敗したんじゃないか」

豊臣は古いソファアに座る、炎条は殺意を込めた瞳で豊臣を睨む。

「・・・つーかてめえさっきからウゼエな、何様だ」

「ええーそのイライラの矛先が俺に向けられんのー」

※

豊臣と炎条がそんなやり取りをしている中、零たちとは言うのと。

「あのーリンさんとか言いましたっけ？」

「はい、リンとは私の事です」

茜色の長髪をした少女は素っ気なく返す、聞いた芦田も少したじたじになる。

「・・・貴女は俺らをさっきの男の場所に道案内してくれているの
だろう？」
アンタ

「はい、そうです」

芦田が聞くハズだったが尾井群が聞いた。またリンは素っ気なく返す。

「「だったら・・・」」

すると今までずっと黙っていた二人が合わせて言い出す。

「「何で同じ場所を何度も通ってるんだああー！！」」

零と雹華は大声を上げながら叫ぶ。零は大事な妹達に危険が迫っている事によってイライラボルテージがMAXになり雹華も一年生が心配し過ぎて早く着かまいかと焦り苛立ちを出す。

「・・・おかしいですね、確か道はこっちで良かったハズ」

「そこはさっきも通って来た道だぞ」

「イライライライライラ」

「・・・む、いかん。黒神が余りにもイライラし過ぎて口に出し始めた」

「ぬがぁ止めろ零！！、余計に苛立ちを増す！！」

「そして雹華も何気苛立ってるってオイ！！、刀出して振りまわすな！！！」

ぎよわぁー剣先が刺さるぅー、等と暴れている生徒会二年生一行、

リンは携帯を取り出して泣き泣き豊臣に道なりを聞いていた。

そしてリンは豊臣に超もの細かく分かりやすく説明されたハズにも関わらず！、その後、帝黒町を二、三週歩き通した後に痺れを切らした豊臣から電話が掛かって来た。

『うおおおおおい！！、テメエなに道迷ってんだバカ！！、なあマジどんくらい時間食わせれば良い訳よ？、道案内が道分かんねえなら道案内じゃねえだろが！！』

「はい！！、確かにそうかもしれませんが、まだ私にはチャンス到来してくる確率方向に10円賭けます！！」

『アホオウ！！、もお無えよ、てか賭けるもん安っ！！、泣いて良い？、泣いて良いかああ！？』

「いや、泣くとかちよつと引いちゃうって言うか……………」

『誰のせいで泣いてんじゃボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！』

携帯からなのにこんなハッキリと声が聞こえるってどんだけデカイ声で喋ってんのよ、と雹華は思うしかなかった。

「（なあ……このままコイツらの言いなりで良いのかよ、零）」

芦田はリンに聞き取れない程の小声で零に聞く、零もリンに聞こえないように小声で応える。

「（俺もさっきまでそう思ってた、逆にこのリンという女の子を捕まえて交渉とかで取引してやろうかなと思っていたが、相手がどう対応してくるか分からんし、逆に刺激を与えて水波達が危険な状態になってしまったら元の子も無い、だからその考えは捨てた）」

「（そんなじゃどうすんだよこの状況、もしリンとか言う女の子が異形者^{レギラ}だったらどうすんだ？）」

零はまだ豊臣と話しているリンを眺めながら考える。もし彼女が異形者だとしたら真っ先に零達を襲ってくるハズだ、なのにリンは襲って来る気配も無く、敵意があるのかさえ分からない。

「……ふむふむ、すみません豊臣さん。すぐに行きますから待ってて下さい」

リンはそう言うのと携帯を切る、まだ豊臣が何か叫んでいたがリンは聞き耳を立てずにしまった。

「ふうーやっと道案内が出来るようになったのか？」

霍華が疲れきった声でリンに聞く、リンはコクコクと頷いてまた歩みだした。零達は本当に大丈夫なんだろうかと心配しながらもリンの後に付いて行くしか他無かった。

※

「ハアハア……ヒューヒュー、げほげほっ！」

豊臣は呼吸混乱が起こりそうな程に咳をしていた。

「……ふんッ、お前はリンに優し過ぎんだよ。少しは厳しく叱ってやれ」

炎条はポケットから取り出したタバコを口にくわえながら言う。

「ハアハア、うるせえ、アイツは俺のパートナーなんだからなんだって良いんだよ、……てか暑いわこのマスク!!」

豊臣は被っていたマスクを取って涼しそうにしていた。

「マスク取って良いのかよ!？」

炎条は当然のように驚いて口にくわえていたタバコを落としそうになったが、落ちる寸前に拾い上げた。

「ああもう良いや、だって俺らの目的はアイツらを……」

バァァン!!!!!!

豊臣が言い終わる寸前に工場の古びた扉が勢い良く吹っ飛んでいた。

「・・・ここに居たか」

扉を飛ばした者らしき少年が居た。

だがその少年は何処か普通で無い“何か”を感じさせる威圧感があった。

炎条はそんな少年を見た瞬間に総毛立つような顔立ちになり、くわえていたタバコに指パツチンで火をつけた。

炎条はタバコを一気に吸い終え、口の中に拡がった煙を吐き捨てる。残ったくわえ部分を吐き捨てると、片手に炎を灯らす。

「アーハッハッハッ!!!、まさかそっちから来るとは思わなかったぜ、くろがねびと《鉄人》」

《鉄人》と呼ばれた少年は一切炎条に反応せずに立ち尽くす。そんな少年に怒りを燃やす炎条は今にも焼き殺そうと片手の炎が天井に届く程燃えてたぎっていた。

「わぁー待て待て、炎条！
こんな所で能力を使うな、ここら一帯を燃やす気か!？」

豊臣は炎条の指摘でまたマスクを被ったのだが、炎条が《鉄人》に向かつて喧嘩を吹っ掛けようとしている所を止めに入ろうとした、だが、突然と豊臣の“背後”から殺気を感じた、そして次の瞬間、

ドスッ！！！！！！！

「・・・・・・・・・・！？」

豊臣は“何か”に風ぎ払われ、壁にブチ当たった。

「ああ！？」

炎条は吹っ飛ばされた豊臣を見ながら吹っ飛ばした奴を見るとそこに居たのは、

「ハアハア・・・・・・・・・・」

さっきまで縄で縛られて居た、水波達が居た。

「・・・テメエ、どうやって縄ほどいた？　　いやそれよりも“今の”はなんだ？」

炎条は視線を少年に向けているが、片目で水波を捉える。水波は自分でも何をしたのか分からない状態らしく自分の両手を見ながら立ち尽くしていた。

「ああ？　　そうか、もしかしてお前も《異形者》か？」

炎条が言い放った言葉に水波は体をビクリッと震わす、自分が『異^イ形者^{レギラ}』だと。

だが炎条はそんな硬直常態になっている水波を待つハズも無く容赦の無い眼光を放ちながら水波に近付く。

「まあ俺的にそれはどうでも良いけどよ、厄介者が増えるのはよろしくねえ、だから今の内に・・・潰す！」

「えっ・・・！？」

炎条は離れていた水波に近付く為に地面を蹴る上げて一気に近寄る、水波は一瞬何を見ているのか戸惑った。

それもそのハズ、人が“飛ぶ”なんてあり得ない、だが目の前の少年は地面から離れるとまるで豪速球のような速さで水波に近付く。炎条の手は炎で纏っており掴まれば火傷以上に皮膚が溶けてしまう。そんな炎を纏っている手を水波の“顔面”向かって掴もうとしたのだ。

ボオウ！！！！

「な・・・があ・・・！？」

だが、炎条が水波の顔面に掴もうとした瞬間、炎条の体は一気に燃え出した。火だるま常態になっているのだ、水波は一体何が起きているのか理解出来ていなかったが、これだけは理解できた、

——この炎条はわざと火だるまになっているのでは無い、まるで誰

かが放った火を受けたみたいになっている、と言う事を、

「…………貴方、今水波ちゃんに何をしようとしたんですか」

水波が火だるまになっている炎条をどうするか迷っていると、水波の後ろからとてつもなく冷たい声が聞こえた。

水波は後ろを振り返ると俯せになりながらも立っている双子の妹・火波が居た。

「オイオイ、異形者が二人も“目覚め”ちまったのかよ、斬崎が聞いたら怒りそうだな」

水波は混乱してある頭を必死に回転させている中に吹き飛ばしたハズの男、豊臣が背中を摩りながら近寄って来た。
だが水波は豊臣が言った言葉に驚いていた、今“二人”と言わなかったか、と。

「…………チツ、魔法型の異形者か。ワイザードタイプ イレギラ しかも炎系」

聞こえて来たのは豊臣の声では無かった、突如燃え出し、火だるま常態になっても倒れていなかった炎条から放った声だった。

その声はまるでこれから燃え死んでしまう焦りと恐怖の声色ではなく、面倒臭い仕事が増えてしまったかのような気ダルさの声色だった。

「なっ…………火だるま常態になってるのに生きてる!？」

水波は思わず声を出してしまった、だが炎条は興味が無さそうに身体に燃えている火を一気に“吸い上げた”のだった。

「・・・なっ!？」

「ぶはぁ、マジイなこの火は」

水波は今何を見ているのかさえも驚く、今この人は火を吸った!？

水波は混乱し過ぎで頭がショートしそうになったが火波が水波の前に立ち、まるで守るかのような体制になったのに気付いて正氣に戻る。

「ちょ火波!？」

「・・・・・・」

「ほおゝゝ一番大人しかった娘が炎条を焼き払ったのか、こりや凄いわ」

なっ!!

今なんて言った!？

水波はそう思った瞬間、火波は掌^{てのひら}から火を生み出して炎条に放つ。
炎条はそれを難なく振り払った。

「・・・・・・」

火波は無言のまま炎条と豊臣を睨む。

「・・・能力に目覚めたからって良い気になってんじゃねえぞ」

炎条は片手に炎を灯らす、手から腕に、腕から肩にまで燃え上がっ

ていった。

「俺は体質型ボディータイプの異形者だ。しかも炎系のな。だから身体を自由に炎化出来るって訳だ……」

「……………」

「つまりはだ……俺はお前の攻撃は一切通じねえって——」

炎条は片手、いや、片腕を炎化し、その炎腕えんわんを火波に向けて、

「——訳よ!!!!!!」

放つ。

ただそれだけの動作で火波や水波達が居た場所は焼き付くされた。

「なっ!? てめえ何てことを!!」

それまでずっと固まっていた《鉄人》が動いた、だが、

「黙れ!!」

炎条は一気に《鉄人》の近くに瞬時に移動し炎拳を繰り出す。

「くっ!!」

だが鉄人は炎化した拳を素手で掴みガードした。
普通の素手ならば火傷してしまう炎条の炎拳だが、鉄人の手は黒色こくしよく

になっており炎条の拳を握り返した。

「チィ!!　　そうだ、その能力のせいで俺はお前を仕止め損ねた!!
何なんだお前の能力は」

炎条は吠えるように鉄人に聞くが鉄人は黒い眼鏡をかけ直すとすぐにもう片方の腕を黒色化し炎条に殴り掛かる。

炎条は下がろうとしたが、拳を鉄人に掴まれており避ける事が出来ず鉄人の拳を喰う。

ゴキンッ!!

まるで壁をハンマーで殴ったような音が廃工場に響く。

「ぐがあっ!?!」

炎条は鉄人に殴られ一気に意識が飛んで行きそうになりながらも止まらせる。

「俺は《鉄人》くろがねびとなんかじゃねえ!!
るんだ、憶えてろ放火魔野郎」

えんどじつこくじ
鉛銅黒護つつう名前があ

黒護と名乗った少年は再び炎条に殴り掛かろうとしたが、炎条はすぐに黒護との距離をおいた。

「うわぁアイツも異形者かよ、しかもあの炎条を退けさせたよ」

豊臣はいつの間にか廃工場の二階へと移動していた。

「リンはまだ来ねえのか、アイツら来ないと俺の仕事は始まらないですけどねえ」

豊臣は溜め息混じりに呟く、炎条一人であの黒護とか言う少年をどうにかするには難ありそうである事に気付く豊臣は先程、炎条が生徒会の一年生女子達に放った方を見ると火波とか言う少女が炎条の炎を“掴んで”いる場面を目撃してしまう。

「うわちゃゝ炎条の相手が三人になっちゃった、まあこの三人は目覚めたばかりだし戦い馴れていなそうだけど・・・・・・・・こりゃキツイかもな」

そんな他人事のように豊臣は二階から眺めていた。

「・・・・・・・・っ!」

「はぁ!?! 炎を掴んでるだぁ!?!」

炎条はさっき放った炎を掴んでいる火波に驚きながらも火波に炎拳を繰り出す。
だが、

ポオオオウウ!!!!!!

「何っ!!!?」

炎条が火波に間合いに入った瞬間、何か壁のようなものに当たる感触を覚える。

「許しません、貴方は水波ちゃん綺麗な顔に一生消える事の無い火傷キズを負わせようとした!!! 絶対に許しません!!!」

火波はまるで何か取り憑かれたように掴んでいる炎を剣のようにして炎条に振るう。

「バカがあ!!! 効かねえよ!!!」

炎条は避ける事のなく火波の炎の剣を受ける、受けた場所から炎が溢れ出たが炎条は退屈そうな顔で火波の首を掴む。

「かはっ!?!」

炎条は火波の首を掴むと人間離れした脚力で廃工場の壁に一気に押し付ける。

「魔法型は体質型ウィザードタイプ ボディタイプに勝てねえんだよ? 理由は分かるか?」

首を締め付けられている火波は呼吸をする事を許されなく、炎条は容赦無く締め付ける。

「教えてやっても良いが、もうすぐ死ぬから意味無えか、アハハハハ!!!」

炎条は一気に火波を締め殺そうとしたが、

轟っ！！

その刹那、黒い何かが炎条をぶっ飛ばした。

「俺は最初からお前が嫌いだった」

黒護の一発のパンチだった。

炎条は炎を纏った多少強化された腕で防御したのだが、完全に片腕が言うことを利かなくなった。

その証拠に炎条の片腕は震えているだけで動こうとしなかった。

「・・・俺はお前に言いたい事があったんだ」

黒護は信じられない脚力で炎条に近付く。

「なっ・・・・・・・・！？」

「まず一つ目だが、俺はお前より年上だ。言葉遣いになって・・・無い！！」

黒護は黒色に染まった腕で炎条に再びパンチを繰り返す。

「チィィィィ！！」

炎条は迫り来る黒護のパンチを僅かならずに反らす、ブォンと手加減など微塵もない音を出すパンチを繰り出す。

「がはあああああ！……！」

その証拠に脇腹に蹴りを受けた炎条は大量の唾を吐き出し尋常ではない叫び声を出しながら倒れる。

黒護が蹴った時に何か折れた音がした。

炎条は腕を炎化し、黒護の首筋をわしづかみする。

黒護の首から上に炎を燃え上がらせる炎条。

炎条は笑っていた、もう相手を殺したと判断したからだ、だがそれは大きな間違いである事に炎条は気付いていなかったのだ。

まず最初に疑問に思ふべき所は、

何故、黒護は首から上を燃やされているのに“立って”いるのか、
という点だった。

「——そしてもう」

「	?
ハ	
ハ	
ハ	
ハ	
ハ	
ハ	
ハ	
ハ	
ハ	
ハ	
ハ	
.	
.	
.	
.	
.	
.	
.	
.	
.	
ハ	
ツ	

炎条は一体何処から声が聞こえたのか分からなかった、さっきの赤髪（あかみ）の女は其処（そこ）に居る。

だが、声は発していない。

明らかに女子の声色では無かった。

まるで軋む鉄に油を注さないといけない音。

まるで鉄と鉄が擦り合った無機物の音のような声色だ。

炎条は気づく。

握り燃やしている目の前の男の顔が“焼け溶けて”いない事に、

炎条は驚愕する。

目の前の男の顔が黒色に染まり、まるで仮面のような、まるで髑髏のような顔になっている黒護に。

そんな炎条はまた気づく、黒色化した目の前の男から発した、声なんだと。

「女に手を出す馬鹿野郎は地球最大史上最悪なクズだってなあああああああああ！！！」

轟っ！！！！！！

まるでビルを壊す鉄球のような一撃を、黒護は炎条の腹部を容赦無く叩き込んだ。

ボキボキボキイイ！！

「ぐ・・・があああああああああああああ！！！！」

尋常では済まされない強烈な一撃を受けた炎条は廃工場の壁にぶち当たり、そして倒れた。

身体の何カ所の骨を砕かれた音と共に。

※

零達は走っていた。

リンという少女が案内をしてくれて、目的地の近くまで来た零達だったが見えてきた廃工場が燃えていることに気付くと猛ダッシュで駆けていた。

廃工場には大きな扉があったのか、片方の扉だけが吹き飛ばされていた。

（オイオイ・・・冗談じゃねえぞ、まさか放火しやがったのかあのマスク野郎は！？）

零はマスクの男、つまり豊臣が言った最後の言葉を脳裏に浮かべさせながら廃工場に入る。

だが、そこにあつた現状は誰も予想していなかったらう。

気絶している白亜と柱木、

呆然と立ち尽くす水波、

首を摩りながら座っている火波、

頭から皮膚が見える場所を全部黒色化している男。

せして放火魔らしき身体から炎を発している無惨に倒れている少年。

「なんだ・・・これは」

第13話「異形者」(後書き)

どうでしたでしょうか？

新しく登場した鉛銅黒護くんは（＜π＞）

名前の由来は国語からとりました！

なんかもう無茶苦茶ですね。

水波と火波は異形者^{イレギラ}になりましたね。

最初から異形者として登場をしたかったのですが、作者がどのタイミングで出すか迷ってしまい第13話でやっと出せました(汗)

感想やコメントをお待ちしております！！

本当に感想やコメントを下さい、コメントしてくれる人が少な過ぎて泣けてしまいます(TOT)

この作品の質問や何でも良いのでコメントして下さい！

待ってます。(。D。(ッ

第14話「黒き鋼の男」(前書き)

更新します！

今回は本編に関係ありませんがレギュラーキャラクターとして出ていきたいと考えている鉛銅黒護の話です。

第14話「黒き鋼の男」

鉛銅黒護は普通の高校の学生だった。

普通に学校に通い、普通に学校で授業を受け、普通に友達と馬鹿をやり、普通にしている生きている少年だった。

だが、少年は、黒護はいわゆる“虐め”を受けていた。

友達と遊んでいると悪態を突かれ、練習台と言って何度も何度も黒護を殴り蹴りの暴力を働き、教師の前では一切にして黒護と距離を置き、虐めをしていないような空気にする。

そんな黒護は何故、教師達に相談等をしなかったのか、そんな理由は簡単だった。

先生に相談すれば黒護がまた倍返しとして虐めがひどくなるからだった。

だが黒護はそれを“普通”と感じ取っていたのだ。

先生に言わなければまだ軽い虐めで終わる。
なら、このままで良いかと。

たとえば、筆箱をグチャグチャにされてたてしても、

たとえば、唾を顔に吹き付けられたとしても、

たとえば、勝手に弁当箱の中身に虫を入れられたとしても、

それは『普通』に感じ取ってしまう黒護だった。

だが黒護も人間だ、ストレスが溜まらないハズが無い。

ストレスの溜め過ぎで、頭痛、腹痛、胃痛等になって何度も早退した黒護だった。

そんな黒護に救いになった者が何人か居た。

まずは友達だ。

黒護と仲が良い友達が鼓枝飛久こえだとびひさだった。

飛久はとても短気で怒りっぽかったがとても友達想いの良い奴だった。

そしてもう一人。

それは、黒護が通う高校。東針とうしん高等学校の生徒会会長を務めている赤彦あかひこ千水流だ。

小学校からの付き合いでもあり、いわゆる幼馴染みでもある千水流はとても黒護の事を心配しており、幼い頃よりバカな事やアホな事をして怪我をする黒護がとても心配していた。黒護はそんな心配性の千水流に『虐め』の事は話さなかった。

話せば生徒会長という権利を使い、黒護を虐めている奴らに何かと

公には公表出来ない事をするかもしれないからである。
おおよけ

虐められた日などの黒護は千水流や飛久と三人で良く一緒に遊んだりする、黒護はその三人と一緒に居るだけでストレスが徐々に無くなりつつあること感じ取って居た。

そんなある日、黒護はよく虐めて来る奴らに呼びつけられ、ある提案を出された。

「おい、黒護、夜に帝黒町にある廃工場に行って写真とって来いよ、何でもその廃工場には夜な夜な女霊の笑い声や奇妙な音が鳴るんだってよ！ だからお前がそれを確かめにカメラ持って写真撮って来いよ」

何とも面倒臭く、そしてくだらないと黒護は思ったがそんな事は言えず、言われた通りに夜に廃棄された帝黒町にある工場跡地に行った。

だが、そこには現実ではあり得ない太刀モノを振り回している白水色をした髪をポニーテールにしている女の子が二人の女の子と闘っていた場面があった。

白水色の髪をした女の子は太刀を二人の女の子に向けて捕まえて行った。

「ええええええ……えれえモン見ちまったあゝ」

黒護は茂みの中から廃工場の中の様子を伺っていた。黒い眼鏡を直しながら呟く。

「廃棄した工場跡に奇妙な音や女霊の笑い声を確かめて来いって言われて来てみれば・・・ええええええモン見ちまったあゝ」

黒護は見た全部の事をよく虐めてくる奴らに報告した、だが虐めてくる奴らは黒護の言った事を全部嘘だと決めつけられその日は終わった。

黒護的には別に信じてもらわくとも良かった、被害が無くなるならそれで構わない。そんな考えだった。

そして黒護の身体の変化はその日に起きた。

「はあゝ疲れたあ、何で俺がワザワザあんな廃工場に行かないといけねえのよ、しかもえれえモン見ちまったしよ」

黒護は虐めてくる奴らと別れて家に戻り、自室でベッドの上に転がる。

「・・・しかし、ホントに凄いモンを見ちまった、あの制服は・・・
・・・たしかこの帝黒町^{まち}の有名な名門高《黒須学園》の制服だったな、あの黒一色はそうだ。」

黒護はさっき見たであろう少女達の戦闘場面^{バトルシーン}を思い出しながら呟く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何でだろうなあ・・・・・・・・ふあああゝ」

黒護は何故あんな所で、しかも太刀なんて物騒なモノを使って闘っていたのか考えていると睡魔に襲われ、重い瞼を閉じて眠りに浸いた。

「・・・くあっ!？」

黒護は苦痛を浴びた声を出して目を覚ました。

「な・・・なんだ、から・・・だが、軋むう!!」

黒護は体中にキシキシ、と何かに縛られている感じを受けていた、だが実際に身体には何も異変も無くただ身体の筋肉や骨などが軋むような痛さに襲われていた。

「・・・い・・・痛えよ」

黒護は両手で身体を抑えつけながらベッドから転がり落ちる。尋常ではないこの痛さを黒護は身を削りながらも我慢していた。すると数分後にその痛さは徐々に弱まっていった。

「ハアハア・・・くっ、ハアハア・・・何だったんだよ、今の・・・」

黒護はあっちこっちの自分の身体に解すかの^{ほぐ}ように身体をパンチしていった。

すると、

ゴキンッ！

「・・・ん？」

黒護は自分の身体から聞き覚えの無い音が聴こえた。

「な・・・なんだこりゃ!？」

黒護は解す為に殴っていた自分の身体の一部を見ると、黒色に染まっていた。

——ツンツン

黒護は黒色化している自分の身体を触ると、

コンコンッ！

皮膚の音からかけ離れた音が鳴った。

「な、何だよコレ！？　まるで鉄みたいになっちゃってる？」

黒護は意識を集中させてみると身体の異常に気付く、何故か感覚的にこの“硬化”出来るようになっていた。

「・・・す、すげえ」

黒護はパツと硬化させたり普通の皮膚に戻したりと硬化を繰り返してやっていた。

「なんか鋼の錬金術師のグリードみてえだ！！」

黒護は自分の変化を驚きつつも嬉しがっていた。

黒護は自分の能力を嬉しがっていたが疲れてた為、すぐに深い眠りへと潜った。

朝起きた黒護は一番に気になっていたのが、昨日発覚した“能力”だった。

すぐに黒護は意識を集中させて身体を硬化させると、

ピキピキピキイイ！！

胸から全体に広がる黒色化した鐵くろがねの身体を見る黒護、

夢じゃなかった……

黒護は改めて実感する自分の硬化能力。

「……………とりあえず学校か」

黒護は硬化を無くして元の皮膚に戻す、嫌々学校に行く為に準備をした。

黒護は東針高校指定の制服に着替えて重い足を歩かせていた。

「……………ふぁぁ」

黒護は欠伸をしながら歩いていると、後ろから走ってくる人影があった。

「おはよう、黒ちゃん♪」

黒護に挨拶してきたのは、東針高等学校の生徒会会長でもあり、黒護の幼馴染みでもある赤彦あかひこ千水流ちづるだった。

「おはよー、千せん」

「ちょっと私の名前の頭文字だけで呼ばないでよ」

「じゃ俺の名前の頭文字だけで呼ぶなよな、高校生にもなって“ちゃん”付けはある意味悪口言われるよりもキツイ!!」

黒く綺麗な長い髪を靡^{なび}かせながら千水流は黒護の言い分を聞いているがそれはその場しのぎ、黒護は何回、何十回、何千回と言っているが千水流は止めなかった。

千水流曰く「この呼び名が一番しっくりくるのよ♪」だそうだ。

「まあ良いじゃない黒ちゃん、黒ちゃんって言うのが一番しっくり・・・」

「ああーハイハイ、分かったよ分かりました」

黒護は溜め息混じりな声を吐きながら言うが千水流は「?」といった感じに首を傾げていた。

黒護と千水流は他愛のない会話をしながら高校に通う、それが日課だった。

黒護は朝からからかって来るハズであろう奴らは今日に限って何もして来なかった。

疑問に思った黒護だったが虐めて来ないならそれで良いと判断し、それ以上の詮索はしなかった。

一日の授業を終わらせた黒護は一日虐めてこなかった奴らを不気味ながら早々に帰る支度する。

「なあ黒護、今日ちよっと美味しい食べ物売っている店あるんだけど一緒に行こうぜ」

学校が終わった事を嬉しがっている飛久とびひさはカバンを背負おぎながら黒護に聞いてきた。

「別に良いけど、千も連れて行かないと後で怒られる・・・」

「・・・？ 千って・・・赤彦千水流か？」

黒護はコクコクと頷いてみせると飛久はニヤリツといった感じのニヤケ面になりながら、

「いやあく大丈夫、大丈夫、ごめんねKYな事を言っちゃって俺は一人で行くから大丈夫だよ」

飛久はそれだけ言うとなやけた面を浮かべたまま「頑張れよう♪」
と言って教室から出て行った。

「・・・・・・？ 何だ？」

飛久の言動を気にしながらカバンを持って生徒会室にへと向かおうとした瞬間、

パチンッ

何処から聞こえたのか、指を鳴らした音が黒護以外居ない教室に虚しく響く。

「やあ新米異形者くん、初めましてだね」

教室の端にある窓の角から青い帽子を被った少年が居た。歳は小学六年生並だった。

「えっ・・・何で高校に小学生が？」

黒護は何で高校に小学生くらいの子供が居るのか疑問に思って声に出してしまう、青い帽子を被っている少年は不服そうな顔で黒護を見る。

「ざ・・・残念だけど僕は小学生じゃないんだよね、もうすぐ中学生になるんだからね」

青い帽子を被った少年はそんな風に言うのと黒護は溜め息を吐いた。

「はあ~~~~~」

「あっ・・・あああああ！溜め息を吐くなお前！！」

少年は面倒臭そうな表情しながら、溜め息を吐かれた事を不服に思った少年は黒護に突っ掛かる。

「どっかの弟かな、悪いけどお姉ちゃんやお兄ちゃんの名前言うてくれる？名前を聞けば分かると思うから」

「ええええ！？捜してくれるのお兄ちゃん？ありがとう♪
うんとねえ〜名前は確か・・・・・・・・・・って何やらしてんだアンタ！！？」

うおっ！ ノリツツコミとはやるな、と黒護が呟きながら教卓の中に閉まっているクラス名簿を見ながら、まだ聞いていないクラスメートの名前を探す。

「くっ！ ふざけるのもいい加減にして欲しいモノだよ！」

青い帽子を被った少年がそう言うのと黒護の背後から誰か居る感覚を感じ取り振り向いて見ると誰も居ない。

そう思った瞬間、

黒護の視界が半回転していた。

（えっ・・・なっ！！？）

黒護は急に起きた事態に理解出来ず、教室の床に転がる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黒護が誰に飛ばされたのか確認する為に投げ飛ばした相手を見ると、今まで黒護を虐めていた奴らだった。

「なっ・・・・・・・・」

だが虐めてきた奴らの瞳には“自らの意思”のある瞳では無かった。そう、まるで何かに操られているような、

「『操作粉砂』・・・・・・・・僕が生み出した粉を吸い込んだ人間は、
オペレッタ・パッダ

脳の指示を出す血管血液に混ざり込み多少だが操れる事が出来るんだ、それが僕の異能力『操作粉砂』だ」
オペレッタ・パッダ

青い帽子を被った少年は愉快そうな笑みを浮かべながら黒護に語る。

「ねえ新米異形者くん、コイツらに虐められてたんだよね？ 今日は虐めが無くて良かったじゃないか」

「……まさか、お前のその能力で今日は黙らせていたのか!？」

黒護は立ち上がり青い帽子を被った少年に聞く、少年は笑って返した、それだけで分かった。

「なんの目的でコイツらを使った」

黒護は掛けている黒い眼鏡を直しながら少年に問う。

「理由は簡単さ、僕らの仲間になって貰いたくて来たのさ」

少年は並べてあった机の上に行儀悪く座った。机の上に座っても黒護の背に勝てなくて悔しいのか、さっきまで笑っていた顔が今はいじけたような顔になっていた。

「……仲間？」

黒護は意味が分からなそうな顔をしていると青い帽子を被った少年は淡々と呟き始めた。

「そう仲間だよ、僕ら『斬裂く白き鎖』の一員のね」
リップバー・ザ・チェインズ
「斬裂く白き鎖だ?」

聞きなれない単語に黒護は聞き返す、少年は青い帽子を深く被り直す。

「そうさ、その『斬裂く白き鎖』^{リッパ―・ザ・チェーンズ}の、つまり僕らのリーダー^{きりさ}の斬崎鎖取^{きさとり}がアンタを勧誘をして来こいって言われた訳さ」

パチンッ！

少年はまた指を鳴らす、すると『操作粉砂』^{オペレッタ・パッサ}で操られている生徒が黒護に迫り来る。

「なっ!？」

黒護は迫り来る生徒に驚き後ろに下がる、すると教室の入口から黒護を虐めている奴らの中心核、つまりクラスの頭^{リーダー}が入って来た、リーダーと言っても「暴力」と言う名で勝ち取っただけの重圧で皆を黙らせていた奴だ。

「名乗るのが遅れました、僕の名前は筏井斗僞^{いかだいとすぐ}って言う者です」

青い帽子を被った少年は顔を上げて筏井斗僞と名乗り黒護に近付く。

「仲間になってくれますよね？」

青い帽子を片手に付け、まるで挑発させるかのような笑みを浮かべながら筏井は言った。

——ヤバイ

黒護は一瞬にして頭にそう浮かんだ、この子供は子供であって・・・子供ではない。その感覚に黒護は意識を駆り出される。

ばっ!!

ぞろぞろと教室に入って来たのは全員、黒護を虐めていた生徒達だった。篠井は虐めていた奴らだけ操っているらしい。

ガシャンガラン!!

「なっ!!!?」

クラスのリーダーらしき生徒（結構体が大きい奴）が蹴った机が人

間の脚力では到底あり得ない攻撃性のある蹴りで壁にぶち当たっていた。

「ど……どういふ事だ！ コイツの蹴りがこんなに強いハズ無いだろ！？」

黒護は高校生の蹴りとは思えない奴らを見て後方にズリズリと下がる。

「それはそうです、その人達には『操作粉砂』オペレッタ・パッドを使っているのですから……」

「はあ？ ちょっと待てよ、お前さつき脳の血液に操作粉砂オペレッタ・パッドを流し込み、多少なりとも操る事が出来るって言わなかったか！？」

「まあ言いしましたが、説明を省いておきましたからね。まあ簡単に言うそうですね……」

筏井は軽～い感じで喋る瞬間、

ガンッッ！！

「いっ……がっ！！？」

オペレッタ・パッド
操作粉砂に操られている生徒がパイプ椅子を持って黒護の頭を思いっきりぶつけたのだ。

「がああああああああああ！！！」

黒護は頭を抑えながら床に転がる。

「ああすみません、操と言っても命令を一定の衝波数として流しているだけなのでソレは私が命令した訳ではありませんよ？」

筏井はそう言いながらも笑みを決して崩さなかった。黒護は激痛を耐え、立ち上がるとすぐに次の生徒から反撃を受ける。

「がはっ!!」

黒護はなんとか防いでいる。だが、操られている生徒達は尋常じゃない一撃一撃を黒護に容赦無く振るう。

「あれえ？ おかしいですね、貴方も何かしらの能力チカラがあるのでありませんか？ 幾ら貴方でも操作粉砂オペレッタ・パッドで筋力を無理矢理張らせて強くしたコイツらの蹴りを受け続けたら死にますよ」

筏井は袋叩きにされている黒護が何故能力使わないのか疑問に思っているところある一つの仮設を思い浮かべる。

この目の前の男は能力をまだ使いこなしていないのではないかと。

「ふうゝ斬崎さんも気が早い、まだ自分の能力チカラさえも使いこなしていない奴を仲間に誘うだなんて」

筏井は溜め息を吐きながら指を鳴らす姿勢をとる。

「邪魔者が入って来てもただ邪魔になるだけ、それなら一層ここで殺しておけば後々楽になるでしょう。幸いこの鉛銅黒護と言う生徒

は度々虐めを受けていたりしてます、もし……その虐めていた生徒達が集団で“過激な虐め”をしてしまい“誤って殺して”しまっても斬裂く白き鎖ぼくらの跡は残らない」

その喋りには一切の感情というものが抜けきっており、こんな冷たく、そして冷淡に聞く言葉は初めて、というような顔をする黒護には、もう普通の小学生とは思えなくなっていた筏井斗僞がさっきまでの笑みを消し、天井に目掛けて上げている片手の指を、鳴らす。

パチンッ！

自然と指パチンの音を聞いた黒護は瞬間的に何かに刺された感覚に襲われた。

リーダーらしき男子生徒が銀色に輝く刃、サバイバルナイフで黒護の背中にブスリ、と刺していた。

だが同時に不可思議な音が聴こえた。

カキンッ！！

まるでナイフを鉄塊てっかいに刺して刃先が欠けたような音だった。

そして次に起きた事はもつとあり得ない事だった。

何人もの生徒達が一斉に吹き飛ばされた光景だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ」

一瞬、

その一瞬で何人もの生徒、『オペレッタ・パッダ』で無理矢理筋力を強化された生徒達が吹き飛ばされたのだ。

筏井は少し離れた場所で見っていたのだが本当の一瞬の出来事で一言しか発せなかった。

「・・・・・・・・暴力までならまだ我慢出来たけどさ、武器それ使うなら俺も硬化能力ぶき使って良いよな？」

黒護は身体に至る所からくる激痛を我慢しながらも口から溢れている血を手で擦る、口の中が切れてしまつて錆びた鉄の味しかなかった。

った。

黒護は片手を黒色に染まり硬化した人差し指で筏井を指す。手はもう完全に尖った鉤爪のような形になっていた。

「……身体能力が人とかけ離れ過ぎている、一秒でどれだけの動きをしたのですか貴方は!!」

筏井はブルブルと身体を震わせながらも怒りが積もった言葉を黒護に言い放つ、すると黒護は、

ドォッン!!!!!!

近くにあった机を木っ端微塵に殴り潰した。

「……あんま年上を舐めるな小学生い、痛い目合うぞ」

かなりの怒気を含んだ言葉を筏井に言い返した。

さっきまでの冷淡な筏井は何処へやら、今の筏井は本当の小学生のように床にぺたりと座りビクビクしていた。

「……人を使わないで自分自身で戦えよ卑怯者、そんな少し離れた場所で観戦してやがって、しかも自分の犯した罪を能力で操っていた奴らに押し付ける? ふざけてんのもいい加減にしろ!!」

黒護はズンズンと激痛を感じながらも一つ一つ足を踏み出す、筏井は「ううっ!?!」と言いながら座りながら下がる。

「俺はな、そうやって安全地帯から命令下して紛争地帯に行け、とか抜かす野郎みたいな奴が嫌いなんだ！！　　まだ正面切って来る奴らの方がマシだ！！」

筏井の前まで来ると黒色に硬化した片手でズシッと筏井の胸ぐらを掴み上げる。

「う・・・うわぁ！！」

「その斬裂き白き鎖リップバー・ザ・チェーンスの頭に伝えろ！！　『死んでも仲間にならねえ』ってなぁ！！」

黒護が叫び声に近い張り上げた声で筏井に言うのと、涙目になる。その涙目を見た黒護は一瞬にして頭に上がっていた血がササアッと下がりて行くのが分かった。

片手で子供の胸ぐらを掴んで叫ぶ黒護。

あれっ？

オレ子供泣かした！？

黒護はすぐに筏井を床に下ろして硬化した片手を普通の手に戻し、ごめんねと筏井の頭を優しく撫でる。

「く・・・屈辱だ！！」

筏井はそう呟くと、

ゴチンッ!!

「ハギヤアアッ!!!?!?」

黒護の金的を見事に蹴りあげてそそくさ教室から逃げて行っただわあああーと黒護は男の大切な場所を両手で押さえながら床を転がり回っていた。

「があクソ、ハアハア・・・ヤ、ヤバい。今日最大の一撃を・・・受けた・・・やるじゃ・・・ねえか・・・あの小学生」

黒護は涙を流しながら独り言を呟いていると、

「あれちよつと? 黒ちゃん何^{うずくま}踞^{うずくま}っての?」

タイミングを見計らったように生徒会の仕事を終えた千水流が教室にやって来た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「返事がない、ただの屍のようだ」

「ドラクエ!? 勝手に死なすな千!」

「千じゃなくて千水流って言うてるでしょう?」

千水流は長い黒髪を靡かせながら教室に入ると気絶している生徒達を見て驚愕の顔をした。

「えっ!?!? ど、どうしたのこの人たち!?!?」

黒護は溜め息を吐きながらその場に座り込んだ、千水流は光に照らされた黒護を見ると驚愕の顔から更に驚愕の顔へと変貌した。

「なっ!?!?!? どうしのその怪我!?!? 頭から血が出てるよ、ああ口からも!」

千水流は怪我しまくりの黒護に近寄りポケットに入れてあったハンカチを出して黒護の血を優しく拭いてあげる。黒護は遠慮、と言うか恥ずかしいので止めろと言ったが千水流は大人しく止めるハズも無く拭き続ける。

黒護はその後、千水流に病院に行くように何度も言われたが曖昧な返事だけを残して家に帰り寝た。

黒護はその数日、放火魔こと炎条騎烈に追い掛け回され、相手が殺しにやって来たので黒護は自己防衛と言う名で見事に返り討ちにし、その数日に他校の生徒達にまで手を出した『斬裂く白き鎖』リップバー・ザ・チェーンズに頭にきて殴り込みに向かい、手を出された女子生徒達を助けようとしたらその女子生徒達も異形者のうりよくしやで共闘して炎人間をぶっ飛ばす等、

波乱で万丈な数日間を経験をした鉛銅黒護だった。

第14話「黒き鋼の男」（後書き）

如何でしか？

個人的に黒護の能力は硬化能力であり《鋼の錬金術師》に出てくるグリードをモデルとしています！

ああ・・・また真似^{パク}ってしまった。

でも個人的にグリード好きです♪

今後の話にじゃんじゃん^と黒護や仲間達を入れて話を進めていききたいと考えております。

感想やコメントを受け付けております！

本当に気軽に良いのでください（涙）

てか本当にUTさんしかコメントが無いので悲しいですよ（T|T）

第15話「敵と味方」(前書き)

期末テストが終わり、あとはみんな大好き夏休みの時期ですね。

あつ、私の予定ですか？

アハッハッハ

赤点の補修ですが何か？

何かどっかの学園都市に住んでいる不幸少年と同じ感じで浮かれています駄目な学生、十握剣ですが、次話投稿しまっス(＜Д＞)

第15話「敵と味方」

「なんだ・・・これは」

くろがみれい
黒神零は困惑していた。

いもうと
義妹を助けに来た所に黒き鋼が光る体色をした一人の少年が居た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少年は黙っていた。

「お、お前は一体・・・・・・・・」

敵なのかと零は聞こうとしたが水波がみなみペタリと座り込んでいたので零は急いで水波に近付いた。

「大丈夫か水波！　どこか怪我とかしてないだろうな！？」

零が水波の肩に手を添うように置くと、

「ダイジョーブだぜい、そいつ炎条が放った炎の煙を少し吸って苦しがつているだけだからなあ」

水波では無い声が水波の変わりに返ってきた。

零は声がする方向を見るとそこにはコンビ二強盗に良く使う目と鼻と口だけが穴が空いているマスクを被っている誘拐犯が廃棄工場の二階から零達を見下していた。

「たくよく、何勝手に暴れだしといて何負けてんだ炎条。お前そんなに弱かったか？」

「・・・・・・・・クハア！ ハアハア・・・・くそが、豊臣とよおみいい！」

炎条と呼ばれた少年は豊臣に向かって叫ぶ、だが、その叫びにも傷ついた痛々しい少年の声にしか聞こえなかった。

「安心しろよ、お前は斬崎鎖取リーダーの大切な仲間なんだからよ、後で回収して行く。だが、その前に・・・・・・・・」

豊臣と呼ばれた誘拐犯はかなり高い二階から零を見下ろしながら言う。

「アンタだろ？ 金野を倒した妖刀師ブレイドマスターって？」

豊臣は薄ら笑いを浮かべせながら零に聞く。

「さあな、知らねえよ」

零は素っ気なく相手から受けた返事を返す。

「つれないねえ、俺だって誘拐なんてしたくなかったのよ？ したくなかったけど、そんな我が儘が言えないのが悲しい現実だね」
豊臣はふざけた感じで零と話す、だが零はそんなふざけている豊臣に苛立ちを浮かばせているが水波がゲホゲホッと咳をする。

零にとって一番気になるのは水波の体調だった。

（くっ！ もしアイツが言った言葉が本当ならこのままじゃ水波が・・・・・・・・。）

クソッ！ 何が平気だ！)

零は優しく水波を抱き寄せながら豊臣を睨みつける。

「はははは、そんな睨むなよ」

豊臣は相変わらずふざけている調子だ。だが、零は睨みつけながらも・・・薄い笑いを浮かべていた。

そう、この廃棄工場に入る前に『ある行動』に出て欲しいと友に、いや仲間に言ったからだ。

「まあ金野を倒したのは間違はなくお前だ。『白仙女』から聞いたからな、まさかお前も妖刀師だブレイドマスターとわな」

(な・・・に・・・?)

零にとって聞き捨てならない言葉を豊臣から聞いた。

——今コイツ“お前も”って言わなかったか？ と。

すると零は一気に豊臣の頭上を見上げる。

そう、豊臣を捕縛する為に廃棄工場の屋根に上がり、太刀を構えるひょうか雹華の姿を。

バアアアアアン！

電華は屋根を突き抜け豊臣の頭上に現らわる。

「止める電華あ！！ ソイツも“妖刀師”フレイドマスターだああ！！」

だが落ちてるくる電華はどうしようもなく一気に仕留めるように太刀を豊臣の頭上を突き立てる。

だが、

がしゃああーん！！

と豊臣が立っていた二階が崩れて豊臣も地面に吸われるように落ちていく、勿論電華の太刀も届かず一緒に落ちていく。

「なっ、二階が壊れた！？」

理由は分からない、だが落ちてくる下には義妹である火波いもうとが、そして黒色化している少年が立っていた。

「なっ！ 危ないぞお前ら！」

零が叫ぶと火波はすぐに気付くが間に合わない。

「・・・クソッ！」

零は水波を床に起き、猛ダッシュで火波に近付くが間に合わないかもしれない。だが零は諦めずに駆けて火波目掛けて飛び込み、火波の肩を掴んで一緒に転がりながら二階の鉄柱や鉄屑を避ける。

ガシャガシャガラーンガシャアーン！

鉄の柱が火波の立っていた場所に突き刺さって居た。

「だ……大丈夫か火波？」

転がる時に頭をぶつけさせないように頭に腕を回しているので怪我は無いハズなのだが一応聞いてみる。

「う、うん、大丈夫だよ。お兄ちゃん」

火波は若干頬が赤らめていたが零はすぐに違う方向に顔を向ける。
火波や水波達を恐らく助けた少年が居なかったからだ。

（まさか！？）

零は落ち崩れている二階の残骸を見ながら言うと、

「大丈夫でしょう、彼なら」

どうやってあの高い二階から降りたのか、声がする方向を見ると豊臣はパタパタと服に着いたホコリをはたき落としながら零達に近寄って来た。

「どうやらお前の妖刀は此処に無いようだね、黒須学園の妖刀師さんよ」
ブレイドマスター

「……てめえ、どれだけ好き放題やりゃあ気が済むんだ」

零は怒りを隠し切れなくなっているのか、声には怒気が含まれていた。

「んゝまあ怒るのも仕方ないか、だがよお」

豊臣は怒っている零を軽く見ながら語り掛ける。

「あの綺麗な水色の髪をした女の子を俺に攻撃にしたのが失敗だったな」

すると豊臣は二階の鉄柱や落ちた弾みで床（コンクリートの地面）の砂ぼこりが舞い上がりその砂ぼこりが晴れるとそこには零にとつて見覚えのある人物が掴まれていた。

「てめえ、火波たちにまで手を出した挙げ句、今度は電華に！」

「まあ仕方ない仕方ない、リンが来ない以上俺はこうでもしないと直ぐに抑え込まれてしまうんでねえ」

豊臣は電華の首を掴んで持ち上げる。電華は「うぐっ！」と声を漏らしながら苦しんでいる。

それもそのハズだ、首を絞めながら持ち上げているのだから。

「クソッ！ 電華を離せ！」

零は豊臣に向かって叫ぶが豊臣は一向に止める気が無い。

するとバァン！ と激しい音を鳴らしながら鉄の扉が開かれた。

そこに立っていたのは茜色の長髪に何処かの高校の制服を着ている少女が居た。

「すみません豊臣さん、ちょっと手間が掛かりまして」

そしてその少女の両手には、ボロボロになっている零の友、あした芦田と
おいむら尾井群が引きずられていた。

「なっ！」

「芦田先輩！？ 尾井群先輩！？」

零と火波はそんな二人を見て声を出す。

「死んではいけませんので」

そして芦田や尾井群を引きずる少女は二人を軽く前に投げる。

あんなにもか弱く細い腕のどこにあんな腕力や筋力があるのか零は疑問に思いながら二人に呼び掛ける。

「おい、芦田！ 尾井群！」

「気絶してますよ、それほどの事をしましたので」

芦田と尾井群に呼び掛けても返事が無いのに不安がり零は何回も呼び掛ける。

すると二人を引きずっていた少女・・・道案内をしてくれた少女リンは気絶していると零に告げる。

（気絶？ 気絶する程の何かをアイツは、リンがやったのか！？）

零は奥歯を噛みしみながらリンを睨むがリンも無表情のまま立っている。

「おう、来るのがおせえよ、炎条がやられちゃった」

豊臣はリンが来た瞬間に掴んでいた電華の首を離してトントーンとリンに近付く。

「……まさか炎条さんがやられるとは思いませんでした、相手は例の取り逃がした異形者イレギュラですか？」

「ああ、今はアソコで寝てるけどな」

豊臣は親指をクイツと二階の残骸を指差す。

「ああ、そうですか」とリンも特に興味無く返す。

「ああこれで第一の【任務】を失敗した、そして続いて第二の【任務】に移行するぞ」

すると豊臣とリンは零の前に立ち塞がるかのようにする。そして告げる、第二の【任務】を。

「黒神零抹殺任務に移行だ」

第15話「敵と味方」(後書き)

お願いです(涙)

感想やコメントを下さい！

ホント気軽に良いんでお願いします！

第16話「風に流れる鈴ノ音」(前書き)

零

「今更だけど作者、何でまた小説増えてんだ？」

十握剣

「何故かって？」

ふっ、それはね黒神くん」

零

(言い方ウゼエな)

十握剣

「その理由はズバリ！」

書きたいから！」

零

「しょーもねえ理由ありがとう、それでは死神の奇想曲、カプリス第16話「風に流れる鈴ノ音」おとをどうぞ」

十握剣

「いやーね、前々から思ってたんだけど小説を書くとか、まあケータイだから実際は打ってんだけどさ、小説って考えながらやらないといけないからかなり頭を鍛えるのではと俺は考えてんだよ、だから色んな小説に手を出すのも良いじゃん、てか正直に言いましょ、作者基本的に気分屋です。友達に言われてショック受けて気持が沈

んでるとかそんな感じじゃないよ、あつ今の状態的にみたいな、だからさ、おれてきに・・・・・・」

零

「長ッッ!？」

第16話「風に流れる鈴ノ音」

【黒神零抹殺任務】

帝黒町私立黒須学園の学生であり、黒須学園生徒会副会長を務め、そして黒須学園の『妖刀師』である黒神零を抹殺せよ。

それが『斬り裂く白き鎖』リッパ―・ザ・チェ―ズから出された任務だった。

「【黒神零抹殺任務】か、ここまで動くとは俺も思わなかったよ」

「豊臣さん、そもそも妖刀師ブレイドマスターと言う存在そのものを『抹殺』しなければいけないのです。……絶対にあってはならないんです、妖刀師や、妖刀なんて……」

「抹殺」とは名の通り抹消、消して無くすことであり零を殺して居なかった存在として、存在そのものを消そうとリンと豊臣は言っているのだ。リンは『妖刀』と言う単語に憎しみを滲めながら言う。

廃棄工場に流れる錆びた鉄の匂いに慣れ始めた黒神零は義妹であるくろがみれい いもうと風瀬火波の腰に手を回し、もう片方の手は火波を腕を掴んで優しく立たせる。

火波は零の親友であり、生徒会メンバーの仲間でもある芦田峰春、あしたみねはる尾井群蒼道がリンと呼ばれる少女にズタズタにされ、思わずペタリと座ってしまったのだ。

風瀬火波は普通の人より何かと内気であり、そして責任感が強かつ

た。

火波は自分のせいで芦田や尾井群を傷つけてしまった、電華もそう
だ。

そして一番に責任を感じていたのが、家族を傷つけてしまった事だ。

（わ、私は・・・私は“また”大切な家族を傷つけてしまったの・
・・・？）

自分のせいだ。

火波の頭にはもうその事しか流れていなかった。

「お、おい！ 大丈夫か火波！ 火波！」

火波は隣から聞こえる声に顔を向ける。

兄の顔だ。

幼い頃に良く遊んでくれた大好きなお兄ちゃん。

怪我をすれば慌ただしく心配して怪我を治してくれたお兄ちゃん。

そんな優しいお兄ちゃんを、失うのが、失うのが怖くなった。

（れ・・・い、おにい、ちゃん。おにい・・・ちゃんは、私は守る）

「おい、ほな——」

ボオオオオウ！！

火波の気がだんだん離れていくのが分かった零はすぐに火波に呼び掛ける、だがいきなり火波の周りには炎が発生、いや、『発火』した。

ボオオオオウ！ と炎から生まれる熱気に零は思わず火波から離れてしまう。

「なっ、火波！？」

零は火波に呼び掛けるが返事が返って来なかった。すると今まで立ち止まっていた豊臣たちが動き出した。

「オイオイ、今になって『異形者の暴走』かよ！？」
イレギラ

「・・・こういう場面も頭に入れといてください、目覚めたばかりの異形者が暴走する確率は結構高いのですから」
イレギラ

「はっ？ お前分かってんなら先に止めろよ！！」

「すみません、暴走してから思い出しましたので」

アホオオオと大声を張りながら叫ぶその同時に豊臣の顔面に火の塊が直撃する。

ボシュウ！ と豊臣が被っていた布製のマスクを焼き付く。

リンは火の塊が飛んで来た方向を見るとそこには眼には感情が無くなったような姿になっている火波の姿があった。火波の周りには炎が『発火』してまるで壁のようになっていた。

「今の貴女アナタの姿はまるで紅の炎を纏っている魔女のようですよ」

リンはそう言うとかか手に集束し“ソレ”を火波の炎の壁に向けて放つ。

すると炎の壁は避けるように無くなり意識が無い火波に直撃する。

「!!!」

火波はリンから放たれた“何か”に直撃するとその場に崩れた。

「かはあ!!!」

火波は口から大量の血を吐き出す。

「てめええええええええ!!!」

零は火波に何が起きたのか分からなかったが、義妹いもうとに容赦無く攻撃したリンに飛び掛かるように殴り掛かる。

だが、

「.....」

リンは無表情に容赦無く零の溝にパンチを繰り出す。

「かッ!？」

とても女の子のパンチとは思えない威力で零を殴り飛ばした。

本当に殴り飛ばしたので零は廃棄工場の黄色い砂ぼこりが掛かったコンクリートに転がる。

リンはまた“何か”を手に集束しそれを豊臣の顔面目掛けて放つ。それを感じ取った豊臣なのか、リンが放った“何か”をスレスレに避ける。

「ぎゃわぁ!？」

「避けないでください豊臣さん、火を消す為です」

豊臣の顔面スレスレで“何か”を避けたお陰でマスクに付いていた火が消えていた。

「てめえリン、お前の“ソレ”は危ないだろうが!　もし食らってたらどうなってたんだ!」

「そうですね、ちょっと顔面の原型が崩れて血管とかがグチャグチャになってましたけど火傷で顔を醜くなるよりはマシだったと思いますよ?」

「『ますよ?』って何!?　どうなるか予想しないで放ったのかリン!　てか原型崩れて血管グチャグチャになるとかの時点でやめろバカヤロオオオオ!!」

豊臣はリンに怒りながら言うがリンは「?」といった感じに何で怒

そして驚くことが豊臣のマスク取った素顔はまさかのイケメン。
そう、イケてる面^{ツラ}だった。

「・・・やっぱりそんな強盗マスクを被らない方が良いですよ、カ
ッコイイんですから」

「くっ／＼／＼／＼／＼／
恥ずかしいから顔に関する事は言うな馬鹿！」

「黒神零さん、悔やむなら妖刀師になった事を悔やんでください」

（く、そ……アレは一体何なんだ？）

「それでは・・・」

「零お兄ちゃんから離れてええええええええええ!!」

「なっ!?!?・・・」

ボシュウウウ!! と炎の渦がリンを囲む。そして一気にリンを包み込んでいく。

螺旋を描くように炎の渦が旋^{まわ}っていく中にリンは居た。

「火波!?!」

火波はリンから喰らった“何か”で血を吐き出したので少しは楽になったのか、片手で受けた脇腹を押さえながら弱く歩んで来る。零も必死に兄を守ろうとしている義妹^{いもうと}に近付こうとしたが、

「・・・無駄なので」

零はギョツとしながら炎の渦に包み込まれている中から聞こえた声に反応すると、一気にズバツ! と何かが弾けた。

火波が作り出した炎の渦を一気に消した、いや、吹き飛ばしたのだ。

「・・・時間の無駄なのです、豊臣さん」

「そうだな、一気に畳み掛けるか?」

リンは無表情なのだが若干苛立ちの様子があるかのような怒っているトーンで豊臣に呼び掛けると豊臣は恥ずかしながらも顔を出してリンに尋ねた。

「『刀詞^{とうし}』だ、リン」

豊臣がそう言うとしリンは両手を胸に当て祈るかのようにして何かを呟く。

《己おのの体は刃、血は風、吹き降りるは風牙の雨》

リンが呟いていくとリンの周りに風が吹き荒れる。

《己おのは妖しき刀、さあ語り掛けよ》

廃棄工場の中には風が吹き荒れている、何処から風が吹いているのか分からない。だが、そんな強風が吹いている中に平然と立っていた者・豊臣はゆっくりとリンに近付く。

「ガキンちよが観てろよ？ これが本物の『妖刀師』だ」
ブレイドマスター

豊臣は力強く踏み込みながら零に言うと、リンに向けて右手を向け、そして静かに。

「我は妖刀おまえの主、妖刀おまえの銘なを今付け与あたん。妖刀おまえの銘は——」

妖刀の銘なを告げる。

「風鈴音！」
カゼノスズノネ

第16話「風に流れる鈴ノ音」(後書き)

本当に感想やコメントを待ってます！
てか本当に感想やコメント下さい！
お願いしますううう！！

死神の奇想曲

カプリス

次回

第17話

「風の妖刀師」

第17話「風の妖刀師」(前書き)

なかなか終わりません誘拐編。

夏休みなので頑張って更新したいと思います！

第17話「風の妖刀師」

廃棄工場の中では風が吹き荒れていた。

その吹き荒れている中心には刀身を緑色に染めた刀を握っている銀髪でうまい具合にセットし、チャラ男風の青年が立っていた。

「もう面倒だ、この工場ごと吹き飛ばすか？」

『それは良い考えですね、と言いたい所ですが駄目です。変に目立ちますし、他の妖刀師やら異形者が集まって来るかもしれません』

銀髪の青年、豊臣とよおみは自分の妖刀であるリンこと『風鈴音』カゼノスズノネと話していた。

零はそんな豊臣を見て驚愕の顔を浮かばせていた。

（まさか、リンが妖刀でアイツが妖刀師だったなんて……！）

零はリンから攻撃を受けて、脇腹を押さえている義妹いもうとに近付いて豊臣との距離を取っていた。

「大丈夫か、火波ほなみ？」

零は火波に聞くと火波は軽く頷く。

「お兄ちゃん、私が時間を稼ぎます、だからその間に水波ちゃんと芦田先輩たちを……」

「駄目だ」

火波は今を脱出する一番の最善策を零に提案するが、すぐに取り消された。

「なッ、だってお兄ちゃん、今一番に助かる方法はそれしか……」

火波が零に再度考えを改めるように言うが零は一向にその考えを否定する。

そんな二人のやり取りを眺めていた豊臣は『風鈴音』を肩に落とし、見ていた。

『……豊臣さん』

「まあそんなに焦んなよ、コイツらがどうやってこの窮地を抜け出すか、どう抗うか、見てみようぜ」

豊臣はそう言って零たちを見ていた、リンは少し不服のようだったが主である豊臣がそう言うので従う。

「ハアハア……お兄ちゃん、相手もそうずっと待ってくれない、やっぱり私が……」

火波はそう言って、立ち上がろうとしたが零に手を取られてまた座ってしまった。

「お兄ちゃん？」

火波は零を見ると何やら企んでいる表情で豊臣と向き合った。

「オイ、アンタら！」

零が豊臣たちに向かってそう言うのと立ち上がって中指を立てた。

「いつまでも余裕ぶっ込いでんじゃねーぞゴラァ！ どうせそんな妖刀を持った所で俺を抹殺できるはず無えだろ！」

バーカ、バーカと零が豊臣たちに罵声を浴びさせているとリンの方がキレてしまった。

『殺します、殺します、殺します、殺します、殺します』

なんか怖い言葉を連発しはじめました。

「ハハハ、この時に挑発とはどういう事だ？ 注意を周りの人間から離させたかったのか？ だったら安心しな、お前さえ抹殺できりゃそれだけさ」

「んな言葉を俺は信じると思ってんのか？」

豊臣の言葉に零は一瞬迷ったが、相手が嘘を言って安心させた所で斬ってくるかもしれないので、零は反抗の言葉を出す。

「まあ信じねえよな、俺に取っちゃあどっちでも良いんだ、さっさとお前を斬れば片づく仕事だからな」

そう豊臣が言うのと妖刀『風鈴音』カゼノスズノネを零に構えた。

「だから、もう終わらせる事にする」

ヒュンッ！

零の耳に風が通った音がした瞬間、

——
チリーン

風と共に鈴の音も聞こえた、すると、

ズバッ！

「ぐわっ！？」

零の肩が少し斬られていた。

「本当だったら首にいつてたさ、一撃で殺せば痛みを感じないで逝く。もういっちょよくぜ」

豊臣がそう言ってまた『風鈴音』を構える。

『今度は首ですの』

「くっ！」

リンから発せられた死の宣告、零は必死に逃げようとしたが、

「風の速さから逃れられるか？」

ヒュンツ！

とまた“何か”が放たれる。

その何かが零の首目掛けて飛んでいくと、

ボオオオオオオ！

紅の炎が壁となって“何か”から零を守った。

「まだそんな力が残ってたか、赤髪の女の子」

炎の壁で零を守ったのは、異形者^{イレギラ}として目覚めたばかりの火波の炎だった。

「炎条^{えんじょう}との戦いでかなり消費したと思ったんだけどな」

確かにその通りで、火波はかなり疲れている表情で力を使用した。

「お、お兄……ちゃん、に……げて」

かなり微かな声で零に言った後、火波はバタツとその場に倒れてしまった。

「ふっ、兄を守るために必死に力を使ったのか、泣ける話じゃねーか」

豊臣はそう言って目線を火波から零に代わる。

「……あんな必死な女の子に守られて、お前はどうするんだ？」

豊臣は『風鈴音』を構えて、零に語り掛ける。

「ふッ、何も考え無しに妖刀師^{ブレイドマスター}になったなら、それはお前の失態だ」

緑色に輝く刀身を斜めに構え、中腰になり、右足を前にだし、左足を後ろに下げる。

「……もう、仲間やら家族やら傷つくところ見たくないだろ」

そして、豊臣の目には首を捉えていた。

「これで終わらせてやる」

そう告げた豊臣の周りには旋風のように風が螺旋状に吹き荒れ、廃棄された工場の鉄の機械やら、鉄柱、壁が切り刻まれていく。

ビュウウー！

と風が吹く音が工場内に吹きわたっていた。

「痛みを感じさせねえよ、それがせめてもの慈悲だ」

豊臣がそう言って『風鈴音』の切っ先を零の首に狙いを定めて、

「風の突きは、鉄をも貫く、さあ、吹き飛ば・・・」

バツツツ！！

豊臣は地を蹴った、爆発したようなそのスタートに零は一瞬たじろぐが、まっすぐな瞳で迫りくる豊臣の妖刀『風鈴音』の刀身を見つめる。

「風爪突貫！」

豊臣は『風鈴音』を地面になぞるように突き上げて爆走する、零の首目掛けて。

そして風の刃に包まれた『風鈴音』はビュウ！
と風音をたて、
突き上げた。

だが、

ガキンッ！

まるで刃と刃がぶつかったような金属音が鳴り響く。

「……俺とリンの“風の突撃”を止めるとはな

豊臣は静かに『風鈴音』を止めた相手に言う。

『あ、アナタは……』

リンも妖刀常態である『風鈴音』カゼノスズノネを止められた事に驚いていたが、止めた“相手”にも驚いていた。

「……私のご主人様に何をしていますか」

静かに、だが何処かに怒気が含んでいた声がその場を包んだ。

「聞いて、いるのです。あなた方は……私のご主人様に何をしていますか」

そして『風鈴音』を止めた相手は緑色の刀身を片手で掴んでいた。

黒く艶やかで背中まで伸びた長い髪を靡かせ、黒い洋服を着こなし、両手には指部分だけが切り取られているグローブを付けている少女。

その少女に、零は声を掛ける。

「遅かったな、キリ」

キリと呼ばれた少女は零と向き直り、ニコツと可愛い笑顔を向ける。

「遅くなってしまって、その、ご……ごめ——」

「謝罪は後だ」

零に謝罪をしようとしたキリに零の言葉で静止させられる。

「戦うぞ」

その言葉を聞いたキリは一瞬に目を鋭くさせ、掴んでいた刀身に殴り掛かる。

「させねえ！」

「くっ！」

だが、豊臣は刀身に風を転めくらせてキリから離させる。

ヒュンッ！ と風音を鳴らし、キリから一步下がる。

「……まさか、妖刀を呼んでいたとはな、『刀契約』の使い方を知っているのか？」

豊臣は『風鈴音』を零に向ける。

だが、

「ご主人様にそのような汚物を向けるな！ 目障りだ！」

キリの容赦無い罵声が豊臣に浴びさせた。

「う、うわぁ、お前の妖刀って最悪だな」

「俺も今ビックリしたわ!？ えっ、てか“おぶつ”って何？」

と以外というか、いきなりそんな難しい漢字単語を出された所で理解していない零に怒りをフル活動する豊臣の妖刀『風鈴音』ことリ
ン。

『おおおお、汚物だとオオオオ！ キ、キサマ！』

「いや、俺は言っていない、キリが言っている——」

何故が怒りの矛先が自分に向けられているのにビクビクしている零は必死に自分では無いと主張しようとした瞬間、

「汚物は汚物ですよ、緑色とか腐っているんじゃないですか？」

とキリは物凄く冷たく二人に言い放った。

「てか、キャラ変わり過ぎじゃねお前!？」

自分の妖刀の劇的な変貌に驚く零。

キリは零と向き合っていると、

「ええ、だってあの人はご主人様の大切な友達や妹を傷つけたんですよ! 許せません・・・殺しましょ」

キヤルルン♪ といった感じに可愛く腰を横に揺らしながらア

ブノーマルな発言をするキリ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

余りにも衝撃的な変貌と言動に脳が追いつかない零、すると妖刀化しているリンから声が掛かってくる。

『・・・・・・・・いつまで待たせるんですかアナタ達はあああああああああああああ！！！！！！』

もの凄い大声で零たちに言った。

豊臣も持っていた妖刀から大音量の声が放出したため耳がキーンとなっていた。

「くああ、そんな大声出すなよ」

『さあ早く、早く抹殺しましょう豊臣さん！』

妖刀化したリンこと『風鈴音』は主である豊臣を急かす。

「チッ、そうだな、報告によると妖刀を持つと黒い衣に身に纏うらしい。そして妖刀を貫かせない程の布鎧ふがゐと化す」

豊臣はそう言うとき『風鈴音』を天に向けるように翳す。

「なる前に叩け、だ」

豊臣がそう言った瞬間に消えて居なくなっていた。

「・・・・・・・・！？」

零は急に消えた豊臣に不安が過る。
だが、その不安は一気に降りかかってきた。

「風の重さを体験しな、風砕点^{ふさいてん}！」

そう告げた途端に零の頭上から大量の風圧が掛かった。

「がッ!？」

ガッンッ! と零は地面に頭を強打し血が滲み出る。

「くう、ご主人様！」

キリも風圧に押し倒される。
しかし、押し倒した後に微かに酸素が無くなっていくのをキリは感じ取る。

(くっ、このまま窒息死させるのか!)

零は激痛がする頭を押さえようとするのだが、手さえも風圧で押し付けられ、動かさないでいた。

豊臣は妖刀『風鈴音』を二人に向けながら近付いて来た。

「悪いが苦しむ形で殺すようになった、お前が妖刀を連れて来なければ痛みを感じないで死ねたものの」

フウ、と溜め息を吐く豊臣に零は笑みを浮かばせる。

「な、なに、買ったような気で、いやがるんだ、まだ、終わっちゃいね、えぜ？」

零は酸素が無くなっているその時でも強い体勢を取る。

『念のためです、風砕点の風圧で動かなくなっている所を利用して、首を跳ねましょう』

「そうだな」

豊臣もその方が確実に殺せると考え、リンの考えを了承する。

「スウ・・・スウ・・・、うお、い、マジ、かよ」

零は苦しくなりながらも必死に風砕点の風圧を逃れようとしている。

「これで俺の仕事は終わるな」

豊臣は緑色に染まっている刀身を掲げながら言う。
そして、死の刃が零の首に降り下ろされた。

だが、

カキンッ！

また、金属音が響く、だが今度は確実の“刀同士”の音だった。

「終わらせねえよ」

豊臣は見た。

今、目の前にいる黒髪が異様に目立つ男子高生が、黒き衣に身に纏っていくのを。

「お前はこれから残業だ」

そう告げたのは、漆黒の刀を豊臣の妖刀と交差させている一人の死おとこ神だった。

「勘弁してくれよ」

第17話「風の妖刀師」(後書き)

次回予告―黒神零編―

零

「何か今回から『キャラ一人ずつ次回予告をやった方が面白くね?』的な考えを急に開花した作者、これからコレでいくみたいです……、これも全部作者の気分でこうなりました。

作者代わって謝ります、すみません!!

てか俺いつも作者の代わりに謝ってね!?

えゝさて、次回予告の最初の当番に来たオレ、黒神零がやらせてもらいます。

恥ずかしいけど。

零の窮地に駆けつけた影、その正体は零の妖刀であるキリだった。

キリが来たことにより、やっと対等に戦えるようになった妖刀師・ブレイドマスター
零は敵の妖刀師・豊臣との戦いに突入！

傷付けられた仲間と妹、怒りを露にした黒き衣に纏いし者。あらわ

絶対に生き抜いてみせる！

次回

死神の奇想曲カプリス

第18話

「戦いの序曲」はじまり

ほら、聴こえる。

死神が唄う

アペルテューラ
序曲を

第18話「戦いの序曲（はじまり）」

ガキンッ！

ジャキンッ！

「ハッ！」

「くっ！」

廃棄された工場跡地、そこには誘拐された義妹と一年生を助けにきた、黒須学園生徒会副会長である黒神零くろがみれいが戦っていた。

戦っている相手は一年生たちを誘拐した犯人である、銀髪で結構なイケメンの豊臣とよおみと呼ばれる青年。

そして、今押されているのは戦い馴れている豊臣だった。

「こんなんでギブか？　まだだぜ！」

豊臣は緑色に輝く刀身を零の妖刀『黒斬』クロギリを打ち払う、ガキンッと刀同士が打ち合う特有の金属音を鳴らして零を押す。

「ざけんなっ！」

零も押されているだけでは気に食わないと黒刀を豊臣の顔に向けて斬りかかるが、

ガキンッ！

豊臣は可憐な刀捌きで往^いなす。そして、瞬時に緑色の刀身が零向けて振り下ろされる。

「くそッ！」

零は妖刀・黒斬の能力で布鎧^{ふがゐ}と化した「黒刃衣^{くろはごろも}」の腕で豊臣の攻撃を防ぐ。

零は豊臣から一旦下がり息を整える。

「ハア、ハア」

「オイオイ、死神さんがそんな息が上がって良いのかよ。つまんねえな」

豊臣は緑色の刀身を零に向ける。

「……妖刀師^{ブレドマスター}は言つとくがお前が産まれる前から存在していた。

そして俺はお前より早めに妖刀師になって、経験^{カゼノスズノネ}を積んだ。お前との大差はやっぱり経験^{カゼノスズノネ}かな。そして俺の妖刀『風鈴音』も最高に良かった妖刀だった訳だ」

『……………』

豊臣は己の妖刀『風鈴音』を零に見せるかのように上に上げる。

「風を発生させる刀、それが『風鈴音』の能力」

豊臣は妖刀を観ながら喋る、まるで妖刀と話しているかのように。そして零には目を向けていない、まるで余裕を思わせるような感じで話す。

「そう、そして、風鈴音はこんな風も………使える！」
カゼノスズノネ

豊臣は一気に零に向けて風鈴音を振るう、すると、まるで見えない斬撃が飛んで来た。

「がはッ！」

零は構えずにいた為に斬撃それを受ける。
だが、

「ちッ、本当に便利だな。その衣は」
ころも

胸に斬撃を食らった零は胸を押さえて立ち上がるが、全然斬られていなかった、だが零の顔には苦痛の顔が見える。

「な〜る、外傷はねえが、斬られて痛覚はあるのか？ ん、いや」

豊臣は胸を押さえている零をよく見ていると、

「んだよ、ちゃんと斬られてんじゃねーか。黒い衣だったから血が良く見えなかったぜ」

零は小さな舌打ちをする、気付かれた事に対しての舌打ちか、それとも隠し切れない程に弱く見えた自分に対して舌打ちをしたのか。零にしか分からない。

「ああ、クソ、お前ほんとにウゼーな」

「自覚はしてるつもりだけだな、それで炎条にどれだけ罵られたか・
・・・・、うゝゝ、俺は本当にウザいのか。どうなんだ、リン」

リンとは豊臣の妖刀である『風鈴音』のことだ。

おそらく風“鈴”音の部分を抜き取って呼んでいるのだろう。

豊臣は気軽にリンに聞くと、

『ウザいですね、真剣にやる前は本当にウザかったです』

「・・・・・そこまでハッキリと言われるとすがすがしいなあ！

アハハハ」

「キリ、何か他に能力とかねえのか」

零は呑気に妖刀と話している豊臣を横に自分の妖刀である『黒斬』に話しかける。

『・・・・・出来るのは出来ませんが、この能力を開花させるのもご主人様によります』

「俺が・・・・」

『ハイ、ご主人様も何気なく気付いておられるのではありませんか？ 私を握っているのです、頭に直接流れていくハズです』

「頭に……」

確かに、と零は思った。

戦っている最中だが頭に何かしら感じるものがあつた、零はこれは何処かぶつけてこうなつたんだろうと考えていたのだが、ずっと頭に何かが引っかかる感じがする。

そして今もそうだった。

掻き立てる豊臣からの、妖刀から発せられる妖氣の重圧力、『妖圧』ようあつに必死に受けながらも零は妖刀を豊臣に向ける。

何かが分かつたような気がした。

「やってみるか……」

※

場所が変わり、帝黒町の夜小貫通りよしぬき。

夜小貫通りとは帝黒町の数ある道通りの一つである。

そこに三人の女子生徒と、その三人を追う二人の男子生徒が走っていた。

「ハア、ハア。は、早く、た、助けに……行かないと！」

そして一番先頭で一生懸命に走っている綺麗なピンク色に背中まで伸びている長い髪を揺らす。私立黒須学園第一学年で最近になって分かった妖刀師である、紺藤勇美こんどういさみが走っていたのだ。

そして勿論、その後に付いて行っているのが、紺藤を慕う、土方歳ひじかたと絵しえと沖多総沙おきたそうしやだった。

カシヤカシヤと何故か刀を帯刀している土方と沖多、そしてその先頭を走っている三人娘を追っているのは同じ一学年で、やむ無く生徒会に入会した斑備白宇まだらびしろと鋪崎銃耶しきざきつやだった。

「ハア、ハア。まさか斑備会長から直接、電話をよこすなんて」

「黒神副会長……もとい黒神副長たちが『誘拐犯に襲われているから助けに行っちゃってよ♪』という電話が紺藤さんにきたん

ですか？」

「ハア、ハア。そうよ、って何でそんな涼しそうな顔で走っているのかしら歳ちゃん!？」

「鍛えてますから、シュツ」

「いや、そんな日曜の朝にやってた仮面ライダーの物真似されとも、ハア、ハア」

もうダメエ、と紺藤はゆっくりとたち止まり、肩を揺らしながら息を整える。

「でもでも、何でそんな危険な場所に紺藤さんや私たちが行かないとイケないんですかあ？」

冲多は可愛いらしく小首を傾げながら言う。
後ろから追って来た白宇たちも追いつく。

「ゼーハーゼーハー、そうだ! 何で、ハアハア……俺が行かないといけない! ハアハア……危ねえだろ……うが……」

銃耶は地べたに手を付けてもう駄目だと言いそうに、地面に寝転がる。

道路なので太陽の日差し of 暑さに負けてまた立ち上がる銃耶。

白宇は妹が誘拐されたことで頭には救い行くことしか入っていなかった。

「もう! 何言っているの! 黒神先輩や他の先輩方に迷惑を

掛けてしまったというのに、こういう時にこそ、その借りを返す時なのよ！」

紺藤は土方と冲多にそう言うと、ムンツと胸を張ってまた伝える。銃耶は紺藤の結構な大きさの豊満な胸を凝視しているが後で冲多に殺されるだろうが別の話。

「士道の徳目の一つである『義』は善悪を分別判断し善に従い、悪を退ける！　よ、忘れたの？」

紺藤は信頼する二人の親友に聞くと、土方はブンブンと何回も頷いて「その通りです！」と紺藤の考えに賛同する。

冲多も力強い瞳で言った紺藤に軽い笑みを浮かばせて「そうですね♪」と快く賛同。

そして親友である妹が誘拐され、少なくとも兄である白宇の次に心配する銃耶も黙って頷く。

白宇は間髪入れないですぐに頷いていた。

「じゃ、さっそくこれ使っちゃおっか」

紺藤は皆の顔を見て、スカートのポケットから何やら赤いカードを出した。

炎のように赤く、爪で裂かれたような爪跡のマーク。

「……？……紺藤さあん、それなんですか？」

「ふうん、私にもよく分かんないんだけど、急ぐならこれ使ってって斑備会長が灯璃さん^{あかり}経由で渡されたの……」

紺藤は赤いカードを沖多に渡して見せた。

沖多はカードを持ってよく見てみると大きな字で何か書いてあった。

「えーと何々、『お急ぎの場合はこの七汽猫車タクシーナナキビようしゃにお任せ、無愛想だけどイケメンと乗れます☆』だって」

沖多はピラピラ〜とカードを揺らしながら皆に言うのと、紺藤は俊敏にカードを沖多から奪い、凝視する。

「こ、これは使うしか無いわよね、うん。使うわよ!」

紺藤は真剣な眼差しで赤いカードに書いてある電話番号を携帯電話で既に掛けていた。

「こ、紺藤さん、まさかイケメン目当てなんじゃ・・・」

紺藤はズバツと携帯電話を耳に当てながら土方に振り向く。

「ち、違うわよ、も〜歳ちゃんったら酷いわね。先輩たちが危ないっていうのにイケメンに食いつくなんて酷いこと私はしな——」

プルル―

プルル―

ガチャ

『はいはい、こちら《七汽猫車タクシー》です』

「あの、無愛想なイケメンと乗れるタクシーってこれであってるんですよね！」

「「「えっ」「」」」

紺藤以外の者は全員、紺藤を見た。

それに気付いた紺藤は慌てて訂正してすぐに来てもらうように言う。

「場所は帝黒町夜小貫通りです、今からこれですか？」

『あゝ、ハイハイ。夜小貫ね。あそこだったらチヨ婆さんを送りに行った奴が居たような・・・、ちょっと待って下さいねえ』

電話受付の人はどうやら少女らしく、声からしてかなり若い。

その少女は電話越しだが大声を上げて確かめる。

『決人ケット、夜小貫通りに確かチヨ婆送りにタクシー行ったよねー』

『如月はくん、僕の事はケット社長ゆと言うてるやないの、まあええわ。うん、行ってるで』

『ほいほいい、あ、お待たせしました、こちらからタクシーを向かわせるので動かないで下さいねえ』

ガチャと言いたい事だけ言った受付の少女は電話を一方的に切った。

「・・・何かここに来るみたゝい♪」

どことなくニコニコと嬉しそうにしながら紺藤は皆に言う。

「「「「・・・」」」」

そして皆は静かに、そしてゆっくりと紺藤を見ていた。

あれから数分後にそれが来た。

漆黒という色が全体に染めあげている大型のバイク。それに股がつて来た金髪の青年と一緒に。

「・・・こちら七汽猫車タクシー」

そして金髪の青年はそう言って終わった。

「終わるかよ！ まさかアンタが七汽猫車タクシーの運転手・・・
・・・？」

銃耶はそんな金髪の青年に言い掛けるが、無表情のままで頷く。

「ていうか・・・一つツツコミを入れたいのだが、良いか」

白宇は黒いバイクに乗っている金髪の青年に問いかける。

「そ、その後ろのは何だ？」

白宇は金髪の青年の後ろにある“物”に指を指した。

そこにあったのは『駕籠^{かじ}』だった。

平安時代や江戸時代にあった馬や牛に引かせ、それに人などが乗る場所を駕籠と呼ぶ。

要するにかなり和風というより、昔のタクシー版といった感じだ。

「うわーお、まさかそれに乗れるんですかぁ！」

沖多は嬉しそうに駕籠に近づいてペタペタと触る。

人が数人乗れるくらいの駕籠だった。

その駕籠は朱色に染まり、真っ赤で大きな車輪が付いていた。

「・・・そうだ、早く乗れ。行き先を言えば連れて行く」

金髪の青年はそう言ってヘルメットに付いているゴーグルを付けた。

「さあ、乗るわよ皆！」

めっちゃめっちゃ乗る気満々の近藤は駕籠の網を開けて入ろうとしていた。

「・・・タクシーと言えばタクシーと言える、が」

「歳絵ちゃん、俺も思ったよ」

「名で呼ぶな、ポニ男」

「ポニ男って何!? 俺がポニーテールしてるからか!？」

近藤と沖多は既に駕籠の中に入り、どんな感じなのか満喫していた。白宇も入ろうと足を上げて入ろうとしている。

「ちょっと待て白宇! 何かが、何かがおかしいとは思わないのか!」

「・・・何がだ」

白宇は片足を駕籠の中に入れたまま銃耶と向き合った。真剣な顔で。

「それに乗るはいささか恥ずかしいと言うか、なんかもう人間的に言うか・・・」

「何を言う!」

白宇はクワッ! と目を見開きながら銃耶に言った。

「早く行かないと白亜が危ないだろうが!」

まったく正論を言われて銃耶も残念そうな顔で白宇と駕籠の中へと入って行く。

土方も紺藤が乗るならと言って、駕籠の中に入った。

中は以外と広くなっており、座る場所もきちんとなっていた、駕籠の後部から入って行った紺藤一行。

「それでは行って下さい、運転手さん！」

紺藤は黒いバイクに乗っている金髪の青年に出発する合図の言葉を掛ける。

「場所は何？」

そして金髪の青年は真つ当な質問を紺藤にしてきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

紺藤は黙る。

そういば何処に誘拐されたんだろうか、紺藤は首を傾げて考え込んでいると土方が携帯電話を紺藤に渡してきた。

「斑備会長・・・・・・・・もとい斑備局長から電話です」

紺藤は土方から携帯電話を取り、それを耳に当てる。

『いんやごめんね、ごめんね、行き先言ってなかったね』

「丁度困ってた所でした、アハハハ・・・・・・」

紺藤は自分がどれだけ焦っていたのかそこで分かった、行き先も知らないで飛び出すなんて・・・・・・・・。

『えーとね、行き先は、帝黒町の町外れにある廃棄された工場だね、しかもちよつとレイくん危ないかな』

なんとも明るい声で渡ってくる斑備に紺藤は軽く怒りを覚える、後輩が危ない目に合っているのにどうしてこんな明るい声で言っているのか。

『とにかく頼むよ、早くしないと……《ぎんしゅ 槇紅の斬手》が、来る』
斑備はそれだけ言うと電話を切った。

「……うん? しんくのざんしゅ?」

紺藤は斑備の言った単語に疑問に思いながらも運転手である金髪の青年に行き先を伝え、さっそく向かった。

※

携帯電話を折りたたみ、生徒会室にある執務机に置いた。

「さすがエイちゃんの《月詠》つぐよみ、便利だね♪」

斑備は横に立っている紫色長髪の少女に言う。

私立黒須学園生徒会副会長を務めている大月詠はただ無言で居た。おおつきえい

斑備はニコニコとこれから起こる戦いに喜びの表情を表していた。

「とても楽しい事が、起こるよ♪・・・」

※

風が吹き荒れている廃棄された工場に、銀髪の青年と対峙している
“黒い何か”が居た。

その“黒い何か”はかなり異形な者となって君臨している。

「おま、何だよ……そりゃ……」

銀髪の青年、豊臣はその“黒い何か”を、見上げながら呟いた。

その“黒い何か”は黒い衣の下口から無数の黒い刃がコンクリートでできた地面に突き刺し、上へ上へと上がっている。

「……これが黒斬の能力の一つか」

“黒い何か”から声が発してきた、と言っても突き刺している黒い刃を足場にして上から黒いフードを被った零が言ったのだが。

「……チィ！　また問題が起きちまったぜ、予想外の能力だ
が速攻叩けば問題無えだろ！」
そっこ チカラ

豊臣は己の妖刀である『風鈴音』をぎっしりと握り斬りかかる。

「風斬りい！」
かざぎ

風の刃を纏った『風鈴音』は零の黒衣から伸びている黒い刃に斬りかかる。

風を何重もの厚く圧縮して、高密度の斬撃を生んだのその一撃は、

ガキンッ！

と鈍い音と一緒に弾かれた。

「なに、鉄をも切り裂く技だぞ!？」

豊臣は黒い刃を睨み付けながら言った。

「オラオラああ! 今度はこっちが先攻だ!」

零は蹴りのように足を払うと、地面に突き刺さっていた黒い刃がギシギシと音を立て攻めこんでいく。

「舐めるな!」

豊臣も『風鈴音』を一振りすると、突風が吹き荒れる。

「舐めちゃいないさ、これが俺の能力だ」
チカラ

零は片手に握っていた『黒斬』を豊臣目掛けて振り下げる。

「くッ……!」

豊臣は風鈴音で黒斬を止めた。

「ハハハ、今の一手で終わりか? なら俺の勝ちだ!」

すると零と豊臣の円形に囲むように風が一気に上に上がる。

「『風砕点』ふうさいてん、風圧でお前を圧死させる」

お前も一緒だぞ、と零は言おうとしたがすぐに口を閉じた。
風鈴音を持っている豊臣に風圧が掛からないと考えたからだ。

「終わりだ！ 黒神零！」

徐々に頭上から掛かる風の圧力に零は少し焦りを持ったが、その顔には余裕の笑みが浮かんでいた。

「終わりじゃねえよ」

「なに？」

豊臣は零の言葉に些か苛立ちを持って聞く。

「気でも動転したか、もう王手なんだよ、死神」

ガチガチと刀と刀が掠れる音に豊臣は零に歓喜の表情を浮かばせる。

「二手だ」

「はぁ・・・――」

豊臣が言い終える前に豊臣は後方に一気に下がった。

ぴしゃっ！ と地面には鮮血が飛んでいた。

「はぁはぁ・・・刀が、二振りだと・・・！！」

豊臣は頬に一直線の斬り傷があった。

切口から血がだらだらと流れでていく。

「まあな、クロタチノツルギ『黒刀剣』ツルギっていうんだよ、これ」

零は黒斬を握っていないもう片方の手にあるものを見せる。

柄や鍔も無く、ただ黒い刃だけがある黒刀。

「な、んだよそれは……」

「言ったら、クロタチノツルギ黒刀剣だって」

零は二つの刀を交差させて豊臣に切っ先を向ける。

「……そんな刀一本増えた所でお前は勝てねえってうのは変わりはしね——」

豊臣は手を払って零に言いかけようとした瞬間、地面から黒い手に足首を掴まれた。

「なっ！」

「あっ……確かそこにさっきお前が切り崩した鉄柱とかに埋もれてる奴が居たぜ」

しまった！ 豊臣がそう思った瞬間には重い一撃を食らっていた。

「がっはあ！」

ズバァンッ！ と壁のトコまでふつとんだ豊臣は足を崩して膝をつく。

「ガハハハ！ 気持悪い！」

体を黒くさせていた高校生、鉛銅黒護えんどうこくごは頭を抱えていた。

「・・・凄え、腕が鉄になってるよ」

零は黒護の腕を見て驚いていた、片手から出ていた黒刀剣をしまう。衣も一部みたいで黒刀は黒衣に戻っていった、無論、地面に無数に突き刺していた黒い刃も戻っていく。

そして元の黒いフードに身に包む零が黒斬の切っ先を豊臣に向ける。

「形勢逆転だな」

※

「帝黒町の外れにある廃棄された工場はここしかない」

「わー！　ありがとうございます♪」

豊臣と零の勝負が終わった時、紺藤たちはやっと廃棄された工場の前と着いていた。

「学生が何でこんな所に行きたかっていたのか良く分からないが、理由は聞かん。それが仕事だ」

金髪の青年は無表情のままそう言う。

「あゝっ、そういえばタクシー代が・・・」

五人はいきなり斑備に言われて来たので見事全員財布を持ってきていなかったのだ。

「・・・お前たちの制服を見て思ったのだが、もしかすると黒須学園の生徒か」

金髪の青年は紺藤たちが着ている黒須学園指定の制服を見て言う。

「はい、そうですけど・・・はっ！　まさか学生はタクシーに乗っちゃ駄目という決まりなんですかあゝ」

紺藤はウルウルと瞳を潤ませながら青年に言う、

「……いや、あそこには姉が居るからな、ただ無料で良い」

なんとも気前の良い事を、と紺藤と銃耶は青年に感謝する。

「あ、あのう、この子はどうしたら良いのでしょうか？」

そして土方はゆっくり駕籠の中から出て来ると、そこには腕の中に収まる位小さな猫が居た。

「思ったんだけどよ、それホントに猫かよ！　なんかライオンと
いうかトラというか、取り敢えず猫科の動物なのは分かるんだけど
よ」

銃耶は土方の腕の中で丸まっている猫らしき動物を指差して言う。
この猫は本当に日本などにいる猫じゃないのは一目で分かる。猫の
全身の毛が赤色や朱色が混ざった感じになっており、おまけに尻尾
が細長い。そして何故か片目に傷を負っている。

「ああ、ソイツは七汽ナナキって言うんだ」

「ふえ？　　じゃこの子猫ちゃんってこの七汽猫車タクシーの……
・・」

「ああ、元となった猫だ」

「きやああああ♪　可愛いですよねえ！」

紺藤と沖多は土方の中にいる七汽を撫で愛でる。

「七汽は駕籠の中にでも入れといてくれ」

「わ、わかりました・・・」

土方は困っていた割には少し残念そうな顔で駕籠の中に七汽を優しく入れて上げた。

「それでは、な」

金髪の青年は黒い大型のバイクを上手く旋回させて帰ろうとするが、紺藤に呼び止められる。

「あの！ 良ければお名前を、今度この事でお礼に」

紺藤は頭を下げて青年に言うと、訝しげな顔になっている青年が居た。

「・・・子供がそこまで考えるな、だが、確かに名前を教えないのは教育に悪いか・・・」

青年は懷から何か出して紺藤に預けた。

「ではな」

青年はそれだけ言うと、バイクのアクセルを踏み、ブンブン！と高らかにバイクのエンジン音を鳴らしながら去って行った。

「・・・確かに無愛想だったな、あの人」

「銃耶、お前も見習うのだな」

「え、なに白宇、俺が無愛想になれってか？」

白宇と銃耶は金髪の青年について言い合っていると、紺藤と土方、沖田は青年から渡された物を見ていた。

「えーと、『七汽猫車タクシー第一車運転士、出雲纏』いずもクラウドさん……だって」

「へえー、纏って漢字でクラウドって読めるんですねえ」

「ツツコミ所がソコか沖多！ あっ、いや確かにそれもツツコミを入れんといけないが……肝心な所は苗字だ！」

「苗字ですかあ？ あっ、確かに出雲神社ってありますよねえ、何処の県にあるんでしたっけ、アレ？ 下根県？」

「“島”根県だ！ お前なんて最悪な間違えをするんだ！」

「ああー♪ 私も島根県で有名な『出雲そば』食べてみたいのよー♪」

「紺藤さん、今はそんな話をしているんじゃない……」

「ああ良いですね紺藤さん♪ 僕は『ぼてぼて茶』っていうお茶が飲みたいですうー」

「ああ、根本的に話が捻曲がっていく……」

二人はどんどんと島根県にある料理やらの話になっていった。
土方は紺藤から青年から貰った物を見る。赤色のカードだった。

（出雲って、まさか黒須学園に居る姉って……！！）

土方は一人、驚いていた。

大きな駕籠を黒いバイクで引いている金髪の青年、
出雲いずも縷クラウドは本社に
連絡をする。

プルル―

プルル―

ガチャ

『はいはい、もしもし？』

「遊吹ユウフイか」

『ちよつとさあ、纏！ 遊吹じゃ呼び辛いから簡単にユフィで良
いって言ってんじゃーん』

「・・・無事に送り届けたぞ」

『むいー、シカトかよ。ハイハイ、分かったよ。それじゃナナキ
の餌が無くなりそうだから帰りに買って来てねー』

バイバーイ、と言って遊吹ことユフィは電話を切る。

「・・・」

青年は静かにダイユーエイトに向かったのであった。

※

「ハアハア、この黒刀剣クロタチノツルギを使うと、以外に疲れんだな」

零は豊臣と人型に戻ったリンを工場にあった鎖で縛っていた。

「・・・ここ何処だ」

「よー、芦田。生きてつか？」

ヒョコツといきなり目を覚ました芦田は疲れきっている零と、まだ気絶している水波と火波、そして一年生を見渡した。

「……尾井群と電華は？」

「電華が一番重傷だったからな、尾井群と病院に行った。まあ重傷と言っても軽い捻挫みたいな感じだ、あともう一人居ただけど、どっか走って行きやがったよ」

「そうか」

芦田は同級生が生きているのに安心した。
そして誘拐犯である豊臣を見る。

「強盗マスクの内側はイケメンってか、チクショー！ 何処か不満があんのかコノヤロー！」

芦田は豊臣に掴み掛かろうとしたがリンの一睨みに一瞬でクールダウンしていた。

「後は警察に任せて帰る……といきたいが、一年生全員が起きるまで待ってねーといけないんだけどな」

零は豊臣が言った、炎条の火の煙を吸った水波を心配していた。

「……悪い事は言わねえ、早く逃げな」

「……あん？」

鉄柱に縛られている豊臣は零にそう言った。

「はんっ！ この後に及んでそれかよ、完全に逃げる気満々じゃねーか！」

芦田は豊臣たちに言うところリンは吠えるように叫ぶ。

「別に居ても良いんですがね！ こっちとしては大助かりですよ！」
リンの言葉に少しだけ不安になる零、別にリンの言った言葉だけで不安になったのではない。

莫大な妖圧が近付いているのに気付いたのだ。

「てめえ！ 誰か呼んだのか！？」

零は豊臣の胸ぐらを掴んでそう言う。

「呼んじゃ居ないさ、ただ、そうだな、ただ“妖気を詠む事が出来る奴”が居るだけさ」

廃棄工場に何か近付いていたのは確かだった。

（クソッ！ 今ここで襲われたら何も抵抗出来ねーぞ！）

それに気絶している義妹や一年生を置いては行けなかった。

「なんだよ……何かここに近付いて来んのかよ」

芦田はいきなり豊臣の胸ぐらを掴んで叫ぶ零を見て不安になった。

「クソッ、待ってろ。キリ！」

「ハイ！ 感じています」

人型に戻っていたキリは壁の下で意識朦朧としていた炎条騎烈えんじょうきれつを連れて戻って来た。

「すぐに妖刀に」

「はい……！！……危ないご主人様！」

キリに手を指し伸ばしていた零を勢い良くキリは飛ばす。

そして、

ジャキン――

ボオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

何かに斬られた音がすると、零の居た場所の横壁から真紅の炎が焼き抜かれていた。

「なッ！？」

ちょうど零と芦田たちから離れていた為に芦田たちは危害を受けていなかった。だが、その変わりにそこに鉄柱に縛られていた豊臣たちは炎に巻き込まれていた。

「・・・ここね」

真紅の炎が止まったと思えば、炎が開けた穴から中学生くらいの身長の子が入って来た。

（紅い・・・髪）

入ってきた女の子は地に着くのではないかと言う程に長い髪に、羽織のように広がっている黒いマントに、体のラインが良く分かる黒い服を着ていた。そして一番に目立つ炎のような真紅色が綺麗な少女が堂々と立っていた。

「風世^{かぜ}、鎖は溶かしといた。早く行きなさい」

紅髪の少女はそう言うと、炎に巻き込まれたであろう豊臣とリンは

炎で開けた穴から脱出していた。

「さて、騎烈を返してもらおうわ」

紅髪の少女はバサツと黒マントを広げさせると、

「ご主人様に近寄るな！」

キリはボクシングポーズをして紅髪の少女と対峙する。

少女はキリを少し見た後に何もなかったかのよいに炎条の近くまで行く。

（コイツ・・・・・・・・強い、さっきの奴らなんかよりずっと）

零は怒りを露にして今すぐ殴りに行きそうになっているキリを肩に手を置いて止める。

「騎烈、起きて、騎烈」

紅髪の少女はペチペチと炎条の頬を叩いて起こそうとするが、起きない。

「騎烈・・・・・・・・」

むにいと頬を伸ばす。

だが、起きない。

「・・・・・・・・起きろ」

紅髪の少女は炎条の臉を無理矢理開ける、白目向いている。

「まったく」

紅髪の少女は、よいしょ、と炎条の肩を担ぎ、ズルズルと足を引きずりながら歩いて行く。

「……くっ……」

「………」

キリは紅髪の少女から溢れ出る圧倒的な威圧感に押されながらも睨みつける。

「ああ、そうえば」

紅髪の少女は零たちと向き合う。

「貴方の妖刀、面白いわね。今度会う時は、闘いましゅ……」

紅髪の少女は舌を嚙んだらしく、口を押さえながら顔を赤くしていた。

「……こぬおおお！」

「おおああ！ 勝手に舌嚙んだのに逆ギレされた！」

紅の少女は背中に隠し持っていた刀を少し抜く、すると、

ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

ただ少し刃を出しただけで、鞘から溢れんばかりに炎が出てきた。

零もキリを妖刀にして戦闘体勢に入ろうとしたが、ガクツと体をが崩れた。

「ご主人様！？」

キリは体を崩した零を支える為に零と抱きつくような体勢になる。

「ふふふ、風世との戦闘で体にガタがついているようね」

紅髪の少女はゆっくりと零たちに近寄ろうとした時。

「黒神先輩から離れろオオオオオオオ」

「なに！」

シャァン！
と空を斬る音が紅の少女の居たであろう場所を、斬る。

ズサー！
と紅髪の少女は炎条を担ぎながら避けていた。

「大丈夫ですか、黒神先輩」

そして零の傍には黒い髪をポニーテールにしている女の子と、黄色い首の所まで伸びている髪をした女の子が刀を出してまるで零を守るかのような体勢になっていた。

「お、お前らは」

「微力ながら助けに来ました！」

「先輩には少しだけ迷惑掛けたからね、私も渋々助けに来てあげたよ」

零は周りを見てみると、一緒に行かなかった一年生男子の鋪崎銃耶や斑備白宇も居ることに気付く。

「白亜！ 白亜、大丈夫か！」

「んだよ、柱木までやられたのかよ……」

銃耶と白宇は気絶している同級生を安全な場所へと移動させていた。芦田は零の義妹である水波や火波を連れて行ってくれていた。

そして、一人の少女だけは戦闘体勢に入っているのに気付いた。

「……黒須学園の妖刀師か」

「……そうですよ」

とても綺麗なピンク色をしている少女、紺藤勇美。

彼女には似ても似つかない片手にある大きな刀が目立っていた。

その刀は刀と言って良いのか、刀の形では無かったのだ。

柄があるのは分かった、だがそれ以外で分かると言えば、血を吸い続け、紫色と何かが交じった色。そして何より、刃車はぐるまがあつた。

回転出来るようになっていゝらしく、刃車が少しだけ回転していた。

「教えてあげますよ、これが私の妖刀です」

紺藤は刃車の付いた妖刀を振りかざすと、一瞬で電気が発生した。

バチバチ！ と電撃音が鳴ると紅髪の少女の場所に電撃が流れた。

だが、

ボシュウ！ というまるで何かを燃やしたような音が鳴ると、紺藤から放った電撃が消えていた。

「なっ！？」

「止めなさい、今の貴女じゃ私に勝てないわ」

紅髪の少女はいつの間に抜いたのか、刀を鞘に収めていた。

（炎で電気を掻き消したのか！）

零は片膝を突きながらも紺藤と紅髪の少女のやり取りを観ていた。

「・・・・・・・・くっ」

紺藤も相手がどれ程の力量を持っているのか不明な為に下手な攻撃は出来なかった。

それを見た紅髪の少女は無言で零や紺藤たちを見渡すと、

「それじゃあね、哀れな小鳥と、自惚れの死神」

そう言った紅髪の少女は炎条と一緒に消えて行った。

「自惚れ・・・・・・・・か」

零はそれだけ言うと、キリに寄り掛かるように体が倒れていった。

「い、ご主人様あ!？」

「黒神先輩!」

「・・・・・・・・!・・・・・・・・先輩!」

三人の少女に支えられた零は静かに気を失って行った。

※

「・・・任務失敗だな」

「そうです、ね」

「リン、身体は平気か」

「・・・豊臣さんこそ」

二人は工場の周りにある森林へと逃げていた。
逃げているというより、離脱だ。
大した怪我、とまで言えないが、少なからず怪我をした豊臣はリンと歩いていた。

「大丈夫？、風世^{かぜ}」

「・・・お前か」

豊臣たちの前にバサッ！ と登場した紅髪の少女に言葉を掛けた。

「待って下さい！ 今回の任務は失敗に終わりましたが次は・・・」

リンは豊臣の前に立ち、豊臣を守るかのようにしていた。

「別に任務失敗したからってワザワザ重要な人材を消すほど『斬裂
リップバー・サ・チェーンス
く白き鎖』は裕福じゃないわ」

紅髪の少女は炎条を静かに降ろしながら言う。

「・・・だったら障害になるかもしれない黒神零を何で殺してこ
なかつたんだ『槇紅の斬手』！」

豊臣は紅髪の少女に叫びながらそう言った。

「・・・斬崎から言われたのよ」

「なっ！」

「急な作戦変更だったし、風世ほどの妖刀師ブレイドマスターを止めるなら私が直接
行った方が良いと判断したのよ」

「ど、どうして、急にそんな・・・」

リンはさっきまでやっていた事が意味が無いのに怒っているのか、
紅髪の少女を睨み付けていた。

「自惚れの死神がどう邪魔してくれるのか、楽しみなんだって」

「そんな理由！」

「豊臣風世、及びその者の妖刀である『風鈴音』は直ちに日常に戻れ、これは『斬裂く白き鎖』の下した命令よ」

反発しようとした豊臣を紅髪の少女はそれだけ言った。

そして豊臣も、納得のいかない顔をしていたが、リンと一緒に森林の中へと消えて行った。

第18話「戦いの序曲（はじまり）」（後書き）

次回予告―キリ編―

キリ

「今回は妖刀『黒斬』であるキリが次回予告をさせてもらいます
！」。

零は己の妖刀『黒斬』にまだ見ぬ能力チカラを開花させ、風の妖刀師を撃退する。

だが脅威は収まっていなかった。

《榎紅の斬手》という紅い髪の少女は圧倒的な力で零や黒須学園の者たちを黙らせる。

だが、零に止めを刺さずに消える《榎紅の斬手》。

それを見届けた零は力が抜いていき、気を失う。

零の傷ついた身体を治す為に学園に住まう天才医師に駆け込むが・
・？

次回

カプリス
死神の奇想曲

第19話

「死神の休息」

ほら、聴こえます。

死神が唄う

ララバイ
子守歌を

第19話「死神の休息」(前書き)

最近になってPVの見方が分かった作者・十握剣です。

第19話「死神の休息」

「どうしてよ、高校生コイコイセイのガキイがこんな傷作って何処に行ってやがったんだ、まったくよ」

今現在、零や他の皆は黒須学園の敷地内にある第一病棟の一室に眠らせてもらっていた。

何故、黒須学園なんか病棟があるかというと、そもそも黒須学園は『私立』であり黒須学園の理事長を務めている人はかなりのお金持ちらしく、学園には色んな施設が立てられているのだ。

室内温水プールが三つあるやら、スポーツをする専用の敷地があるやら、お茶会をしたいからと言って豪華な洋風と和風の屋敷を立ててあるなど、お金持ちを完全にアピールしている。

元々、女学園だけあって、怪我をするのは少なかったのだが、お嬢様だけあって傷を負ったら学園に何かと面倒なこと言い掛けてくるかも、と理事長は考え、万全な施設体勢となったのだ。

校舎にも保健室があるのだが、そこにも数多くの保健室が用意してあるのだ。

しかも一室一室に一室専用保健教師が配属されているのだ。

元女学園だけあってその全員は女性教師だ。

たが、女性だけの保健教師たちだったのだが、男子との共学になった為に男性教師も取り入れたらしい。
一名なのだが、

「愛手^{あいた}先生、また黒神くんが逃げだしましたあー」

「あア？ 早く捕まえろ」

「了解しましたー、でも病棟の中ではその口に加えているタバコを吸わないでくださいね、まったく」

今名前を呼ばれた白衣の中には私服を着て、胸元を開けは耳にピアスと両手の指全部に銀色の指輪を付け、顔右上の所に黒色の『愛』の一字を刺青に彫ってある長身の男性が黒須学園保健教師唯一男性教師である愛手指^{あいたさしのぶ}伸だ。

愛手はベッドでまだぐっすりと寝ている風瀬水波^{なぎせみなみ}と隣のベッドでも寝ている双子の妹である風瀬火波^{なぎせほなみ}をチラリと見てカルテを見る。

「黒神は刃物による傷、風瀬（青）は肺に少し負担が掛かってあり、風瀬（赤）は外傷の軽い火傷、たが、黒神以外はもう自己回復していた」

チツと舌打ちをして保健室の中にあつた椅子に座る。

「……妖刀育生計画か、チツ」

ガッツと机に堂々と足を上げてカルテを見つめている愛手、完全に

ヤンキーに見えています。

「愛手せんせー、捕まえてきましたよー」

「ぐ、ぐわあ！　　ちよ、力強いッスねレッサーちゃん♪」

「あら、ありがとう黒神くん♪　　でも淑女レディーに向かって“力強い”
は無いと思うわー♪」

「うぐあ！　　きゅ、急に力がつよ……ガクッ」

白衣を着た女性教員に首を締められ、意識を失った零をベッドに戻す。

「……ガキィ相手にプロレス技決めてんじゃねエぞ、母瀬井ぼせい」

「今のは荒れる生徒を止める体術法なのですよー、後アタシの事は
“テレサ”♪　　って言うてくだ——」

「“母瀬井”は風瀬姉妹らの身体の様子を見つから診察室に連れて
け、薬谷堂くすりやどうと癒佐ゆさにも言っとけ」

愛手はそう言っつて診察室の鍵を母瀬井に渡した。母瀬井は渋々な感
じで起き上がれるくらいに回復した風瀬姉妹を診察室へと連れて行
った。

「お前めもワザワザ逃げてんじゃねエぞ、面倒めんどうくせエんだからよオ」

ドサツと気を失っている零の前でそう言いながら椅子に座る愛手。

「・・・やっぱ完全に回復はしてるが、内側の傷が癒えてねエ、
本当に面倒メンドーだな」

愛手はそう言いながらもちゃんと零の常態を診ていた。

※

零が黒須学園第一病棟で寝ている同時刻、妖刀師・豊臣風世とよおみかせ及び妖
刀・風鈴音カゼノスズノネが戦った場所であろう廃棄工場付近の森に、炎々と赤き
炎が燃ゆっていた。

「ふざけんなああああ!!」

そこに赤き炎と化した手腕を木々に放つ少年が居た。

「落ち着きなさい、騎烈。まだ傷は癒えていない」

「うるせえ!!」

そしてその少年の近くで紅色の鞘に紅色の柄をした刀を肩に吊るし、

紅い髪をした少女が少年に静かに語りかけた。

「紅^{こう}祢^ね！

お前は何故オレを助けた！」

紅祢と呼ばれた紅^{こう}髪^{はつ}の少女は一つため息を吐いて答える。

「良いから炎化を止めなさい。熱くて汗が出てくるじゃない」

「ハッ！ よく言うぜ、冷や汗一つも出てねえくせによー！」

「ああもう、煩^{うる}いわねえ」

炎々と燃えている木々に紅祢は紅い柄を握り、構える。

そして、

スパァン！ と紅く煌めく一閃が裂いた。

燃えていた木々は火は消え、黒い炭と化していた。

「・・・うぜえ」

「騎烈はすぐそうやって頭に血が上る」

パチンと鞘に刀を収めた紅祢はその場に腰を下ろして言う。

「貴方は私のパートナーなのよ、『火の妖刀師』には『火を操りし

者』、つまり火の異形者である炎条騎烈イレギラが私の相方パートナーなのよ？」

「・・・・・・・・・・」

炎条は炎と化した手腕を普通に戻し、何か気まずそうな顔で居た。

「・・・・・・・・どうしたの？」

紅柙は首を傾げて炎条に聞く。

「・・・・・・・・俺以外の、火の異形者が現れた」

炎条は紅柙に背を向けて呟いた。それを見た紅柙はクスリと可愛いらしい笑みを浮かべさせた。

「あの娘でしょ、確か名門校の・・・・・・・・クロスがくえん？ 名前
は・・・・・・・・忘れたけど確か魔法型ウィザードタイプの火の異形者だったわね」

それに少し反応する炎条。

「でも私は騎烈の方が良いの、だって騎烈の方が絶対に強いと思うもの」

紅柙は真っ直ぐな瞳で炎条に言った。

「・・・・・・・・ふん」

炎条は鼻を鳴らして森の中へと消えて行った。紅柙はそれを見てまたクスリと笑い紅柙も炎条を追って歩いて行った。

「《慎紅の斬手》と《ほむらびと炎人》、火炎チームは崩れちゃいないね。突風チームも大丈夫そうだし」

「だが、まだまだ成長してもらわないと、そうだろいかだい筏井？」

筏井と呼ばれた小さな男の子は大きな帽子を被って木に寄り掛かっていた。

「はくせんによ白仙女さん、確かにまだ十分な戦力では無いですね」

白仙女と呼ばれた女性は白く艶つややか髪を靡かせ、そして純白の衣を浮かせていた。その姿、雰囲気は何故か仙女のような感じであり、そのせいでいつの間にか名が『白仙女』となっていたらしい。

「あの方もそう思ってたっしやる。だから、まだ戦って貰わないと、計画を邪魔する事は出来ない」

白仙女は衣をバサツと払うと宙に浮いていく。それを筏井は見向きもせずに答える。

「……分かってます。絶対にあの計画をブチ壊す、それが『リップバー・ザ・チェインズ斬裂く白き鎖』の全てです」

白仙女はそれを聞くと、まるで空間が布地のようになり、白仙女はそれを“掴み”そして“裂いて”その中へと“入り”そして消えた。

「本当に、仙女みたいな人だ」

筏井は何も無かったかのように消えて行った。

※

「愛手先生、 風瀬さん達の診察終わりましたあ」

「おお、ごくろー」

愛手は零を診た後に部屋を暗くさせて静かに部屋から出て行った。
そして今居る所は黒須学園第一病棟管理室だ、医療関係のプリント
や、薬品、器具、そしてその全具を記録したパソコンなどがあった。

「愛手さん、 コーヒーです」

「おお、さんきゅー」

そして愛手は自分の席であろう机の前にある椅子に座る。コーヒーを愛手にあげたのは校舎から来た癒佐ゆさという女性教師だ。

「葉谷堂はどーした」

「葉谷堂先生なら残りの仕事があることで校舎に戻りましたよ？」

「チッ、アイツに新しく届いた薬品の書類渡さねえといけねエのによ、まったく」

愛手は片手にコーヒーを持ちながら机の上に沢山乗せられている書類を見て舌打ちをした。

「愛手さん、言葉遣いが良く無いですよ。仮にも教師なのですから言葉遣いをちゃんとして貰わないと」

「……この書類の薬品には消毒薬と消毒液、包帯に、あと麻酔剤も無かったハズだが……おオイ！ 母瀬井、そっちのデスクにデータあるか？」

「あ、えーと、あっ、ありましたよー♪」

「聞いてますか！ 愛手さん？」

癒佐はコーヒーを飲みながら輸入物の確認をしている愛手に叱る、だが愛手はコーヒーを飲み干し、癒佐と向き合う。

「俺は教師なった憶えが無え」

「なっ！」

愛手の発言にまた何か言おうとする癒佐に、愛手は真剣な目で見た。

「だかな、たがよオ。俺は怪我をした奴なら片っ端から『愛の手を差し伸べる』ってーのが主義だ。“治す”なら俺は引かねェし逃げねェ。だから俺は教師になったつもりは無えが、校医、つまりこの学園の医師とだという自覚はある。だから別に言葉なんざ相手に伝わりゃそれだけで充分なんだよ」

つまりはこの愛手という男はこの黒須学園の教師になったつもりは無いが、黒須学園の校医になったのは自覚しているということらしい。

癒佐は愛手な目から伝わる何かを感じ、その場でため息を吐き。

「わかりました、ですが極力言葉遣いには気をつけてお願いしますよ？」

うおーい、と愛手は片手をヒラヒラさせてパソコンと再び睨み合う。

癒佐も空いている席に座り、使った薬品や器具、医療機械などの報告書を書き始める。

するとそこにプルプルーと連絡用の電話が鳴った。

「どこから繋がってる、母瀬井、教えろ」

「えーとですね、あつ、生徒会室からですねー」

(生徒会室……斑備の奴か)

愛手は連絡用の電話をパソコンの電話回線に繋げ、受話する。

「直接来たらどうだ」

『……いや、それはちょっと困るんですよね』

回線の向こうから少し困ったような声が返ってきた。

まだらびびやつこ
「斑備白虚か」

愛手は予想通りの相手で少し溜め息を吐いた。

『レイくんや他の皆は………大丈夫ですか』

向こうもかなり沈んでいるような声だ。

だが愛手は知っている、斑備コイツがどんな人間なのか。

「ああ、全然ダメだわ、アイツら動けない状態だから当分は学校休ませないといけねエな、全員」

愛手はわざとらしく、いや、零たちの現状に嘘をついた、そうしなければ。

『……そうですか、なら愛手先生、アナタの異形のうりよくで治してやって下さいよ♪ 医療機器や薬品なども使わないから良いでしょ♪』

そう、この斑備は愛手の異形のうりよくを知っていた。

『愛手先生的能力』『生命の樹術者』ライフオペレーター だったらすぐですよ』

斑備の発した言葉に黙る愛手。

「おい、斑備イ。てめエ」

『生命の樹術者、手に触れた植物や、大気中にある樹木の粉を掴めパウダーば急速的に成長させ、薬草や秘草などを自在に造れる能力。それをやれば一気に』

「斑備ッ！」

愛手はバゴンッ！ と机を思いきり叩く。その拍子に母瀬井と癒佐は驚く。

「てめエはそんなにアイツらを戦わせてエのか！ あア！？」

愛手は電話の相手である斑備に吼えるように叫ぶ。

「理事長の何の計画か知らねえがよ！ 子供共らが通うこの学舎まなびやで何で刀傷を負える子供が出てくんだ！ おかしいだろウがよ！」

『・・・・・・・・・・』

「斑備、てめエもその一人だ」

愛手はスウツハアツ、と吸って吐き、そして静かに言う。

「子供は子供らしく、学舎で勉強してりゃあ良いんだよ、そしてて

めエも――」

『分かりました！ 分かりましたから、その先は、言わないで下さい・・・・・・・・・・』

斑備はその後、回線を切った。

「・・・・・・・・くそガキが」

愛手はそう言って、管理室から出て行った。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ご主人さま」

零が静かな吐息をしながら寝ている傍にとっても心配そうに見ている黒髪長髪の女の子が立って居た。

「すみません、すみません、ご主人さま。・・・・・・・・私は貴方様の妖刀であるのに、怪我をさせてしまいました・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

零は寝ているが少女は言い続ける。

「私の、私のせいで……」

少女は零に近寄り、零の手を握り締める。

と、そこに、

「ここに居やがったか」

ガラガラーと扉を開いたのは愛手だった。

「あいて愛手さん」

「あいた愛手だ、あいた」

愛手はずかずかと部屋に入る。夜というのもあるが部屋には明かりをつけず、真っ暗の中に零の手を握っている少女が居た。

「黒神の傷はもう大したこと無エぞ」

愛手は部屋にある椅子に座る。

「ありがとうございます、お陰でご主人さまは大事にいたりませんでした」

少女は深く頭を下げて愛手にお礼を言った。

「お前え……名前は確かキリって言ったか？」

「ハイ！ ご主人さまから頂いた名前です！」

凄く嬉しそうな顔で愛手に言う。

「……そうか、そんでお前エは黒神の……妖刀なのか」

キリは話して良いのか躊躇ったが、主を治してもらったので頷いて見せた。

「まあ、聞かなくても、『ご主人さま』っていう時点で気づいてるがな」

愛手は机の上に置いてあったディスクを持つと再度立ち上がった。

「キリ、大事なご主人さまを休ませておけよ、逃げ出さないよーにな」

愛手はキリにそういうと、キリはブンブンと正直に頭を下げて頷いて見せた。

愛手は部屋から出て行く。

愛手は暗い廊下を歩いていると、

「差伸っ！　黒神の容態はどうだ！？」

夜中だと言うのに心配でやって来た零たちの担任、出雲由いずもゆかりが居た。

「チッ、愛手と呼べつつってんによオ、てめエはどうして……」

「黒神は無事なのか！」

出雲は返答を早くしてこない愛手の両肩に手を置いて言ってきた。
愛手は首をガクンガクンさせながら零は大丈夫だと伝える。
出雲は安心したように廊下にあった椅子に座る。

クラウド
「纏クラウドに送ってもらったのかア？」

「ああ、夜中なのに嫌な顔せずに乗せて貰ったよ、出来た弟だ」

出雲はそう言いながらも顔に手を当てて項垂れる。
そうとう心配したらしい。

「……………どんだけ心配したんだよ」

愛手もそう思ったらしく、壁に背を預けながらタバコを出す。

「吸うか？」

愛手が出雲にタバコを差し出す。

出雲は迷いなくタバコに手を伸ばそうとしたが、途中で手を止めた。

「……………ここは病棟だぞ、しかも差伸、お前が吸っちゃイカンだろ」

出雲は危うく共犯になりかけて止めた。愛手も舌打ちをしながらタバコを懐に戻した。

「なあ、差伸」

「愛手って呼べつつってんだろウが」

出雲が真剣な面持ちで愛手に聞く。

愛手も何が質問されるのか分かっているのか、真剣な顔にする。

「この学園には、何か秘密があるのか？」

「……………」

ブレイド・パーティ
妖刀育生計画を知っている教員は極僅かであり、関係者だけ聞かされているのだ。

出雲は知らされていない教員の一人だ。
生徒に危ない真似をさせない、という考え持つ者には尚教える訳にはいかなかった。

「さあな、俺にも分かんねえよ、ただ治すだけだからな」

愛手はそれだけ言って出雲の前まで来る。

そして手に持っていたディスクを出雲に渡す。

「それを五条に渡しといてくれや」

「銀雲にか？」

ああ、と愛手は言って戻って行った。

「・・・・・・・・一体、何が」

第19話「死神の休息」(後書き)

次回予告〱風瀬水波編〱

水波

「次回予告! 異常なまでの回復力を見せた零兄に驚きを見せる
愛手先生。」

今回は零兄がまた休むお話?

私たち風瀬姉妹も登場するよ♪

次回

死神の奇想曲 カプリス

第20話

「零と黒斬キリと義姉妹シスターと」

ほら、聞こえる。

死神の

奇想曲が カプリス

第20話「零と黒斬と義姉妹（シスター）と」（前書き）

題名通りに行きませんでした（泣）

シスター絡んでねえじゃん！

と思われても仕方無いツスねこりや（T|T）

本当に申し訳ございませんでした！

運動会に出場し筋肉痛になって日常生活に四苦八苦している作者・
十握剣でした！

第20話「零と黒斬と義姉妹（シスター）」

今、黒神零はと言うと、家^{アパート}に帰って来ており、布団でぐっすりと寝ていた。

「スウ・・・スウ・・・スウ・・・ZZZZZZ」

黒須学園校医の最高責任者である愛^{あいたさしのぶ}手指伸は『もう心配は無いが、家での安静してろ』と言って学園に休みを取らせ、零は家で休養することにした。

「ジー」

そして零の傍には、零の妖刀である「黒^{クロ}斬^{キリ}」こと、キリがジッと寝ている零をガン見していた。

そして、

「尾^{おいむら}井群ア、鍋何処にあっか分かる？」

「・・・上の戸棚にあったハズ、無かったら下の戸棚に」

「ちよっす」

零の友達にして、同じ生徒会の仲間である芦^{あしたみねはる}田峰春と尾^{おいむらそふとつ}井群蒼道は台所で何かを探していた。

「くっくっく、零の野郎、俺らが平日を返上してまで看病しに来たんだ。後で多額の金をぼったくってやんぜ！」

「・・・鍋あった、ちゃんと探せ芦田^{バカ}」

「あつすみません、てか、芦田と書いてバカって呼びませんでした！？」

「・・・材料は学校の帰りに電華たちが買って来るからそれまで鍋とか皿とか洗って用意しとくか」

「聞いて！」

どうやら芦田と尾井群たちは零の家で鍋をやるみたく、せっせと鍋や皿などを洗っていた。

そしてさっきからずっとガン見していたキリは何か手伝うことは無いかと台所に入ってくる。

「なら、零を見てろ。アイツ一人でもたどっかにいきそうになるかな」

「・・・見張りだ」

「わ、分かりました！ キリは全力でご主人さまを見張ります！」

キリは黒く綺麗な長い髪を揺らしながらまた零の元に戻った。

「・・・信じられねえよな、あそこで心配そうに零を心配している女の子が、妖刀なんてよ・・・」

「・・・そうだな」

二人は未だに妖刀が、いや刀が人間になることにまだ疑問がついた。

だがそれは当たり前だ、普通は絶対に有り得ないことなのだから。二人がそんな風に鍋や皿を洗っていると、尾井群の携帯から電話が掛かってきた。

「・・・もしもし」

『蒼道か！ 私だ、雹華だ』

「誰だ？ ハッ！ もしかして、バレたか！」

芦田が尾井群に掛かって来た電話相手を聞く、だが尾井群は無視して電話相手と話す。

「・・・雹華か、どうした」

『どうしたでは無い！ 何故お前と芦田まで休んでいるのだ。朝早くから居ないから気になったぞ』

「ヤベェ！ 必死で誤魔化せ尾井群！」

雹華と話している尾井群の横で、芦田は必死になりながら言う。どうやら音は小さいが聞こえたらしい。

「・・・まかせろ」

『・・・何をだ』

「（バカアアアアアアア！！）」

バカ正直に答えた尾井群にびっくりする芦田、なんとか小声でツツコミをする。

何故こんなに芦田は焦っているかと言うと、

「（頑張れ尾井群！　ここで朝からサボれる口実が出来たこと霍華に知られるのは非常に危険だ！　殺される、アイツは真面目だからな。こういうのは許してくれないんだ！）」

という訳で、学校をサボる・・・否、友達の介護の為に休んだのだ。

『・・・もしかして、そこには峰春も居るのでは無いか？　どうなのだ、蒼道』

「・・・居ないよ」

明らかに疑いが混じった声色で聞いてくる霍華に尾井群は涼しそうな顔で普通に返す。

基本、尾井群はいつも無表情が多く、何を考えているのか良く分からないのだが・・・。

『嘘だな、若干蒼道の声に微かな乱れを感じた。それはつまり蒼道が嘘をつく時だ』

「（どんな聴覚してんだあの薄水色女アアアア！）」

と小声でまた芦田はツツコミを入れた。

「・・・ちよつと喉が痛く・・・」

『嘘だな、この乱れは風邪の類いの乱れじゃない。私が一番知っている』

（凄過ぎでしょ、いくらなんでも!!）

芦田はもう口に出さず頭の中でツツコミを入れるようにした。

その後数時間に渡り尾井群と電話をした電華は、仕方なく引き下がり、帰りに風瀬姉妹らと一緒に零のお見舞いに行くことになったらしい。

「ただいまの時刻13..26、朝来てグテって鍋探して皿洗いとかしてたらこんな時間帯になっちまったな」

「・・・昼飯を食べないか？」

「賛成です！」

「いきなりッスか、キリちゃん!？」

尾井群と一緒に零の部屋に置いてあった机コタツに入りながら芦田が朝から来てからの日程を言うと、昼時なので昼飯を食べようと尾井群が提案すると、布団で寝ていた零の傍から一瞬にして芦田の隣まで移動したキリに驚く。

「ん、昼つつつてもなあ。零の奴どうせ節約とかしてそうだから

な、何も無えんじゃねえですかい」

芦田は台所に向かって冷蔵庫に何か入っているか確かめる。

「うお、何故か魚肉ソーセージがたくさんあるぞ」

「そ、それは私のギョニクソーセージですっ！　食べないで下さい」

涙声になりながらキリは冷蔵庫の中に入っていた魚肉ソーセージを死守している。

「……じゃ、どうすんのよ」

芦田は冷蔵庫を死守するキリを見ながら頭を掻く。

「……カップ麺が戸棚にあったはずだ」

「あっ、そうなの。てかお前零ん家の物がどこにあるかどんだけ熟知してんだよ、驚きだわ」

芦田は立ち上がり、戸棚にあるカップ麺を取り出した。

「ん、犬うどんに猫そば、それとカレーソバゲティがあるなあ……
……尾井群は何食べる？」

「……俺は犬うどんだ」

「じゃ俺は猫そばで――」

「猫そば（それ）私食べたいです！」

「ええ！　それじゃ結果的にごちゃ混ぜったこのカレーなのか蕎^{そば}麦なのかゲティなのか分からないこの食べ物俺が食うことになるわけ！？」

「・・・お前しか居ないだろ」

「ひ、酷いや！　人権侵害だい！」

「・・・！？・・・」

「・・・え、何、その『お前に人権なんてあったのか？』的な表情は！^{かお}」

「・・・正解だ、お詫びにこのカレーみたいで蕎麦みたいなゲティをお前にやろう」

「正解したのかよ！？　嬉しくねえし！　しかも結局カレーソバゲティ！」

「・・・！？・・・」

「もう良いよ！　もっとう良いよ！！」

「・・・正解だ、お詫びにこのカレーで蕎麦みたいな――」

「うひゃはっい！　ループしてるやゝい♪」

その後は尾井群が飽きるまで芦田をからかい続け、勝手にキリがカ

ップ麺を食べているのに気付き、芦田たちもカップ麺を食べる。

「ふう、食った食ったァ。以外といけたな、カレーソバゲティ」

結局食べた芦田であった。しかも好評。

「・・・・・・・・・・」

そして、キリは食べている途中からいきなり黙り込み、零の近くでずっと座っていた。

「・・・・・・・・どうした」

尾井群は黙って零を見ているキリが気になり、声を掛ける。

「尾井群さん・・・・・・・・、あの、私昼ご飯を食べてて思ったんです。私だけ幸せになって良いのかなって・・・・・・・・、ご主人さまはこんな重傷を負っていて苦しがつているのに、私は暢氣のんきに昼ご飯を食べているなんて・・・・・・・・」

キリは自分の妖刀師である零が怪我あるじをしていると言うのに、自分だけ昼食を取っていたのに嫌気をさしたらしい。

その姿は、主を心配する子犬のようにションボリしていた。

「・・・・そうか、なら今度は、零の為に何かしてやれば良いんじゃないか？」

「えっ！」

「・・・さつき電華からメールが届いたのだが、今スーパーみかどで買い物をしているらしく、買った物が沢山有りすぎて困っているらしい。どうする？ 手伝いに行くか？」

尾井群の言葉にキリはどうするか迷った、持ち主である零から離れて良いのだろうか。

「・・・今出来る事と出来なかった事を重ね合わせるな、出来なかった事は出来なかったんだ、でも・・・今から出来る事をやるかやらないかでは・・・違ってくるんじゃないか？」

尾井群はそれだけ言うと、立ち上がり玄関の方に歩いて行った。

「・・・あ・・・」

「行って来いよ、零なら大丈夫さ、俺が付いてるし零がここに住んでいるかまでは知らねえだろ」

キリが迷っている所で、芦田はキリの背中を押して上げるように、そう言った。

「・・・芦田さんが付いてるのが心配ですけど・・・分かりました、ありがとうございます！ それじゃ私は手伝って来ますね

♪

バタバタとキリは走って尾井群の後を追いつけて行った。

「・・・俺どんだけ頼り無えんだよ・・・
・・・なあ、零」

芦田は寝ているであろう零に話し掛ける。勿論返答は無い。

「もう狸寝入りしなくて良いんじゃないの？ キリがいねえんだし」

芦田がそう言うのと、寝ているであろう零がムクツと上半身を起こき上がらせる。

「……何時から気付いてた？」

「んゝ多分、俺ら来てからダロ？ 違う？」

芦田は床にあった週刊誌を取って、パラパラ読みながらさりげなく言った。

（はあゝ、何でコイツは洞察力だけ凄いんだ？）

零は芦田^{バカ}の以外な凄さに驚きながら溜め息を吐いた。

「なあ、今結構失礼なことかんがえ——」

「てねえから安心しろ」

「そうか」

芦田は首を傾げながら納得する。

沈黙。

芦田と零は互いに黙っている。
すると零が言い出す。

「……会長が言ってたこの妖刀ブレイド・パーティー育生計画ってさ。もしかしたら何か裏があるんじゃないかねえか？」

「……それも今更だと思っぜ、大体よく、コーコースー高校生に堂々と銃刀法違反してる時点で怪しいとか思わなかったのかよ」

「いや、思ってたけど、そういう学園なのかな……と……」

「アホかッ、んな学園は漫画の中かアニメの中しか存在しねえよ！
実際に刀を振り回してOKな学園なんて存在しないっつの！」

パシッパシッと零の頭に週刊誌を投げつける芦田。
それにイラッときた零は、

「いやぁ悪い悪い、確かにそうだよな（ブンッ！）」

零は近くにあった目覚まし時計を芦田の顔面に叩き付けた。

「うぎゃああああ！　今鼻がグシャッ嫌な音がしたアア、マジで今グシャってつか痛いイイイイ！！」

芦田は顔面、特に鼻を押さえ付けて転がっていた。

「荒らすなよ」

零は転がっている芦田を横目にまた布団を被った。

（妖刀育生計画……間違はなく危ない計画なのは分かる）

零の頭の中には今まで戦って来た妖刀師を思い出していた。
ブレイドマスター

まず一人目の妖刀師。

黒須学園を襲おうとした妖刀師・金野。その妖刀の「爆花」ばくばな。

そして二人目は、黒須学園生徒会に所属している一年生女子達を誘拐し、仲間である異形者・炎条騎烈イレギラ えんじょうきれつと共に現れた妖刀師・豊臣風世とよみかぜ。その妖刀の「風鈴音」。

最初の相手は油断していたから勝っていたが、二回目の相手、豊臣にはボロボロになりながらの勝利だった。

（これからも、多分妖刀師がやって来る。そんな時は俺が何とかしないといけない……やっぱり、練習あるのみか）

布団で寝ている零はそんな風に思っていると、芦田は部屋にある窓から外を眺めていた。

芦田の瞳は、何処か難しそうに、据えていた。

※

場所は変わりスーパー「みかど」、そこで黒い制服を着ている女子高生が野菜と睨み合っていた。

「ムムム……電華先輩、このキャベツ高くないですか？」

「うん？ どれどれ、見せてみる」

「電華先輩、あっちで卵が格安で売ってました」

「何ッ！ 買いだな！」

その女子高生とは、零のお見舞いに行く途中で鍋の材料を買っている、黒須学園生徒会所属、黒須学園高等部二年・南郷電華と黒須学園高等部一年・風瀬水波と風瀬火波の双子姉妹の三人だった。

水波は綺麗な青色の髪を、後ろ纏め上げ、電華は薄水色の髪を後ろで纏め下げており、火波は赤い髪を下ろしてゆらゆらと揺らしながら居た。

この一人一人の少女たちはかなりの『美』が付く程の少女たちで、三人の美少女が集まればかなり注目される。

なにせ何の変てつもないスーパーに美少女が居るので驚いているのだろう。

「鍋に必要な材料は結構買ったな」

そして、電華たちはスーパーの買い物袋を持って零の家^{アパート}にへと向かっていた。

「そ、それにしても……買いましたね」

火波は買い物袋一杯に詰めし込んだ材料を見て言う。

「うわぁ〜い♪ チョコボール美味〜い♪」

そして水波は袋から茶色い小さな箱を取り出してチョコボールを出して食べていた。

「こら水波、歩きながら食べるのは行儀が悪い……ん？ あ
の青色の髪は……蒼道か？」

買い物袋を器用に持って歩いている電華は、道路の向こうから歩いてくる人物に見覚えがあった。
青髪の少年とその隣にちょこちょこ小走りをしてくる長い黒髪を靡かせてやって来た。

「あっ、本当だ、尾井群先輩だ。ほら、火波ィ」

「ちょっと水波ちゃん、ちゃんと買い物袋持ってってよ、まった
くもう」

「キリも一緒に居るようだな」

電華は荷物持ちが来たことに少し安堵の気持になり、水波ははしや
ぎ、火波ははしやぐ水波に溜め息を吐いていた。

※

芦田峰春は考えていた、今の状況をどうしようか。

「・・・・・・・・ヤバイ」

そう、かなり危険^{ヤバイ}状況になっているのだ。
それは何故かと言うと、

（ゲーム機が・・・・・・・・故障しちゃった！）

芦田は尾井群たちが来るまで零の家にあった最新ゲーム機のPS3
（プレイステーションスリー）を壊してしまったのだ。

だがこれは芦田は悪くなかったのだ、普通にゲームをやっていたら
普通に壊れてしまったのだ。

生憎今は零が寝ていた為にまだ気付かれていない。

だが、いずれは絶対に知ることになる。そうなればかなりのゲーム
好きである零に殺され・・・・いや、殺されるよりもっと残酷かつ冷
酷な罰が下されるかもしれない。

（いや、素でヤバくね！？ え、何これ！ 普通にゲームやってた
だけなのにどうして止まっちゃう訳！？ プツンってめっちゃ嫌な音
鳴らして消えたよ！！？）

芦田はさっきまで10分くらいフリーズしていて、早速今の危ない
状況になっているのに気付き、どうしようか考えていた。

因みにやっていたゲームは芦田がワザワザ買って零の家でやり込ん
でいたギャルゲだ。

（マジどいしょ！？）

芦田は何回も何十回もP S 3本体を見て、何処かおかしいか調べているが分かるハズも無い。

すると後ろからカタッ！ と音が鳴り、芦田は、

「あひゃ!？」

物凄い情けない声を出して振り向く。

音が鳴った場所は小型テーブルの上に置いてあった雑誌の上にあった卓球のボールが落っこちた音だった。

何故卓球のボールがあるかと言うとこれもまた芦田が零の家で「卓球やろうぜ☆」と言い出して卓球部からパクってやっていたからだ。

「なななな、何だよ、ビックリさせんなバカっ！」

ボールにキレる芦田、情けなかった。

「と、取り敢えず片付けるか、うん、片付けよう……」

さりげなく証拠隠滅しようとする芦田だったが、

「何してんの」

「……………えっ……………」

芦田の後ろには寝起きの零が立っていた。

零は芦田を一回見て、テレビ画面を見て、もう一回芦田を見た。

「……………何してんの、いや……………何した」

「あら、あららら! ?　　れ、零さん、さっきよりちょーっと声が低くありやしませんでしょーか(汗) !」

零の声はかなり低かった、それがどういう意味かは、もう芦田は知っているが知りたくなかった。

「てめえゴラァア!! !　やりやがったなこの塵男!! !^{ダストマン}　お前を外国に売ってやろうかゴラァア!! !」

「人身売買!! ! ?　　てかごめんなさいiiiiiiiiiiii!! !」

程なく芦田の顔面に零の右ストレートがめり込んでいたのであった。

芦田が畳の上でのたうち回っているとガチャンと玄関の扉が開く音がした。

「……………今帰った、何だ……………芦田がまた何かやらかしたのか」

「失礼するぞ零、ん?、また芦田が馬鹿やったのか」

「尾井群、お前の家かここは。電華も面白い物ありがとう、助かったわ」

荷物を沢山持って、居間に入って来る尾井群と電華。転がり回っている芦田を見てもいつもの反応をし、零が辛くないのを見、安心してすぐに台所に向かう。

「し、失礼しまーす」

「失礼し、しまひゅ・・・あう・・・噛んひゃ」

「水波と火波も来てくれたのか、ありがとうな」

重い買い物袋は尾井群とキリが持っていたので水波と火波は軽い買い物袋を持って入って来た。水波は前に一度入ったことがあるがしつかりとは入っていないので少し緊張しており、火波なんては途中で舌を噛んで上手く言えなかった。そして、皆が入った後からキリが来るかと思ったら、

来なかった。

「あれ？ キリはどうした」

零は荷物を台所に持って行こうとした火波に聞く。

「キリちゃんなら、玄関の所で立ってましたよ。私も何で入らないのかなって思い声を掛けようとしたら尾井群先輩に止められて・・・」

火波がそう言うと、脇からヒョイツと尾井群が現れた、エプロンを着てお玉を持っていた。

そして尾井群はお玉を玄関の方に向け、顔で『行って来い』と言われた気がし、零は言う通りに玄関に向かった。

「まったく、気にすんなよな」

話を全部聞いていた零にとって、キリが入って来なかった理由はすぐに分かった。

零が玄関の方に行くと、沢山ある買い物袋を両手で抱くように持ち、顔を俯かせているキリが立っていた。何処か痛々しい感じがして零も可哀想でたまらなかった。

「キリ」

ビクッとキリは肩を震わせた。

「ぎ、ごしゅ——」

「ストップ、止めよう、その単語」

まるで交通安全にあるポスターなどに書いてある言葉みたく言う零はキリと所まで移動する。

「何で入って来ないんだ？」

「その・・・・・・・・・・」

零がキリに聞くと歯切れ悪く答えようとするが、言葉が出ない。出てこない。

キリは『持ち主を守りきれなかった事にショックを受けている』。それは持ち主本人の零にとってもうとづくに分かっていた。

妖刀なのに、何故か女の子になる。

何故？

どうして？

零は毎晩のように考えていた。

でもそれは当たり前な事だと思う。

だって世界の何処に武器が人間になる真実があるんだ？

聞いた事も、当然のように見た事も無い。でも、今日の前に居る少女は『妖刀』、つまり武器になるのだ。

感情が無い訳でも、常識が通じない訳でも、言葉も分からない訳でも無い。

ちゃんとある。

ちゃんとした『少女』なのだ。

「・・・なあ、キリ」

「は・・・い」

キリは零の顔を見ず、俯かせたまま返事をする。

何処か返事も元気が無かった。

「俺はお前を、ただの武器だと思ってない」

「・・・・・・・・えっ」

零は今はっきりと答える。

下手な説明など無く、思っている事を全力でキリに伝える。

それでキリを救えるなら、それでキリが苦しまないなら、零は何万回も言うだろうその言葉を。

「お前はもう、武器とか、そんな感じじゃねえんだよ」

キリは零を見る。

零は力強い意思のある瞳でキリを見ていた。

「別にお前がわざわざ苦しむ必要性なんて1ミリも1ミクロンも無えんだよ」

そう、何故キリが苦しむ必要がある？

それは何処にも無い。

「今の今まで、全っっつ部お前に助けられたんだよ。今の今まで生きてこれたのは全部お前の、キリのお陰なんだよ」

事実。

それは紛れもない事実。

「怪我とかしたのはさ、多分、俺がお前を、キリを血に染めたくなかったからだと思う。だってそうだろ、一番最初に戦って金野とか

言う爆発野郎だって峰打ちで気絶させて、次の豊臣とかいう奴だつて斬れなかった。その、俺の考えで怪我したんだ。自業自得だ」

零は何処かで恐れていたのかもしれない。

自分が何時、この強大な妖刀チカラを持って狂う日が来るのでは無いかと。刃物を持って振り回す事によって、現代で必要の無い『戦いの意思』が目覚めるのではないかと。

キリを、妖刀黒斬を『道具』として見てしまうのでは無いかと、恐れていたのかかもしれないからだ。

「まあ……つまりだな。俺は、キリを、“家族”だと思ってんだ」

そう、最初からこう言えば良かった。

零はそれを言った後に気付く。

「今までキリをボロボロにさせちゃったかもしれない、キリを悲しませていたかもしれない」

零はキリの頭に手を乗せ、

「でも次からそんなの無しだ、もうキリを、苦しませないようにする。もう泣かせないようにする。理由は単純――」

キリにとって、安心の言葉になって欲しい。その思いを込めて零は言う。

「『家族』だかだ」

零のその言葉に、キリは瞳全部に涙を潤ませていた。

家族、武器には職人^{おや}から造られれば兄弟などが居るかもしれない、だがキリは『妖刀・黒斬』。世界に一つしか無い刀だ。

家族なんてものは皆無に等しい。

そんなキリに、妖刀の持ち主である零は、『家族』だと言ってくれた。

道具として見られてもしょうがないと言うのに零はキリに名まであげ、『家族』までくれた。

「わゝゝゝゝわゝゝゝたし、わゝゝゝたしがゝゝゝがぞぐで良いんでじようが、わゝゝた——」

「お前は、俺の、いやゝゝゝ俺と皆の家族だ」

キリは零に抱き着き、大声を上げて泣いた。泣いて泣いて、泣きまくった。

そして零も、キリも思った。

家族は、温かいと。

零は泣いているキリの頭を優しく撫で、泣き止むまで撫で続けた。

泣き止んだキリを連れ、鍋の準備を仕終えた尾井群や電華、皆の皿に添えていく水波と火波、直らないかなとまたP S 3を見ている芦田たちと一緒に食べたその味は、キリや零にとって忘れられない味となったに違いなかった。

第20話「零と黒斬と義姉妹（シスター）と」（後書き）

次回予告―尾井群蒼道編―

尾井群

「・・・今回は楽しんで貰えたか？

零が少しカッコ良かったな。

・・・さて次回は何々・・・うむ、どうやら芦田が関わっていくらしいな。

ん・・・？

芦田一家が登場するだって？

それは、気になるな。

次回

死神の奇想曲
カプリス

第21話

「芦田妖々（あしたようよう）」

・・・ほら、聴こえる

死神が唄う

カ
プ
リ
ス
奇
想
曲
を

第21話「芦田妖々」(前書き)

更新遅れてすみません！

そしてまた話が中途半端に終わってます、すみません！

もう何もかもすみません(泣)

あつくあちくくしよ。

んあ。

鳥になりてえ。

第21話「芦田妖々」

零の家で鍋パーティーを行った次の日、零は完全復帰し、今現在黒須学園生徒会室に居た。

「会長、マジで勘弁して下さいよ。何スカこの書類とかプリントの山は」

零は副会長専用の机の上に目を向けると、そこには沢山のプリントの山が出来ていた。

「んーとね、僕も結構やったんだけどさ。凄い量のプリントが生徒会に来てね、僕だけじゃ間に合わなかったんだよ」

そして、その大量のプリントを寄越したのがこの黒須学園生徒会の長を務めている白髪美少年の斑備白虚まだらび・びやっこはにこやかに零に言う。

「ハハハ、そんな事ないさ」

「全部俺に押し付けたんじゃないスか？」

零は斑備を睨むながらプリントを手取る。

「僕の方はやったさ、後は頼りになる副会長たちに任せる。信じることも会長の仕事さ♪」

「・・・知らぬうちに副会長にされた俺の権利は今何処いまだどこに」

文句を言いながらも零は山となっているプリントを片付けるように

作業する。

「つか、お前は何してんだ、芦田」

「ZZZZZZZ・・・」

作業を仕始めた零は、何故か生徒会にあるふかふかなベッドで幸せそうな寝顔をしている芦田。

「・・・・・・・・（イラッ）」

ドカツッ！

「ふごっ!？」

零は幸せそうに寝ている芦田の溝に思いきり強いパンチを食らわせる。

「ゲホッ！ ガホッ!？ 何か凄い腹痛いんですけどッ!？」

芦田は起き上がり、腹を押さえながらベッドから出る。

そして零は満足したようで、山のようなプリントとまた睨み合っていた。

「時にレイくん」

「・・・・・・・・はあ、何スか」

零は斑備から呼ばれると溜め息混じりに返事する。

「ちょっと『妖刀』に関する話になるんだけど、良いかな？」

斑備が真剣な表情になり、零に聞いた。

零も手に持っていたプリントを机に置いて真面目な顔になる。

「何ですか」

「うん、君たち二人、というより僕とエイちゃん以外は知らないと思うんだけどね。実はエイちゃんも異形者イレギラだったのは知っているかな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「マジですか!？」

芦田は驚きながら斑備に近付く、零はあまり驚いてはいなかった。

あの様子では気づいていた、というより、薄々感じていたのかもしれない。

「そしてエイちゃんの異形能力は“月詠”つくよみと言ってね。夜にしか能力が使えないんだけど、月が登っている時は、月が照らし出す範囲内全てを見通し、傍聴とか聞き取ることが出来るだよね」

斑備がまるで自分の事を話しているかのように、満足そうな顔で喋っている。

因みにもう一人の副会長であり、三年生である大月詠おおつき・えいは生徒会の仕事で生徒会室には居なかった。

「まあそういう事だよ」

「いやいやいや！　ということスか！？」

芦田が身を乗り出して斑備に聞く。

「ふふふ、つまりだね。“君たちは常に監視されている”ということだね♪」

それまで真剣に話を聞いていた零が一気に斑備との間を詰めると、一睨みする。

「つまりは『勝手な行動はするな』ということスか？」

零が睨みながら斑備にそう言うのと、なんても柔らかな笑顔で斑備は返事する。

「雑な言い方をするねーレイくんは〜」

零は斑備のその返事を聞くと、すぐに踵する。

「ま、待てよ零」

芦田もすぐに零の後を追いかける為に扉に近付くと、不意に斑備に呼び止められた。

「峰春くん」

「・・・・・・？・・・・・・」

“今日の夜は月をよく見える”、皆で月見というのも良いんじゃない

ないかな」

「えっ、それってどういう——」

「それじゃあね、峰春くん♪ また明日だよ♪」

斑備はニコニコと笑いながら手を振って、芦田を送り出した。

※

零は校門まで遠く長い道を黒須学園指定の鞆を手にはぶら下げながら歩いて行く。木をちらつかせ、緑が生い茂っていた。

部活で走り込みをしている女の子たちが歩いている零を追い抜かしていく。

そんな女の子たちの後を追うように芦田も一緒に走っていた。

「いやぁ頑張ってるね〜♪ えっ何？ 陸上部なの！ どうりで綺麗な足をしている訳どわ——！？」

芦田の話が途中で途切れたのは勿論、零が蹴り飛ばしたからだ。

「ああごめんね〜、走り込み続けて良いよ」

芦田がゴロゴロと地面を転がってる中、零は走り込みを止めて心配そうに見ていた女子達を促した。

「何してんだよ」

零は転がっている芦田に聞く。すると芦田は急に真面目な顔になって仰向けになる。

「いくら監視してるからって常について訳じゃないでしょうよ。大月先輩だってプライバシー守るって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「てかさてかさ、何かウチの親がさあ、『零くん連れて来い』って言ってんだけどよ。来てくれ」

芦田は起き上がり、零に向かって笑いながらそう言う。すると零は静かに芦田の横を通り過ぎる。芦田は心配そうにもう一度訪ねようとすると。

「・・・・・・・・行くぞ、久しぶりに飯食いに行つてやる」

芦田はそれを聞くと零に飛び付く。

勿論、零は見事に芦田に蹴りを食らわせた。

※

学園から出た二人はさっそくおなじみの奴ら待っていた。

「今回はやけに遅かったな、会長に何か言われたか？」

「・・・面倒臭いからな、あの人は」

同じ生徒会に所属する同級生の薄水色の髪を後ろに纏め上げている少女・南郷電華なんこう・ひょうかに青い髪が特徴的な尾井群蒼道おいむら・そうどうが待っていた。

「おーす、ワザワザ待ってたのか」

零は二人に鞆を持った手で振る。

「電華に尾井群か、お前らも久々に家に来るか？」

芦田も零の後ろからひよいと顔を出してそう言う、だが電華が申し訳なさそうに芦田に言う。

「済まないな、今日はお隣さんである私が尾井群兄弟の夕飯を作らなければいけないんだ、青利しょうりも腹を空かしているだろうからな」

「青利って、尾井群の弟だっけ？」

「・・・ああ、まだ小六だがな」

尾井群も残念そうな顔で言うと言と零たちと加わり、歩く。これがお馴染みの“春華零道”と呼ばれる四人組だ。たまに別々に帰るがそれは仕方ない、たまには一人で帰りたい時もある。

「水波と火波は？」

「今日は生徒会一年生女子メンバーだけで打ち合わせという名の遊

びに行ったぞ」

「電華も行きやあ良かったのにな、あっ……尾井群兄弟の夕飯があるんだったな」

「……俺だけでも料理くらい作れる」

「色々とお前も忙しいんだろ、会長から聞いたぞ、生徒会の仕事を家に持ち帰ってやってるって」

「大変だなく尾井群は」

「どっかの芦田^{バカ}が雑務ちゃんをやんねえからな」

「そうだそう……だ……ん？俺のせい？」

「青利は何が好きだったかな、カレーだったか？」

「んっ？シカトユ!？」

四人は話し込みながら賑やかな商店街通りにへと入り、電華と尾井群は途中で別れ、零と芦田はそのまま芦田家にへと直行していた。

「またお前ん家に行ったら店の手伝いをやらされんじゃねーだろうな」

零は歩きながら芦田に訪ねる。だが芦田は一人で何か考え込んで歩いていた。

零は芦田に再び聞いたが無視され、思いつきり重い蹴りを食らわせようとした瞬間に芦田はドバツ！と前方に“飛んだ”。

なぜ芦田が“飛んだ”かというところは、

「きゃあああ♪ 零さんじゃないでスカああ♪」

現れたのはとても元気そうな女子中学生で、茶髪に赤いリボンを結んだポニーテールの似合う女の子だった。

「おお相変わらず元気そうだな、えのき榎ちゃん」

零が目の前でキャーキャー騒いでいる女子中学生の名前を呼ぶと、ぴたっと止まり、零を直視する。

「わ、私の名前を覚えていてくれたのですか!？」

「そりゃ友達のこと……」

零はチラッと芦田を見る、芦田は妹に蹴られ、膝を思いきり道路に強打した為はかなり痛がって道路でゴロゴロと転がり回っている姿があった。

「……バイト先のお子さんの名前を忘れるハズが無いでしょう……」

「な、何故に遠目になって言ってるんですか？」

榎と呼ばれた女子中学生が不思議そうに零を見ていると、ずっと転がっていた兄、芦田峰春が復活する。

「くおらあエノキ! 兄を蹴るとはそれでも——」

「うっさい！」

ゲシッと芦田の脇腹に手刀を繰り出す。

「い――」

「黙れ」

ドカッと今度は芦田の弁慶の泣き所を問答無用に蹴る、靴の先で。

「ふざけんなああ！ おま、お前本当にふざけんなよ！？ 『痛えええ』と俺が叫んでたらやっぱうるさいからツツコミを入れもOKだよ？ 多少過激でも目を瞑るよ？ でもな、痛えええの“い”の一言さえ言わせないとかどうかと思うんですけどこれ如何に！？」

「結論から、うるさい」

バシッと榎が芦田にそう言うと、流石の芦田も堪忍袋の限界だった。

「て、てめえ……俺はお前の兄貴だぞゴラァ！？」

芦田がそう言うと、榎は急に怒りの顔を無くし、少し不安そうな表情になって芦田に訪ねる。

「え、あの、私に兄なんて居なかったんですけど……どちら様ですか？」

その言葉に芦田は一瞬にして黙り込む。

「すみません、私に兄という存在自体が無いので、これで」

それだけを榎は言う、スタスタと歩いて行った。

歩いて行く榎の後ろ姿を見る芦田が、その、哀愁が漂っていた。

「・・・なあ、零」

「な、なんだ芦田」

芦田が神妙な顔つきになって零に訪ねる。

「俺って、誰だ」

「知るか」

一応心配したが、芦田なのでスルーして芦田家に向かう零。

芦田が泣きながら零に抱きつこうとしたので迎撃したのも後の話。

芦田家は御食事所というか和風レストランというか、とにかく食事を営む店を経営しており、町では結構人気を誇っている。

『御食事所“あした”』という店名でやっているらしい。

「・・・いつ見てもすんごいネーミングだな」

「仕方ないですよ、私たちが名付けたんじゃないんですからねー」

そして先に行った榎は普通にお客様が入る入口から店の中に入って行った。

「良いのか、芦田？」

「ア、ア！？ 知るか！」

そう言いながら芦田も入口から入って行った。

「……入って良いのかよ……」

零は独り呟きながら芦田の後を追って、入口の戸を開けると。

「グッ・モー・ニング！ レッイくうくうん♪」

超満面な笑顔をした髭ダルマおっさんが居た。

「やめろ変態っ！」

「ぎゃあああああああああ！！！」

先に入って行った榎が強烈な蹴りをその髭ダルマおっさんに食らわせた、髭ダルマは悲痛の叫びを上げながら転がる。

「や、止め、やめろ榎！」

「うっさい変態オヤジ！」

「なんだとっ！？ 俺は決して零くんが来るからって別に髭を整えたり、歯を磨いたり、香水をつけて『やっべミネ（峰春）ん家の父

ちゃんカッコ良くね？ てかマジ若くて男前じゃね？ つか髭パネ
エじゃん』とか言われたいと思っていけないぞ！」

「完璧思ってたんじゃないかあ！！」

娘と息子に蹴られた父親を気まずそうに見ていた零だったが、ツン
ツンと袖を引っ張られた。

「……ん？」

「……………（ジー）」

引っ張っていたのは襟首まで伸びた茶髪を片方だけ結んだ女の子だ
った。

「おお、久しぶりだね楸ちゃん♪ また背高くなったんじゃないか」

「……………（コクコクコクッ！）」

零の言葉が嬉しかったのか、楸と呼ばれた女の子は嬉しそうに頷く
まくる。

「おう、お帰り、楸」

「お帰り、ヒサギ」

「お勤めご苦労だった我が妹よ！」

上から芦田の父、芦田、榎が迎える。
まだ取っ組み合いをしていたが。

「そーいや楸ちゃんはまだ小学生なの？」

零は楸に聞くとコクリと頷く。

「ヒサギは小学六年生だ、そうや今日は客居ないんだな」

芦田が妹である楸を説明すると、父に向かって聞く。

「おうよ！ 今日零くんには是非食べてもらいたい作品が出来たからな！ 今日は休みを取った」

ガハハハと笑う芦田父を見て、零も苦笑いを浮かばせる。

「こっちですよ零さん♪」

榎も零が来ているのが嬉しいのか、お客様があがって召し上がる為にある畳に零を促す。

芦田も仕方なしといった感じに鞆を持って奥に行った。

零は畳に胡座をかいて座ると、隣に榎も座ってきた。

「えへへへ♪」

「・・・・・・」

芦田父は調理場に向かい、楸はちょこんとお客様が座る立ち椅子に座り、真っ赤なランドセルを机に置いて宿題らしきプリントを取り出して勉強していた。

「榎ちゃんちっと近すぎないかい？」

「ええ、全然近くないですよお、むしろもっと近付いた方が良い感じ？ みたいな！」

（ええ、何この状況）

零はズンズンと近付いてくる榎に遠慮するように距離をおく、だが壁がすぐある為に動けなくなる。そんな積極的過ぎる榎の前のいつの間にか居た楸が立っていた。

「ひ、楸ちゃん、ヘルプ！ ヘルプミー！」

「……ごめんなさい、アラビア語分かりません」

「あつれえおつかしいなあ、俺英語言ったハズんだけどなアハハ！ ！？」

隙ありッ！ と獲物を前にした狼の如く、榎は零に飛び掛かろうとする。

「おーす、待たせたな……って何人の妹に手出してんだコノヤロー！！！」

そこに私服に着替えた芦田が戻って来た時に丁度襲われていたのでバッチリと目撃されたのだが、何分目撃者が馬鹿な為に零が妹に襲い掛かっていると逆に見えたらしく、榎と共に零に飛び掛かった。

「うおおおおおおっつー！！」

零は体をひねらせて横にへと移動し、難を逃れた。

「はあはあ、相変わらず面倒な兄妹だ……そしていつの間にか楸ちゃんが俺の腰に抱き着いてる!？」

「てめえ！ エノキだけではなくまだ小学生であるヒサギにまで手出しやがってこの鬼畜野郎！」

「むふう♪」↑楸

「チクシヨオオオ！ 今すぐ俺の代われえい！ ヒサギちゃんヒサギちゃん、お兄ちゃんにも！ お兄ちゃんにも抱き着いて良いんだよ！」

「ここのシスコン変態兄貴がああああああ!!!!」

「ごばあああああああ!!!!」

抱き着いていた楸が可愛い過ぎたのか、それとも真の妹好き（シスコン）だった為か、変態染みた顔になりながら零と楸に近付いた芦田だったが、その変態過ぎる兄を見た榎が手加減無しのパンチが溝に入る。

「出来たぜえー!……ってうおっ! どうした峰春!？」

料理を終えた父が零の前に持って来たのだが、悶絶している息子を見てうろたえた。

「お気になさらず、ただ言わせて下さい。貴方の息子さんは変態です」

「ワハハハハ！ 男はそれくらい馬鹿じゃねーとダメだったの！」

零はなるべく優しく碎けて言ったのだが、芦田父はまったく気にしない方向だった。

「御食事所“あした”の新定食！ その名も店長の名前が入ったイカした寿司！ 『クワガタずし 鍬形寿司』だああああ！」

ババンっ！ と零の目の前に出されたのは漢字の『クワガタ 鍬形』と彫られたキュウリが握られた酢飯の上にただ置かれただけだった。

「すみません、不愉快です。下げてください」

「ぬぁにい！？」

ならばこれはどうだあ！ と次の料理を出してきた。

「御食事所“あした”の新定食パート2！ その名も店長の名前が入ったイカした煮物！ その名も『鍬形風煮物』っっだあああああぁ！」

トバンッ！ 今度出てきたのはカルパッチョに牡蠣かきの酒蒸しに海鮮サラダにポテトサラダに鶏のつくねと若竹煮に麩ふと三葉のすまし汁にしゅんぎくのおひたしにミネストローネに、

「煮物どれだあああああああ！！！！！！？」

久しぶりにキレた零であった。

※

場所が変わり、ある高校の生徒会。

そこには黒須学園の生徒会副会長を務めている大月詠おおつき・えいが居た。

「私が何故ここに來たのかは、お分かりかしら？」

詠は微笑みながら言うとお面している黒髪長髪でボリュームのあるスタイルをし、制服越しなのにくっきりと引き締まっている所は引き締まり、出ている所は出ている女性が座っていた。だがそんな事を全部丸めて忘れさせるような鋭い視線が詠を捉え話を静かに聞いている。

そんな女性の隣には茶髪を首まで伸ばしたショートカットの女の子が詠を睨む。

「何なんですかあなたは！ いきなり学校に來たかと思えばその態度！」

「あら？ あなたは……この学校の生徒会の者ですか？」

「私は東針とうしん高校生徒会書記の山吹九花やまぶき・このかと言います！」

山吹が詠を睨みながら自分の名前と役職を伝える。詠も納得したように頷くと、

「それじゃあ、ドアからこっそり覗き見しているあの男子生徒たちも生徒会の一員なのかしら、ねえ赤彦あかひこ・ちつる千水流生徒会長さん」

詠がそう言うのと山吹がズバツとドアの方を振り向くとそこには少しだけ開けたドアからこっそり覗き込んでいる男子生徒二名を確認した。

「コラアああー！ 勝手に覗くなあ！」

山吹が怒り心頭しながらドアに近付く。

「やっべ逃げろ！」

「ばっ、声出すなよ！ バレんだろ！」

その声を聞いた瞬間、山吹と千水流がピクツと反応した。

「えっ、ちよつと、まさか鼓枝こえだ、なの？」

「……黒ちゃん？」

二人も確認するようにドアに向かってそう言う山吹と千水流、すると、ドアが半開きになり、顔を出して来た男子生徒二名。

一人黒い眼鏡を掛け、髪が逆立つように立たせている男子生徒、もう一人は人当たりが良さそうな柔和な顔の男子生徒。

「すみません！」

「あつちよ！ 飛久とびひさずりいぞ一人だけ謝りやがって、すみません！」

二人共すぐに頭を垂直にして謝る。

「なな、何で鼓枝と鉛銅えんどうがここに居るのよ！」

「いや、俺は行かないって言ったんだけど、何かコイツが……」

飛久が人差し指を鉛銅と呼ばれた少年に向けてそう言う。

「ちよっと！？ お前も九花さんに人目見たいとぶるあああああ
あ！？」

「ちょ黙れえええええ！」

と二人は取っ組み合いを始め、山吹はその様子を溜め息を吐きながら頭を抱える。すると詠が、静かに、そして平淡に言う。

「ああ良いのよ、“二人共”関係ある話だから」

それを聞いた二人はピタリと動きが静止した。

「いきなり聞くわね。鼓枝飛久と鉛銅黒護の両二年生はある“チカラ”を手に入れたんじゃないの？」

それを聞いた黒い眼鏡を掛けた少年、黒護がピクツと反応した。黒護だけではなく飛久も肩を震わせた。

だがもっと反応したのがこの東針高校の生徒会長である千水流ちづるだった。

「…………すみません、今日はもう遅いですし、お帰りになられた方が…………」

千水流は黒護に笑い掛けるような純粋な笑みでは無く、軽く人を殺したような冷徹な眼差しで詠にそう言った。

その眼差しを軽くあしらうように詠は微笑みを浮かべて呟く。

「赤彦千水流、貴女の情報だけは私は持っていないのよ。それって…………どういう事なのかしら？ この東針高校に『斬り裂く白き鎖（リッパー・ザ・チェーンズ）』が乗り込んだまでは“視て”いたのだけれど、ね」

また何か言おうとした詠がふと、言葉を無くした。いや、話せなかった。

「随分と喋るお方なのねえ。でも早く帰ってもらえませんかしら？ こっちとしては不愉快極まり無いわ」

それを言ったのはまごうことなき千水流だった。だがそこには黒護の知ってる千水流では無かった。

そして、“千水流の影から出現した巨大な手”が詠を掌てのひらに乗せたように囲んでいた。西洋の鎧手がいしゅのようで漆黒色だった。

「私はこの東針高校の生徒会長です、東針高校こしを護ることが私の『義務』でもあるんです。貴女の用件は知っていますが丁重にお断りさせていただきます」

「それほどの……この高校を護れる“チカラ”を保持しているから、と受け取っても良いのかしら？」

詠はこの状況を知っていたかのように冷静に千水流にそう聞く、千水流も頷いて見せると詠は微笑みを消して真剣な表情になる。

「解りました。まだ時間があります。もし気がお変わりなられたのなら黒須学園生徒会に連絡を」

千水流がそれを聞くと、影から伸びた巨大な鎧手が影に沈み戻っていった。詠は立ち上がり、帰る支度をして山吹が入口まで送りに行った。

沈黙。

飛久と黒護は混乱している頭で目の前の女子生徒、千水流が行ったことを必死に考えていた。

「せ、千？」

黒護がぎこちなさそうな声で千水流に話しかけると、ニコツと笑いながら千水流は二人を椅子に座るように促した。

「いろいろと説明しないといけないみたいね」

千水流は哀しみのある瞳で飛久、黒護を見た。

そして、その言葉を聞いた二人は、高校生では絶対に経験をしなかったハズであろう『殺合』^{ころしあひ}に身を投じることなるなんて、

考えても居なかっただろう。

第21話「芦田妖々」（後書き）

次回予告―斑備白虚編―

斑備白虚

「いやあ、僕が次回予告をするとはねえ。するからにはさせてもらうよ？」

へえ、レイくんたちは峰春くん家に行ったんだねえ。家族も多そうだね、えーと何々、どうやら次回も峰春くんの兄弟姉妹達が登場するみたいだね、楽しみだよ。

因みに峰春くんの兄弟姉妹たちの名前には何かが関連してるんだけど分かるかな？

まあ〜簡単だよねえ。

でもねえレイくん、次回の月は綺麗だよ。
是非…………峰春くんと一緒に見てあげなよ。

…………また面白いことが起きそうだねえ。

次回

死神の奇想曲
カプリス

第22話

「夜月の光は魔煌の輝き、闇は拡がる」

ふふふ、聴こえるよ。

死神が唄う。

騒動さわぎ歌うたを。

第22話「夜月の光は魔煌の輝き、闇は拡がる」(前書き)

早く免許を取りたい十握剣です！

今回は主に芦田の話がありますよ！

第22話「夜月の光は魔煌の輝き、闇は拡がる」

帝黒町、“町”とはなっているがその人口は遥かに町よりも“街”に近くなるほどに人口密度を占めていた。

大きく出来た新築の立派なお店や、はたまた古い昔から馴染みのありそうなお店、そして帝黒町に遊びに来た人々を見上げさせるように王立ちする建造物、ましてや世界遺産なんかに認定された自然もこの町にはあった。その自然も豊かな訳でその四季揚々に彩る景色を観る為にわざわざ遠路はるばるやってくるお客様が多い、その為に旅館や出店、飲食店が数多く出されていたりする。

そう、店も沢山あれば人員も欲しい、欲しければ雇う、出来れば手軽に。

そして考えた。

そうだ！！

Part-time
アルバイト
jobだっ！！

『御食事処・あした』

くろがみ・れい
黒神零は一時期バイトした所である。

そしてその御食事処あしたと言うのは零の自称・親友(?)である
あした・みねはる
芦田峰春の実家でもあり、その御食事処あしたの店長は芦田家の大黒柱にあたる訳で、

「いやああ！ まさか俺の新定食全部ダメになるとはな、ワハハハハ！」

何とも豪快に笑っている髭ダルマ親父もとい、このあした・くわがた芦田鋤形が芦田峰春の父である。

どこかの週間少年ジャソプに連載している死神の漫画に出てくる主人公の父親に似ているのは零の気のせいなのか、ずっと零は考えていたが一番の方法で解決した。それは、

(まっ、いっか♪)

ずっとあの髭ダルマ親父のことを考えるなんて俺はホモかッ！ と
やっと気付いた零がとったのは“放置”だった。

「お父、零^{とろ}お兄ちゃんを困らせては駄目だ」

襟首まで伸びた茶髪を片方だけ三ツ編みにした可愛いらしい小学生の女の子、芦田^{あした・ひさぎ}楸が父・鋏形の袖をひっぱりながら言う。

「困ってる訳じゃ無いんすけど、まさかこれだけの為に呼ばれたんすか俺は？」

「こ、これだけ」の為ににッッッ

漫画のように黒い棒線が現れて、物凄く落ち込む鋏形。芦田のネガティブ部分はこの鋏^{ヒト}形から受け継いだっばい。

「ねえ〜お父さあん、噎^{かれる}は何処に行ったのー？」

一旦着替えの為に部屋に戻っていた芦田家の三女・芦田^{あした・えのき}榎が降りてきた。恰好は何とも際どい感じになっているジーンズの短パン、そして薄い白い模様入りのシャツ。髪はポニーテールから普通にして、綺麗に整えて長く下ろした感じだった。

噎とは榎の双子の妹であり当然芦田の妹でもある。

「本当にお前の妹なのか？ 一度DNA検査した方が良いよ？」

「お前根本的に失礼だな！？」

お客様の為にある畳に座って携帯をいじっている芦田に零は凄まじい真剣な顔で聞いた。

「……………」

榎は疑問に思いながらも鍬形に再度聞く。

「ねー、嗚はー？」

「カレルはバキ姉に荷物届けに行っただろうが、朝父ちゃん言っただぞ」

「えっ、マジでー!？」

「^{ハイチュー}灰中の鞆あったし」

芦田は面倒臭そうに榎に言って、携帯を見せる。

画面には帝黒町らしき電子地図が映っていた。

因みに^{ハイチュー}灰中とは榎と嗚が通っている中学校を略した名で学校名は^{かい}灰神中学校と言う。

「何これ」

零がそう言って芦田の携帯を取る。榎も気になり零と一緒に携帯画面を観る。

「GPS」

「……ちょっと待て、え、ウソ、マジかよお前……」

零はかなりかなり冷めた目で見ながら芦田から一歩引く。

「えっ！ 何だよ!？」

芦田は何で引かれているのか分からない様子で零から携帯を取り返そうとしたが、榎の手刀を喉に食らった。

こう、ズガッ！と。

「おう、ええええええええおおおお！！！」

芦田は当然痛がる。

「か、暇までそんなことするなんて……アンタは正真正銘の変態だ！」

「あう、あ……あ……あ！？ あ、そういう事！？ 違う！ これはなんと言うか我が子を心配する親心と言うか！」

何故暇に手刀されたのか気付いた芦田は言い訳がましく言うが榎は止まらないで進む。兄の息の根を断つ為に。

「折るか」

「はあああ！？」

「おら♪」

バキッ

零は笑顔で芦田の携帯を逆パカ、つまり折った。

「ぎゃああああああああああ！！？ 俺の妹の現在位置が分からなくなったああああ！！」

「えええ！ 携帯よりそっち！」

零は折っておいてなんだが芦田のツツコミ所に驚いた。

その後、父・鍬形が復活して見た光景が何故か娘の榎が息子であり榎の兄である峰春がボコボコに殴られている場面だった。楸は姉の豹変ぶりにかなり驚いていた、そしてそんな光景を見ていたもう一人の人物黒神零も楸がその内この光景に馴れていくんだろうなーと悲しそうにしながら奥の部屋に入って行った。

芦田家の家は表はお店になっており後ろに回れば普通の民家のようになっている。ただ稼ぎが良いらしく中庭も付いている。

「俺ん家のアパートより全然良いじゃねーか」

奥の部屋に行くとりビングとなっており中庭を眺められるように出来ている。

基本女の子が住んでいるからか男のむさ苦しさは一片も無い。片付けられており床も綺麗になっている。

「おっ♪」

零は中庭で元氣そうに尻尾を降っている動物を見つける。

「久しぶりだな、カナ♪」

零は中庭に行くと元気そうに足下まで駆け、摩り寄ってくる大型犬
ゴールデンレトリバー、名前がコンと言う犬が可愛く鳴く。

この犬は芦田家の前に捨てられていて、そこを芦田が見つけ、かな
り凄まった顔で『飼う!』と言い出したことにより芦田家に新たな
家族が増えたらしい。

ゴールデンレトリバーのゴールデンから抜き取り日本語で最初『金^{きん}』
と名付けた芦田だったのだが随分日が経ってからメス♀だと言うこ
とを知った芦田はすぐに名前を変更した。同じ漢字で読み方が違う
ことから『金^{きん}』から『金^{コン}』に変更になったのだ。

「毛がフサフサでふわふわだなコノヤロー♪」

元々動物好きな零は人懐こいコンが大好きだった。
だが零は認められない事が一つあった。

それは、

「クソオオ! ちょ、今から喰を迎えに行つて来るわ、カナの散歩
と一緒になっ!」

奥からボコボコに腫れあがった顔面を気にしないでやって来たのは
シスコンの持ち主である芦田峰春だった。

「させない！　　嗚までお前の毒牙に染めさせてたまるか！」

「おまつ！　兄貴を“お前”呼ばわりってひどくね！？　ちゃんと俺の事は『お兄ちゃん♪』って呼んでくれ、あと『大好きだよお兄ちゃん♪』とかでも可！」

「可じゃないわよオオオオオオオオ！！」

ドカアアッ！　と芦田の溝に榎のパンチがクリーンヒット。

「オエ、エエエー！！」

丁度円を描くように中庭に吹っ飛ばされる芦田。

零は華麗に芦田を避け、芦田はバサアッと地面に落ちる。

「受け止めるよ！？」

「ヤダ」

「え、即答！？」

「シネ」

「何でだッ！？」

芦田が零に食って掛かるが悉く罵倒を浴びさせてくる零に心を打ち砕かれそうになる芦田、そんな芦田に愛の手が・・・では無く。

ペロペロ。

コンが芦田の頬を舐めていたのだ、飼い主を思いやる優犬、零は思わず涙腺が崩壊しそうになった。

「コ……コン」

ワンツと元気よく鳴くコン、芦田はもふもふなコンに抱き着く。

「コンは優しいぞオオオオオオ!!」

そして芦田はいつの間にか持っていたリードをコンの首輪に付け、ダッシュする。

「あ、逃げたあの変態!」

「不覚……グズッうぐっ!」

榎は逃げて行った芦田を背後から忌々しそうに睨み、零は涙腺崩壊し、今の場面に泣いていた。

「ハッハッハッ……ちよ、待っ……て……早いぞコン!？」

芦田はカナに引っ張られている状態で街道を走っていた、もう日が落ち、夜がやって来る時間帯になると言うのに帝黒町は賑わっていた。部活帰りの学生の集まりや迎えを待っている学生、そして出勤帰りのサラリーマンの人たち。他にも色々な人たちが出回っていた。

そんな学生やサラリーマンたちを飲食店などに誘う香ばしい匂いが芦田や他の人たちのお腹をくすぐった。

ぐうぐう。

なんとも言えない腹の虫が芦田のお腹から聞こえた。

「腹減っちゃったぜ」

芦田はお腹を摩りながら呟く。

誰に？と聞かれたらそれは芦田の横でちょこんと座って待っている芦田の愛犬・コンに言ったのだろう。

「ワンッ！」

コンも元気良く飼い主の返事をする。返事を聞いた芦田は嬉しそうに笑いながら妹の元へと走って行った。

芦田家から少し離れた場所には黒羽土駅クロウドという駅があり、そこから

通う学生や勤労者人が沢山利用している。そんな黒羽土駅に一際目立つ女性が立っていた。

何故一際目立っているのかというと、それはかなり“美人”な女性だったからだ。テレビや雑誌等載ってそうな綺麗で出てる所は出て、引込む場所は引っ込んであるナイスなプロポーション、そして渦巻く欲望から醸し出た大人の色気を引き出すような麗しい赤い瞳、背丈まで伸びた長い桃色と茶色が入り乱れた髪で一目見れだ傷んでいないと判る美髪。

そしてその全ての味を上手く出している女性の恰好も抜かりは無かった。

綺麗で色欲を掻き湧かすような美脚を露にした赤いミニスカートを履き、上半身は赤と紫色を上手い具合に交差させたラインが入っている衣服。そしてその上から灰色のコートを肩に乗せているその女性には駅で皆に注目されているのに何の反応もせずただひたすら待っていた。

その女性の前にテクテクと歩いて来る女子学生に手を振った。

女子学生もその女性が手を振っているのに気付き、恥ずかしながら小さく手を振り返した。

「遅いわよ、嗚ゝ」

「バキ姉が持つて行く物を忘れちゃいけないんでしょ」

「いい加減“バキ姉”は止めてよねえ。私の名前は椿^{ツバキ}って言うんだから昔みたいに『椿お姉ちゃん』って読んで」

「それは嫌」

「うふふふー、そんな冷たい態度を取る暇も可愛いわねえ♪」

椿と呼ばれた女性は頬を紅潮させながら妹である暇に抱き着こうとしたが阻止させられた、主にゴールドデンレトリバーを連れ歩いていた芦田に。

「公衆の前だと言うのに問答無用に妹に頬を赤くしながら抱き着こうとするなバキ姉」

ワンワンッ！

コンも芦田の味方になりながら吠えた。

「春じゃない、どしたの？」

若干邪魔されたことに頭にきた姉の椿だったのだがワザワザ駅まで犬のコンまで連れて来て、何故だろうと思った椿は素で芦田に聞く。

「逃げてきた」

速急に答える芦田、何故か周りをキョロキョロしながら言った芦田が、椿にとって一番分かりやすい行動だと思った。

「まさか零くん家に居るの？」

「・・・・・・居るけど」

芦田は言い辛そうにそれを言うと椿は目をキラキラさせていた。

「帰るわよ！」

「ダメだ、さっさと仕事行け！」

「何よ春！ まさかアンタだけ零くんを独り占めする気じゃ無いでしょーね！」

何故か嗔は引いたような目で兄の芦田の顔を見た。

「俺は女が大好きじゃ！ 誰が男と【ピーー】や【ピーー】をやったり【ピピピピーー】をしたりするブバァア！？」

芦田の言葉は最後まで言えることは無かった、嗔が顔を真っ赤にしながら芦田の腹をパンチしたからだ。

生憎もう一人の妹、榎よりは弱いパンチだったのだが完全無防備だった腹にいきなりパンチを食らっては弱くてかなり痛かった。

「くううう・・・かなり悔しいわ！ でも確かに仕事をサボる訳にはいかないか、電車も来る頃だし行って来るわ」

恐らく夜勤なのだろうか、日も沈み掛かったと言うのに電車に乗り込もうとする姉を見送る妹と弟、弟は腹を押さえて悶えていて、それを面白可笑しく笑っている椿は手を振りながら電車に乗った。

「カレルうゝかれるよ、じゃなくて帰るぞー」

「うん」

「ハハハー、スルーかぁー（泣）」

噺は学生服特有のスカートをひらひらさせながら帰路を歩いて行った。

妹の噺と他愛の無い話をしながら我が家に着いた芦田と噺。

「俺コンを中庭に連れてくから先中入ってろよ」

「・・・・・・・・？・・・何で店閉まってんの？」

不思議そうに我が家が経営している『御食事処・あした』の入口を見ながら芦田に聞く。

「父ちゃんが零にオリジナル定食を食べさせる為だけに今日は休業にしたらしいぞ」

顔を向けないまま芦田は愛犬コンを犬小屋に連れて行った。

噺は呆れたように小首を傾げながら店の入口から入る。

すると、

「もっと酒持って来オオオオオオい！！ 今日^{きょう}は飲むぞオオオオオオオ！！」

「ご主人様！ この髭ダルマのオジサン面白いですね♪」

「黒神先輩♪ 俺^{おれ}らにもアルコールぷりーずっスよお♪」

「だあああああああ！！ 銃^{つづ}耶^やテメエ何普通に学生が酒飲んでだお前エ！？ あとキリお前はその危険ワード出すな、別に髭ダルマオヤジとかOKだけど！」

「黒神先輩、日本酒ドコにあるんですか、鍬^{くわ}形さんが持って来いとうるさいので……」

「白^{しろ}宇^うお前も順応すんなッ！ つか良いの！？ 鍬^{くわ}形^{あんた}ここの責任者だろうが！？」

凄い事になっていた。

嗚^うは店の中で何故か酔っ払っている父親の姿と名門高として名高い黒須学園の生徒たちが未成年で酒を飲んでいる姿を見て呆然とする。

何^{なに}がどうなった？

「榎コラッ！ 何で芦田家^{オレンち}にあんなに人数居んだ！？」

芦田は店の中で好き放題に騒いでいる連中の声を耳に聞き入れながらソファで暢気にポテチ食べながらテレビ鑑賞している妹の榎に聞く。

「ん〜？ 何か最初は黒くて長い髪をした可愛い女の子がやって来て零さんに『ご主人様ア！』と叫びながら抱き着いて来たのが始まりで、その後お腹を空かした黒須学園の学生さんが来て『喉を潤す為にアルコールを貰ってもOKっすか？』とか凄い事言ってきたんだけど・・・」

「で、出したのか！？」

榎が疲れたような顔で言う。

「止めるハズの大人、父さんが上げたみたいで・・・」

「あのオヤジ店を潰す気か！？」

うがァー！ と芦田が騒いでいる店の中に移動すると、

「タケノコタケノコっつ、によっきっきー♪」

皆何かのゲームをしていた。

「うわっ何この状況！？」

芦田がでろんでろん状態の零が畳の上でガーガーと膨大な^{ごんや}響を響き

かせながら寝ているのを見ながら言う。

零が俯せになりながら寝ていたのでキリが零の背中を枕にして可愛いらしく寝息を立てていた。

「おうおうイーヒッ、ヒックッ、おうう我がむしゅこよう、オデに酒さけ注げやゝヒックッ」

「大人オヤジが筆頭に酔っ払ってんじゃねええええ!!」

おかしくなるんじゃないかという程に顔を赤くする鍬形に芦田はコップに入ってた水をぶっかけようとしたが、ピタッと動きを止めた。何故急に動きが止まったかと言うと、

「・・・・・・・・・親に、ヒックッ、それは駄目ですよウツクッ、明日先輩」

「比較的おまえに白宇が一番まともそうだが生憎目が据わってるぞ白宇! ? あと痛い、おまえのその筋肉たつぷりの腕が俺の手首をいろんな方向にへと曲がってる、曲がってます・・・・曲が・・・・曲がってるうううううううううううううううううツツツ!! ? そして字が違ああああああう久々!! !」

うぎやああああああ! ? と呻き声を上げながら巨漢の白宇に脇蹴りするが筋肉で芦田の蹴りが弾んだ。

だがアルコールが入っているせいか白宇はすぐに芦田を離して千鳥足で一緒に来た銃耶の方にへと歩いて行くと、

「銃耶アアア! 酒は駄目だあああ!! !」

「ぶはあああああああああ!! ?」

いきなりラリアットを繰り出した。銃耶は他の奴らより全然酔っていないでグビグビと日本酒を飲んでいたのだが白宇の強烈なラリアットを受けて気絶ノックアウトした。

現在、『御食事処・あした』の店内にて、酔っ払い四人（キリは飲んでいなかった）が大口を開けて寝息を立てて爆睡していた。

芦田はこの状況をどう打破するか思索を巡らせる、が。

「……………ほっとこう」

ほっとく事にした。

※

日が完全に落ち、周りが暗くなっている。

暗い夜道を黒いツンツン頭に黒縁メガネを掛けた学生服の少年、鉛えん銅黒護どうこくごと隣で歩いている黒護の同級生であり“ある秘密”を共有する者同士の鼓枝飛久こえだ・とびひさがトボトボと歩いていた。

「生徒会長、詳しい話は明日って言ってたけど……オレ正直、まだ信じられねーよ」

飛久は気分悪そうにそう言うのと黒護は若干頬を引き吊った。自分にも飛久に隠し事をしているのに。

「な、なあ、ショー」

「……あんだよオレも混乱中なんだぞ、後なに『ショー』って？」

「飛久の『飛』から取って読み方を変えてショーにしたんだ」

「はーん、あっそ」

明らかに興味無さ気に飛久は帰路を歩いて行く。

「ショーは今日も太鼓の練習あんのか？」

「あるよ、山可屋太鼓『山猿』チームの練習」

「山猿って、山猿って読めるのにな？」

「知らねーよ、昔から代々受け継がれて来た大切なチーム名を馬鹿にすんじゃねーぞ、黒護！」

「いやしてないでしょ」

そしてその後から飛久は山可屋地区だからバスで移動する為に黒護と別れた。

そして今、黒護は暗い夜道を一人で歩いていた。

「……………“硬化”」

辺りに人が居ないかを確認した後、自分の異形が夢では無いか確認する。のうりよく

黒護が呟くながら右手を見ると黒色に染まり鉄を粘土のように簡単に曲げられそうに見える夢では無い“鋼の手”を確認した。

「……………気持ち悪ワリイのかな」

自然だった。

自然にそんな風に呟いた黒護は自分で言った言葉にどれほどの意味を込めて呟いたのか、分からなかった。

そしてそんな風に思い耽っていた黒護の背後から何かが近付いていた。

「そおんな深く考えなくても良いのにな」

「——ッ!?!——」

黒護はすぐに背後から聞こえた声に反応して振り返る、が。

キュガンッ! と黒い何かが黒護を“凧ぎ払った”。

※

芦田は妹たちに後を任せて二階へと上がる。

母親は只今訳ありで別居中なのだが、幸いにもうすぐ兄と共に帰ってくる。

「母ちゃん久しぶりだな、母ちゃん特性麻婆豆腐が楽しみだ」

風呂も入ったし歯も磨いたし、後は疲れた体を休ませる為に寝るだけだ。

芦田は二階の自室へと入る。部屋は『大した広く無い普通の部屋』で前に零や尾井群、電華に言われた事があった。

失礼極まり無いな、と芦田が思いながら辺りを見ると、まあ妥当だな、と納得する。

「ふわぁあゝ」

自然に出た欠伸、眠いという信号だ。

芦田はそれを素直に従いベッドへと入る。

そして暖かい毛布に包まれながら思い出した。

（会長に、今日は満月だから月見をしたら、とか言われたよう・・・
・・・寝る）

思い出したがもう毛布の中、布団を退かす程芦田の意思は強く無い。

芦田はすぐに夢の中へと赴いたのだった。

ふわふわ。

芦田はまるで雲の上に寝ている感覚に襲われた。

ああ、夢か。

芦田はすぐにこれが夢だと認識する。

夢の中だと知るやすぐに芦田は目を開けて、感覚通りに白い雲の上に立っていた体を動かす。

まるでトランプリン、いやトランプリンより遥かに柔らかい雲。

「ぶはっはっはっは！ 雲を食べるのが俺の夢だったんだー！

一体どんな味だこらー!!」

芦田は雲にかぶり付く、綿雨のように触感なのだが、口の中に含むと水の味がした。

「うん、まあ、妥当、うん……予想は、してた」

かなり落ち込んだ芦田は独り愚痴りながらいると、雲の平原の向こう金色の何かが近付いていた。

芦田も気になり、その金色の何かに向かう。

するとその金色の何かが人形ひとがたに見え、テトテトと芦田の方にへと必死に走って来ていた。

「んんんん？ 人なのか？ ハッ！ まさか天に住まう女神様とかとかああ♪♪」

かなり馬鹿な考えをして勝手に駆け出す芦田、こういう馬鹿はまっすぐに殺られるタイプだと作者は思った。てか作者とか書いてすみません。

そして芦田が見たものとは、

金髪の女の子だった。

「キタアー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

電車男のように喜び上げる芦田。

芦田は駆け寄って来た少女を見た。

かなりの美少女だった、綺麗なものは顔だけでは無く髪は地に付く程長く、太陽のように光輝く金色こんじきの美髪で太陽の光を浴びれば目が眩くらむ程に輝き背中を全部包み込んでいた。

服は白いワンピース一つ着ているだけで背は芦田より少し小さい位だった。

「うわ、ちよ、うわー」

芦田はかなりテンパリ始めて、言葉が出て来ない。夢の中なのだから何をしてても良いだぞ、と外道な考えを思案している中、金髪の美少女が口を開く。

「・・・・あなたの名前は・・・・」

無表情のまま金髪の美少女は芦田に訪ねた。

そして芦田は変態なだけか無表情のまま喋った金髪美少女にどツボに入った。

その証拠にパクパクと口をあんぐりしていた。

金髪の美少女は小首を傾げて「？」と不思議そうに芦田を見る。

そして美少女の質問に芦田はやつと反応する。

「あ、あの、えゝゴホンゴホン！　ゴホッ！？　ゲホッゲホッ、ゴホッゲホッ！！？　オヴェエエ！！」

声が裏返ったので一回直そうと咳をすると変な器官に入り激しく咳き込む。

夢なのに変なところリアルにすんな！　と芦田が思っていると目の前の金髪の美少女はコクリと頷く。

「成る程、あなたはゴホッゲホッオヴェエエさんですね」

「ゲホッゲホッ！？　激しくに違います！！」

また小首を傾げて「？（クエスチョン）」を浮かばせる。そんな時
まで無表情、芦田は浅く興奮する。

ええゝ、と芦田は息を整えて言う。

「僕の名前は芦田峰春と申します、淑女^{レディ}」

大変気色悪い極まり無い。

零が居たらそう告げていた。

だが無表情だった金髪の美少女の頬に何故か、何故か！　『何故か！！』　赤くしていた。

「知りました、あなたの名を……では私もすぐに行きます」

h?

行くとは？

芦田がそんな風に思った瞬間だった。

雲の上に居た芦田の足下が突如、消えた。

[illegible]

当然、芦田は暴れるように手足をばたばたとするが芦田の身体は落ちていく。

「うわあああああああ！ この落ち方も変にリアルだあああああ
あああああ！」

そして天高く空にあった雲から落ちていた芦田は下方に聳そびえる大地。

芦田は何の抵抗も出来ずに落ちて行く。

(せめて夢の中だけでも幸せになりたかったー・・・)

かなり悲しみに満ちた表情で地に落ちて行く芦田、が上空から“何者”かが追いついてくる。芦田はそう感じてさっきの金髪の美少女

だと思い、必死に吹き上がる風を抵抗して上空に目を向ける。だが向かって来ていた“者”はあの美少女では無く。

黒い翼を生やした青年だった。

黒い翼を生やした青年は大きな黒翼を羽ばたかせ、弾丸のように振り落ちてくる。

芦田はギョツとした顔で必死に避けようと身体を泳がせる。だがそんな所をして避けれる筈も無く黒い翼を生やした青年は獲物を殺し仕留める鷹の如き眼で芦田を捉えて急降下してくる。

あの黒い翼は絶対に危ない。

芦田がそう思って覚悟を決める。夢の中だとしても殺されるなんて嫌だ。

そんな考えを空中でしていた芦田に救いの手が差し伸べられた。

ガキーン！ と黒い何かが黒い翼の生えた青年を止めたのだ。

黒い刀に黒い衣。

そして芦田の見知る顔。

黒神零が止めてくれたのだ。

「零イイイ!!」

芦田が叫ぶが零は振り向かない、零は黒刀を黒い翼を生やした青年と激突し、刀と翼が交差させ、ギリギリと音を立てて弾かせる。

（なんだよこれ？ 夢にしては変にリアル過ぎる）

ビュウビュウと風の抵抗を受けながらも芦田は冷静に考えられた。そして空中で戦っている零が押されているのが分かった。

そして零が相手の翼に妖刀を弾かれ、黒い衣が無くなった瞬間、零の胴体を真っ二つに“切り裂いた”のだ。

「——んなッ!!?」

当然芦田は驚く、親友が真っ二つにされて平常心を保てる程芦田の精神は強く無い。

「てめええええええええええ!!」

芦田は手をバタバタと振るわせながら青年に叫ぶが、青年は不気味な微笑みを浮かばせて、次に仕止める獲物に飛び掛かる。

力が無い。
何も無い。

芦田はそう思ったのはその時だけでは無かったのだ。

生徒会の一年生が拐われた時、炎条騎烈えんじょう・きれつに敵えなかった時。

芦田は夢の中でも無力、本当にやってられない。
なんて惨めだ、なんて弱いんだ。

雲の上で美少女に会えて何を糠喜ぬかびしてんだ。

そう思いながら芦田の首に振り下がる死の翼刃ジロチンに芦田は何の抵抗も
無しに目を瞑った。



芦田は目を開ける。

目に映ったのは見覚えのある自室の天井。

—— ああ、やっぱり夢か。

「……へっ、あつけ呆気な」

芦田は自分の不甲斐なさや無力感を漂わせ、芳しく無い思いをしなから自分で寝相悪く蹴っ飛ばした布団に手を掴む。

無造作に布団を持ち上げると、丸くなって寝ている夢の中で出会った少女が居た。

「あ、……え、は？」

当然芦田は混乱する。

とうとう夢と現実を間違えてしまう程疲れているのか、と考えを迫られ、掴んでいた布団をまた被せた。

「ふむゆ……」

如何せん幻聴まで聞こえてしまった芦田。

取りあえず自室にある窓を開け、そして今の気持ちを整理する為に確認の一言。

「キタアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアア！」

幻だとしても幻聴だとしても死ぬほど嬉しかった。芦田峰春だった。

455

『また目覚めたのだ、新たな妖刀師が……』

「そのようすなあ」

無機質のような声、そう感じさせる声に反応するのは黒須学園の教師を務めている銀髪の男性、ごじょう・ぎんうん五条銀雲。

銀雲が居るのは黒須学園の豪華施設が施されている外庭。

『順調のようだな』

無機質、感情の何も感じさせない声に淡々と銀雲は答える。

「この黒須学園だけでもう三人目の妖刀師が目覚めていますなあ、いやあええ事ですわあー」

『ふむ……』

「貴方の計画が順調という事ですわ、ええ風向きですねえ」

銀雲の関西弁を聞いて静かに話す謎の無機質の声。

『数が肝心なのでは無い、その妖刀師の「質」を観てみたいのだ……
……そう、数が関心では無い』

銀雲は綺麗に掃除してある庭の木製の椅子に座り、白いスーツの首もとを弛め、

「……………“契約”の事は決して忘れ無き事を……………」

いつも細めていた目が鋭い眼光を虚空に向け放ちながら静かにそう

言う、『分かっている……』とだけ返事し、もう返ってくることは無かった。

銀雲は右胸にあるポケットから煙草の箱を取り出し、その中にある白い煙草を抜き出して口に加える、太股辺りにあるポケットに手を差し込んでライターを探す、パタパタと叩いて確認。
どうやらライターを忘れてしまい。

この煙草どうしよう、と口に加えていた煙草をフルフルと揺らしている、

「……よお、朝からご苦労だな銀雲」

「あろ？　愛手先生じゃ無いですか、こないな朝からどないしたんです？」

「俺はこのクソ広^{ひれ}え学園の医療施設の点検と保健室にある薬品の確認、せしてクソガキ共のもうすぐ始まる身体測定の準備をする為に徹夜続きの毎日ですがア、てめエこそこんな朝ッばら何してんだあ、あア？」

「嫌やわあ、そんな喧嘩腰にならんで下さいなあ、あ、牛乳飲むとカルシウム摂取出来てイライラ解消とあったんやけども……保健の先生ならもうとつくに聞いたことのある話ですなあ、いやあ、こらあすんません」

何とも楽しい会話とは思えない二人、『愛』の刺青を彫ってある愛手はいつも着ている白衣からライターを取り出して思いつきりヒュッバンッ！　と銀雲に投げつける。

「まったくテメエと居ると楽しくて仕方ねエぞ、癌^{がんじ}死ね、ゴジヨウ

先生」

ポツと火を出してずっとくわえていた煙草に火を付ける。愛手は相変わらずチャライ感じの恰好に白衣を着た不良保健教師は銀雲の横に座る。

「ありがとうございます、アイテ先生^{せんせ}」

「あァん!？」

隣の銀雲にガンつけしてくる愛手、保健教師あるまじき行為である。

「そんなの疲れるだけだと、テメエは知っているじゃねエのか？」

愛手は銀雲が何をしているのか分かっていた。

「自分は別にどうなったってええんよ、大事なんは『契約』の事だけや」

銀雲が真面目な顔をしてそう言うのと白煙を吐き捨てながら立ち上がる。

「今日は休日、愛手せんせも休んでくださいな」

それだけを言うと、ライターを愛手に返して校舎にへと歩いて行った。

「……クソ面倒臭くせえ奴だ、チッ!」

愛手も愛用の煙草を吸い、苦みを噛み締めて早朝の青空を見上げた。

第22話「夜月の光は魔煌の輝き、闇は拡がる」(後書き)

次回

死神の奇想曲 カプリス

第24話「戦黒夢双」 せんごくむそう

ほら、聴こえる

死神が唄う

戦闘歌を イクシャータ

第23話「戦黒夢双―戦う黒鋼と夢の少女―」

(前書き)

久々の更新です！

マジで小説更新するの大変ッス（。ロ。）

第23話「戦黒夢双―戦う黒鋼と夢の少女―」

「カツ、全く、硬^{かて}エのは良いがよう、もうちょつと俺と遊んで貰いたかったぜ」

帝黒町の夜明けで町中を照らし始めた頃、黒い翼を生やした青年がある学生を尻^{しり}ぎ払^はっていた。

黒い翼を生やした青年はスーツを着崩し、首には銀色の十字架アクセサリーをぶら下げ、整った綺麗な黒髪とイケメンに値する顔。
その青年はまるで『買ったばかりの玩具が思いの他ガラクタだった』ような眼差しで倒れている学生を見ていた。

「がはっ、ハアハア、な・・・んだよ、いきなり、だな」

ハアハア、と打ち突かれた胸や腹を摩る東針高校二年生である鉛^{えん}銅黒護。
妙な痛覚を味わいながら立ち上がると、ガクツ、と足がふらつく。

「ウハッ♪ 足下フラつかせてダイジョーブかよ、コクゴちゃん♪」

ギロツ、と黒護は馴れない睨みを黒い翼を生やした青年に向ける。
青年も手をヒラヒラさせて背中から生えた大きな黒翼を羽ばたかす。
そして異形となってからの黒護の体力は人間のレベルを越えて、超人以上の脚力で黒い翼を生やした青年に突っ込む。

（コイツが千^{せん}が言ってた『斬^{リッ}り裂^{パー}く白^ザき鎖^{チエーンズ}』の一員か？）

考え込むよりまず行動。

黒護は黒色に染まった鋼の腕を“硬化”し、即座に攻撃してきた青年に殴りつけようとする。

「フイフイ、野蠻過ぎやしねえか」

だが黒い翼を生やした青年は軽い微笑みを浮かべながら黒護の攻撃を避ける。

だが黒護の攻撃はそれだけでは無く。

すぐに肩まで鋼化^{こつか}してシオルダータックルするように体を向ける。

^{すこわざ}

異形の力を手に入れるまではそんな思考と反射神経が出来る凄技^{すこわざ}は前まで出来なかった。異形化した事による身体進化と言うべき成長。そんな黒護のいきなりの攻撃に青年は微笑みを崩さないで大きな黒翼でシオルダータックルをヒュガッ、と受け止める。

「ツッ!？」

「野蠻極まり過ぎだっツーの」

そのまま追撃出来たろうに、その言葉を吐くだけ吐いて翼で黒護を払う。

払われた黒護は不思議とも言える敵の翼の感覚に内心ビクビクしていた。

(あの翼・・・・・・・・・・実体が、ある)

実際に塞がれたし、それなりの力があつた相手の黒翼。汚れを落とすようにバサバサ、と翼を羽ばたかせ、チラッと黒護を見る。

「いきなり攻撃は無いだろ？」

「……アンタが言える立場かよ」

「ウハハハ、まあ、確かにネー♪」

羽ばたかせた黒翼を綺麗に折りたたみ、背中を覆う。

「俺をあの野蛮な組織と間違えてんじゃネーよ、俺はお前が考えてる組織に属しちやいネーよ」

そんなの信じる筈が無いだろ！ 黒護が鋼化した拳でコンクリートの地面をズシンッ、と殴る。だが敵の青年はまた微笑みながら語る。

「信じるか信じないかはお馴染みの君次第さ、ま、俺的には信じないけどな、ウハハハ。怪し過ぎんだろ♪」

混乱させているのか、自分で言った言葉をも否定している青年。

「じゃ、じゃあアンタは、何者なんだ。俺と」

そこで小さく、そして疑問を晴らす為に力強く聞く黒護。

「俺と『同類』、なのか？」

そう黒護が言っていると黒い翼を生やした青年はニコリと今度は優しくそうに微笑む。

「『同類』って、何か人種として扱われて無くネーか？ 能力者とか、超人的進化あーとかよ、色々言い方あると思うがネー」

そして黒護は知る、さつきと打って変わって雰囲気はかなり優しくなっている青年の対応に。

黒護は警戒を怠^{おこた}らないように重要な事を聞く。

「アンタの、名前を聞いても良いですか・・・」

その黒護の質問に、青年はニコリとまた微笑みながら答える。

「名前まだだったネー、俺の名前は空須^{からす・うよく}羽翼、ヨロシクネー」

そしてどんな意味を込めた眼で黒い翼を生やした青年、空須に黒護そんな質問をしたのか。

それを知ったように。

気付いたように空須は黒翼の刃が鋭く黒護の顔面に斬り裂こうとしていた。

※

そして町中でそんな出来事が起きているのを知っていない者たちは、騒がしい朝を迎えていたりする。

「と、取り敢えず・・・起こす、かな・・・うん」

朝第一声に叫んだ芦田峰春はと言うと、芦田の布団に可愛くスースー、と吐息している金色の長い髪をした美少女が眠っている。それを芦田は起こさないように静かに、静かにに忍び寄る。

芦田は散らかって己の部屋を忍び足をしながら寝ている金髪美少女に近寄る。

「スー、スー……」

その女の子を見てみると、さっきまで見ていたあの夢の少女だった。芦田は如何にこのような、どうしてこんな“美少女”^{たから}が我が部屋で寝ているのか芦田なりに黙索する。

だが分からないものは分からない。

芦田は恐る恐る金髪の美少女を起こそうと手を伸ばした瞬間だった。

ドタドタドタッ！

「うるさいのよ、このバカ兄……き……」

ボタンッ！ と芦田の部屋を問答無用に開けたのは芦田の妹である
あした・エノキ
芦田榎だった。

そして榎は兄が金髪の美少女に「ハアハア！」と激しい息をしながら手を伸ばしている場面を目撃する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「待て、待てよそのなんとも言えない沈黙と眼差し！ 違う！ 違うぞエノキ！ 兄は断じて“危険な方向性（あっち系）”に走ってはいない！！」

あっち系とはどっち系なのか分からないが芦田はかなり焦りながら弁解する。だがその慌ただしさが疑いのパラメーターをどんどんと上がっていくばかりであり、榎は静かに、そう静かにゆっくりと兄に対する心と部屋の扉を閉めた。

「つつつてウオイイ！！ 訳を聞いて訳をッ！」

よっくりと階段に降りていく妹に芦田は必死に呼び止めた。

「・・・・・・・・ごめん、邪魔しちゃったね。通信販売で等身大人形を買って自分のベッドの上に寝かせちゃって興奮している兄を見て別に幻滅とか、もう家族の関係を絶ち切っちゃたりとか、もう一生口聞かないとか、夜中に鉈で殺そうかなとか思っていないから・・・・・・続きやってて良いよ」

「完全に今お前言った言葉実行しようとしただろ！？ てか本当に待って！ 家庭崩壊の危機！？」

妹の片手を取りながら引き摺られる兄をかなり残念そうな顔で見た
榎は『あゝはいはい、分かったからこの手離して』と言いながら芦
田の言い訳を聞く。

と言っても零の『妖刀』に関する事や『異形者』^{イレギラ}の事は伏せて夢に
見た少女のことだけを話そうとした、が。

『きゃあああああああああああッッ!!』

だがその前に芦田家の厨房に悲鳴が轟いた。

「今の声は………嗟!」

「下には楸ちゃん^ビと嗟^{カレル}しか居ないのに!」

榎は階段をジャンプしてすぐに家の厨房にへとダッシュした。

芦田も榎に続くように後を追う。芦田家の厨房は父親が愛用してお
り器具も色々なものが揃えてある。勿論使い方を間違えれば怪我を
する器具もある。だから父親の芦田^{あした・クワガタ}鋏形は調理をする以外は立ち入
りを禁止しているのだ。

そんな場所から悲鳴が聞こえたのだ、芦田と榎はかなり焦りながら
厨房にへと向かう。

「嗟ッ!!」

「カレルっ!」

二人が厨房に繋がる扉を開ける、するとそこには酷く蒼白な顔をし
ている嗟が両手で口を隠して立っていた。

嗟の立っている前には、包丁が足元辺りに落ちており、そして胴体

「明らかに気持ち悪そうにしながら朝飯を作ろうとするなッ！ほらカレーもエノも父ちゃん運ぶの手伝え」

「カレーじゃない、^{カレル}嘔。一々呼び方変えないで」

「エノって何よ、ほらお父さん、自分でその汚いの綺麗にしてよねえ」

芦田から言われた呼び名に怪訝そうにする嘔と榎、二人は唸り苦しんでいる父親をズルズルと引き摺りながら厨房から出されて行った。

「……吐瀉物^{ゲロ}をブチまけたままの厨房は嫌だろ普通は」

そう呟いた芦田は鍬形が吐いた吐瀉物を片付ける。

「チキショー、何が悲しくて父親のゲロを片付けねえといけねえんだ」

そう愚痴りながらも片付ける芦田。

とそこに。

「^{はるあに}春兄……何しゆる」

厨房の入口に寝起きの四女・^{あした・ひさぎ}芦田楸がまだ眠たそうな目を擦りながら立っていた。

芦田は振り返らずに答える。

「ああ、ダメよ、ヒーちゃん。厨房は危ないし、ちょっと子供にわざわざ見せるような物じゃないからー」

「・・・・・・・・・・だって」

「あん？ あんだって？」

芦田は吐瀉物を片付け、入口に目を向けるとそこにはパジャマ姿の楸と黒く薄い布地な服を着た金色の長髪の美少女——夢に出て来た少女と手を繋いでいた。

「・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・・・ひえ!？」

そして何とも情けない声を上げた芦田は金色の長髪美少女に驚いていた。

「おはようございます、父親」

ん？

今何を発した？

「違う・・・春兄だ」

そこに楸は見当違いな間違いを指摘する。だがそれは今問題では無く、

「うおおおおおおおおいッッ！！　今なんて言ったの君ッ！？」

「・・・・・・・・？・・・・“父親”と言ったのですが」

ド偉い危険ワードが飛び出してきた。

「？？・・・・春兄は春兄・・・・」

楸は金髪の女の子が何を言いたいのか良く分からないといった状態だった。

そして芦田は吐瀉物を急いで片付けて、楸と金髪の女の子の元に戻ると芦田は腰を下ろして楸の頭に手を乗せる。

「ヒーちゃんはまだ眠いだろうからお部屋に行ってな？　朝ご飯は俺とエノキたちと作っから」

「むむ、それなら私も一緒に作りたい」

少しだけ眠気が覚めて来たのか楸は目を頑張って開きながら言う。

「んゝヒーちゃんにはまだ早えからなあゝ、・・・・・・・・・・・・・・・・そんならヒーちゃんの好きな朝ご飯作ってあげっから茶の間片付けておいてくれよ？ 眠いんだったら寝てても良いし」

芦田は微笑みながら楸の頭を撫でていると楸は素直にコクリツと頷いてビューっと茶の間に走って行った。

その場に残るは地に付いてしまってもおかしくない程長い金髪をした美少女と、平凡な顔に茶髪の少年だけが居た。

「よし、取りあえず・・・・・・・・・・・・・・・・」

芦田は頭を掻きながら金髪の美少女と向き合って言う。

朝飯にしよう！



帝黒町上空、晴天の空に不釣り合いと言って良い程奇妙な光景が浮かんでいた。

その上空には黒い翼を生やした黒いスーツを着た青年、そしてその青年の片手には『人間の形をした鉄の塊』を掴んで浮かんでいた。鉄の塊を難なく掴み、苦い顔をしないで大きな黒い翼を羽ばたかせる。

「くろがねびと鉄人”とは言ったもんだな、確かに硬い」

黒い翼を生やした青年、空須羽翼は『くろがねびと鉄人』と呼ぶ人の形をした鉄の塊にそう言うのとニヤリと薄い笑みを浮かぶ。

「もっと抵抗とかあるでしょーが？ それとも喧嘩馴れてねエからかい？」

空須は呟くようにそう言うと、鉄の塊のような人の形にある顔から白い眼をギョロつかせながら空須を見る。そしてその鉄の顔には剥き出しの齧はぐきが生々しく露あらわになった齧と共に口が開く。

「お、れは鉄人じゃねえって……言ってるでしょうが、ハアハア、マジで何言ってた……」

その声色は隠すこと無く恐怖に染まっていた。相手に伝わった時点

で高得点だ、声が震え、口が思うように動かない、舌が回らない、何を言えば良いのか分からない。それが今空須の片手に掴まれている“人の形をした鉄の塊”・鉛銅黒護えんどうくくの心境だった。まず考えられない、それは彼の症状があるからだった。その症状と言うと、

「何軽く上空飛んでんだアンタアアアアアアアッツ!!?」

口では絶叫を放っている黒護だったが身体は微動だに動いていなかった、むしろ空須の片手に両腕で掴んで離さないようにしていた。

簡単に説明すれば黒護と空須は地上での戦闘は派手になる可能性があるあるので別の場所に行こう、という空須の提案があったのだが喧嘩を余りしたことも無い黒護からすれば絶対に行きたく無い提案だったので自らの異形能力を用いて全力逃避に試みた黒護。

だが相手は大翼を持つ異形者なので逃げることに叶わず今に当たる。

「ハハハ何だよ、君って高所恐怖症とか言うヤツ？」

空須はビビりまくりの黒護にそう聞くと、

「いいいいゆあ、?、別にうすおんなじゃねっしゅ!」

尋常じゃ無い程の丸分かりである反応であった。ニヤリと笑う空須に黒護は悪魔の笑顔にしか見えなかった。

（アレッ？ 実際にコイツ悪魔みたいな翼生やしてんな、あれ？・・
・・悪魔の羽ってコウモリみたいな皮っぽくなかったけ？）

頑張って現状逃避を試みる黒護であったがその逃げ口も空須は悉く粉碎する。

「それじゃ、もっと楽しい事しよツか！」

そう言葉を発した瞬間に黒護は空中で重心が持っていかれる感覚を襲われた。

「う、うわあああああああああッツ！！！」

空須は黒護を片手で持ち続けたまま上空から真下に真っ逆さまに落下して行った。

ギュゴオオオオオオオと風圧でまともに空気を吸えない黒護を横に空須は涼しい顔のまま落ちていく。

黒護は全身くまなく“硬化”させ、衝撃を備える為に眼を瞑る。^{つぶ}

この感覚が堪らなく嫌いな黒護は何時衝撃が来るのかビクビクしている、まだなのか、まだなのか！

どれくらいまで地上に近付いているのか確認の為に瞳を開くことさえ能^{あた}わない。

それを横目で見ていた空須は直ぐに面白むように黒護の耳に言葉を注ぐ。

「ほうら、もうすぐだぜ？　もうすぐで死ぬぞお前、道路に落とされて死ぬんだぜお前？」

まさに悪魔の囁き、黒護の恐怖心を煽るには十分過ぎた。

「・・・ああ、ハアハア、く・・・ああゝ！！　うわああ、うわああ、うわああああああああああああああああああああッッ！！？」

黒護の頭の中には『恐怖』しかなかった。

空須は嘲笑うかのように大声で黒護に言う。

「まったく痛快な面白さをありがとう、鉄人♪」

その次の瞬間だった。

ドカアアアアアアアアッッッッン！！

「ッッッ！！？」

頭上から伝わる意識を揺らぐ衝撃。

砲弾の如き轟音が帝黒町を覆わせた。

黒護を落下させた場所を上空から見る空須。

（何処か見たことがあるな、この山）

黒護を落とした場所は山で、山頂付近に落下させたらしい。空須は黒翼を羽ばたかせながら落下地点に舞い降りる。土煙が漂っており黒護の姿を確認出来ない。

嫌嫌そうな顔で黒翼で風を吹き起こし、土煙を払う。どうや自分の翼を土を付かせたくないらしい。

そこには上半身の殆どを土に埋もれてしまっている黒護を確認する。だがまだ生きているのが分かった。

再度面倒臭そうな表情を浮かべながら周りを見る。

周りには草木が生い茂り、木々には様々な鈴が吊るされていた。その吊るされている鈴を眺めながら空須はこの山が帝黒町のある山だと思い出す。

「そうか、この山『侍鈴山』か」

空須はそう言って大きな黒翼を羽ばたかせて風を起こす。するとその風に揺られてチリーンと鈴特有の涼しい音が鳴る。

帝黒町の誇る昔から有名と名高い山『侍鈴山』じれいざん。

江戸時代から侍の修業の地としてあった所で、数多くの侍がこの山に訪れ修業をしていた。

鈴を持ち歩き、決められた場所の近場にある木々に鈴を吊し、その鈴を一切音を鳴らさずに破壊することが出来れば修業は終了と見做みなされる。

古来から日本の山々は草木が生い茂り、様々な恵みをもたらす場所として、昔の人達は神々が住まう神聖な地域として拝めていた。そ

して山を信仰の対象や修業の場として使われていたのはこの『侍鈴山』も同じであった。

現在は帝黒町の観光名所として報道され、団体客が登山をしにやって来たり『侍鈴神社』に置かれている鈴を吊しに観光客等が来たりしている。

幸いなことに空須たちが居る周辺には一般人は居ないらしい。

(だが帝黒町の登山隊の連中や、ブレイドマスター妖刀師共たちがやって来そうだな)

空須はそう思った瞬間に黒護に止めを刺すことを決めた。

(・・・なら“アレ”で殺すか)

バサツと黒翼を広げた空須は愉快的な声で黒護に伝える。

「今ので死んでれば良かったのになあー、次はもつとに痛いZE」
♪

黒護も何とか身体を動かそうとしているがまともに動く事が出来なかったことが空須にも分かった。どうやら頭を強く打ってまともに立つ事は異形者でもツラいらしい。
イレギラ

空須は大きな黒い翼を羽ばたかせ、宙を浮かぶ。
そして翼を大きく後方に下がらせると、

「・・・貫翼飛翔」
カンサ・ビシヨラ

翼から放たれた黒い羽は弾丸のように黒護を襲った。

バババババツ！ と黒護の周囲にも着弾して再び土煙が覆った。

空須は快哉^{かいさい}な、満足な表情を浮かばせて空を飛ぶ。

「ウハハハハーツ！！ やっぱ強えー！ 俺は、俺はもうただの“人間”じゃねエ！ 俺は『天使^{エンゼル}』になったンだー！！」

まだ日が登ったばかりの空には、自らを天使^{エンゼル}と名乗った青年は黒く翼を広げ、帝黒町を飛遊する。

天使は力に酔い、悪魔となっていくのを自覚していなかった。

第23話「戦黒夢双―戦う黒鋼と夢の少女―」

(後書き)

死神の奇想曲^{カプリス}

登場人物紹介!

名前／空須羽翼

読み／からす・うよく

血液型／B型

異形能力／????

性格／物事を深く考えない

異形能力は次回はっきりします

そして芦田の目の前に登場した“夢の少女”も次回に……いや
分かんないス

翼をモチーフにしたキャラクターでこれからの展開にご期待を!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3459i/>

死神の奇想曲(カプリス)

2011年9月24日13時51分発行